

高澤良一全句集

第一句集	ねずみのこまくら	序	松崎鉄之介	7
		跋	下田稔	11
		後記		15
第二句集	ももすずめ	あとがき		16
第三句集	さざなみやつこ	あとがき		17
第四句集	ぱらりとせ	あとがき		19
第一句集	ねずみのこまくら			21
第二句集	ももすずめ			33
第三句集	さざなみやつこ			49
第四句集	ぱらりとせ			73
第五句集	鳩信			99
第六句集	燕音			121
第七句集	宿好			151
第八句集	随笑			183
第九句集	寒暑			225
第十句集	素抱			267
第十一句集	石鏡			323
第十二句集	暮津			361
独歩への一步	茨木和生（「運河」主催）			405
虫の素顔	土生重次（「扉」主催）			411
『さざなみやつこ』私見	本宮鼎三（「蛙」同人）			415
『ぱらりとせ』を読む	村上一葉子（「濱」同人）			421
あとがき				425
著者略歴				426

凡例

当集には左記十二の句集を収録した。

- 「ねずみのこまくら」(三五八句)「ももすずめ」(四七五句)「さざなみやつこ」(七五九句)「ぱらりとせ」(八四三句)「鳩信」(六六〇句)「燕音」(九〇六句)「宿好」(一、〇一八句)「随笑」(一、三六〇句)「寒暑」(一、三二〇句)「素抱」(一、八三四句)「石鏡」(一、二三四句)「暮津」(一、四四五句)。総句数 一一、二〇二句

収録中の句集名 出版社 発行年月日は以下の通り。

- 第一句集 ねずみのこまくら 風神社平成二年七月十六日
- 第二句集 ももすずめ 風神社 平成四年一月五日
- 第三句集 さざなみやつこ 風神社 平成五年八月一日
- 第四句集 ぱらりとせ web 上出版 平成九年十月一日
- 第四句集 ぱらりとせ (株) デジタルパブリッシングサ

ービス 平成十五年十月一日

- 第五句集 鳩信 web 上出版 平成十五年十一月二十四日
 - 第六句集 燕音 web 上出版 平成十五年十二月三日
 - 第七句集 宿好 web 上出版 平成十五年十二月十二日
 - 第八句集 随笑 web 上出版 平成十五年十二月二十九日
 - 第九句集 寒暑 web 上出版 平成十六年一月十日
 - 第十句集 素抱 web 上出版 平成十六年一月三十一日
 - 第十一句集 石鏡 web 上出版 平成二十一年六月十一日
 - 第十二句集 暮津 web 上出版 平成二十一年六月十一日
- * web 上出版はインターネット上に PDF (Portable Document Format) 形式で公表したもの。

句集名 命名由来の一端を下記に記しておく。

- 第一句集 ねずみのこまくら 女ねずみもち 貞の実の異称
- 第二句集 ももすずめ 蛾の幼虫の一種
- 第三句集 さざなみやつこ 熱帯魚の一種
- 第四句集 ぱらりとせ 童謡の一節

第五句集 鳩信

便りの意

宇宙一に何ぞ悠たる

第六句集 燕音

便りの意

人生百に至ること少なり

第七句集 宿好

閒居すること三十載

歳月相うながいせま催しま遍り

遂かくて塵事はると冥はるかなり

鬢はな辺早や巳まに白し

詩書 宿好あつを敦あつうし

若し窮達きうたつに委まかねずんば

林園 世情なし(陶淵明詩)

素抱すぼ深く惜おぼしむべし (陶淵明詩)

宿好しゆくこうもとからの好み

素抱すぼ||平素へいそから胸むねの底そこに抱かかっている思い

第八句集 随笑

「兒童随まいて笑わらう 放翁はうおう狂きやうすと」(陸游)

第十一句集 石鏡

閑いかに 石鏡せききやうを窺のぞつて 我が心を清

詩)より

うし(李白詩「廬山の謠、廬侍御虚舟に寄す」)

第九句集 寒暑

我れ更さらに何を親あしむ所ぞ

第十二句集 暮津

終はつに窮きやうりて 暮津ぼしんを渉わたるを計はかる莫なし

志こころを暢のべて自みづから宜よろしく老おいゆべし

暮津ぼしん||人生にんじやうの夕暮ゆふぐれの渡わたり場ば

形容けいじやうは寒暑かんしよに遷うつれども

心珠しんじゆ甚いたんに保たもつべし(寒山詩)

第十句集 素抱

貧居ひんきよ人工にんぎやうに乏ひしく

灌木くわんぼく余あまが宅たくを荒あう

班班はんはんとして翔とける鳥とりあり

寂寂じやくじやくとして行迹ぎやくなし

第一句集 ねずみのこまくら 序 松崎鉄之介

句集『ねずみのこまくら』は一風変わった句集である。著者の眼の付けどころが他の人と異なっている。時にふざけ散らしているように見えるが本人は大真面目で詠っていて、一つも照れてないので、句がしっかりと納まっている。何となく斜に構えているように見えるが、意識して斜に構えているわけではなく、それが本人の地であるので、表現が浮いてない。いわば既成観念の枠から大いにはみ出していると言えるのである。

温言のごとき日を載せ茶の咲けり

鳥渡る空傾けて棒倒し

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

紅梅の中へ一步の夕ごろ

青き踏む一遍遊行の地なりけり

吹き寄せられてゆく東京の空つ風に
竹が散るまた散る論されぬごとし

影ぐるみ灼かれ突立つ義民の碑

昭和五十三年から同人になるまでの昭和五十七年までで、好もしい句を拾ったが、これらは俳句の持っているよさを十分に感慨を込めて打ち出しており、何等変ってはいない。しかし、これ等の句で知れることはいち早く俳句の表現の技法をマスターし得ているといえよう。この間著者は二度の海外出張をしている。一度はジャワで一度はタイ・インドネシアである。

朝市の涼一とくるみバナナの葉 ジャワ

波のりのこゑスコールのあがる海 //

白服にねむり成層圏を航く タイ

羽抜鶏もんどりうつてスコール来 //

ひとねむり椰子の高みのハンモック //

海外での作品は兎角読者が理解出来ないだろうと考へ、多分に説明がましい句が多いが著者はそんな事は一切意に介せず、自己の感じたもの見た物をズバリと言い切っている。熱帯の地で季語を求めるとはむずかしい。この旅も果して夏であったかどうかは知っていないが、そのようなことなどかまわず、把んだものをそのまま句にさらけ出している。その度胸のよさがその後の作品に大きな自信となつてあらわれている。

ぶつかり合ひふとる仔豚や桃ひらく

紙角力とんとん年の詰るかな

林火の句にこの頃「着ぶくれてぶつかりあうて
朋の国」の句があるが、同じぶつかりあうにして

も見方が全く異なっている。紙角力は確かにとんとんとんと机の上を叩いて勝負するものであるが、そのとんとんの音を時間の経過に結びつけた発想は非凡というべきであろう。

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

デザートに枇杷の出で夜を本降りに

賞与の日そら豆が出て湯も沸いて

リヤ王読むポインセチアを足許に

たつぷりと寝てアネモネの日曜日

曳売のぶつきらぼうに独活を見せ

目の上のたんこぶの兄柿呉れず

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校

これもこれもこれも土産よ梅雨畳

帰省便り玄海灘に友釣ると

荒神松買ふにがま口北風晒し

六郎の絵の中の子もみかん剥く

海鞘好きの客と覚えてゐて呉れし
蜜柑の皮二つ重ねて暇乞ふ

日常生活をこのように把えて詠われてくると、
著者のほのぼのとした家庭生活がよく見えてく
る。兄弟喧嘩をしつつもすくすくと素直に育つて
いる子供の姿も、家庭を守っている主婦の日常も、
決して亭主閑白でない著者の姿も、近くの商店街
の人々との交流も極めて明らかに匂ってくるので
ある。そしてその表現が 会話風になっているの
で、俳句というよりも一つの散文詩という感がす
るのである。これがもう少し安易になってしまう
といやみになってしまいが、ぎりぎりの線とど
まつているだけに人情のぬくもりが匂ってくるの
である。庶民性豊かな詩情をたたえている。

鳶若芽爬虫類館蔽ひけり

十夜僧かりんのごとき頭をしたり
金時山もこもこ雑木紅葉せり
七面鳥ぼろぼろの声発しけり
飛びつ切り上等の旭が花木瓜に
鳥入れてさくらのうつらうつらかな
遊ばれて磯に置き去りあめふらし
あめんぼう方程式のXなす
暖雨去りうぐひす餅のやうな島

七面鳥、あめふらしは共に季語になっていない
が、七面鳥は外国ではクリスマスに欠かせぬ料理
で、俳句の国際化の面からして採用してよいので
なからうか。またあめふらしは春に磯で見られ
るなめくじを大きくしたようなものである。形容
に特異性を出しているといえようか。

「当人渡世勝手次第」の島に灼け

夏痩せてブラキオサウルス仰ぎけり
弁慶の泣きどころにて蚊の打たる
コップに挿すすずめのてつばう独立祭
裏山より年を届けにみそさざい
色なき風背に釈尊の山圖

仙崖円相圖

これ食うて茶をのめと○あたたかや
身の廻り小出しに詠ひ葉ざくら李
死ぬは莫迦と告げたる人の墓洗ふ

面白おかしく物を詠っているながら、しつかりと
季語を把えて句に仕上げている。言葉の面白さだ
けに終わらないのは、対象に向って身が入ってい
るといべきであろう。時に古今の絵図を詠って
くる事もあるが、身が入っていないとそのもの
皮相だけにとどまってしまう嫌がある。

八丈島での嘗ての流人に対する申し渡し状の文
句をうまく使っている。著者に対して「当人句作
勝手次第」という申し渡しを送ろう。今までの既
成觀念の中で俳句を作っていたのでは、いささか
うんざりしている昨今である。各自思うがままに
表現の幅及び物を把える見方を工夫すべきではな
いかと思う。そういう面で大いに身を入れて独自
な境地を開拓して行くことを望みたい。そのよう
な面から句集『ねずみのこまくら』は一つの行き
方を示唆するものではなからうか。

平成二年万愚節

松崎 鉄之介

横浜、横須賀の人たちで毎月第一水曜日に行っている一水会という句会がある。松崎先生をはじめとして十名ばかりのささやかな研究会だが、メンバーは気ごころの知れた男ばかり、批評は辛口、ときに毒舌も出てすべてに遠慮抜き、小気味良い清爽の気をはらんだ会である。高沢良一さんは五十五年頃から一水会に出るようになり、現在は主要メンバーの一人である。主要というのは、良一さんの司会がてきばきと会を進め、発言も活潑だからである。くりくりとした眼を輝かせ、類を紅潮させて夢中でしゃべり、われにかえって、はにかみの眼を伏せる良一さんの面差しを見ていると、その胸中に童心と熱情の所在がありありと読みとれる。一水会の会場はいく度か変ってきたが、五十七年頃から今の横浜市金沢区地区センターに

定着している。自分の住居区ということで、良一さんが役所と折衝し世話をしてくれたのである。良一さんの俳歴は略歴によると五十一年「濱」入会になっていて。しかし、俳句への素地はその以前からあったようだ。御両親は共に若い頃から句作されていて、父君は既に故人となられたが母堂は「鶴」で今なお腕を奮っておられる俳句一家なのだ。そんな環境の中で育った良一さんは門前の小僧よろしく極く自然の形で高校、大学時代を通じて俳句に親しんでいた。師につくでもなく我流で過ごしていた良一さんは、五十一年勤務先の三田 日本電気の職場俳句に出て俳句との縁がふかまる。更に「濱」に入り大野林火先生に師事するに至って俳句に対する態度をハッキリとさせた。内にかまえて俳句を思いつめる、すなわち志を持ったのである。

紅梅にもつとも近く女ごゑ

ぼうたんの白に浸りてゐる浴後

水仙の初花一本目の香氣

紅梅の中へ一步の夕ごころ

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

散りそめて白さるすべり水の上

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

「濱」入会四、五年目までの作品を抄出したがいずれも調べが高く、豊潤な香をたたえ、詩情に澄みをこころざした秀句が並ぶ。良一さんの詩才を存分に示した一連と云える。中でも寒牡丹の一句からは良一さんの人温をもって醸されたいつくしみの詩情があたたかく伝わってくる。そういうあたたかさは、

よき顔の里芋を傾く子の皿へ

大いなる春月母子寄る方に

祖父の忌の雨たつぷりと葱畑

長湯の子柚子もろともに掬はんか

団欒の灯のゆきわたりさくらんぼ

よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ

など、家族を詠った諸作にいつそう著しい。特に子供とあそび興じ、語りかけるときの作品には構えがない。こころのおもむくままのくつろいだ表現から、ほのぼのとした父子像が浮んでくる。

一体に良一さんの作品は軽妙、洒脱な味を持つ。把握、表現とも一見無造作に見えるが、直感で得た詩因は大事に抑えて決して逃さない。持つて回った云い回しや、裱を着けたいかめしい表現とは無縁、気張らず構えずが身上なのである。この生得の氣質が生み出す飄逸さと自在さは他の追従を許さぬところだ。集中の、

遠浅の海に遊べること朝寝

弁慶の泣きどころにて蚊の打たる

長梯子どこへ掛けても師走空

蛸の申し送りに嶺々昏れて

絵団扇のあらかた竹の性抜けて

気の遠くなるまで蒲団干されけり

鳥籠を日向にサトウハチロー忌

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

などはどれもこのことを証左している作品である

う。更に自然詠を眺めてみるよきの、

裸木となりてさくらはそこらの木

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

切株の白打つて雨盆の山

口笛に空鮮しや桐の花

うすらひをつつとつと鶺鴒浄瑠璃寺

草の花氷室名残りの上り坂

竹の葉の降るになかなか昏れぬなり

拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し

竹が散るまた散る論されぬることし

白日傘水母の海を覚ましゆく

裏山より年を届けにみそさざい

朴落葉山の暦日重ねけり

などの句に共通するものは有情のなつかしきであらう。情と景の均衡の奥に紛れない作者の明るい意気ごみがのぞく。中でも、

朴落葉山の暦日重ねけり

の句の提示する観照は重厚、その上滋味おのずから具わった作、良一さんの自適を楽しむ姿が見えてくる。林火先生は良一さんの持つ情趣をすぐれた資質として挙げつつも、情趣が情趣だけに終らず自然の大で身を養うよう指針を示された。そして繊細にすぎて瘦せぬようにとも言われている。それに応えて良一さんの作風も逐年豊かさを加えつつある。

霜旦のイエスに通す緋毛氈

仏頭をあづかる寺に鉦叩

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

花椎か薬師の壺か夜を匂ふ

白菜をどかと仏へ飛鳥人

すべて精気に満ちており、事物との対決に心身を掛けた迫力を具えている。良一さんはよく吟行に出る。一人で出ることもあるが、数人のことが多い。大勢連れ立つての吟行はあまり好まぬようだ。そうかといって孤立型の人ではない。私も何度か一緒に歩いた。一泊の旅もたびたび共にした。そんなときの良一さんは実に人なつこさを示す。夜酒が入ったときの能弁ぶりも爽やかさを失わない。人間好きなのだ。人は大抵気の合ったグループで吟行を行うが良一さんの相手は世代、男女の枠を越えて範囲が広い。大胡さんのような傘寿を越えた人とも歩くし、竹内さん、神谷さんのような新進の女流とも歩く。気兼ねなく誰とでもすぐ解けあう親しさを持った良一さんに、

草稿に手を置くことも夜の秋

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

月明の紙魚と遊びて師の忌くる

臘梅に夫婦二組佇める

繰上げて海晴るる日の七五三

独りごつ男蘇枋の花を過ぐ

のような落ち着きを見せる作品がある。いずれも寡黙な句だが身に引き据えた勁さを持つ佳品と思う。そこに生活をひとまわり大きくした、人生の底深きところを置く良一さんの風姿の豊かさを見る。

平成二年四月

下田稔

ちの実」に、我が意図するところを代弁して貰いたかったからである。

句集『ねずみのこまくら』は私の第一句集である。顧みて、饒舌また冗漫な句ばかりが頭を並べている。

自業自得。

なれば、仕方がない。

句作に当っては、極力、自己の性情に忠実でありたいと願って来た。すなわち、己が気持のおもむく処、言葉を矯めずにのびのびと申し述べてみたいと。

集名を『ねずみのこまくら』としたのも、その言わずもがなの処をよく弁えている。「ねずみも

句集上木に当り、鉄之介先生からは直裁簡明なる御序文を、親炙する下田稔氏よりは意を尽した跋文を頂戴した。唯々、深謝する矣。

又、風神社の富田直治氏には編集万端一切合財お世話になった。厚く御礼申し上げたい。

平成二年四月

知命を三月後に控えて

高澤 良一

第二句集 ももすずめ

あとがき

ここ数年来、僧帽弁閉鎖不全なる一病にみまわられて、医通いが続いている。要注意は水分の取り過ぎと急激な肥り過ぎである。にもかかわらず中年肥りのせいか、首回り、胴回りは、優にその適正寸法を越えた。これも着られず、あれも着られずという妻の嘆息をよそに、庭に出ずれば、あんなの葉上に何やら緑の一魂。芋虫大にして、角あり、ストライプあり。なかなかダンディーな一物である。早速、「庭・畑の昆虫図鑑」にて調べてみれば、蛾の幼虫にして、モモスズメとある。その脇にブドウスズメと云うのも載っている。

葡萄に来るからブドウスズメ。桃にくるからモモスズメか。それにしてもこのスマートな肥り様は、吾がミニチュア版にして快なる哉である。

此のころころ虫が大いに気に入ったので本集名とした。

この度も本集上木に当っては、風神社の富田直治氏に一切合財お世話になった。厚く御礼申し上げます。

平成三年初秋

高澤 良一

最近、家の近くの八景島に新設のアクアミュージアムが完成した。地元住民ということもあつて招待券が舞い込み、妻共々出かけてみることになつた。水槽の中をゆうゆうと泳ぎ廻る熱帯魚は見ているだけでずいぶんと気持ちをしラックスさせてくれる。「悠々」「人なつっこさ」がその魅力の源泉であろう。愛らしい目付き。鰭付き。無言の語りかけ。そして色彩の氾濫と何とも愉しい。中でもサザナミヤッコと云う一魚に目を奪われた。涼しげに魚体を走るさざなみ模様、その流麗は抜群である。ちなみに、サザナミヤッコは巾着鯛類の一種でチョウチョウウオ類と並び海水産熱帯魚の双璧を為すと云う。江戸時代、主に刺網にかかったのもこの類で、魚名もその模様が巾着の縞を

彷彿とさせるところから来ているらしい。又別にこの仲間はヤッコと呼ばれ、尾鰭前部の長いとげが奴（ヤッコ）の髭に見たてられそういうのだと云う。ヒレナガヤッコ、タテジマヤッコ、ソメワケヤッコ、アカハラヤッコ、アデヤッコ、ニシキヤッコ、チリメンヤッコとその名のりもにぎにぎしい。名、体とも庶民性が身上の魚である。さて、吾が俳諧もそういう彼等に見倣いたく、当集をサザナミヤッコと銘打つてその嘉徳にあやかりたいと願うものである。この度も本集上木に当っては、風神社の富田直治氏に一切合財お世話になつた。厚く御礼申し上げたい。

平成五年初夏

高澤 良一

当句集は「さざなみやっこ」につぐ私の第四句集です。ここ九年来、心臓弁膜症を患っており、一九九七年七月十四日より一ヶ月間入院しまして手術をしました。目下養生中。その際、病気が病気でしたものですから句集でもつづめておこうと思つてまとめたのが「ぱらりとせ」です。従つて緩選となり八百句ほどありますがご一読下されれば幸いです。

といった書き出しで一九九七年七月に句集を一旦刊行予定でしたが諸般の事情あり現在まで伸び伸びとなつてきました。この間、インターネットの自分のホームページに「ぱらりとせ」を掲載して来ましたが、今回考えるところあつて紙本に収めることとしました。

今、私の関心はインターネットにあつて、句作の発表も旬日誌の体裁で、月々備忘録を兼ねて発表しています。又ネット句会も実施して四年になります。新しい時代のニューメディアとしてのインターネットが「俳句の場」に如何に活用出来るかに最大の関心があります。その一環として、三年かけて俳句検索データベース（六十三万句収録）をネット上に構築し、一般に公開して来ました。どの方の句であろうと、作句された一句一句にとつて最も幸せな途は出来るだけ多くの方に読まれるということ、その公開性、流通性にあります。その点、インターネットは最適です。紙本が制約されるのに比し、ネットは無限の公開性を有します。従つて句集の上木も、私にとってはネットが主、紙本が従ということになります。それでも紙本の佳さは、読みたい時に寝転がつて読めると

いう気軽さにあります。その意味を含めての今回の上木となりました。

句集出版の形式も、かねがね希望して居りました、経済的に安価であるDTP（印刷の前行程を全てパソコンで行う）出版としました。

句集上木に当たりましては、オンデマンド出版の先進企業である（株）デジタルパブリッシングサービスの大塚正志氏に大変お世話になりました。厚く御礼申しあげます。

平成十五年秋

高澤 良一

第一句集 ねずみのこまくら

●昭和五十二年

佳き顔の里芋を頷く子の皿へ
初刷の極彩版は妻子占む
降る雪に弾み付ききし夕笹子
髪詰めて童顔もどる五月妻
病むわれに声撒きちらし梅雨鴉
虹立てり荒き雫は椀の直
郭公の峰三方よ信濃へ下車
蝦夷青嶺肩寄せて守る湖の艶
灯より濃き金魚を掬ふ夜宮かな
夜焚火となりて炎のいま丈余
転げ出て故山の匂ひ虚栗

●昭和五十三年

春の地震白鷄百羽揺すりたる
雁引くや荒布色なる島の子ら
紅梅にもつとも近く女ごゑ
大いなる春月母子寄る方に

●昭和五十四年

昨夜雨の籠り蚊放つ木曾格子
ぼうたんの白に浸りてゐる浴後
切株の白打つて雨盆の山
あかあかと蓄洗ひあげ終戦日
明神のうしろ日当る竹に蟬
温言のごとき日を載せ茶の咲けり
祖父の忌の雨たつぷりと葱畠
夕凍みの直路三十路の靴鳴らす

●昭和五十四年

風邪に臥す一日梅の光りさま
実南天笑みのこぼるるばかりなり
白梅の薬ばつちりと雨後の山
どつと灯の点る親しさ田植あと
鳥渡る空傾けて棒倒し
野に出でてよりの水勢まんじゆさげ
遊行忌の道一本や相模晴
当てなき歩柿の家より楽溢れ

●昭和五十五年

朴落葉山の暦日重ねけり
枯月夜燭入りて堂膨らむよ
口笛に空鮮しや桐の花
朝市の涼一とくるみバナナの葉
波のりのこゑスコールのあがる海
アイシヤドウ濃く炎天の一帆追ふ
海上につよき一星メロン冷ゆ
炎ゆる日のはじめのトマトもぎにけり
毛虫焼く一部始終を見て足れり
石獣のひたすら座せる大暑とも
草稿に手を置くことも夜の秋
石路の花誰も来ぬ日と決めてゐし
空ら拭きの机にひびくしぐれかな
山中の雲にあけびをあづけたる
棒のごとき白息何もかもこぼむ
水仙の初花一本目の香氣

●昭和五十六年

頂へ道の集まる初詣
紅梅の上白梅をわたりし風
紅梅の中へ一步の夕ごろ
青き踏む一遍遊行の地なりけり
かたまつて仏の裾のふきのたう
夕雲光琳笹を鳴らし過ぐ
雫切りのぼる太陽金盞花
霞立つふるさどに入る遠忌かな
焼山に月の出かかる母郷かな
よく聴ゆ汽笛西瓜は一番花
白日傘水母の海を覚ましゆく
散りそめて白さるすべり水の上
白服にねむり成層圏を航く
羽抜鶏もんどりうつてスコール来
ひとねむり椰子の高みのハンモック
昼寝覚椰子五六本突立てり

碧きまま昏れて流星椰子の上

長政のこゑぞ全天夕焼けて

夕焼空アラ―讚ふるこゑのぼる

シャワー浴び貝殻ランタン灯の入りし

柿ことごとく落ち裏山の青天井

方丈に鯉の一ト跳ね秋天下

木の実拾ひみほとけの掌に眠らす

吹き寄せられてゆく東京の空つ風に

水仙の香のつきぬけてゐる夜空

長湯の子柚子もろともに掬はんか

大年のむらさきだちし夕櫛

●昭和五十七年

箸置に箸鷺の幼なこゑ
ぶつかり合ひふとる仔豚や桃ひらく
日の牡丹日暮れて風の牡丹かな
竹が散るまた散る諭されゐるごとし
そら豆のもう咲いてゐる青入江

●昭和五十八年

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

水馬二つ光輪ぶつけ合ひ
予後よきを聞きし日よりの鉄風鈴
友の忌の白あぢさみを胸の丈
はやばやと入りて菖蒲湯匂はすか
のうぜんの方へ顔向け母眠る
祭果て巨き夕浪立ちにけり
影ぐるみ灼かれ突立つ義民の碑
立秋の影のごと出て帆の一つ
子と食うぶ柿のあかさの他は欲らず
猛り鴉丹を強くせる宮柱
水仙の葉の尖りくる怒濤音
紙角力とんとん年の詰るかな
もてなしに大き湯婆年の宿
みそさざい白に囲まれ白を剝る

望遠レンズ花菜畑の黄を絞る
告別の膝折る寒の百合の前
八方塞の一方展けチューリップ
他所者のほえられみたり桃の村
匂ひ立つ芽木突風の過ぎし闇
倒れたるまゝの杖彼岸講
団欒の灯のゆきわたりさくらんぼ
よく食べる子にはさくらんぼが出るぞ
デザートに枇杷の出で夜を本降りに
祭くる門川に殖ゆ糸みみず
鬼灯を雨に打たせて船世帯
武者窓を烏揚羽のよぎりけり
月明の紙魚と遊びて師の忌くる
帰省せり蠅取りボン吊る家に
どぜういんげんこまめに摘んで生身魂
末つ子の水撒き上手水打てり
ふるさとの雲の匂ひのかんぴよう着く

遠浅の海に遊べること朝寝
春泥をぬぐひて詣つばたもち寺
さへずりに十余り甘茶茶碗伏せ
さくら薬降る制服の紺の肩
萬若芽爬虫類館蔽ひけり
目立ちたがる芍薬赤芽雨催ひ
一言で癌と告げられ躑躅燃ゆ
つばくらめこゑの徹れる看護婦来て
花椎か薬師の壺か夜を匂ふ
夏瘦せてブラキオサウルス仰ぎけり
絵解僧こゑをおとしぬ遠蝮
弁慶の泣きどころにて蚊の打たる
法難絵凶風死す灘を正面に
焼香の列遅々としてのうぜん花
ぶんぶんと泣虫抛り出さんかな
賞与の日そら豆が出て湯も沸いて
コップに挿すすずめのつばう独立祭

かまつかに出陣の下知下ることし
十五夜の空へこぞれる糸瓜加持
形ばかり長けし子に似てコスモスは
海桐の実弾けむばかり漁日和
採煙蔵鶴の眼のごと凍てて火は
膠釜あたたかく年送るかな
大仏に見下されゐて風邪貰ふ
うすらひをつつとと鶉淨瑠璃寺
橘寺垣を低めに手毬唄
白菜をどかと仏へ飛鳥人
掃き了へて夕凍みねずみもちの実に
売れのこる芒みみづく風邪引くな
裸木となりてさくらはそこの木
藪つばき他所者を見る目付して
●昭和五十九年
実さくろの木乃伊めく枯れ祖父の忌よ
通り矢の鼻先昏れて寒鴉

父試歩より吹かれて戻る鴨足草
幅跳の助走路に沿ひ雁来紅
いち早く自然薯黄葉狐雨
回遊の鯉の鱗見え一遍忌
鬼女祀る堂出て日暮とりかぶと
糸を焼くうしろ鬼無里の真暗闇
霜旦のイエスに通す緋毛氈
ブロッコリ茄でて数へ日籠らふか
リア王読むポインセチアを足許に
●昭和六十年
元旦の日が降りてくる鎖樋
葉牡丹に父逝きし夜の明けにけり
雲雀落ち尽し河口の高曇り
強東風や焦げ目の残る芦の節
たつぷりと寝てアネモネの日曜日
質されて子の口ごもる春の雷
矮鶏が木に上手に登り三鬼の忌

忘れもの妻の追ひくる連翹垣

おもたせの鶯餅に雨の客

葉の混んできたるさくらの幹にほふ

葉ざくらの候と書き出し本降りに

曳壳のぶつきらぼうに独活を見せ

その中に杭もすつくとかきつばた

駐在所前を駈けぬけ青蜥蜴

黴まじく仁王どんぐり眼かな

巫浪生家跡つばくろの真かがやき

沼尻に雲せり上がり坐禅草

しやうぶ見る腰ポケットに扇子かな

海よりも濃きあぢさゐを操舵室

月見草水平線の上に吹かれ

氷水伊豆見屋と云ふ海の家

わらしべに鯨の吊られて御祭神

施無畏印むくろじ強く地を打てり

仏頭をあづかる寺に鉦叩

水馬総出で水を澄ましをり

元素記号子の諳んずる夜の秋

目の上のたんこぶの兄柿呉れず

豊年の糊のねばりにデコ作り

デコ絵付け関羽の髭のさはやかに

箱河豚に酌みて無月の泊りかな

待宵の濡れ岩隠り蟹の爪

片寄せられ等外の菊白ばかり

握りよき播粉木選りぬ大師講

くわんのんの手の厚かりき寒さくる

落葉焚午後の落葉を加へけり

臍の緒のごとき句を溜め年逝かす

●昭和六十一年

裏山より年を届けにみそさざい

歯朶活けて年入れ替る坊廁

ちやつきらこよくそろひみておちよぼ口

孟宗の雄三浦半島・長沢、左義長ごるおんべの火中より

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

園児等に鼻振り上手日永象

つつかけに銭湯を出づ芽出し雨

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校

茶摘籠腰に弾ませ結仲間

柿接木居坐る雲の雨ぶくみ

代掻かれ雀の鉄砲水浸し

これもこれもこれも長子、修学旅行より戻りて土産よ梅雨畳

百段をのぼりつめれば七変化

ほんち捕る子に目つぶしの柵垣

*ほんちは喧嘩蜘蛛のこと

夜色楼台雪万家圖を見て端居

帰省便り玄海灘に友釣ると

どぶ板通りねずみ火花が駈け抜けて

隠元豆摘みかと問へば婆むむと

老人ホームほたるぶくろの道のさき

鯛ノ浦色なき風に鯛肥ゆる

鮑あわびの上あるく鮑よ一遍忌

朝市の牛蒡せり出す寺門脇

鬼無里晴れ稲を刈る音蕎麦刈る音

ひつじ田を田螺のあるく鬼無里晴れ

廊に群る夜長のスリツパ鼠めく

宿の餉にけとばしの出て紅葉季

草の花氷室名残りの上り坂

鳥籠を日向にサトウハチロー忌

自転車に空気を入れる石路日和

綿蟲を割つて総本山清浄光寺、一ツ火七句に入る

滅燈会枯葉の精も加はれる

一ツ火びやくしやうに白道濡れむばかりなり

白道の左右より咳御滅燈

わらわらと白息称名起りけり

引声念仏畳めつぼう冷ゆるかな

甘酒に六腑の在り処滅燈会

紙飛行機木犀の香によく飛べり

色なき風背に釈尊の出山圖

やどり木に逝く年の眼を止めをり

大マスクとつて白子の味見せり

荒神松買ふにがま口北風晒し

長梯子何処へ掛けても師走空

●昭和六十二年

餅腹にもくれむの芽を見に出づる

臘梅の嫌ふ日向をきらひけり

水仙の葉に水仙の葉影凍み

紅梅を見合のごとく見てをかし

土器出づる山を拓きて桃島

これ食うて茶をのめと○まるあたたかや

仙厓再相図

月高みはくれむ浮力のつくごとし

はくれむに似たれど辛夷で押し通す

修験道生五倍子の連珠飛び散れり

さへづるは何かと問はれあてづつぼう

散るさくらタイムカプセル埋めし地に

喪の知らせまたありさうよ紫荊

独りごつ男蘇枋の花を過ぐ

身の廻り小出しに詠ひ葉ざくら季

腹這ひに蜥蜴ぬくもる子産石

航海を終へて棕櫚咲く家に居り

蠅生る磯長しながの國の磯歩き

青嵐山女魚焼く火を襲ひけり

朗報を聞くごと新茶味はへり

梅雨籠りあうむにこゑを奪はるる

裾領けの実梅の山を三つに盛る

閑取に前歩かるる薄暑かな

蘭鑄を揺りて昼の地震ありぬ

亀西伊豆、田子三句の手といふ貝が出て涼しき鮎

かつを船滴る陸くがに戻りけり

浦祭藻を出で入りのべらを見て

花火野郎青嶺の肝を抜き来しと

蛸の申し送りに嶺々昏れて

帰省子の弥次郎兵衛めく手土産に

死ぬは莫迦と告げたる人の墓洗ふ

隣家よりこゑ枝付きの柿貰ふ

のうぜんの盛りや防火講座聴く

海鞘食べて午睡六腑の匂ふらむ

無人店に買ひてすこぶる柿甘し

法要の集りよくてかりんの実

男体と名も佳き山に蜻蛉湧く

下着売るお十夜の灯のらくだ色

十夜僧くわりんのごとき頭をしたり

お十夜の小菊嗅がれて買はれけり

通夜ありて良夜の句会一人欠く

土蜘蛛の撫でやる腹の珍無類

金時山もこもこ雑木紅葉せり

七面鳥ぼろぼろの声発しけり

しかと笹鳴瑞鹿山円覚寺

隣席に日の射し込める年の旅

大年の日を載せ覺屈託なし

国民休暇村一斉に雪雫

●昭和六十三年

通るたび橙の木の似合ふ家

六郎の絵の中の子もみかん剥く

大とんど崩れ腹中覗かする

飛びつ切り上等の旭が花木瓜に

鳥入れてさくらのうつらうつらかな

山羊髭の人類学者春を語る

連翹のハハハハと又ハハハハと

空つぼの檻も覗きて日の氷き

腫れぼつたき鯉に寄られてゐる暮春

遊ばれて磯に置き去りあめふらし

うらうらとごうなのあるく漁休み

やどかりも帰り支度の日を浴びて

あめんばう方程式のXなす

椎の香と云ひかけて顔見合せり

門構へ泰山木に負けてをり
波羅羯諦はらぎやてい泰山木の花咲けり
泰山木散る滅却といふ言葉
棒杭の如きをぐいと墨の涼
ねずみもち咲く辺を妻の往き来せり
大茅の輪大蛇おろちを跨ぐ心地せり
蚊帳吊草古風な風を送りけり
摘まずともほたるぶくろの裡知れり
梅の幹くるぐろと梅雨待ちあたり
ポポーの木と云ふを植込み夏はじめ
ほたる火に一幹ぬつと現れにけり
昼寢覚とると庭木ありにけり
絵団扇のあらかた竹の性抜けて
海鞘好きの客と覚えてゐて呉れし
榎酒に口とがらする夜の秋
飛魚八丈島等跳んで跳んで水平線退る
われ泳ぐ下にテールブルサンゴ礁

ゆつたりと泊船を入れバナナの葉
すぐあがる雨と知りをりハイビスカス
「当人渡世勝手次第」の島に灼け
喜雨雫カナリー椰子の刺にかな
八丈太鼓教師の打てる盆鉢
雨落ちて来ぬ流燈のまへうしろ
くろぐろと精霊舟を曳きし跡
明けわたる水に水馬の鉄脚
一驟雨高層ビルを壮とせり
仕舞ひまできれいに芋殻燃えにけり
のうぜんのうぜんの散らかつてゐる伝心寺
邯鄲を聴きにひきずる下駄の音
気の遠くなるまで蒲団干されけり
菓子折の赤き紐もて菊括る
いつまでも隣家へ木の葉降らせる木
拾ひあぐ落葉に朴の木の遠し
枯柏青天井の何処か鳴る

裸木となりて櫛の鬘鑠たり
懐手する手の無くて大櫛
みかんの皮二つ重ねて暇乞ふ
数へ日の日にまどろめるさるすべり
木々にあり大つごもりの三時の日
二段上の枝に凍みをりもう一羽
根方よりずいと見上げぬ冬櫛

●平成元年

投函にぶらりと出づる雑煮腹
臘梅に夫婦二組佇める
初東風にそらまめの茎ぐらつけり
カリフラワー剪られ空あだなる空を抱き
春隣向き合うて立つカンガル―
花冷の河馬の図体ただよへる

建長寺

巨福こぶく山梅の活潑潑地かな
清湘老人呼びに遣りたき里の梅

笹子来と云へば目白と正さるる
もくれむの散り下手堀の内と外
暖雨去りうぐひす餅のやうな島
古草のそこらへ坐り給へと云ふ
くるぶしの風に乾ける磯遊び
連翹の枝の跳ね出せる道普請
竹の葉の降るになかなか昏れぬなり
そら豆の莢突き出せる島の道
たあいなく風につまづく鴨足草
あぢさみをびいどろ色の雨つつむ
相撲草強く吹かれて立ち直る
坐をすこしづらせば見ゆる夕顔棚
照り返し強し鰻の日の舗道
雨弾き弁慶草の葉にちから
秋さくら川を優しく曲げにけり
繰上げて海晴るる日の七五三

第二句集 ももすずめ

●昭和拾遺

初晴や立枯松にあまねき日
新社員交へて今朝の昇降機
白帆消ゆ沖に五月の風余し
海へ虹一帆もなく立消えに
花桐に雲青年に志
竹林に発し螢と一川と
遅れゆく一羽必死よ秋の暮
かどはかされて熊手ゆくごと夕日の中
白を剥るうしろ檜山の垂り雪
お年玉大尽と街闊歩せり
階きざはしの幅員ひろし牡丹寺
もう一艘殖えて常節採る舟が
網繕しふ手許けだるく海紅豆
艦しの花垂し弥次郎兵衛めく祭舟
崎鼻しに葛とおぼしき花吹かれ
佐久平に塩沢堰を引きし六川長三郎氏

村人に水大将と呼ばれ親しまれば

日雷水大将の家震ひ
石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て
曲糸かに鶏頭明り忌を修す
朝寒の神道かみのぼる下駄の音
戸隠の霧に娑婆気抜かれけり
揃へ脱ぐ中に長靴糸瓜加持
五柳先生色無き風に吹かるる圖
魂たま抜けし炭団法師と年越せり
本尊のうしろ辺りやしづり雪
大あくび春の海より貰ひけり
鹿尾菜干す手の影鹿尾菜よりも濃く
大茅の輪仕上り風が先づくぐる
誰もよく撮れてりんごの花の前
釣舟草霧に溺るる女坂
身じろげるとき邯鄲に鳴かれけり
裸木の蕊の白さをおもひけり

熱爛を一気に呷り口火切る

●平成元年

読初めの今は昔の天竺部

元日の肌着ひらりと手に通す

目を皿のやうにして追ふ夕笹子

日当りが佳すぎても駄目シクラメン

鎌倉の日向をあるくかほしろうも 袂

梅林を歩いて見むかもう少し

かまきりの巢と云ふを見る着膨れて

もろともに路肩と崩れ犬ふぐり

猫柳一言云ひて皆触るる

泳へ性足らぬ椿のまた墮つる

手つかずの芹の森あり川向ふ

紋白蝶もんしろが仏舍利塔を越えんとす

爪弾くつくしの頭よりぱと煙

九十九折木きぶ五倍子ごばいしの上に人のこゑ

蔦の芽のあかあかおつつけ降り出さむ

おづおづと寄りまじまじと蘇枋見る

みつまたのやうに時間を使ひたし

啓蟄の足のぶつかる古机

句の誤植推量せよと亀鳴けり

ビルと云ふ直方體の夕おぼろ

山ざくから吹き割る風のいくそたび

孫ほどの破れ傘容れ破れ傘

弥次馬のやうに転がる椿見て

花冷え増上寺の此の鐘撞かば木更津まで

かるがると昼月上げて八重櫻

雨冷えの甘茶こくりとのみほせり

偶にくる鳥があんずの花散らす

連翹の葉がちとなりぬ投票日

三椶の花の空うっけに日の闌くる

荒崎の雨にがうなの濡れあるく

引く波に鹿尾菜被きて礁現る

馬珂貝の尻の辺りが剥げぬたる

沖波のときに牙だち花ユツカ

警策音飛んで瑞鹿山芽吹き

咲く桐に一瀉千里の旅ごころ

十葉を抜き来てさつぱりしたる顔

牡丹圖を杜若圖に掛け替へよ

花棕櫚を仰ぎゆつたり坐りけり

棕櫚の花黄昏長う長うせり

たそがれの肉眼可視星花くわりん

ゆりの木の花たふたふと海風に

ありきたりな色でありけり垣の薔薇

紙兜折つてかむつてみせにけり

梅雨に入る櫻昂然榭慄然

在の百姓、菜を啄む鳥を菜食いと呼べば

菜喰ひが梅雨入畑に現はれて

高枝より喧嘩売るごと梅雨鴞

鯉跳ねてどうんと梅雨の水面打つ

梅雨湿りゴヤの巨人の黒髪も

見つめゐる梅雨のシグナルレッドかな

青梅のひよわきは落ち転がれる

ゼラニウムだから雨に打たれをり

夕映えを長びかせをりブラシの花

山車倉を叩きて榭の荒牽

泰山木拝見磴の端借りて

泰山木ずりおちさうな花とどめ

雨あとの磴打ち泰山木病葉

虎耳草石垣沿ひに風の起つ

「附子」を観て椎のにはへる戻り道

緑蔭を彼方の人も立つところ

銭葵長けしを残り引越せる

かなぶんの鉄砲玉に斜面畑

犬枇杷に沖より旭駈けつけし

崖の百合揺れゐて波浪注意報

くろんぼと云ふ名もよけれ海の家

高浪に茶をひいてをり海の家

鼻先へすうつと螢臭き風

嗚呼といふこゑにほうたる横江り
川下の方へほうたる木を替へて
葉つばごとむずとほたる火掴みけり
こんもりと煽り甲斐ある櫂若葉
若葉風立たす木の名をふうといふ

*ふうは中国産まんさく科の樹木

薫風を捌き疲れて夕櫂
神輿庫新樹の気宇につつまれて
竹の葉のそそのかさるごと散りぬ
庭の紫蘇摘み来て鯨のたたきかな
虫喰ひの紫蘇も一緒に吹かれをり
目に見えぬ雨にのうぜん昂れり
間引かれてふてくされぬ西瓜玉
滝水のぐるりと迂回せるもあり
腹の底割りて二つの団扇かな
手花火の煙くる部屋にシート敷く

何は扱置き一杯目のビール
鎌跡の残る草長け吹かれをり
風と云ふ風が死にゐる大蓮田
畳廊百日紅に突きあたる
唐突に簾の蟬の鳴き出せり
昼寝人かさと寝返りうちにつけり
炎帝に葡萄の種を抜かれたる
家に入る前に夕顔垣間見て
五虫譜
一興の掘り返されてあとずさり
シマガラスヨトウ嘉せる夏の雨
ふんばりてドウガネブイブイ露吸へり
秋立つと丸々肥えしモモスズメ
掘り出され団子決め込む団子虫
朔日の風蟻螂の貌を吹く
立ち直るいとま与へず萩へ風
無患子の地を打つ音を聞きに来し
秋草を折りとる音の根元より

弟が立寄り呉れて門火焚
門火焚く時刻そろそろ来てをりぬ
芋殻折るひびきに迎へごころかな
芋殻火また消え入りさうになりにつけり

仏前

観自在菩薩諸の蒸けたるを
かんじざいぼさつ
躓きてゴツと夜宮の走り根鳴る
樟脳舟すぐに元気をなくしけり
三伏の激痛に腰掴まれし
レントゲン写真
龍淵に潜む透視図医師と見て
通院の途次のうぜんの宙ぶらりん
幹赤く守一夏もりかすの木を画ける
生ぬるき木椅子ににいに蝉聴けり
ずんどうの櫂に蟬の取継る
暑にかすむ新宿が見え烏龍茶
峯雲のよく聳つ日なり鵬を見ず
峯雲に亀裂入ることなかりけり

はんめうのふつと消えたる岩の色
コスモスに須弥山見ゆる日もあらむ
朝の鴉空気震はせもう来たか
かん
甲高く百舌鳥が雀を制しけり
手入れせる松に根気を問はるごと
仙厓四相図
○△□圖判じゐる夜長
露けさの出刃下げ南泉斬猫図
信貴山縁起
宙を飛ぶ倉を目で追ふ夜の長し
野の草を見る会葛に屯して
かそけしや垂穂を垂穂うてる音
犬蓼の稲田になだれ込むところ
コスモスのそこを折れ穂高町
林檎園脚立を夕陽あたたむる
城垣の上より呼べる秋の鯉
おろしがね
下金色の夕日に菜を問引く
町内の二百と五人の敬老日
くるぶしの上より刺せる秩父の蚊

吊し柿早うつるせと秩父の日
十夜僧すつぼりと入る傘買へり
十夜僧ずしんずしんと廊渡る
葉を落しずんとあかるき銀杏の樹
そそけだち自暴自棄めく一枯木
畑の菊ごこえて朝を迎へけり
ひもじさののつびきならぬ日暮鴟
稲架棒の取り入れ後もふんばれり
金賞を争ふ菊の目白押し
福助に作れる菊に人ばかり
一文字咲きを支ふにポール紙
盆栽の菊の松籟聞かむとす
着膨れて遅参の弁をこもごもと
着膨れて後部座席を占めにけり
足柄古道よぎる蜥蜴の貌に冬日
遅ればせながら駈け出す落葉あり
日陰りて木賊に引立てらるゝ家

凍むこゑに電光石火みそさざい
もくれむの凍む枝に雨のぬくとからむ
玄孫弟子^{やしご}巫浪序文を読初めに
風生に「大寒と敵のごとく対したり」の句あれば
風生の相手取りたる寒ン迎ふ
碧梧桐忌法外な寒ンもたらせり
厚着よりもこと手を出し仏撫づ
みつまたの蒼おつとり日の射せる
オソコロコロセンダリ称へ凍むまじや
紅梅の下土踏めばほこほこと
梅東風に弁財天の膝吹かれ
十二神将一体修復中余寒
黒ずめる連翹の芽に雨つめた
れんげうに笑ひかけらる日も近し
れんげうの葉をもこと解く天気雨
啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉
パツパツとさんしゅゆの黄を振撒ける

磧に沿ひあゆむ寒さも本格的
月光のあまねく葱に性根入る
すずかけの裸木季と申すべき
閲覧室そそけ枯木の見ゆる席
二三冊年をまたぎて本借りぬ
床の間に積み置く本も年の内
千両の実付きのわるき年逝かす
熱爛こんな夜はに限る限ると注ぎ合ふも
ぞろぞろと二階へ通され年忘
前輪を後輪追へる街師走
●平成二年
水栽培の髯根にも年改まり
滑つこき初刷を取り落しけり
高梢に寄生木昇り初日受く
木瓜の枝のこんがらかつて年越せり
ふだん着で通し三日も過ぎにけり
一二枚落葉挟める葉水仙

悪相の紫荊雨まみれなる
茎を曲げ生ふるアネモネ頑に
問診に次いで触診スイトピー
涅槃圖を二人がかりで懸けたへぬ
エイプリルフル句集序文賜はると序文締めくくられ
天気雨はらと雀の帷子に
吹き降りの白木蓮を横なぐり
手際よく傘をあづかる甘茶番
よき風の吹き抜けるなり花御堂
愛すべき春の櫂のその全て
この葉形がたちたしかに破れ傘の花
南畝の忌噓をまことの種として
でで虫の止まる広葉に朝が来て
早起きをしてでで虫の側にある
朝方の楓翼果に風湧ける
かみきりにいちじく甘露用意せる
朝顔の種蒔く臍を下にして

けふ夏に入れり櫂の戦ぎぶり

若葉して櫂は杜の明り取

まだ借手つかぬ空家の棕櫚咲けり

要^{かなめ}栄ゆ吾が家新築然として

葛餅に頁の耳を折りて立つ

むしむしとする日を咲きて夏みかん

万緑に抑へ込まるゝ一堂宇

掘り出されまじまじ見らるあとずさり

よるよるとじやがたらいもの花へ蝶

あめんばう跳び越しゆけるあめんばう

梅雨到来告げて編集後記かな

十葉に朝の一刻日差しけり

黄楊の花小雨あかるく降りにけり

しやがしやがと著我にふる雨聴きぬたり

くるぐると梅雨入の八ヶ岳の大つむり

濡るゝ枝掴み直して梅雨鴉

函強く振つてとり出す梅雨の本

梅雨の月上つてをりぬ家間近

夏富士を語るに静岡弁が出て

白樺の一幹に倚る夏ゆふべ

郭公の連呼絶えざる八ヶ岳は好し

ともかくも郭公を詠みおほせたり

黒揚羽宙より降れる晋山式

征桓立交り咲くねずみもち

曇日を待ちゐしごとく合歓咲ける

鉄線の剪り処こころと鉄当て

いんげんの白花むつと曇りづめ

だしぬけに降られて泰山木の下

でで虫の当推量が外れけり

花了へしあふひの茎の突つ立てる

なめくぢら砥石溶かしにかかりけり

のうぜんあたりにかまはず散りにけり

のうぜんの妄想を詩の糧とせよ

庭土が性に合ひたる移し竹

手に負へぬ赤さのカンナ咲き出して

タツクルに走者潰さる海紅豆

弁慶蟹蓐の葉騒に目を上げぬ

驟雨あり大根台地の地味肥やす

皺寄らぬやうに蚕豆茹でるコツ

けふ差して腰に馴染まぬ扇子かな

浄^{じようはり}玻璃の鏡も曇らむこの暑気に

*地獄の閻魔の庁にあつて死者の生前の

行為を映し出すといふ鏡

黄表紙に凌ぐ暑さも峠越す

朝蟬のじゆげむじゆげむに起き出して

大向日葵竜顔を拝すごと

塩^{しほから}辛蜻蛉の汚れし翅を笑むごとく

翻る芭蕉に雨の五十棒

夏の灯の鯨の本へ乱反射

夜や秋の手にとりてみぬ不審紙

峯雲に見下ろされゐる鮫州駅

^{佐渡行}

どぜう捕大佐渡曇り背に負うて

大佐渡の竹灼き尽す日なりけり

照りつける鉄砲鼻に葛灼けて

^{金山}山百合のうへに出でたる狸掘

^{妙宣寺}わめく蟬塚原問答聴くごとし

そよりともせいで巨刹の青すすき

抽んづる赤松蟬を集めをり

漬茄子と佐渡米に食すすむなり

海に入る夕日見守るおけさ柿

木偶の抜く段^{だんびら}平涼し文弥節

一工夫ありそな花火揚がりけり

空昇りつめてよろめく花火玉

ナトリウム色の花火に顔染めて

パリパリと揚がりズドンと花火了ふ

大玉となりて間合をとる花火

打止めの花火はこれかこの後か

終の花火らしき高さにあがりけり

行きあたりばつたりの蟬吾を掴む
夕顔を天蛾すずめがぶると発ちにけり
颯風サカザキシーズン到来
あばずれのキティ上陸せしことも
そはそはと次の風待つ白芙蓉
泥亀の鼻もたげゆく秋風裡
一吹きに鯉魚風葭を鳴らすなり
一遍に阿弥衣はりつく初嵐
起き抜けの鴉の横紙破りかな
はつはつと山車倉の上に鴉鳴ける
内祝鶏頭の茎色づきて
水引の際立つ方へ目を遣りぬ
花の名をそこそこ覚え田村草
コスモスの脇をぶると馬体過ぐ
八つ頭馬鹿丁寧に洗はれをり
天柱山柴屋寺その脇山の紅葉かな
自然薯の包引つ提げ長身に
そろそろと野老黄葉の竹のぼる

青空に木賊の節を継足せる
草の花鉄路のつくる三角地
背の崩る温知叢書を曝しけり
曝古地図されて龍の取り巻く秋津島
庭草の二三供へて十三夜
だぶだぶの身不知柿みしほすに口もてゆけり
大根の形よき葉に旭さし
一段と今朝は冷え込込む隼人瓜
藕の実の風味を鴉の熟知せり
卒塔婆のつまさきだてる鴉日和
道なりに下りゆかれよ芒の中
数珠玉を過ぎてずんずん暮るゝ道
畳屋の菊の出来栄えよかりけり
家に居ることにおちつく石路の花
蓮掘のここぞと力入るゝ顔
柿のみぢ柿に根負けして散りぬ
枯木道脇挟む本ぬくとかり

呆けし実を三つ四つ残しやぶめうが
拾得じつとくの笑ふがごとく裂け石榴
そそくさと蛇穴に入る海蔵寺
不可思議光放つ石榴の暮れずあり
鴉描き足さばや倪さん空林圖
十五夜三浦三崎の花暮町に灯の入りて
跼み見る露草の露鳴りさうな
穂すすきのほの字程度に解けそめて
種茄子に晴れてまた降る雨のあり
砂蹴つて鯨の子姿くらませり
鬼貫忌平語しつかり使はねば
苦吟してとつてつけたる秋の風
さういへば家紋に似たる柿の蒂
唐辛子ひとりよがりの癖が出て
赤のまま此処らで誰か滑りしか
水引に視力測られゐるごとし
案山子見る男チェックのシャツを着て

根方まで冬日が当り気さくな木
いちどきに散るを好めるいてふとも
入り組めるいてふの枯枝枯枝に日
ごはんつぶほどのあかるさ冬ざくら
まなうらに駱駝の現る日向ぼこ
墓地に向き花柄蒲団干せる家
炬燵して芋銭の狐隊行圖
なまこ囃む音こめかみに伝はりて
ちやんちやんこ着て神頼み長かりき
男鹿線男鹿年越吟行に乗りてことこと年の旅
一病と年の関越す膝栗毛
悴める掌のかたちして枯柏
逝く年のぼそと暮れゆく男鹿の空
夕凍みのわけでも鯛の鼻柱
上つぱり脱いでしよつたる招ばれけり
これやこの男鹿のしよつたる賞味せむ
しよつたる鍋煮えて飛び交ふ秋田弁

これが彼の秋田音頭の男鹿雷子ぶりがこ

なまはげの出る夜を雪の降りしぶる

なまはげのくる夜家中明るうし

真山神社

お祓ひの済みてなまはげ放たれし

なまはげの足踏み鳴らす屋台骨

なまはげの聞きしに勝るおらびごゑ

なまはげのずいと茶の間に踏み込みて

なまはげのもぞと酒盃に手を出しぬ

なまはげの去るを呑み込むうるし闇

●平成三年

男鹿半島、戸賀

顔寒くこんこの如く目覚めけり

*こんこはコンベイトウ科の魚、体形は球形。

腹鱗は吸盤をなし、吸物等にして食す

軸物のえびす見下ろす年の膳

みやうみやうと海はるかより初声す

海牛の二日の波にたゆたへり

五ツ六ツいやもうひとつつばき咲く榊

やおろちのうみの初東風萱鳴らし

賀状来て曰くぼちぼちやつてます

二つ目の蜜柑の臍のずれてをり

三浦半島・長沢、左義長

ふぢづるをきりりとおんべの胴くびれ

魂消たりおんべの胴の大破裂

おんべの灰ゆらりと鴉立つごとし

手負ひめきおんべどしりと崩れけり

音頭取三人かたまりちやつきらこ

店も狭に緋扇舞はせちやつきらこ

電気毛布なんぞと云ひて取合はぬ妻

風の中梅の徒長枝目を恋へる

早咲きも早咲き明王院の梅

つまさきだち緑萼梅を嗅ぐ男

ぬかるみに嵌り其処より梅を見る

ししぶと煤け紅梅咲き出せり

梅林をざつと見て来ぬ鼻つ風邪

枝ぶりに齡歴たる寒牡丹

荅解くさんしゆゆ雨を心待ち

まんさくのカイゼル髯の風そろと

山菜萸の黄にむらありて鄙曇

さんしゆゆの鶺鴒色に母屋没しけり

薄ら日に三極密語交しをり

糠雨に垂るゝ木五倍子の寸足らず

冷つこき雨にいきなり桃咲ける

ふる雨に桃の葉並び美しき

野蒜摘ちよいちよい摘み処変へにけり

木瓜みんな咲いてしまへり馬鹿陽気

喇叭秘め喇叭水仙苔めるよ

ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり

拾ひあぐ木蓮一片雨くさき

啓蟄の茶鼠のコピー再製紙

ばつとせぬ天気つづけり紫荊

だいぶ水ぬるんで来たりすっぱん鼈塚

ふるぷると顔を震はせ蝌蚪浮上

葱坊主苞を破りて落慶式

アスパラガス長けて緑の棒畠

恋猫の彼奴此奴が庭通る

天道虫ハイカラな星七つかな

本堂の畳ざはりや棕櫚の花

振花のどれも動力尽きしさま

一新の街路アメリカハナミズキ

城ヶ島、鍛錬会
明易の顔をふるんと洗ひけり

まんぼうのやうな梅雨雲沖にあり

ぶつかつてここは譲れぬ蟹同志

欽抱き磯蟹波をかぶりけり

よき浪が来て海牛を泳がしむ

海牛の泳ぎ歩きといふものす

びらびらと蟹の口許南風吹く

針深く吞みし虎魚の横つ面

げんなりと赤べら魚籠に腹を見せ

でで虫に深淵なせる油壺

だぼ鯨の無茶苦茶走りまたしたり

蟹横に横に夕日を引摺れる

笹茄の搗布つ喰ひに手が伸びて

*島人、シツタカ(貝)のことを搗布つ食いと云えば

梅雨晴間小包ぽんと届きけり

小包の紐切る音も夏近し

あれこれと梅酒造りの空壇出す

灯まみれにごきぶりの子のピーナツ色

髭振りつ次はどうでる油虫

とばつちりうけて十葉むしらるる

ねずみもち
女 貞雨に乏しくなりし花

熟れ枇杷の雫ほたほた地をうてり

抜きとりて雨のにはひのかやつり草

ぶるぶると行手をよぎる梅雨雀

蒸し暑き花掲げたり泰山木

むつとして妻良の明け方ダチュラ咲く

並べ干す手拭三連明易し

浜おもと踏みしむる砂ほこほこと

縞鯛のごとき浴衣と浜に遇ふ

舟虫のしよほしよほ歩き雨に釣る

下田、下岡蓮杖の碑
写真術開祖の咲かす濃あぢさゐ

泥を食ふ蟹を見つめて腹空けり

下田稔氏
蟹に眼を凝らして蟹のやうな顔

降り出して干潟を蟹のわらわらと

さんしゆゆの葉裏に蜂の小さな巢

びちびちとくわりん青実に雨跳ねて

行く方に朝蟬の杜わつとあり

よれよれとなりて夕日の山車を曳く

団扇風とろけさうなる腕揺りて

掌の中に団扇ありけり昼寢覚

出色の百日紅に汗退けり

第三句集 さざなみやつし

●春

鎌倉の梅がよかると連れ立ちて
建長寺
海東の法窟の梅心当て
まんまると梅の苔を誉むるこゑ
梅を見て廻る歩幅となりゐたり
紅梅に紅梅のとりよき間合
黒髪に吹きつける風紅梅へ
梅かをるをみな引目鉤鼻に
その梅は豊後と告ぐる破裂音
眼の馴れてつまらぬ彩の紅梅よ
天神の梅に祝詞のりこの出だしかな
かつかつと寿福金剛禅寺の梅
風すこし出できぬ梅見切り上げむ
妙法寺
事旧れど杉田の梅を偲ぶべう
園の梅何分咲きかと確かむ風ふう
真向より烈風を受け咲ける梅
紅梅に赤坂小梅あせかこ顎引き

紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ
叡尊の鎌倉下向も梅の頃
慈姑食ふ似合ひの齡よはひありぬべし
ものの芽に大きくなりぬ雨の音
山菜萁さきおとついでの一昨昨日より咲けるとや
花さんしゆゆ日差しに斑むらのありにけり
花山菜萁さきおとついでいり玉子めき夕日中
預けおく彼岸団子を帰るさに
まんさくに昼の風向きかはりけり
まんさくに四通八達風のみち
磯山の松にのぼれる藤の花
みつまたの夕づく苔思慮深げ
大榎の幹のざらりと寒明くる
ひよいひよいと鶯餅を包み呉れ
それではとうぐひす餅に手をつけぬ
魚氷に上りつらきめに遇ひにけり
立春の夜を馳すバスは光の函

ひかりつゝくびれてながる春の水
鎌倉を驚かしたる……
素破こそとばかり余寒は詠むべかり
先達てお目に掛かれり佐保姫に
法窟の椿ころがる其処彼処
一飛鳥椿林をすり抜けて
木五倍子きぶし咲く道を大仏方面へ
突然の雨に木五倍子の華やげる
にはとこのふためき出づる木の芽道
にはとこの出臍のごとき芽の並び
接骨木のこんな花かとくささるる
菜の花のきちがひじみしひかりあぶ
油菜にアゲハ春型かさむりて
安房花菜日和ずんずん歩きけり
菜の花にずんと展けて安房の海
入船荘花菜畑を突つ切りて
一泊が二泊となりぬ花菜村
絹莢のさして頼りにならぬ蔓

春潮に一艇一艇打たれ鳴る
摘むのは芹ですかえゝまあたんぼぼも
鉢壳の三四十二のサイネリア
啓蟄や消炭いろの鯉直進
啓蟄の水蹴破りてドイツ鯉
啓蟄の石押し退けて何ぞをる
蠅の子の止まりつぶりも物馴れて
蠅の子の追はれて次に止まる処
ユスリ蚊と正体知れてはしやぐもの
ユスリ蚊のかいぐり遊びはじまりぬ
雉のこゑ天気予報をくつがへし
てうちてうちあはゝと緋木瓜咲きにけり
更紗木瓜三弦商の庭さきに
枝いっぱい賑やか好きな桃の花
雛の日の入日雑木にさし込める
雨ながら桃は咲きたい時に咲き
桃の花時間どんどん経ちにけり

春一が蒲団落としてゆきにけり
春荒れにとんび揉まれてひようと鳴く
双眼鏡あたたむ海の春日差
兔波マーガレットに駆け寄りぬ
風除け篠ストックの香を封じけり
ストックに顔突つ込んで剪りにけり
煽られてポピーフレンチカンカンめく
蚕豆まごちの正東風に吹かれ勁き茎
春風は海を渡りて檳榔樹
張りぼての岩のやうなる春の雲
三極の暖雨まみれに岐るゝ枝
鳥好きの人と聞きある家籠
ダチュラ咲き当地至つて温暖な
やまももの巨木なるほど温暖な
あたたかや寺門に並める通用門
来し闇もドアのノブも暖かく
浦浪の頭をもたげくる涅槃吹

雛かざる干潟色なる夕日中
雛段に午前の日差しさし込みぬ
表具師の家の黄瀬戸の坐り雛
陶雛の肩の釉葉明りかな
恋猫のこゑを真似して通りけり
恋猫の何にのぼれる爪の音
燕来ぬ海の玄関横浜に
かすめゆきしものつばくろでありにけり
甲斐駒岳かいこまを前にのけぞる乙鳥
昼日中あんずつまらなさうに散り
梅は了り杏咲きそめ桃半ば
べんべんと昼のすももの花散るも
連翹の今を盛りに誰も来ず
れんげうのざつくばらんな枝を四方に
ほころびて垣の連翹味噌歯めく
郁李にはうめの咲けば出がけに立寄りて
是しきの雨に郁李散れるなり

花仕度了へてはくれむ待機せり
おてだまを抛りあぐごと白木蓮
はくれむに吹いて一層強き風
こんもりとはくれむ咲かす家殖えて
はくれむに放送衛星巡るかな
はくれむをほぐしにかかる朝の雨
隔たりて同じ雲雀を見てみたり
一列にちやんと並べりチューリップ
並び立ちステロタイプのチューリップ
大如雨露ぐうるりぐるりチューリップ
チューリップ散りて吹かるゝ茎二三
なまぬるき風を展げて大干潟
ジーパンをたくしあげては浅蜷搔く
貝ほじくり返し干潟を汚せるも
馬刀貝を挙げし海辺に住み古るも
揚げられて鹿尾菜天草一緒くた

ときめける花に湿りをくれに雨
いとたやすく花の抜け落つ糸ざくら
夜桜にあがる焰の二タ柱
花乏し降られづめなる鶴に
このところ変な陽気に蘇枋咲く
紫荊噴ける蒼の筥棒な
山吹の上の断崖底技けし
山椒魚の手足を置ける水温む
マナテイの身じろげる水ぬるみそむ
象亀の砂に喰ひこむ四温の手
蕨手のによつきり南洋リュウビンタイ
蛸の木の根の遣り場なき室の春
パツと明るくショウタイムてふ紅椿
しつとりとリップステイクてふ椿
河原鶉ひよいと頭沈め餌をあさる
腋パツと開きて河原鶉立てり
匂を案じ暫し朝寝も虚子掌上

滴れりみみずのやうな鹿尾菜の茎
麗日のワラビー母子の餌の持ちやう
ワラビーの前脚春の土突きて
日永鰯夢む手足の置きどころ
コンドルの怒り肩して春逝かす
鍵一つ掛けて出づ家茎立てり
大きくて立派な鉢や紅牡丹
真上より覗きて牡丹いびつかな
まぶしかり雲頂庵の白牡丹
愛染明王示現牡丹の花中より
追ひ追ひに池の廻りのさくら咲く
称名寺殿の頭に花散れり
*北条実時銅像。重時は極楽寺殿、
時頼は最明寺殿と称されれば
花このまゝ仏生会までもたせし
一体に海岸ぶちの花早し
野毛山のさくら馬上に魯西亜人

永き日の郵便受に余るもの
かたわれの函を探せる日永かな
諸葛菜晦日の雨に伸び切りて
茎立や妙にあかるきゆふまぐれ
遣る水をじはつと吸へり君子蘭
花からたちこ疎にしてそこは密
さくらさう二つ返事で咲きにけり
さくらさう貯金ちよつぴり利子ついて
何と手の混める貝母の花の裡
女童の立つてふらこ漕ぎ出せり
クローバを分けくるダックスフンドかな
山麓の溶岩隠り虎杖摘
ぶつつりと切れて南無三のびる玉
わさび田をはすかひに馳す水ありぬ
昼過ぎの雲雀のこゑの中弛み
あれこれと詮索しをり古巢の材
ひこばえや集合時間告げられて

青饅にはつと気付ける親不孝
大挙して実朝の忌の沖つ波
俳壇の六十余州横霞

海苔巻のすこし乾ける遅日かな
老鶯や起きて欠伸をもうひとつ

●夏

めんどくささうに吹かれて花しやうぶ
一八のひよいと咲いてるまひるかな

半島に足を伸ばせる鯉季こいせき

金網を這ひずりまはる時計草

立あふひ東海林太郎をおもふべし

水捌けの悪きを著莪に好まれて

野あやめの妹分の著莪咲けり

あぢさゐの咲きためらへる花のいろ

寺男朝な手古摺る夏落葉

あぢさゐ同期生の極まる色も見ず逝くか

濃あぢさゐ男色の粹尽しけり

あぢさゐののつぺらぼうが庭木かけ
十葉の森の何処より手をつけむ
うつむいて庭の十葉引一途

黄鶺鴒来て溪流見通しよき処

ねずみもち花のまはりのまだ昏れず
がやがやとほたるぶくろの辺を通る
破れ傘大分しつかりしてきたる

雫切る手際宜しも甘野老あまじころ

転勤を小耳に挟むゆきのした

もめぐとの外に洩れをり鴨足草

人のあと宝鐸草の花こづく

葎の花とまどひがちに雨降れる

ゼラニウム赤き愛車を洗ひをり

からまつの間の一樹の夕若葉

山若葉こんもり朴の木もあらむ

あかときの新樹の樹頭冷え居らむ

楠若葉神馬のけぞるごとく揺れ

新樹林木の性質たちのこと話しゆく

御柱その盛土もさみだるる

照り合うて拝殿おほふ楠若葉

若葉雨日照雨にかはる御神域

洗濯機朝から始動こどもの日

けふの昼餉冷索麵に一致して

緑蔭のベンチあそこが空いてをり

サイクリスト緑蔭に汗拭へるも

五月雨の降り込む椎と楨の間

道灌の墓五月雨を聴くばかり

早苗の上農兵節の富士現るる

苗はこぶ南安曇野曇りかな

今にして羨け足らざるこどもの日

若楓煽られしどろもどろかな

ほんのりと枇杷に自祝のおもひあり

枇杷にのる色の散漫また降れり

公理より定理導く雲母虫きんぼちゅう

一つ咲きうしろ向きなる夏つばき

柿の木の雨にからきし弱き花

梅もぎの擦り傷此処とこことここ

青梅の真夜の土打つ音ならむ

雪溪の端まで二三歩ふきのたう

いつぼんの水道局の桐咲けり

雲冷えてひとりごころの桐咲けり

指し示すゆびにあつまる朴の花

目を戻し再び天の朴の花

花くるみつめたき雫こぼしけり

何か実のやうな花付けポポーの木

教会の三人掛の梅雨木椅子

青梅雨に集へる信徒魚族めく

徹まじくパイプオルガントッカータ

ケルル作曲「カッコウによるカブリッチョー」

くわくこうの声出すオルガン奏者かな

梅雨晴間壁に凭るるぬひぐるみ

植込みを打ち始めたる男梅雨

でで虫も其角の墓も傘の内

鴉の巢こゑから推して二羽はゐる

子を産んで杜の鴉の都合五羽

雨虎あめふらし花魁道中歩きせり

比類なきオトメウミウシ捕らへたり

つまみ上げ大海牛の段袋

鼻アケアミュージウムつ先エイのフリルを戦がせて

初対面紋付剥と申す者

チョウウチョウウヲ吻吻云うて泳ぐなり

棕櫚の花雨に散ばらけて落ちにけり

浦島草釣糸垂れてむかう向き

日の盛かすがひ鏝打たる仁王の脛

てのひらに這はせて愛づる紅てんとうむし娘

三羽目の青葉木菟の子洞を出で

菱形となりて大瑠璃駆くるそら

吹き降りの雨の降り込む鴉の巢

子鴉の分際にして威嚇すか

葭切の長寿長寿と朝朝

二夕三搔き樹影を出づるあめんぼう

空元氣出して晦日の水馬

あめんぼうの氣紛れ歩きぶつかれり

あめんぼう足投げ出して中休み

だしぬけの雨に臆しぬ水馬

掘り返して団子虫やら蚯蚓やら

御器ごきかぶり嚙追ひ詰めおいて助け呼ぶ

ががんぼの空中飛行見下ろせる

ががんぼのせうことなしに玻璃せせる

もう我慢出来ぬぶんぶん締出せり

木雫の音を聴きゐる華奢な蔭

ずばぬけて櫂のみどりよかりけり

老人が出て来て朝の薔薇剪りぬ

立て続け降る雨薔薇を砕きけり

ジギタリス花筒の中にもかくもの

橘大野林火全集のかをるが如く上木す

美丈夫の梧桐の幹打ち据ゑぬ

夏の日をさへぎる櫂にして偉なり

こころもち幹を振りて夏櫂

チューリップツリー並木を南風馳せ

広重の人馬ふためく夏の雨

はたた神空を鳴らして空開き

いなびかり大海原に珊瑚樹に

うなばらを押へつけたるはたた神

十歩出て左方に海や雲の峯

天を突く気なき峯雲は斥けむ

結実果実温室中カカオ色なるカカオの実

目に入りて拳大なる青パイヤ

パイヤの青果押し合ひへ押し合ひて

パンの実の何処にとあふぐ夏帽子

黒揚羽追ひゆく別の黒揚羽

コリント式噴水の水柱かな
突風に噴水のすぐへこたれて
安居寺廁草履のうすべつた
大疑堂竜沢寺坐禪堂覗く俗頭涼しけれ
御旅所に団扇と扇子語らひつ
団扇風みぞおち辺り汗に冷ゆ
文庫本伏せて麦湯を飲みにゆく
やつと手の空きし妻来て心太
売店へ空のラムネの壘戻す
ひよつこりとラムネのおくび出で来たる
大仏をまづ先に見て氷水
長かりし一日ビールの黄昏色
海水着踏みつけて浴ぶシャワーかな
請雨宋版経某々竜王づくめかな
午睡して妻の背ひろびろとありぬ
虎尾草とらのをの風に払子を振ることし
夏草を手折り夏草搏ちゆけり

西瓜置く場所を最初にこしらへて
西瓜種ほじくる種のうしろにも
クレッシェンド、デクレッシェンドの散松葉
仙人掌に侏儒の咲かせる黄の小花
避暑客のたてこんでくる小海線
熔岩積みの熔岩の間よりすいと百合
向日葵の茎は棍棒火山灰大地
向ちよんちよんと夏櫛紅葉したりけり
白檜曾の幹を好める霧が出て
霧の中四五歩先ゆく妻の肩
一団の霧に突き上げらる霧も
日光黄菅霧の向うの霧を見て
取紐る蝶もニッコウキスゲ色
夕菅の霧を素早く技けし色
一目見て薄雪草と断じけり
車百合蝶をくると返しけり
くりくりの空があるなり吾亦紅

のうぜんのうぜんの繰出し吹ける青き空
若死とおもふのうぜん散るにつけ
のうぜんのうぜんの落花を蟻の離れざる
花とべら海匂はする風が吹き
海桐の香つよく干潟を押し出せる
蓮巻葉風にほぐれてジャンクめく
蓮の葉のさつと開いて風通す
蓮に雨素通りといふ通り方
莫迦でかきオオオニハスの葉の置き処
朝顔のうなだるる葉に水遣れり
朝顔の小つさうなつて咲きつづけ
観面くまめんにその葉畳める含羞草
夏萩のすんなり風を受け入れて
極楽寺百日紅の夢見時
さほどにはあかくはならぬ百日紅
つきあたり百日紅の極め付け
茂みより一羽飛び出す葉っぱいろ

ほうたるの独りごころの灯を提げて
くさむらに転げ込んだりほたる火が
目の前をずんと明るき螢過ぐ
ひめぢよをん偶さか雨に搏たれけり
夏送るころにアディオス・パンパ・ミア
川の音ほたるさつぱり出なくなり
穴を出て小蟹とと疾ととと駆け出せり
砂蟹の穴に押し入る無理無体
つままれて脚硬ばらす磯屑蟹
磯屑蟹打ちて雨脚強くなる
沢蟹の脚すりぬけて奔る水
沢蟹の桔梗いろの肯を押ふ
目の遇ひし蟹が脳裡にちらつくも
一茎を両手で押へ糸とんぼ
蟻地獄扱も根気の要ることよ
船虫散る活路開けるごとくなり
およそこの世に与し易きはうまづらはぎ

かははぎの目の後退を何とする
秋篠寺
梵天の御衣夏めく安佐美止利
動物園
蛇の衣懸けあり蛇の遊び木に
官軍の錦蛇とはもつともな
目を宙に標本擬まがひの大蜥蜴
蟻喰ひの悲願適ひてよく伸ぶ鼻
ベンガル虎風死す檻を往き来せり
走鳥類エミュー目を伏せすかずかぜに
北極熊棒立ちの涼ふりかぶる
蝙蝠の躰鈍なまれば飛びにけり
寝返りを打ちつゝ蟬のかすれごゑ
鉢植の棕櫚竹ともども暑に耐へむ
また鳴きて蟬は古きに泥むごと
おぼつかなくなりし日差しに愚図る蟬
拾ひあげ蟬の茶羽根を広げみる
心経の皮切りに似て朝の蟬
銭亀のいづれ遜色無かりけり

音に凝る花火もありてどよもせる
木斛の葉っぱばかりと秋がくる
けぎやかに景立ててこそ青松毬
おろぬきどき大根台地を抜けにけり
竜淵に潜む面持ちして診られ
カルテの横秋の心臓模型かな
秋晴のポニーの鼻をまさぐる子
一秋草ひよんなはづみで田に入りて
雄日芝の引張り返すちからかな
雄日芝にくさやのにほひ移りけり
相討ちのごとく雄日芝に臥せ
狗尾草えのこらの向きを一つに揃へたし
相俟つてゑのころ草のすがれそむ
葉耳おなほみの三度目にしてくつつきぬ
泡立草錆つくものは錆つきて
稲架棒の使ひ古しに露降りて
コスモスの空のあなたに祝儀あり

まくなぎのしつちやかめつちやかか払ひけり
利かん気な飛び方をせる蛸一つ
この辺の何処かにサザナミヤッコの本
打ちもらす蠅の行方を追へる顔
かはほりに油ッ紙のやうな空
かうもりの翼電動仕掛かな
青故郷法事一つに繋がりて
ものかげに昼やりすごす大馬陸やすで
上背ある次男と土用鰻食ぶ
ひさびさに腕が鳴るなり蠅叩
蠅叩にぐき難ければ肘折り曲げて
樟脳の気落ちして夏逝けるなり
はりきり草しほたれ草や夏深み
●秋
消ゆ花火開く花火に照らされて
意気込みも新たに花火揚がりけり
手の内をあかすが如く花火爆ぜ

コスモスのやうに浮かれてあたき日や
コスモスの縁へりを掴みて虻沈む
私語多きコスモスを風咎立
コスモスの汚れ下葉の縮れ気味
コスモスの横に吾が顔ぶれてゐる
道形に風のくるなり草の花
花野ゆく女の服の大雑把
頼りなき日のまだ差せる鼠の尾
白粉花の勝手気ままに路地に殖ゆ
おしろいの種菟む子のたそがれぬ
しゅんとしておしろい朝を迎へけり
庭に出て点呼取りたき石露の花
屹きよとして瑞鹿山の石露咲けり
そこまでと云ひて出で来ぬ石露日和
白芙蓉咲かせに朝がやってくる
朔日の空にぼっかり白芙蓉
萩に萩押しつけゆける萩の中

十六夜やギターケースの胴くびれ
まんじゆさげ蹴散らかしゆく小鬼あり

料亭の一繫舟に秋日差

鶏頭の数にこだはるすさびごと

かまつかの旭にむせぶ斜面畑

阿武隈川ぶくと秋暑の泡生める

黒塚をよぎる蜻蛉の胴焦げて

智恵子生家、父の名は長沼今朝吉と聞けば

露けさの一步今朝吉宅を出で

菊人形虻の飛び交ふ千早攻め

臙脂なる菊を鎧の草摺に

白菊の束帯召せり後醍醐帝

菊人形直衣の菊に斑ありて

枝豆を根こそぎにしぬ佐吉多万人

襪襦くそに云はれ折らるる蒸し諸

衣被だまつておいてゆきくれし

新米に葉唐辛子を目分量

今云うたそれがよささう胡桃蕎麦

泥亀町吾が前をゆく鬼やんま

張り切つてやんまがやんま追ひゆけり

空にゐる鶴田浩二の赤とんぼ

うしろにも居さうなおはぐるとんぼかな

アキアカネ墳の鞍部を乗り越えて

半島はここにてくびれ昼の虫

鯨を釣る舟が出てゐる大日向

蜻蛉は翅を頼れる楽天家

昼の虫すがれし赤のままのなか

擬態語の力を借りてぎす鳴けり

虫一つ水平飛行秋日中

手に乗せて勝手の違ふ竈馬

跳ばむとすバツタ眼を整へて

円墳の空をバツタの脚曳きて

跳ぶ前をおんぶばつたのゆうらゆら

とび出して土師器色なる墳の虫

稲雀立てりばらばらばらと

稲雀舞ひ降るてんでんばらばらに

初鳴にしては早すぎでは何か

巨福山裏手に鳴の鎌倉声

日が差して境内櫻黄葉いろ

暮れなづむ庭木に鳴のシルエット

雨の鳴後姿のずんぐりと

目を止めし目白の側に目白ゐて

逆しまに止まる目白を目白見て

目白捕る鶺鴒をコッコ叩きをり

白菊が机にあがる突然死

同僚

足音のびたりと止まる古典菊

笛吹川の中州の尾花日和かな

小式部の才気走れる色にして

身勝手を通してきたる唐辛子

灌木に搦めとらるる通草蔓

快気焰あげてゐるなり烏瓜

丸顔の多摩川梨の送り主
酒・飯・梨うまくて人間好時節
舌先のぎうと縮める洪柿ぞ
栗をむく間縫ひ雑用足しに妻
熟れ柿の正体もなく日に酔うて
柿は柿らしくかためを好みけり
つやつやの中間色の柿剥けり
柿の種ペルリ提督携へて
柿好きの子規が妹にあたるこゑ
木守柿油断だんじて許されず
木守柿うからやからをもう忘れ
馬鈴薯の宅送届く紋別産
気紛れに落ちくる雨や種なすび
ゆふかぜに葉の摩れて鳴る盆の入
行き交へる人も芋殻のひと包
迎へ火のたきつけ紙をひねりけり
おがら火のト揺らぎして直なる炎

独特の板谷楓もみぢの明るさで
中国語あやつるやうにいてふ散る
紅葉狩えらい上りとなりにけり
うねる丘ぶだう黄葉の幾区画
風入れの案内当山方丈にて
風入や軸物入れの箱いろいろ
背合せに吊らる軸物お風入れ
経櫃の参之内参お風入れ
経行のごとく巡れる曝書の辺
風入れの役僧舟を漕いでをり
地獄絵の飯の炎となるお風入れ
曝涼の応挙の虎に真向へる
伝牧溪伝何くれとお風入れ
お風入れ涅槃図ごわと畳まるる
袴着のままそのまま目つむるなよ
袴着のとんとんのぼる五十段
松手入すこし空き過ぎたかとおもふ

ふれ込みと違ひ野分の雨然程
盆過ぎの更に大きくうねる浪
卓袱台で卵割る音敗戦日
独り酌む筋子にたうたうたらの灯
外骨滑稽新聞に引きずり込まれ読む夜長
長き夜の本を持ち替へ持ち替へて
ぼつと出の社員に新宿秋夕焼
供へらる二十世紀に今日の月
庭木より栗名月を外し見る
青葉吹き散らしさしもの颱風も
けふ殊に天高けれど家に居む
離陸機の鱧のやうなる胴露けし
やや寒の鯉にゆらりと鯉寄りて
うそ寒の毘羯羅大将より拝観
黄落のいてふ男時の杜抜けて
凋落の一步手前の黄葉とも
そこそこに山吹黄葉したりけり

糸瓜吊る茎の付け根のもつこりと
●冬
玄冬の海に百の目啼鷗
玄冬の地蛸粗塩すり込まれ
空つ風どんと吾が家を衝きにけり
何よりも冬日が馳走仏日庵
水面を押しくる風や返り花
生真面目な木と誰もいふ冬櫂
銅鐸のごとき手ざはり冬櫂
宿木を寄せぬ櫂でありにけり
ずいとなり水仙季の瑞泉寺
寒茜浴びゆく赤肉団しゃやくにくだんじやう上に
水仙をぎうと鳴らして活けにけり
今朝みれば柀咲いてをりにけり
柀の小出しに咲ける角の家
柀が咲いて四五日ほど経つか
柀のこゑにならざるこゑ交す

終の人目にふれぬ零れ方
サイカチに鶉の贅季とよき過ぎてをり
新葉の効き目追ひ追ひ枇杷の花
枇杷の花海に陰謀あるごとし
吟行のわれら老いたり枇杷の花
枯枝折り隣家葬りの仕度かな
辛うじて木五倍子と判る程の芽が
思はずの縁切寺の冬ざくら
冬ざくら花の漂着せる如く
落葉径はやり小さき流行の犬つれて
冬ざくら花は直下に零れけり
冬ざくら雨にまみるる外はなく
尾長の目南天の実をズームイン
ややこしき坂の熱海の寒桜
寒ざくらばつと咲かせてこの陽気
すいと来て頬赭あかき鳥寒ざくら
臘梅の角ばる花の分光器

臘梅も了りと寢れしこゑにいふ
コアラ見るコアラ色なる厚着の子
着膨れの過ぎし上着を手になだり
日曜は読書に当ててちやんちやんこ
こんもりと妻の蒲団の山かたち
干蒲団日和と妻に謂はれをり
手袋の布地薄れし処かな
不整脈薬で押へ枯るゝ中
木葉髪拾ひ外来患者のわれ
心電図師走の波形出でをらむ
B棟の患者見下ろす一冬木
蠅が脚長く使へり花八っ手
籠りきり日向ぼっここのやうな日々
日向ぼこ鳥の死に処に思ひ馳せ
床起つて暖房入れにゆきにけり
電気すとうぶせつせと部屋を暖めをり
鳥のごと眼つむり風邪の床に臥す

枳殼からたちのなかも臘梅明りして
祖師堂まで臘梅いろの雨の径
散る木の葉十とおに一つは急降下
日にまどろむ幹にぶつかる落葉あり
葉柄の赤くて長き落葉得し
散るあとの手間弁へずいてふちる
掃けば飛ぶ落葉始末に悪き日や
われ勝ちに櫛落葉の駆け出せり
くんと鼻鳴らして落葉焚きぬたり
一両日中に散り尽くいてふとも
闇籠めに杜は落葉を匂はする
たんたんと昼のいてふの散るばかり
溪間の朽葉の八寒地獄かな
断乎つひたる枯鷄頭の大頭
がむしやらかな姿とどめて枯蔓は
足音の往き来にふとる竜の玉
大往生遂げむばかりの枯公孫樹

片付けてをると風邪ごゑ返しけり
炬燵して絵本の蟻の穴倉
炬燵火に脛を焙りて「安愚楽鍋」
高橋阿伝たかはしおでん夜刃やしもものがたり譚 曇る夜に
熱爛党麦酒党相半ばして
二本目の熱爛持ちてさあさあと
熱爛の余勢をかつて人物評
熱爛に林火一辺倒の人
従つて云ひたきは何爛熱し
熱爛に酔うて全く何をいふ
蕎麦湯のみたうたう降り出しきやがったか
冬灯蟹の甲羅はキチン質
葛湯とく呪文唱ふるこちして
海鼠なり風邪こじらせて臥せる身は
たらば蟹ずばと包丁入れにけり
こうばく蟹波くま陸削る夜なりけり
胸中に枯葉降らせる高英男

中^{ちゆうぶる} 古の斧を振りあげ蟻螂は
詩は言語道断冬の虹立つも
浮寝にはすこし間のある日向鳥
古女^{こまめ}噛めば歯ぐきに当りちらしけり
寒雀隣る立木へ四散して
鳩に跳んでみせたる沼の稚魚
水音にきよとんきよとんと鳩
鴨を見に常連さんの身拵へ
手前より杭・葎・鴨の睡る水
鴨の水脈家鴨の水脈を打ち消して
迂る鴨うづくまる鴨雪降り
冬鷗キツと長谷川一夫の眼
オオミノガの巢をこじあけてみるつもり
つられ立つふくら雀の一羽かな
ひいふつと枝を離るる寒雀
寒波来桜は樹皮につつまれて
前以て寒さ強調しておきぬ

風募るうへに寒さも見合はせり
冬帝の欠伸催しさうな日々
冬將軍声を囁らして何を下知
落葉風かさと賓度^{びんどら}羅跋^{らぼつ}羅惰^{らだ}に
冬暖の家鴨日和となりにけり
鷗の目ついと流れて安房小春
ざうざうと暖房音も心音も
啖呵切ることく大空霜晴れて
ユリの木のまばらなる葉を北風鳴らす
天を衝く俳諧弔花閒石に
青畝迎へ俳人協会黄泉路支部
手強^{つよ}さと手強^{つよ}さ違ふ鉄斎忌
冬草のあをさ裏返してみても
極月の蛇屋の壇の蛇視く
ギフトカードにポインセチアのカットかな
並びあるポインセチアと消火器と
屋上に御用納めの日の鴉

忘年の駅乗り過^{ていたらく}ごす為^た体
がさ市の山と荷積まれ立て掛けられ
年の市海山の幸積み上げて
本に本寄りかかりをり年の内
煤払ひどうにもならぬ本そのまま
本の塵本に舞ひ降る煤払
こりこりと何を剥きある小晦日
鉢物に土を足しやる小晦日
日の在る内購ひおかむ注連飾
飾売だいたい値をいいかげん
鮮やかな正月物に目を止めて
豆も煮て慈姑も湯搔き了へてさて
数へ日のスイッチひねればチャプリン出で
黄金狂時代抜け出し師走妻
年を越す鉢の金魚に被せ物
薄ら日のやうな一ト年振返る
鳥の名を二三覚えし年逝ける

行年のアチャコ笑うてみせ呉れても
年の瀬に打ち上げられてゐることし
歳旦吟二三打出の小槌より
歳旦吟何処となく腹座らざり
舌鼓はらわた鼓打ち年酒
数の子を一ト度噛めば一ト昔
餅腹に昼過ぎの空展けたる
鳥の名を少し覚ゆる年とせむ
半月に元日の町更けにけり
ピーナツつるとむける二日かな
別嬪な鳥が来てゐる二日の木
春著の子まるぼちやの手を膝の上に
屯せる春著に聳ゆ二万噸
初泣のわつと車中を通りけり
日当りに南天の実の笑初
赤べこをくるみ上手や春著の子
初寅へ車村道飛ばし来ぬ

櫛にも器量のありて初社

初東風に浦波ザザと篠ザザと

本紅の色に羽子つき了へし空

末つ子の受験に励む太郎月

ぶすぶすりとんどに火の手あがりけり

とんど火のあやふく立つてをりにけり

たうたうと冬草色して川ながれ

砕かれし氷氷の端に乘れり

滝桜見るに枯木に手をつきて

枯桜突つかへ棒が利いてをり

デコ木型黒びかりして凍てにけり

日陰りて張子天狗の凍みつ鼻

寝台車着きぬ今年の灯をともし

初日乗せベコ千両の振分け荷

初荷積む土間凸凹のデコ屋敷

冬日差烏山椒の枝を研げる

一渉り池のほとりの枯木見て

青天に米点打ちて公孫樹枯る

枝ぶりのどうしてかうなる枯いてふ

頭上なる枯木の何かこそつける

サンザシに巢と見えしもの枯枝なる

枯櫟日和小枝の山繭に

シヤガールの月にビュツフェの一枯木

枯幹に抱きつきざまに鶴止まる

とつつきの寒紅梅に足止めぬ

手焙に五指峙てはだてて牡丹見る

シクラメン手のほどこしやうもなく萎れ

伊予柑を横目八朔買ひにけり

島の地理頭に入れをれば笹鳴けり

笹鳴いて洗濯物の脇抜けぬ

動物園ユーラシア区の落葉季

冷え性の本土キツネとおもひけり

何とこの日本あなま 獯目まぐるし

後生楽な縞ふくろふの貌のぞく

みみづくの雨は苦手と見ゆ素振り

ふくろふの目蓋まなぶた開けて吾を見る

ふくろふの振るつたことをいふごとし

朝からの雀のこゑや松とれて

大榎の根方に隆と焚火跡

もういちまい余分にはおり探梅行

おしくらまんぢゆう服台無しにしてをりぬ

咳こだまりヨウメンシダの林にて

青天に月は大きな氷玉

さえざえと紙切り裂ける肥後之守

ミシシッピー鰐の横縞雨に冴ゆ

白妙の富嶽相模の風表

二階より顔を突き出し雪といふ

稀の雪矢鱈せはしくなりにけり

新さらの雪踏み来て宋代禅講座

葉に雪の付ける頃合ありにけり

雪つもる時間たつぷりありにけり

第四句集 ばらりとせ

●春

旧正のはつかに挙がる沖つ波
とんど火の先づは松葉を炙る音
とんど火の爆せて肉声聴くごとし
子の年の郡上の井水小走りに
宝刀の切字を頼む歳旦吟
ピスタチ才殻割る音に年立てり
恐竜的存在として賀詞述ぶる
やっかいな正月の富士詠み初めに
ほうこんな本が出たかとメモ始め
好調と云はるる年でありたかり
奥の間に花奪はい祭の花造り
屠蘇の酔ひ「吉原雀」聞きながら
惟然も亦七種摘みけむ七器山
膝に来る日差しに年酒出来上がり
乗初のディーゼル音に熟睡せり
乗初の車中キャラメルかほるなり

さきざきに富士を眩しむ旅始め
浅間さん詣で破魔矢を高かかげ
ひととほり読み通さねば松の内
川床の藻のたゆたひも三日経て
十姉妹の籠を日向に三日かな
洗ひ場に水走り込む三日かな
青麦の放てる夜気と覚えけり
日曜日大魚籠のごと朝寝せり
浜に出てほんわかあったかさうな雲
人参の葉っぱのやうなやつはアネモネ
伊予柑の皮の脂をとばしけり
うぐひすの笛方雀の囃子方
鶯餅つまむに作法あるごとし
好意ありがたく綻ぶ梅のなか
曇日の目許ぼんやり梅咲けり
紅梅の雪洞咲きに遍き日
巨福山梅は五百木に先立ちて

紅梅の一二輪ほど好意に似て
老紅梅能う限りの花付けて
紅梅に寄りくるひとりふたりかな
白梅の日向を開き呉れるごとし
夕おぼろ入湯十訓声にして
三亀松のようはあよりの臙にて
出開帳力む仁王の脇抜けて
香煙を掬ふ手ぬつと御開帳
人混みよりわが身抜き取る出開帳
開帳寺門前臨時郵便局
出開帳頭の間の二本尊
海棠の蒼解く風方丈へ
下駄鳴らすごとし古刹の山蛙
口語で鳴く蛙文語で鳴く蛙
睨め廻す「風流蛙合戦圖」
河鍋曉齋筆
団子虫団子いびつに陽炎へり
石と玉取り違へては亀の鳴く

俳諧の腕力振るへ其角の忌
未完なる塔にしぶけり櫛の芽
見習ひのガイド訥々木の芽じき
篠囲ひして金盞花まだ葉がち
陰る日に臆病咲きのクロツカス
廃れたり桑と甲源一刀流
靄といふおほやうなもの桑巻けり
恋猫の往き来にそぞろ心かな
恋猫の老嬢坐り直しけり
恋猫の香油のやうなこゑを曳き
須らく恋する顔の猫であり
恋猫は日に膨らめる瞑想家
看護婦の一語納得サイネリア
曙のさくら一鳥抱へをり
幹に花咲かせてさくらはちきれさう
いつときは光帯びけり山桜
ほころぶと告ぐる言葉の花より浮く

揺れ出して息呑むほどの山ざくら
本来の彩は斯くなる山ざくら
人の出も日増しにソメイヨシノかな
日本語乱れ初めても山櫻
花の風鯉の背鰭を吹きにけり
鉛筆を走らす花鳥諷詠漢
かわず掛け河津が郷のさくら見に
ここ河津緋寒桜の田舎咲き
海渡りさくら咲かせに一暖雨
ひよひよと大島桜吹かれをり
鳥らいそいそ河津桜の原木へ
言語野に射して言の葉花明り
幹ずんと押し出しのよき里桜
当たりゐし山の日を花逸したり
雨ありし上野の山の花の首尾
鳥ごゑに奥行き深き花の山
花揺るゝは船酔に似て昼日中

桜薬ばかりの赭き木となれり
半島の出鼻さざぬの水硯突漁
ふなばたに鬼殻さざぬ揚げられし
近海もの今は不鯛とさざぬが旬
山菜萸の向ふ側より差し込む旭
幹照らす春月チャンチンモドキの木
春潮にをりをり差せる風の翳
一睡のゆめに磯長の春かもめ
春泥をぶつぶつ云ひつ脱しけり
春眠曉を覚えずまでゆかず
夕野火のうさぎの耳のやうな炎よ
末黒野ゆく雲のすこぶる女性的
末黒野の芒夜盗のごとくなり
ストックの嗚呼このかをりこのかをり
ストックの蒼ほのぼの眠くなる
ストックを剪るやほろほろ虫発たせ
巣箱懸け穂高赤松天然林

浅春のカクテル光線エノケンに
梢見てあゆむ乃木坂春浅し
竹秋の物心より直心
泡吐いて能事終れり大田螺
ボヘミアン田螺の唄が聞こえ来ぬ
種蒔きに出て退屈の虫退治
厳しく鹿爪らしくたらんぼの芽
河津七抱七楠の唯一の現存木
七抱大楠たつぷり暖雨吸ふ
轉れり横綱格の大楠も
恰幅よき蘇鉄に朝の一暖雨
チューリップ奉書めく葉を先づ立てぬ
上等な蜂蜜いろの蝶とべり
日中ゆく蝶のうねりを湧水も
知恵の輪の外るごとく蝶別れ
初蝶をエイゼンシュタイン流に撮れ
茅花咲き自由乗降区間なり
常節を突き磯風のやうな息

箱蒔きの花種うんとすんともや
種袋振り回しつゝ喋々と
へんにたかく咲いて月夜の花菜かな
いちめんの花菜みつばち見えてくる
菜の花に虻は呪文を唱えけり
花冷えの青天井に及びをり
緋桃の緋畑の空にぶちまけて
桃の花想ひ凝らさばボツティチェリ
からからに乾く畑土桃の花
阿呆陀羅經極意は桃の花に聞け
二三日降ればその内桃咲いて
桃の咲くぼかばか陽気ここ両日
山麓に日色を湧かせ花りんご
同齡のりんご若木の花連ね
原木のあかとき色の花りんご
盛り売りの蛤ちゅうちゅうたこかいな

鳥雲にインターネット日和かな
接骨木のおおどじ踏んで咲きにけり
宇和島のネーブルほとばしりにけり
伊東若冲 野菜涅槃図
二股のすずしろ涅槃し給へる
野遊びにクロワッサンのやうな雲
野遊びの服を叩いて起ち上がり
瞬きてあけびの雄花雌花かな
花あけび雨うすずみに降るばかり
国栖人に腹赤魚はらかのうおの瀬をのぼる
当り来た来た来たさくら鮎ならむ
唐破風をつゝと花屑奔りけり
花こぶし花混み合ふてうるさかり
花辛夷はたきづかれし思ひかな
花こぶし少し荒んで吹かれをり
辛夷散りひつちらかつてをりにけり
辛夷より翔ち損ねしや残り花
色合ひのおとなし過ぎる花大根

えいほうと松も春めく東海道
半島のももいろがかる春雑木
すつかり春我等がビルも霞に入る
春を感じ来してふ朝の顔に遇ふ
醜男ぶがのぶの面持ちの春不鯛ぶだい
吾が病心は僧帽弁閉鎖不全なれば
心臓の戸口の直し春にせむ
日まみれの梢立春過ぎてぬし
立春のいつか過ぎをる机かな
春近む音の一つにしづり雪
内海へ春は潮目もくきやかに
春暁の川波びよんとびよんと立つ
春子盗る猿は「さうさな十五頭」
春雨のほろつと零るゝところをみる
カァーテル検査にて入院
測温測圧検尿採血春隣
看護婦の大き叱声春隣
大部屋に一つ空き出来春隣
ビスケット色の三つ四つ春の雲

良性の雲のはらわた春の月
根詰めて汀を打てる春の瀟
すぐ思いあたる仕種を春の蠅
半島の椎櫛打ちて春の雹
枝々にうるみ初めたる春の星
草の中鳴りをひそめて春の水
鳴る處見つけて春の水鳴れり
ちよろちよるとちよろつと春の水ながる
さきざきに鳴りてことごと春の水
きつぱりと春雪あがる挿木畑
駆け廻り蟹は干潟のプロデューサー
鹿尾菜生ふ礁ラッコの背のやうに
男つ気世帯大内雛飾る
雛調度牛車ぎつしやより誰が降りにつむ
黄は黄でも日向水木の薄黄好き
古草の上を鳥の頭行き来せり
古草となりし賑はひ天あまがした下

溶岩原に向かふ山火の急先鋒
焰ほむら焰ほむらを呑んで大きく山焼く火
山火爆ぜ爆ぜては山を呑む勢ひ
山を焼く音の漣火の漣
山焼きの灰のわらわら頬を打つ
太陽の坩堝真上に山を焼く
山焼に煤けごころを払ひけり
なまくらの山火道端焦がしをり
焼山の段だら縞に日の新た
通り魔に遇ひし面持ち焼山は
焼山の焦げ目曼陀羅日表に
燃えさしに山火の火力そこそこや
焼山は心腹の友さながらに
焼山の灰のほろりと道よぎる
山火果つ白きは蓬の灰ならむ
雪解山降り注ぐ日は天蚕糸
呼子鳥専心花鳥諷詠経

半島のかかと辺りの防風摘む
頬白のディスクジョッキー生まれり
格天井牡丹圖牡丹の頃に来て
甘茶仏乾き易きを淋しめり
花御堂新たなる風呼びにけり
起請文累々芽吹く杜生島足島神社にて
色合ひも野暮な櫟の芽吹きかな
付け足しにそらの小木も芽吹山
芽吹かんと樹皮を寄る辺の洞櫟うら
家々の立つる物音ものの芽に
やどかりの新しがりや宿替へて
ご門前朝の山吹なまなまと
たつぷりと日を浴み山焼き前の萱
山焼きの付け火ちよんちよん小走りに
山を焼く煙くすりと上りけり
手をゆるくつなぎのぼれり山焼く火
気紛れな山火すすつと山の肩

蓬萌え太鼓の胴のやうな道
●夏
青あらし鯉の英気を養へる
青桐の幹の葉混みに自若かな
切り出してこころ青嶺の水利権
吉野ぶり青葉時雨に目覚めけり
あぢさゐの色ならぬ色みえくる日
ボテロ描きしモナリザでぶで汗ばめり
難陀竜王即断下し給ひけり
あめんぼの脚のかしやかしや小競合こぜりあい
推力の一桁違ふあめんぼう
頭の内にまだ遊びあるあめんぼう
あめんぼうくんずほぐれつ日の暮るる
新進のあめんぼ滑り出しにけり
あめんぼのドンファンぶりも板につき
雨音の奥に雨音明易し
鮎釣の雨暗に竿納めざり

菅笠の仰向くは鮎釣れるとき
折合のつきし如くに蟻別る
石畳朝儀に参ず蟻ならむ
夜のあわび一枚岩を這ふといふ
腕っこき海女の揚げたる大あわび
蘭座布団きちんと坐り直しけり
一八の旺んなる中葬りけり
だんだんと水の高鳴る岩魚釣
ふなばたの湿り鶉舟の出を待てり
ばしゃばしゃとばしゃりと水を打ち了る
海の家二つこつきり日本海
付けたりの固き枝豆昼の酒
炎昼の時間の檻に入ることし
炎帝の何一つ手を下さぬに
日の盛引つ張り出して片付けもの
炎天へ妻着て出づるジャワ更紗
豌豆の花ぬくぬくと砂地畑

巡礼の遠のくやうに蝸牛
でで虫のでん公雨を呼びにけり
柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を
渡り蟹いろの夕映え額染めて
来る波に蟹のたじろぐ岩っ角
泡の中蟹の何やら策しをり
赤黴の自治領蟻が通りけり
闇を翔け来たる強肩兜虫
天牛のつままれ鳴きのいと女女し
魚籠の皮剥もうおだぶつの顔したり
島泊り別談えの鱧料理
岐阜提灯ならではこのアトモスフィア
吉野の日ぎぼしの上を通りけり
曲がることついつい忘れ優胡瓜やさぐり
すぐ掬へさうな金魚をしくじれり
葛練や山の肩より山覗き
女郎蜘蛛木の葉外しにかかりけり

莢透いて海の日とほる豆の部屋
上品の大山蓮華咲きにけり
泳ぎ出す亀の子鼻を反らしけり
問題にしをり藪蚊の侵入路
蚊柱がいつぼん立ちぬ党派心
ユスリ蚊の柳を好む別派かな
蛾を追ふて兼六園の夕雀
茱萸の木より蛾のモスグリーンはたはたと
悪食のヨトウガ奴の仕業なり
ガーベラにプラチナ線のやうな雨
筒っぽの海芋は雨を蒐む花
古き湯宿ががんぼの発つ脱衣籠
かがんぼのずりおちさうな後ろ脚
卒塔婆に高脚を懸け蚊の姥は
かがんぼの礎石を発てり国分寺
かがんぼの脚踏み外す鬚草
柿の葉鮓ほおばれば雨響くなり

蜘蛛の糸すすつと見えてすすつと消ゆ
日の当りながら物食ふ女郎蜘蛛
月の夜の海月が考へさうなこと
海を出て水母の一つ昼月に
柁垣毛虫に先を越されたる
源五郎へへと闇より現はるる
かはほりに問答無用と昏るる空
通り魔の如くかはほり頭を越せり
兼六園松が根を見て氷水
片町に朝の氷を挽ける音
しなしなの氷掬へり岐阜城下
わたしには氷いちごの真つ赤なやつ
雑草としての勢ひを五月山あらくさ
黄金蟲手つ取り早く翅畳む
かなぶんに玻璃戸を引きて助け船
ごきかぶり初太刀二の太刀かいくぐり
ごきかぶりゲストのやうに現はるる

共用の水色ポロシヤツこどもの日
境内のこれは別格百日紅
珊瑚樹の花にあがれる雨飛沫
三伏の肩を叩きて肩の音
十一のイントネーション真似易し
曼荼羅圖喰うとは紙魚のふてえ奴
同一の紙魚の仕業でありにけり
お気入アロハ押し込む旅靴
赤松に対す秩父の暑に対す
立ち寄りて菖蒲青張る八日堂
代田に引く水の咳き込むごとくなり
張る水はどぶろくに似て代田なる
道祖神巡り代田を迂回して
常念岳じょうねんの膝下早苗の丈も伸び
ややこしくなる前の蔓白南風に
天気もちにもつて新緑寸又峽
素足吹く風あり本を読み継げり

そら豆の怪童に遭ふ夢のなか
そら豆をつまめば指の温みほど
葉の混み来てアンリルソーの泰山木
水中に田亀もさつと昏れにけり
水垂みずだれで降りて七滝巡りななかな
滝飛沫あびてアリアを聴くごとし
滝水の巖過ぐとき巖いろ
滝水の下に滝水割込めり
花ダチュラ押さばばふばふ鳴るならむ
風采のあがらぬ花よポンポンドリア
その頃の花ではポンポンドリアかな
父の日の酔ひて子よりも早く寝る
乙鳥いづなに乙鳥いづないろいろの朝鮮人にんじん参小屋
親鳥とおもふ頭が見え燕の巢
長良川朝風乙鳥吹き上げて
大潮の日と聞く燕ふりあふぎ
移動せり梅雨の黒雲バツファロー

糸からくり大きな所作の音涼し
涼めとや清涼寺式釈迦如来
何といふ涼味ホルンのまあるい音
雪溪の風に画用紙めくれけり
にいにい蝉生ぬるく夜の明けにけり
法師蝉走り込み鳴きしたりけり
死してなほ肉付きのよき蝉の肩
みんなの持論力説することし
時国家湯殿にとほる蝉のこゑ
蝉穴の瞑さに辺り暮れて来ぬ
鳴き納む蝉ズリヂリとヂリとヂと
死す蝉のそのままドンキホーテ面
つくつくし前口上を端折りけり
朝蝉の頭越しなる喧し屋
ゼラニウムに金盥めく太陽が
突端に来てそら豆の花の道
そら豆の撓むかたちはダリ好み

梅雨の浪へこと凹みてたゆたへり
梅雨大扉入るや洞なす大仏殿
梅雨籠りあうむの与太を飛ばしをり
悪たれる鴉を相手梅雨晴間
教団の使者とし来たる天道虫
十勝晴れ天道虫が肩に来て
屯して天道虫のローティーン
ふふふふと地に息かけて蜥蜴出づ
十葉のむつと一雨ありさうよ
十葉の筒芽棒立ち選佛場
家ぬちに風通る日や心太
日の下に田螺の大愚どぢやうの愚
荒凡夫土用太郎の波起こす
ほんとうに軽く一膳漬茄子
田淵たがしひで子こさん逝く
訃音告ぐ子の名は穂高立夏経て
海原は鯤の背隆と夏が来て
牛乳の泡泡を押す夏の朝

夏霧のじはつと鳴れる日本海
精悍なにほひの蔓でありにけり
キリストの鼻かむやうに夏の風邪
夏服に永年勤続祝がれをり
鯛・鯉昇れや虹の太鼓橋
色合ひをつべこべ云ふな虹は虹
文字摺草きりきりしやんと立ちにけり
大難の降り懸かることのうぜん花
川中島過ぐる辺りか幟見ゆ
再犯の金蠅なれば許さざり
じたばたと蠅取紙の蠅の脚
箸取りていちいち蠅を追へるひと
葉ざくらに一も二もなく染まりけり
金輪際動かぬ蓮の間の水
蓮開きジャポニズム展開催中
蓮咲くとイスパニア語にて言ふならむ
蓮の葉の瑕つけ合うて風の中

吃^{しゃつぷり}逆のやうに冷酒注ぐなかれ
疎遠なることはともあれ冷し酒
雛罌粟のごとき欠伸を内房線
せつせつせ雛罌粟咲いてばらりとせ
だいそれたことを言ひ出す冷奴
馬車道を歩きがてらのアイスクリン
雪村の鯉にまたがりぬし夢か
昼寝より覚めてうまづらはぎの顔
藻を離る気泡のごとく昼寝覚
昼寝覚一陣の風つまさきに
古ぼけし畳の目あり昼寝覚
軒風鈴ついついこんなことまで書く
舟蟲の吾に続けと云ふごとし
舟蟲の這ひ廻る岩減りもせず
舟虫や怪傑ゾロを彷彿と
老舟虫時化占ひの髭を立て

花南瓜尻窄まりの通り雨
頑張りのきくうちが華花かぼちゃ
もうひとつ桐の筒花拾ひけり
南米産バナナは台湾バナナの横
協賛の某花火あがりけり
あがりたる初手の花火の高さかな
中華風彩色花火あがりけり
ポカポカと追打かけて昼花火
ストトンとさきがけ花火揚がりけり
手花火に興じぬしこゑ引つ込みぬ
揚火花表六玉もあがりけり
長岡の花火帰りの道真直
川幅のそれと知らるる花火舟
ひょうたんの花等類を好みけり
パイヤへ銀の額をもてる朝
はんめうの背後にそつと息詰めて
酌^{ひゃ}み初めはきのふのごとし冷酒の旬
小原紫光さん逝く

蛍狩知り合ひのゐて声かはす
トパーズいろサファイアいろの蛍とぶ
山峽を一つほたるの急行便
よろよると平家蛍の草隠り
海鞘の酢が利きてびくんと長まつげ
木杭に呪文かけられかいもちかき
南無南無と円光負ふてかいもちかき
まひまひの気合ひの入りし一円相
まくなぎのこんちくしょうめ躓ける
まくなぎの何こじれたる内輪揉め
名舟衆切籠泣かせて山を降る
能登
デカメンが割り込み御神乗夏太鼓
すと現れて幽霊面を受け継ぐ子
華やぎて雨の降るなり祭月
雨だれの音のとんとん祭月
生りものを包める産毛実梅にも
人拒む色をとほせり水芭蕉

緑さす籐編み籠に籐の鳥

大南風勇魚いさなの息をつくやうに

大南風解りしひよこより柔らか

鯪こわに入道雲の聳ち損ね

ぐわらぐわらと峰雲崩る筈もなし

花ミモザライオン色に太陽は

むずむずと田虫送りの火のすすむ

松明の大きいっぱん虫送り

一祖二祖六祖祖師像お風入れ

時頼公強装束のお風入れ

木斛咲きじわじわむしむしする日なり

灸花やたらむしやくしやする日なり

灸花けふの暑さの如何ばかり

白象のごとくけだかく雲灼けて

やぶれ傘油じむ日を浴びあたり

白雨を浴びをりペリカン修道士

夕焼け渾美清さん逝くに挙句の果ての寅次郎

神々の乗り込む船が夕焼けて

海上に夕焼屈み込むやうに

夕焼けて年増女のやうな舟

かの二百合やうやう暑さ納まるか

すがれても姥百合背筋ぴんしゃんと

ヨット馳せグレイプフルーツ色の海

トランプのジャック振向く夜の秋

月琴の音締めきりきり夜の秋

はたた神大だんびらを振りかざし

雷神の太刀先杉をばらりずん

ちやかぴかとそれも端はなからはたた神

鳴神の逢瀬天上往き来して

鳴神ひんがしに取って返せりはたた神

その伝で云へばなまくらはたた神

首筋に蟬の羽月の風受けて

礫山のタツチ若葉のやはらかさ

うねり出すぶだう若葉のみどりの炎

わさび田を素通る水の垣間見ゆ

音もなく葉わさび潜る水の暮れ

わさび田の小流れ夕日返しけり

わさび田の水を束ねる處あり

山葵の匂水入れ替はり立ち替はり

山葵田の小石に当る水の音

二年ものわさびの花に穂高の日

蝶追うてわさびの花も飛びさうに

霧濡れの小石を抛り処駒草は

古木にて惰眠むさぼる合歡の花

栃若葉すいと雨滴を奔らする

亀型へ舟型吹かる釣忍

●秋

カナダ行カナダ行もみづれるカナダを机上プランかな

カナディアン・ロッキーの秋見に来たり

牡蠣食うて夜風にあたるダウンタウン

メイプルのみみぢ押し葉にして機内

*タカカウは素晴らしいの意

隣席の袴着袴こそつかす

赤い羽根赤信号と向き合うて

水張りしコップに空地の赤のまま

人間に雲脂といふもの秋立ちて

忍性金澤文庫の赤鼻に秋立ちにけり

書きあぐねをれば秋扇手にとりて

秋雨に煙草臭さを抜いてをり

秋蟬のひりりと榎を離れざる

秋空に鳶の打ったる感嘆符

秋ついでり紛々天の篩より

秋日差し湯釜水釜涸釜に

小刻みに蠅の向き変ふ秋日中

岳樺幹の阿修羅に秋烈日

朝顔の色はと見れば在り来たり

道三の国の蝗の閻魔顔

稲妻の夜討ちの如く廊を馳せ

稲妻の銀の眼を沖合に

ふかし藪あてがはれをり留守居役

藪蔓を衾ちちろの鳴けるなり

藪洗懐旧 隣家のおばさんふ笠置シツ子のブギウギに

雨脚のびよんびよん車前草伝ひなる

後後のことを芋殻を焚きながら

炎明りに雨粒見ゆる芋殻焚

芋殻折るひびきを芋殻を折る前に

燃えのこる芋殻にも炎を廻らしむ

芒原目がみえてきて女郎花

女郎花一息おいて手折りけり

いちばんの庭の古株瘦万年青

貝割菜整列足踏みせるごとし

木守柿のやうやうおちて閑日月

蠅螂の翅にも山の露降りて

しやれてをり縦縞入りの烏瓜

烏瓜残る一つも飛び去んぬ

烏瓜びりつと肌を刺す大気

きちかうの記憶を辿る容して

買手つく菊の苗より虻立たせ

五つ色もあるうか垣の乱れ菊

嗟峨菊は火花打ち出すひつち燧石

白菊の朝臣あそん黄菊の臣おみ・連むらじ

滑茸ののらりくらりをかっ込めり

ぼっぼつと日の差すひよどりじょうこの實

朝霧の汝を訪ひ声を掛くるならむ

霧うすれ弟子屈町営飛行場

きりぎりすびくりと動く水平線

ぎんなんのへちやと土打つ音すなり

草の架飛びそむ空の雲母きらすり刷に

栗飯一家よく喋ること喋ること

黄落の骨うづむなら西林寺

ブナ鮭の水かつたるく打ちにけり

山茶花に大きく物の割れる音

さざんかの目を泣きはらすやうな花

猪鍋のもう煮えたるうまだ煮えぬ

猪撃ちに取り憑かれたる脂顔

猪撃ちの口鉄砲をつづけをり

猪撃ちの黙殺に遇ふ峠道

地藏盆実の付いてゐる櫛束

なむあみだ鉢にたむる地藏盆

かず玉の天つ日返す地藏盆

川地藏供養稲の香むせるなか

醤油瓶醤油尽きかけ終戦日

かず玉のつるんつるんにかえりやんせ

四時廻り白粉フォーオク ロック花咲き出せり

新走りふふみ日向に出づおもひ

灯心蜻蛉の尻尾ずんずん目の前を
ななかまど白根百度霧流れ
浜っ子のべえべえ言葉海羸廻し

大野林火先生居

焚萊山房庭前の萩走り咲き

八月も終りに降れる雨に斑

風立てる其色月の橋わたり

素破こそとばかりバツタの跳べる貌

おんぶさるバツタの脚の懸け具合

葉っぱに貌ぶつつけ跳べるバツタあり

蕎麦の花びくんぴくんと雨受けて

花煙草十分に葉の大きかり

花野行足弱組に加はれり

もちまへの力出しきる隼人瓜

はららごに伍してかがよふ飯の粒

蛸の畳みかけ鳴く閉園どき

蛸聞き平家統領謫居の家

藤の実の如く垂れなば涼しからむ
ひろがれり葡萄の味の交響樂

西施・虞姫芙蓉の三十二相かな

朝の気をはらめる芙蓉雨外れし

夕されば芙蓉けじめをつけるごと

白芙蓉閉づと云ふよりポシヤリけり

分且の天然のいろ出し渋る

来宅の途次の糸瓜の棚のこと

がたびしとべつたら市の屋台組む

鯨飛んで深川鼠の川面かな

盆波のうねり座頭鯨の背のやうに

じよんがらのでんと盆波くつがへる

盆波のあとからあとから遠江

ヤッチクを郡上生まれの娘っこ

若衆のゲンゲンバラバラ夜っぴいて

阿波踊りそこは素通りぞろぞろ連

よしこのに腕まくりしてうづうづ連

盆花摘み川原歩きも朝のうち

曼珠沙華念彼観音力以て

長雨に火力衰ふ曼珠沙華

彼岸花彼岸の色を薄めけり

日表に痘痕の零余子法師かな

白木槿とびきり暑き日とならむ

虫の音のほろろばったり雨閉す

虫の夜のああ利尿剤利きにけり

繰返す蟲は一病息災と

木犀のかをる出鼻を雨叩き

木犀の花の付き方はと見れば

木犀に頭すつきりする机辺

ひとしきり初鵲聞いて座につける

言葉かけ合ひ楷樹もみぢの愛好家

いくらかは山吹黄葉してゐたり

粧はず俵藤田の唐沢山

一念にかられて来たる敗荷

敵はない人の句を誦す夜長なり
めいめいの部屋に引きとる夜の長し
りんどうのほとり真つ黒火山弾
りんどうに霧のわいわい押し寄せぬ
蔓荔枝サタンに魔法かけられし
ひやっこき雨に見舞はれ蔓荔枝
吾亦紅指で突くごと風の出で

●冬

病床空想 二句
齊の國響郡の俎村

箸つけて雑煮ヶ浦の煤け餅

熱爛をすすむるときは汝が声音

熱爛し日和見主義をとつちめむ

熱爛にてやんでえばかやろめが

すこたんのへったくれのと熱熱し

其の段になると熱爛ほすばかり

着膨れてゐてはごたつく句ばかり出来

着膨れて心臓外科に繋がれぬ

強く吹く日なりその分厚着せり
鮫鱈煮え巧言令色鮮矣仁
風響くなり氷瀑の大伽藍カテドラル
一月の風に飛び散る雨の粒
冷え込んだまま一葉忌暮れにけり
いざこざのなき隔たりに浮寝鳥
兎出づ村に小さな浅間さんせんげん
先口の鴨南蛮忘れ居らぬかやかもなん
松ぼくり大年の日を懐かしみ
水面の落葉も日差し受けながら
青き葉も意気のあがらぬ落葉焚
タンバリンもつて木の葉は舞はずべし
落葉の灰風に壊れて仕舞ひけり
おでん酒当を得ているその見方
高飛車に決め付けらるるおでん酒
昼からの余りある日や枇杷の花
枇杷の花われらかうしてまた会へて

枯蔓の零し損ねし実の二三
枯蔓の乱脈透きて日の差せり
枯木打ち晦日の雨の至りけり
枯木越し円空さんの寺が見え
からたちの棘の挟める一枯葉
枝っ先吹きもがれずに櫟の葉
滑り込むシート寒さも底打って
寒泳者浪子の海を前にせり凧子
三度見て三度炎のいろ寒桜
寒芹をこづき湧水馳せゆけり
鮮しき切り口一つ寒木瓜に
きさらぎも半ばつるりと虚子の貌
木の葉髪諾否ふんぎりつかぬまま
これきりと思ふくつまめ飛ばしけり
何笑うて波間に消へし鯨の目
翹花こやしいろの昼月冲天に
ためらひつつ氷ついたる水ならむ

二度咲きの一つこつきり小米花
ごたごたがやつと片付き帰り花
枯柏風打ち勝って飛ばしけり
枯柏つひに強情通しけり
がさ市の風素つとんで来たりけり
風花に取り込み忘る男物
聖護院かぶらな漬の送りどき
水切りてキューピーの頭の赤蕪
紙を漉く技も曾ての武蔵紙
風上へリズムをとりにて鴨の首
割り込ませてもらひますよと鴨のこゑ
首猶も前へ前へと鴨助走
派手好きなきな鴨の二三羽交じりぬし
鴨の水ばかりとらへて遠眼鏡
鴨の首振って大きな波を越ゆ
すがれたる蔓の蔓打つ空つ風
枯るる頭を潜望鏡のやうにリス

竹落葉突つ込むままに氷りけり
鳶の鳴く水と氷の郡上かな
延年舞黒凍みの堂鳴らしけり
肉桂玉しやぶる御城下凍みつぱれ
踏台こころもりによるけつつ立つ小晦日
用足しつつ用思ひつく小晦日
木の葉髪視力が落ちて堅き本
木の葉髪妻愛読のサザエさん
東京に出でゆく御用納の日
霜の朝一路軌道の如くあり
踏んづぶしをるなり甲斐の霜柱
燃えさしの一つ一つに霜降りて
霜げたる何の木の実か赤茶けて
絨毯の上を温風這ひ廻り
十夜講持味出してひとくさり
マカダミアナッツ師走の船便にて
目前の師走手帳に走り書き

鱈の口この一年をしめくくる
師走妻うしろをよぎり前よぎり
水仙花湊手錠の形して
湯ぼてりの顔はいびつかダツフォォデル
アポロンのラツパ手喇叭水仙は
水仙の袴の着付け具合かな
スキーヤー滑空旗のやうな顔
綿入に行方不明の本やあーい
ゆるゆると熾りて美濃の桜炭
それぞれと招ばるゝ美濃の桜炭
ずわい蟹両腕組んで豪のもの
ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆
関取の手を放れたる年の豆
千両に祝がるる年を重ねけり
植うるうち三浦大根は二割方
葉先まで綺麗に蘿蔔黄葉して
おはじきを二つ並べし狸の目

古障子色の日差しが花石路に
参道の両側に石踏呼応して
湧水の冬麗の目を織り込めり
年忘れ一本杉の唄が出て
鍋焼の鳴門の渦も煮え立ちぬ
寝て覚めて脈をとらるゝ病ミなまこ
ふつつかな海鼠物云ふ患者食
人づてに聞けり海鼠の不料簡
白熊の公爵白き息つけり
蠅が来て蠅追ひ払ふ花八つ手
はきはきと答へてをりぬ花八つ手
めいっばい時間をつかふ花八つ手
屯田兵絵巻冷ゆ手をさすりつつ
ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し
踊子号避寒の客を零しゆく
避寒地に降り立ち一本目の櫻
郡上のなあふくら雀も春駒を

鼻の貌立て直す真暗がり
吸ひ込まるふくろふの目のレモン色
鼻の魔法仕掛けのこゑ出せり
蒲団のずれ直し呉れる妻をうつつ
福助の面テ起こせる冬はじめ
雉子の目のやうな水輪を冬泉
冬鷗素数の如くとびとびに
立姿どこをおしても冬櫂
冬桜風が間引きし花の隙
冬ざくらひとつひとつの花の向き
今着きしばかりの日差し冬桜
湧水の気泡びびびび寒日和
瘤櫂すんなり櫂冬日浴ぶ
冬日宙湧水八重にひらきけり
湧水の川を養ふ寒日和
今在りし冬日の何処へ十賊刈
一列車遅れて着きぬ冬帽子

婀ぶりも子持高尾の冬ぼたん
葉並びの間合又よき冬ぼたん
口々にこれはこれはの冬ぼたん
冬ぼたん風に正せるみどりの葉
枝先にかけて冬芽の間詰り
ニナリツチコーナーのポインセチアかな
ポーナスでよろしがさうは云ふもの
物音を立てぬ向ひ家みそささい
南天は本来のいろ美濃馬場
餅焙り一病息災冥利かな
餅腹に相模の海のにほふかな
焼鳥やカワ・ネギ・ハツと声とんで
木漏れ日の間々差すことも藪柑子
沙羅の枝に水晶玉の雪雫
目覚めては紙と木の家牡丹雪
目の前を大きな嘘のやうな雪
舞へる雪津軽こぎんの花つこのやう

直ぐなるは直ぐなるままに庭木へ雪

白樺のいっぽん交じる雪景色

ひとしきり雪混んでくる杉の空

分け入りにわか雪空美濃馬場ばんば

雪吊の手持ち無沙汰といふべかり

逝く年を括るに大き鍵括弧

なまぬるき炬燵のやうな年なりき

竜の玉識れるは竜の玉ばかり

竜の玉なんぞ詠む季来たりけり

手を入れて見れどまだまだ竜の玉

臘梅のつりがね花に落ちゆく日

角力好き患者綿子にくるまれて

●雑

水族館

ドレツシー・ハナミノカサゴ水掻けり

墨かぶりエイの涼気を曳き来たり

ゴンズイの吼ゆるが如く息継げり

なさけなき顔のオオカミウオ昼寝

へコアユのきんぴらごぼうめくが揺れ

大海馬しるしばかりの背鰭振り

乙なもの大海馬の立ち泳ぎ

のんのんとウマズラハギが近づき来

拗ねる癖吻にありありフエヤッコ

毒針を何処に仕込めるミノカサゴ

マンボウのプロポーションに見とれをり

いそいそと竜宮城ヘルリスズメ

いつせいに顔の向き替えデバスズメ

皮剥の尾鰭背鰭の鰭拍子

ミズクラゲほうと魅入れば又昇る

まんぼうの涼しげな胴スポーティー

アロワナの腹部をくぐりぬるむ水

昼行燈鮫鰻向きを変へにけり

ナンヨウハギそんじよそこらにない色で

シードラゴン搗布林を散策す

大海馬眼をしよぼつかせぬたりけり

カゴカキダイカゴカキダイに追いつきぬ

春さきのテッポウウオの口捌き

永日のマイクにあうあうアシカショー

踊るならタンゴに如かず高脚蟹

淡水水槽
ペレステトラ・コンゴテトラ・エトセトラ

皮下脂肪揺りてセイウチ泳ぐなり

水槽の隅に大ハタでろりんと

水切ってサヨリの鼻の尖る訳

サギフエの乙姫さまへご注進

カーニバルサンバにのりてミノカサゴ

クー・クラックス・クラン団員エイ飛来

岩化してダルマオコゼとなる暮春

植物園
カンガルーポーの木の花飛交うて

マンゴーの見ゆる席にてグアバジュース

ベニヒモの木とやばおっとして来たり

ソロモン産ポトス茂みをつくりけり

覗くさへミミカキグサのこそばゆし

大温室全開バナナに風入れて

カナダアサバスカ氷河

動悸打つごとく氷河の雫かな

雲に日の入れば氷河の惘然たり

草の花氷河すさりし跡に充つ

音も無く氷河の上を水はしり

光度増し氷河息づきあるごとし

万年雪きれいきれいと日本語

氷河焼けしたるガイドのジョーク好き

氷壁を煽りて発てるブルージェイ

*ブルージェイは北米産青懸葉

サンガラス断てり氷河の乱反射

真輝く氷河を前に道消ゆる

足下より煌きわたる大氷河

大氷原わたる太陽古びずに

目くるめく光体となり氷河馳す

氷河湖を見つむこころもエメラルド

水餅のやうに氷河の横たはる

第五句集 鳩信

●入院日誌

カテール検査入院
食器には皆蓋のあり万愚節

何もつて本復巷は花の頃

検査日の諸葛菜彩薄れをり

この術例三百ほどと亀鳴けり

検査の為の検査蛙の目借時

春の夜のまなぶた閉じて患者たり

患者食済みし春昼箸洗ふ

目に見えて体力戻る春大根

大部屋の消灯までの春灯

大部屋の患者寝息の朧なる

春眠曉を覚え目覚めぬ大部屋に

亀鳴けり医術日進月歩の世

体温計鳴り出す春の夜のとばり

春の夜の手術痕撫で寝入るまへ

春の夜を看護婦消灯触れ廻る

点滴の終りを告ぐる朧ごゑ

春夜尿りて体外へ出す造影剤

退院の途次の暮春の中華蕎麦

梅雨といふ辟易月に入りにつけり

一通り聞きて入院梅雨海鼠

黴どきの無精が無精生む寝床

東京の朝焼け入院一日目

易々と蠅にたかられ一患者

夏物のパジャマ引つ掛けギブスの上

七夕の夜風にあたるギブス組

ギブス組涼みがてらの莫迦話

包帯に患部包みて星祭

かがんぼ来夜間急患窓口におろしたてパジャマに夏の夜の更くる

胸板に夜風涼しみある患者

病床に妻もたらしぬ厄除護符

幾そ度かがんぼ吾の採血よ

注射針ぬうつと太き昼寝覚

採血の跡黄味がかる肌小暑

夏の夜の採尿採っても採ってもや

人參も余さず食ふぞ新患者

病棟の深夜冷房音どすん

白扇に茶化しきれざる病景色

永日のそもそも何でこの病ひ

術後の日の為の浴衣を着慣らしぬ

真裸にて辿り着きたる正念場

甚平が術後の吾を待ってをり

手術着に所詮孤りとなる裸

鳥賊非諧オベ医長やおら脈拍とり(病棟は水槽)にけり

蛸博士ぶつたけ腹式呼吸教授せり

執刀はノコギリ鮫の某教授

麻酔利き水母漂ふごとくなり

蘇ICU室る為の管吸ひ罌粟のゆめ

麻酔覚昼寢覚ではなかりけり

細魚さより嬢看護婦ナース寢起きの声掛けぬ

素手素足ずいぶんすっきりした色に

昼寝せるゼブラ縞柄パジャマかな

退院の挨拶だぶつく夏ズボン

話かいつまんで云へばと古扇

自宅にて養生始まる朝の蟬

脚力をつけんとゑのころ草の道

ゑのころの光れる試歩は朝の内

藪の葉に大いなる穴開けし奴

病み上がり足許いとどに跳ばれけり

朝蟬が啼かぬとある日来たりけり

水を掻く仕草も秋のあめんぼう

かまつかの錦の御旗振るごとし

秋寂びて縦一文字手術痕

病閑やくわりんのおいど日を受けて

●玄帝

歩かぬは万病の因花もと八つ手

作そもさん麼生と実さくろ問ひ掛けくるごとし

手術手術当日当ぐた日のいろいろ巴里祭

管ぶらさげ鳴り物入りの巴里祭

ほぐれ初む麻酔の糸や脳涼し

術後にしてこんなうまき一氷片

冷房裡家人と面会オペ顛末記筆談に

天蚕いろカーテンに覺む患者なり

新聞売りのおばさんのこゑ明易し

術後十日重湯すすりて病ミ海鼠

暑き日の飯粒何處に三分粥

声の主一体誰や昼寢覚

元氣出てかぼちやいろなる尿の色

豆ごはんほつと安堵すその彩に

肌伝ふシャワーに骨皮筋右衛門

患者等のわれらが宝庫冷蔵庫

床擦れに手こずり居れば夏曉の日

牢名主めく患者ゐて部屋晩夏

見舞客勝手に変へて冷房「強」

冬菊のいちめんそれも麴こうじ色

また一つ家毀たれて枯木星

町内の左官屋の菊三色みどりほど

朝露のまだ干ぬ内の柿もみぢ

ため息を一つつくごと帰り花

臍物の如き朝刊取りに冬

七五三紅葉坂 伊勢山皇代神宮あつさり組と凝り組と

もどかしく磴を登るも七五三

おねだりの僕は僕はの七五三

水野毛山動物園の面に桜紅葉の心ばえ

アナグマに落葉臭さと尿くささ

落葉手にとり霊長目人間ひと科人間ひと

アムール虎右往左往の黄落期

もみずれりオランウータンの体毛も

堂前龍ノ口竜口寺に靴の累々御命講

御命講鳩の目をして祖師さまは

雀等も連れ立ち御宗祖日蓮忌

葛黄葉遠慮がちなる色合ひに

くわりん落つ落つるとおもひぬし矢先

枇杷の花そこはかとなく癒ゆる傷

火がとほつて来たと湯豆腐動きけり

一飛雪塩原行ひゆうと川面をよぎりけり

旅仲間雪つこといふ濁り酒

川向ふ今しも木の葉時雨かな

残る葉の幾枚枯木のプ・ラ・タ・ナ・ス

次々降る山の木の葉と歩を一に

涸川の涸れ灌木に移りけり

紛れ込む落葉一片脱衣籠

枯れ木つ葉臭き湯町の子が乗り来

川端の鴨の口々雪来ると

宿木にほうと佇む耳袋

頤おしがひに大根台地の風鳴れり

*煤逃げの地は三浦半島大根台地

膝小僧へ海辺育ちの冬の蠅

岬なればこそその日溜り藪つばき

切干に午後から波の納まりぬ

切干は紐に跨り相模灘

割干に日の経ち方といふがあり

頬被正月ものの覗突漁みつきりよう

手術などそんなこんなひとしとせの一年で

いてふの木枯れて素性といふが見ゆ

銭湯の逝く年映す大鏡

ねんねこに肌着乗つけぬ脱衣籠

一年の始めの氣息もて起床

歳旦吟誌上古風当風張り合うて

力んだりするから額縁歳旦吟

心臓のポンプ順調去年今年

初詣羽田航空神社かな

句をつくるはた又授かる太郎月

心臓知多半島 篠島行の直しが利きて旅始め

地図好きの方と初旅して三河

伊勢海老の伊勢を向うに島泊り

寒木瓜咲き窯元家裏相似たり

土管坂土管の端に水仙花

常滑の土管色して咲く菊も

窯主が湯呑みまけ呉れ初商

横腹に知多の朝日よ冬鷗

乗初の胴震ひせる高速艇

何の生簀かんの生簀と知多初旅

三日果て金海鼠きんこ色なる鳥羽の空

正月顔せる皮剥を賞味せり

ひよろろんと雨の四日のとんびかな

見夜火堂夜又倍子の実のくろぐると

*見夜火堂は灯明台(灯台)のこと

百合鷗浜より翔ちて伊勢の方

東風吹いてちりめんじゃこの水揚場

捨て積みの焼酎瓶に冬の蠅

明日葉の道を巡りて島弘法

浅春の男波女波をおっぺして
紅梅は生菓子ほどの湿りもて
白梅のはたと膝打つ明るさに
川いっばい使つて春の水ながる
接骨木の芽と手を添へて申さるる
下田 石廊崎行
奥石廊アロエ畑の中に村
下田港きだちちようせんあさがお咲く
ハイビスカス花の真中の突起物
春愁ふウツボカズラに指入れて
完熟のパパイヤそれを賞味せん
ラン棟に舌嚙みさうなランの名も
石廊崎沖ターナーの冬白浪
唐人お吉経營の店
安直楼余寒車軸を流す雨
玉泉寺
総領事ハリス好みの仏手柑
総領事ハリス出府圖春の雨
熱川の宿てふ宿の春灯

●東帝

宿毎に伊那路のさくら愛でゆくも
高遠花祭り
花に浮かれ来たる奴に高遠城
藩校の教場抜けて花の風
絵島囲屋敷
永日の一机据えあり絵島の間
庭木芽吹く頃となりをり下女詰所
行水所コヒガンザクラ明りして
横須賀安浦 旧鎮守府長官官舎
長官愛づ櫻なりきと顎引く
鎮守府の櫻の上に海展け
通院
永日の欠伸百度して待たされ
造影剤かつと胸板焼く暮春
採血の血管選れり目借時
皇居の櫻
一滴の雨にも遇はず初ざくら
なかなかの櫻と幹に手を掛けて
一雨に花崩れたり北の丸
鴨飛来花散るからに散るからに
怪童の腕かいなのやうなさくららの枝
真つ白な花に群がる風一目

下曾我 流鏑馬
下曾我の梅皚々の方十里
干蒲団富士の白妙差しにけり
流鏑馬の馬首めぐらすに冠雪富士
永日の馬体に鞭を一の射手
橋本 かたくりの里
べべんべんべんと堅香子反り返り
つんのめり咲きのかたくり風受けて
控え目になほ控え目に花かたかご
かたくりの花のまだ咲く鄙曇り
かたくりの花のむつつり右衛門かな
かたくりの花の貧乏揺すりして
下諏訪御柱祭
控へをる秋宮一之御柱
御柱落とす地点へ白き蝶
山風に木遣り起こりて木落とし坂
坂上の空へせり出す御柱
落とさんと諏訪の春宮二之柱
元綱に小綱を掛けて木落とし衆
木落としはまばたき一つする間

満開の心を一に濠桜
只管になること落花には如かず
夫婦して見にゆくさくらありにけり
夜桜に誘つてみてはと付け足せり
戻りてさくらに彩の戻るなり
山櫻さう山櫻葉の臙脂
夜桜にしこたま冷えて戻りけり
四月馬鹿達者と云へる褒め言葉
ぼうたんの匂ひ薄める風立ちぬ
緋牡丹の錯乱状態つづくなり
筈は口を嚙んで掘るべかり
亀鳴かす程でなくともこの俳味
目借時沽券てふ字が書けなくて
浅春の闇のとりもつ睡りかな
連れ合いの渾名呼ばるゝ牡丹寺
それはそれで趣ありぬ霞草
咲きさうな処に咲きぬ三味線草

がつくりと見せ場つくりぬ緋の牡丹
頭亀戸天神の中に藤の暗がり垂れ込めぬ

越天樂奏づることく下り藤

藤棚の暗部雫を零しけり

花房を伝ひて微光下り藤

亀戸の煎り豆本舗藤の雨

旧古河庭園
黄の似合ふ薔薇の名札はオクラホマ

金澤八景 野島海岸
蟹蟹と岩を起こして蟹捕る子

干潟踏みすつくと健康さうな脚

抛り投ぐ潮吹潮吹にぞ当る

舟虫の俗気さらなる俗気呼ぶ

やぶからし最初考え違ひして

浦島草蕭白好みの画材にて

トラ鱸の薄茶の縞の涼しさう

車輪梅海匂ふとき匂はぬとき

夏みかんの花の匂ひを風薄め

接吻といふ語思へりかたばみに

大船植物園

常夏のウツボカズラのサキノホン

薔薇の赤き棘も美観の一つにて

陽谷山 龍寶寺
観音は空に存すや桐の花

はつなつの砂場のままごと遊びかな

桐描くには水彩に如くはなし

桐の花入れて一景仕上げけり

桐咲いてやうやく空がおちつきぬ

桐の花程よき距離に立ちてみる

竹秋の竹林鳴動して止まず

あらくさ
雑草に掴まり立ちのやぶからし

泰山木落葉木片降る如く

山女魚らの口肥えて来ぬ青葉どき

花了り椽うっさうとして来たり

女貞咲かせこの家地味も地味

椎の香のこれぞてふ香に立ち止る

馬刀貝の素つ頓狂を鷺掴み

能六浦
謡はなむ青葉楓の面目を

小机城周辺

ひまはりを十本植うは晴れがまし

口つぐむ百合に魂胆あるごとし

蕾む百合あうむ返しをせる如し

ニス塗りし如くに百合の蒼かな

川崎 妙楽寺から東高根森林公園へ
朝風は平らに吹いて額の花

枇杷の木にだらだら雨の始まれり

聞き来し道わからなくなり立葵

あぢさゐの雨の葉っぱのほひかな

六月の鴉どすんと樹頭に降り

柵の中蚩袋の変電所

立葵てふてふ道草喰つてをり

かがんぼの雨やり過ごす葉裏かな

索性よき樹木といはむ花木

伽羅路をつまむ箸もて「例のほら」

大緑陰鳩・人・蜥蜴憩はしめ

棕櫚の花はらはら零れカステラも

梅雨空の突つかえ棒の外れ月

朝は朝の智が働いて朴の花
心臓にも運動療法青き踏む

ざりがにのそっくり返るはこけおどし
三浦半島 妙音寺
ダダタツと山百合咲いてなだれけり

半島の空をテッペンカケタカと
魯山人展
涼しさは染めつけ鯨向付

筈は何處にでも出る度し難し

●炎帝

愛宕神社千日詣
ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

大茅の輪雨具携え潜りけり

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

鎌倉近代美術館
モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

水馬雨に追ひ立てられにけり

妙本寺
擬宝珠の花にはじまるお題目

お出ましの守宮と暫しにらめっこ

落梅を一つ處に庭そうじ

夏掛のひやとせるをあてがひぬ
伊豆へ避暑今は山中今は浜

手にとりし団扇ことしもこの図柄
天牛の朝飯前の力かな

搔き鳴らし我が家自家製氷水

腹の上団扇はたはたさせをりぬ

口癖のえらいえらいの夏始まる

夏掛して妻と思ひ出話など

古団扇扇ぎて去年の手術のこと

かかりつけ心臓外科の冷房利く

天然の涼風窓より浅草線

黄泉にては閻魔の禪の丈詰めん

*内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く

汗っかき大漢にして大ジョッキ

梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ

汗くさき肌着ステテコシャツの山

梅雨鴉けふは出ばって近所の樹

はんちくな齡を取るまじ豆の飯

夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚

あじさゐの毬に見事に乗りし色

俳優伊藤雄之介逝く
時代の眼涼しく使ふ雄之介

菖蒲湯の菖蒲に術後の身を寄せぬ

アメリカンチェリー一粒底光り

普段着の海月の単衣よかりけり

エッセイのとば口に佇つ夜の秋

大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ

漢名は目赫爛れし夕空に

*のうぜんに漢名あり もつかく

のうぜんの似たり寄ったり花なだれ

貝原益軒「花譜」
のうぜんは脳破る花そを嗅ぐな

祭の子衄遊びの町内湯

挫折にもいろいろありてのうぜん花

三伏の我が身一つを持って余す

身空てふ言葉も死語に団扇風

手を膝に金魚屋親爺目を配る

足のつば崑崙揉みてより昼寝

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰

天日干し鰹を吹けり時津風

梅雨雀何か追い詰めたる羽音

水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ

射的屋の手持ち無沙汰も夏祭

夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり

とりついたりとりつかれたり葛の蔓

漢名の音おんの締りのよくて紫微

からす瓜真白き花の怯え咲き

何するにも大勢は佳き豆の飯

そつとして置いてくれよとだんご虫

いい加減降って止む雨花南瓜

手術して一年経つかビール注ぐ

夜顔や老人ばかり殖ゆる世に

ここのとこご無沙汰残暑見舞出す

青くわりん既に一徹者の貌
蜻蛉の面白がりぬ穂先の揺れ
沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇
家康公御廟日光きささげ青葉して
滝落ちてアオダモの木に轟けり
別名を鳥肌立の滝となん
日光山一巡りして蜜豆
夏律埃立たせて雨の来る
縦あふぎはた横あふぎ団扇風
三尺寝濁世に用はなかりけり
隣席の扇の風にあやかりぬ
立秋と云はれて空の海のいろ
わが持論一步譲りて団扇風
気骨あるその歩きぶり羽抜鳥
すいっちよと云ひて足音しのばせゆく
結局は一日蟬を聞く羽目に
うだうだと頭でつかち蟬啼けり

盆の入電車幾分空いてをり
炎昼をへたばりをると誰が云ひし
雷公の所持品古ぼけ大太鼓
捕虫網持つてほっつき歩きけり
噴水遠く望メバ鯨魚ノ潮吹クカト
旧季題ラムネに明治の活気あり
うつくつと蓮の奥より誰がこゑす
蓮葉の大きなやつがはたと昏れ
蓮弁のグラデーションを愉しめり
蓮田べり亀の子ぶかぶかやつてをり
寝返れば傷口ひくと夜の秋
朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき
そら来たたと白雨に掌を差し伸べぬ
アロハ着てはしゃぎたくなる気の未だあり
盲蟬ぶつかる音にまどろまず
氷水落ち着くところに落ち着きぬ
蟬時雨だまらっしゃいと夕立来

はらからは屈んですなり芋殻焚
疎開地の機銃掃射の諸畑
二夏を経たる金魚を死なしめき
鼻声に何か言ひたげ朝の蟬
夏草を引きちぎっては歩むなり
厨房へ徹る真夏の広東語
灼け紅旗へんぼん関羽生誕祭
土用波波の裏より手が挙り
浴衣着に一皮むけていい女
水泳の足の切り傷オキシフル
竹煮草雨あたふたと駆け抜けて
ヤブニッケイ大樹自尊の秋立てり
腰折れの扇子使ひてふむふむと
烏瓜の花の縮みて昨日あり
侠客の鮎にしらじら谿明るる
手花火の音の奇天烈奇天烈と
不景気を一蹴せんと揚花火

漂ふて花火の煙の大海月
お昼寝の面付き直せ山の神
秋蟬の遠く蔵書を死蔵して
何に付けきゅつとやらねば盆最中
ぶだう食ふ洪ある故の甘味なれ
秋秋と尾鰭を付けて啼く蟬も
連れ鳴きの末はだらけて法師蟬
空蟬の貫き通す初一念
月並みを恐れず恥じず名月吟
俳諧の奉行何処に豊の秋
熟柿皆承知年貢の納め時
横須賀へ舟賃五十銭の秋
社好き瀬戸明神の油蟬
秋分の木造駅舎の日章旗
泥亀も首をすぼめて盆休
世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ
心音も至極尋常明日は秋

藪つ蚊の金属音の急降下

急雨にもいけしやあしやあの法師蟬

あな蟻の門渡り風船葛にも

白芙蓉後事託すと云ひて墜つ

颱風の何処へ抜けやうかと腐心

山出しのししうどの花盛りなり

夕立のあとのむむつとする中に

わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん

夕立が上り辺りのなまぐさし

ダリエンソ手練手管のピアノの涼

低音部利かせ夜涼のダリエンソ

幼な子の見て見て見ての草もみぢ

露の鉄鉢長者の倉を持ち上げて

飛倉は野山の錦一つ跳び

命蓮の法力使ふ秋天下

色変えぬ松をあふぎて尼の旅

大佛の夢のお告げに粧ふ山

迷へども持つて出かけぬ秋扇

雀蛤になること容易なこつちやない

白浪物短けえ娑婆に昼の虫

そこそこの梨買うて来て褒めらるる

二の腕の歴然とあり秋の風

隼人瓜畑の先を通り雨

腹話術腹の底より秋の暮

秋風も紅燈趣味もそれとなく

衝羽根に鬼籍の人と昼の酒

こんなのと母が手拵げ穴惑ひ

虫時雨妻の寝顔のつやつやと

月渡る空朗々と虫今宵

根詰めて仕事にかかる虫の夜

烏瓜咲く辺の興味津々と

秋雨にひるむどころかあめんぼう

芙蓉咲く高さは風の通り道

蜘蛛の囲を払ふことなく庭掃除

ちちろ虫雨の音色と心得て

弁慶草起こし野分の後始末

草千里一二三と霧湧いて

糸瓜忌に出来て俗だが気に入る句

口さがなき婆のがちやがちや娘のちろ

蚊の姥に留守を頼んで出かけけり

一波乱相撲秋場所上位陣

烏瓜不思議や不思議霞み咲き

芙蓉の葉食むは一体如何な虫

長き夜のつれづれに湯の効能書

臭橙探る畑のあなたに周防灘

鬼やんま青の洞門抜け来たる

穴惑大日如来にっこりす

ゆふいんに妻と遊べば色鳥来

芒馳す彼方祖母山傾山

花すすき夜盗さながら裾野馳せ

熊本より来たばい真名井の滝はよか

紅葉狩薩摩おごじよのバスガイド

相まみえ臭橙の里の大日如来さん

昼蘭けて鳴く虫もなき岡城趾

有袋類おばさん秋の日向路へ

日田杉のずんと高むや秋の空

国東の仁王顔してぎんなん食む

向日葵の百の素顔と阿蘇連山

夜長宿宴席の名も草千里

ゆふいんの霧に目の慣れ梅擬

鉄漿蜻蛉に羽搏ち疲れといふものなし

ゆふいんの銀鼠ずすこ雨まみれ

まんじゅさげその朱ヶ飛んで宇佐八幡

祖母山の裾のコスモス高かばい

霧込めののっぺらぼうぞ草千里

カルデラを一目たりとも霧の中

嘶きと思はるこゑも霧四辺

熱泥のべつぷべつぷと秋の雨
稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里
秋興の宿のだご汁かつぽ酒

●白帝

烏瓜開花頗る珍にして

齊藤史 惘然たる鶏頭に似て史の歌

物教奇がかうじて雀蛤に

あはててはいけけない柿を滑る蜂

柴田宵曲文集 出し渋る本こそよけれ長き夜に

長き夜を読ませる宵曲妖怪譚

夜長咄狐が人を騙す型かた

長雨に櫻もみぢの目減りして

コスモスや奥羽に廻る碧梧桐

秋雨といふ長雨の至り方

枯れに入るもの一つに床擦れも

曼珠沙華突撃バンザイ花にして

烏瓜失せたる色を思ひつゝ

咳き込めば臍腑七転八倒す

柿色に降り注ぐ日に蜂降り

コスモスの人気ひとけなければ昇天す

コスモスの佳人の如きたたずまひ

コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ

睡蓮の四方の水面びらびらす

会心の音色きちきちばった翔ぶ

かがよへる水の回廊あめんぼう

落堀の意を強うせる風が吹き

風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋

ほうほうの体で逃げ出す咳地獄

流行風邪吾が屋台骨揺らすなり

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん

釘抜けば悲鳴をあげぬ鴟日和

秋燈懐石下勢ひし日には勢ひし書

とかとんと金槌振ふ敬老日

鶏頭の今年の種を見せに来る

こんなにも朝昼晩の風邪薬

居直れる風邪を追い出す粉薬

店頭の本に目利きの要る秋ぞ

足が向き神田古本まつりかな

山妻に風邪移りたる移したる

飛び方が目に見ゆきちきちばった翔ぶ

咳をする奴は不埒といふ目付

挿し芽してつきたる菊と聞かざるゝ

二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス

折角の月の供へとはなれり

麗しき石榴新作見る如し

ピアノラのタンゴ魂露と凝り

納棺の泪は菊の蕾ほど

二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日

日差しにも奥行のある稲架襖

石菫浄土金ンのくしゃみをしたりけり

女郎蜘蛛金龍院の空を降り

どうかうもなく山菜黄の醜しづもみぢ

暖房の音しみしと試し焚き

柿落ちてたうたう一つ日の入り際

狗尾草えのこらの魂たまのぬけがら枯月夜

水鳥の目がなびしゃびしゃややってをり

トラトラトラ！永田耕衣逝く耕衣俳句は奇襲もて

何事も先手取るべし十二月

書きとめてそれ清書して十二月

冬物を著るといふより身を容るる

唐突の真紅がよけれ猩々木

ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」

小春日に水栽培の根が出たか

おだてには乗ってみるもの猩々木

菊花賞菊に係わりなき人出

ポインセチア十鉢並べて景気付

油断して地を擦るまいぞ千歳飴

ぼっくりのしゃんしゃん歩き七五三

日の差しておべべぼかぼか七五三

祥啓の耳毛の達磨お風入れ

牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す

滝に皺入りて雪村観瀑圖

暮雪の軸雪村八十二歳筆

直伝の型歴然と蘆鷺圖

近景に巨岩を配す冬景色

着膨れて解説雪村鬚肩かな

錦蛇暫し見てゐてのぼせけり

冬の日に駱駝の鼻先白つぼく

網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ

檻抜けておこぼれ頂戴寒雀

檻隣りホンドキツネのお忙氏

丹頂に日本の色極まれり

郷土史に明るき人と石落をみる

柿の家スウィングズビズビダバダバと

見えてゐるものが全てやいぼむしり

大接近ワクワクドキドキ流星群

紅葉山人語鳥語に匹敵す

草の絮何時までつづく有頂天

てのひらで押さへて咳の震源地

ちよつとしたことできさかひ返り花

寒鯉の水押し力鈍りたる

けふの段取り朝の蒲団の中にあて

よく喋る女マスクで蓋をせん

落葉日に日に少くなりて朝の舗道

あまりにも人間臭きくわりんの實

歳旦吟作り今からそんな莫迦な

ひざら貝冬ざるる身を張り詰めて

同人会忘年会と金嵩む

鈴懸の尾羽うち枯らすまでのこと

新聞を裏返す音文化の日

花八つ手瞬くやうに朝が来て

水鳥の水破る音夕間暮

鴨着水ざんぶとやってみせにけり

木の実どき鑿目を残す観世音

唐物を揚げし湊や秋風裡

厚着して俳句はこの眼この脚で

爛酒にさようさようと応ず人

本郷の学生寮の枇杷咲けり

一政の上目使ひの鯉かな

蕎麦啜る音に人品骨柄出づ

鳥ごゑの弾ける如し白隠忌

壁いちまい抜け来る咳に力あり

コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで

烏瓜どうせ採るなら器量好し

木の実落つダーウインレアは真顔にて

へべれけのお手を拝借年忘れ

罷り出て精霊ばったの御曹司

首筋のすうすうオーバー羽織り初め

掌を組んで目つむる車中極月へ

大幅に賀状絞るか思案月

新年を迎へる櫛の瘤だらけ

立て込んで検尿 採血 咳 患者

梅鶯の南部坂聴き早や師走

耐寒性さくら草にて花果散

金目鯛よく見る為の大きな目

まはりから徐々に片付き木守柿

プールサイド雨の落葉のわっさわっさ

寝支度の電気毛布をぬくめに行く

数え日の雑用買って出ること

鴨の名にいやに詳しき女あて

じたばたのじたの師走のちんどん屋

じたばたのばたの大つごもりなるよ

ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ

高張を要所所に義士祭

それはまたそれでけっこう長火鉢
湖上に降り鴨の比良組比叡組

殲滅の白山茶花でありにけり
鴉は潜水精進吾は句精進

百千の鴨の一つとなり湖上

傾城も手玉に取られ羽子板市

羽子板市

売り顔も商ひの内羽子板市

一生もの羽子板なりと売り口上

志ん朝の買札付きぬ羽子板市

横顔の誰ぞに空似羽子板市

羽子板市東都ツアーに組み込まれ

ちよつくら前ごめんなすつて羽子板市

二代目も笑顔で対す羽子板市

灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市

一回りして元の店羽子板市

角店の助六よかり羽子板市

羽子板の値踏み群がる頭越し

ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし

置炬燵出てがさ市の客相手

落葉もて机塚埋めん合点じや

*山東京伝机塚句碑 耳もそこね足もくしけて

もろともに世にふる机なれも老たり

机塚あたじけなしの冬日差し

橋越へて水もしたたる都鳥

心臓の鼠鳴きする寒さかな

酒やれば風が募りて松葉蟹

さそひには口を濁して年忘れ

一病を持ちて海鼠の類ひなる

第六句集 燕音

●一月―三月

神鈴を一つがらんと年歩ます

輦れんたい台に乗れる初夢大井川

力在るものと格闘初夢に

まあまあとゐなされてゐて初寝寛

初夢の思ひ出せずにゐる科白

宝船ツアーといふはなかりけり

歳旦吟言葉飾らぬ生地の佳さ

風向きがガラリと変り海鼠突

もう一つ呑み込めないでゐる海鼠

芸術劇場 高橋竹山 孤高の響き
凍むや門付一から学ぶことばかり

吹雪く町門付三味線剥げるまで

じやみせんじよんから坊様ぼさまに躓すきて雪の原

顎引いて太棹雁のわたる空

太棹に津軽が見える雪んこ見ゆ

音色凍むほんに三味線授けもの

馬面の竹山切な互てあいや

春は華やぐ音色即興曲岩木

雁ゆかせ津軽よされの高調子

こんな句が先師にありて初昔

冬浪の白起つばかり鯨望荘

庭に富士膝に初刷手に眼鏡

東海道白妙の富士皮切りに

初刷バリを発利と車中に響かせて

雪どころ米原過ぎてベそかき空

おめでとうさんと安土の田鳥に
近江八幡

初鴨安土の田んぼをとんとんと

刈り頃の芦擦りあふて湖日暮

たまさかに日当るは贅枯芦原

あなたなる安土の麦の青霞

枯芦の日に呟くを俳言と

枯芦に対す先師に対すごと

枯芦の水路は鮒の通りみち

枯芦の葉屑浮く水動きをり

枯芦の明るさあふみに来た甲斐あり

三井寺の夕凍み及ぶ大黒天

運の尽きならぬ凍み鐘突かれけり

凍みる中そもそも三井の鐘由來

三井の鐘立ち去る耳に凍み憑きぬ
義仲寺 駆け巡る夢のほとりに枯尾花

夕凍みにはか也有の文台に

春小袖二人連れなる巴塚

堂守のすすめれば

味はふて珍の芭蕉の花の蜜

巴塚寒木瓜弾け一二輪

中興の蝶夢法師の噓堂

齊生ふ朝日將軍墓所御前

供花絶えず絶やさず寒しの巴塚

木曾殿の塚に裏白侍らしめ

寒木瓜の一輪発句を吐くごとし

でかしたる丈艸の墓つつむ寒ン

破魔矢持ち膳所で降りたる夫婦かな

その昔膳所で越年都鳥

膳所泊り夢に行き交ふ初飛脚

石山寺詣ちんちん初電車

石山寺郵便局の大根注連

石山の石皚々と冬紅葉
坂本

比叡より一雨あるか実南天

楽浪の志賀に初波立ちにけり

里坊の柿の蒂見て夕暮れは

鶴鴿の遊べり石の浪人と

*後で要るであろうと思つてその辺に

転がし置く石のこと

多羅葉に一時雨あり日吉造
日吉大社

着膨れて山王さんに頼み事
西教寺

冬紅葉俗塵払ふ麓寺

藪巻に雪まじり雨比叡より
琵琶湖

疾うに鳩目覚めて居りぬ堅田寒

練達の士なり堅田のには鳥は

瀬田唐橋くぐり遊びの鳩一つ

淡海を初手に染め上げ大日如來さん
芭蕉に「天津繪に筆の始めは何仏」の句あれば
購へり筆の始めの追分繪

息白し根本中堂常闇に

叡山の寒ンを背に阿耨多羅

蓮如堂杉の撥ね上ぐしづり雪

叡山の雪氣太肉締めつけぬ
ふとしし

根本中堂香炉の煙も凍らんか

叡山の雪氣柱の朱を剥ぎに

手探りの根本中堂初燈明

しづり雪をりをりありぬ谷隣

風花の舞い込む三塔十六谷

大津繪の春さきどりの藤娘

大津繪の弁慶かざす薙刀寒
なぎなた

大津繪に散財始め松とれて
大津

かいつぶり潜り出でたる比良面

二年坂初商の水打てり
清水清水の小雪おっとり店構
三年坂「雪やろ」「さうやと思ひます」
清水の小雪おっとり店構
角つこの三文駄菓子屋初商
一山の枯れ清水の舞台お庄す
初比叡洛中半分日当りて
三年坂連れ立ちのぼる春小袖
買初めの色のほのほの五色豆
冬鴟のぎうと落柿舎暮れにけり
落柿舎の閉門氣遣ひ歩めば鴟
暮れかかる柿の蒂みち落柿舎へ
落柿舎の夕凍みの憑く柿古木
俳諧奉行去來の庵に夕鴟來
柿主は小倉山下儒医去來
落柿舎の年初の苔の常みどり
落柿舎の柿の蒂ほど吾も凍みて
去來の墓いかにも時雨來さうな空

しぐるるや黒みてここに去來の墓
初伊勢伊勢や腰の曲がるも何のその
春小袖うつせる五十鈴川の水
詣で日の天氣がようてお伊勢さん
初伊勢やをろがむ顔も魚のごと
初東風に伊勢の神々耳すませ
をろがめる大御親神伊勢おみおやがみの春
初伊勢や守武ぶりの一句出來
初はつに詣でて土の宮風の宮
お伊勢さま詣でのゑびす顔続々
初伊勢の玉砂利鳴らし往路帰路
お伊勢さん詣で人出のえらき道
初伊勢の点り初めたる常夜燈
春著着て乗合自動車内宮前
初伊勢や官憲筋の五六人
初伊勢や鳩のくぐもりごゑの中
水槽鳥羽に正月顔のマンボウも

浮寝とはゆかざる鳥羽のゆりかもめ
日当りて鳥羽の水鳥真珠粒
初春の真珠選別御木本嬢
冬潮大王崎の透けて鮑の産卵期
明日葉に子守唄めく冬の潮
潤目うるめ鯛干す美しく干す波切なぎりの婆
初雀波切の路地をひゅんと抜け
虎河豚に三段腹はなかりけり
ゆりかもめ女顔めをすいと寄せてくる
水鳥に水の一年明けにけり
さうなのよけふから寒の入なのよ
松とれて心の内に頭擡ぐ虫
歳旦やからかひ心大事とし
俳諧は破格破格と木菟の云ふ
左義長の煙の黄竜立ち昇り
いやはやの島の階きざし初弁天
まんぼうはまんぼう泳ぎ春隣

思ひ及ぶところをずいと青々忌
ひとまわり上の辰年賀状の主
建前をとらずにずばり冬帽子
この坂道これあるかなの玉椿
平日の氣息確かな年とせん
櫛にしゃきつと朝が來たりけり
本復はまだ先のこと龍の玉
血湧き肉おどるト伝説初めに
じつとしてやりすごす冬もう少し
航跡保田は氷の青さ久里浜丸
枯篠にひねもす東京湾の照り
水仙鋸南町の里を名乗りて旗標
風筋を掴み滑空冬鷗
冬浪の彼方鷗の千里眼
毛糸帽うるさくなりて取り捨つる
赴任きざし告ぐ便り二月のワルシヤワより
恐らくは霜バリバリの朝ならむ

信念の重み睦月の一家集

咳き込んで地球踏みつけ止まぬなり
襲はれてあいたた筋肉痛の風邪

こたびは喉イタイウイルス引当てし
こたびは胸ムカムカウイルス引当てし
寒暄を聞きしに勝る利尿剤

一日を臥して風邪寝の薄まぶた
野毛山動物園
冬枯れに長寿の象のハマ子さん

咳をしてコンコンチキノコンチキノ
マスクして蛙めき来ることのおもしろ
マスクしておのづからなる女の目
マスクして疾うに観念してゐる目

老梅の老梅たる枝苔生す枝
きさらぎの鋭さを増す木々の空

風邪抜けの目鼻外気に心地よし
夕べは鮓の煮付けに一家満ち足りぬ
海鼠拾ふ相州の浜その昔

山の梅疾うに匂ひの飛んでをり
梅の花スケッチ型染作家かな
恋の猫別誂えの声を出す

●四月―六月

花屑こっむじに小旋毛風立ちぬ愛宕山
走り根に花屑の風堰かれけり
花筏などとはとても云へぬもの
気が利いてルビが囀る日本語
その説に服しぬ花よ鳥よと詠む
入り鉄砲 出女 春風 出入りす
そら豆の花の勝手な思ひ込み

スイトピーつまらぬことは気にせず
干潟踏む素足の白くさみしけれ
折角の花が霞んで仕舞ひけり
このとほり櫻は場所を選ばない
ゆとりより生るゝものに花の風
初櫻先師に向ひ合ふごとく

河豚の吻つき嘘ばつかしといふごとし
クラス会
水漬の皆相当な悪漢ばかり
東夷あづまえびすでよろし海鼠が大好きな

心配はご無用顔の海鼠とも
煮凝の如き偏見一蹴す
猩々の一物突起せる真冬
野菜涅槃図葱の高足侍りけり
古草を渡り歩きの天道虫
のらくらと陽炎主宰月旦評

啓蟄の好きな活字と嫌いな活字
その場でふ空気が大事桃の花
恋猫の季節と云ふか黙らつしやい
吉川英治郎
新平家書き継ぎし部屋梅の影
春先の風邪こじらせてああしんど

山椒の芽午後から降らなきやいいのにねえ
枝ぶりも宜しく古梅範を垂れ
幕山梅の里
重心を移してみるや梅の花

好きな木を一つ挙げれば山櫻
櫻の幹叩き鼓舞せる男あり
楽しんでよるひるざくらあさざくら
夜ざくらを見にゆく元氣既になし

花は佳し桜しべまで見尽して
大櫻之ある哉の裁判所
春の水黙つてゐても春の水
まどろんで先師が花に遊べる図
門前の小僧のタチツボスマレかな

藤右衛門さんのはちまき花談義
花を見る心ええならええ花見
日本の櫻を他国に植う話
名庭園ならんとさくらの木も努める
ソメイヨシノ
人間が構つてやって咲くさくら
雨ありてあとは櫻の花次第
振り返る桜がそこにあればなり
沿線の桜見ながら汽車ぼっぱ

曙の桜どの木も気を張りて
人間の勝手放題花を見る
わからんと云ひて笑へり櫻守
花も又花を了へたら一服す
年寄ったなりの咲き方桜もす
咲く桜暦代りの世も絶へて
花噴いてぼこんぼこんの桜の幹
思ひも見よ山の桜の根の張り方
地味ありて枝隆々の山櫻
桜には桜の営みそを通す
他愛なく花を見てゐる旅ごころ
野暮天のソメイヨシノといふ勿れ
昼下り自転車来てさくら狩
萍のとつつき方といふがあり
花開くまでいろいろな事があり
小粋とは物は云ひやうべんぺん草
花降れる地べたに雀色動く

気ふさぎの重たき花となりにけり
垂直に上枝に移る花の鳥
ひんやりと手の甲に当つ春の草
二輪草あひくき雑草一つ交へずに
花咲くと鳥もすっかりその気になり
鈍器もて物を割る音花曇り
嘴のずんと重たき花曇り
念を押すごとくに春の雷鳴れり
ものの芽どきその辺歩いてくるといふ
思ひ切り悪き女やヒヤシンス
蹠のたわたわ花屑踏みつけに
祖光悼 下田稔さん浄稔信士と余寒の掌になぞる
一卷の終りの花の水に散る
男気の筈の反りおのづから
根っからの浜っ子野毛の桜見に
海浜の雨は曲者花散らす
御本尊どぜう髯もて仏生会

何事ぞ牡丹を寺の囲ひもの
円覚寺
雪柳三千世界此処にあり
身延山
祖師さまの山へのぼらん桜どき
俳句仲間へ
もう十年程ご一緒にさくらの世
来年も又来ておくれ花の鳥
だらしなさ小兒に同じ紫木蓮
いづくにて死に候とも墓を身延の沢にさせ候べく候
一わたり歩き身延の沢櫻
日蓮
土筆打ちたたき出したる青煙
紫荊己を通す色見たり
すずめのでつぽう束毎山の田を返す
花を押す南アルプスよりの風
花の鳥あれこれいふを聞き遣りぬ
内船寺
花の下先師のおはち頭かな
土筆摘む音のつくづく真昼かな
シーソーの花屑吹いて跨りぬ
青空へ一二三と飛花発ちて
田に引ける水音すずめのでつぽうに

田の隅にべんぺん草の丈を得て
クレンソンの根方素通りせる水音
ぼんぼんと山桜置き遠山並み
いのちなが
寿 身延詣での紅支垂
花見客杖を忘れし身延線
緋の桃に近寄り過ぎぬ心拍音
糸櫻糸よりかけて身延山
法燈の山櫻いろ夕づきぬ
雨脚の忽ち千筋花きぶし
老若の一切を度す花の風
本山の飛花つきあたる堂障子
むくむくと大善坊の毛虫かな
身延山ひたすら空を亘る飛花
飛花よぎりけり北之坊岸之坊
うぐひすのこゑの又せり坊隣り
久遠寺の南無妙鷲ほうほけ経
当山の門徒ならねど桜狩

川原石の隙を見つけて花の塵
接骨木の花まぎれんとしてみたり
身延山花冷からかね灯籠に
白妙の昇竜となり糸櫻
登り詰め櫻吹雪の別天地
夏は来ぬ焼津の海の魚光り
浅草のカツ井色の神輿かな
茹でごみには鯉節ぶっかけて
たいがいにしろや牡丹の覗き見は
地のもののこれ一品と云へば蛸
齢なりに私も頑固筍飯
あめふらし好いた事して潮溜り
磁石の針大きくふれる五月山
襟立てて越後湯沢の木の芽どき
残雪と越後訛りが耳元で
秋山郷
畑隅の雪間の桐のつくねんと
凡庸な芽吹きの色でありにけり

豪雪の爪跡芽木に残りけり
谷川の水飛沫して五月空
朴芽吹き谷川の水段為して
秋山郷赤湯に春を惜しみけり
小赤沢部落駆け抜け雪解水
奥山のさくらは白く春づける
白樺の芽吹き朝日に眩くごと
和山温泉
わさび沢わさび養ふ水鳴れり
津南 飯山線 しろとり
すもも咲く信濃白鳥たもとほる
鬼くるみぼつつり芽吹く千曲川
りんごの飛花あれよあれよと千曲川
正受庵
蒔きものを烏ほじくる正受庵
葉ざくらに葉ざくらのいる正受庵
山吹の黄を突つ切りて正受庵
柏原
菜の花の空ゆく雲も一茶風
春の蠅探せばをりぬ俳諧寺
春の蠅何をするかと見てをりぬ

春の蠅一挙手一投足の妙
一茶坊の生地たねつけ花の盛り
くらくらと花菜の中を歩きけり
一茶堂蠅虎が戸袋に
縋り来るかがんぼに胸貸しにけり
小布施 高山鴻山記念館
日の永く一つ目妖怪囲碁打図
緑さす鴻山妖怪財布かな
サイクリングりんごの花の高さゆく
月くりくりりんごの花の薄闇に
北斎館
画狂老人真筆雪中筍狩
菜の花に北信五岳月夜かな
あっぱれなりんごの花の八分咲き
雪山に沿ふてりんごの花街道
岩松院
昼蛙腹の底より啼くが佳し
蛙合戦見守る此処が上席ぞ
鬼無里 鬼無里
鬼無里村河鹿謡へり鬼女紅葉
代田水息せききって駆け込めり

虎杖をへし折りゆけり鬼無里の子
戸隠山の裏手雪間の露のしゅうとめ
田蛙のカララ躰に共鳴す
雪中水芭蕉
がしと雪踏みしめ見入る水芭蕉
水芭蕉乾きし泥を揉み落とす
水芭蕉そこはゆつくり水流れ
山水に凱歌を挙ぐる水芭蕉
水芭蕉山水くびれ流れけり
二夕三搔き股ひろげ浮く山蛙
真昼間の山雪のうへ蜘蛛あるく
水芭蕉林中に水響きけり
もう一つ顔乗り出しぬ水芭蕉
水底に倒木透けり水芭蕉
オオルリのこの森深しといふごとし
せせらぎに木五倍子そろそろ花を垂れ
ミドリ虫鞭毛使ふこどもの日
仁丹の看板健在植田中

空梅雨の下駄箱の戸をがらがり
一生を棒にふりたるあめふらし
白詰草いちめん水上バス乗り場
翼打つ音のばつさり夏空より
葛西臨海水族館
ヒブダイの佳人とりわけ歯が見事
夏痩せてハダカイワシのご面相
のうのと髯のオジサン泳ぎけり
この槽ふねのウマヅラハギでござんすよ
涼しさもその名からしてユカタハタ
ひようきん者ねずみ泳ぎのネズミフグ
力泳のその名もウケグチイトウダイ
ボンネットヘッドシャークの涼気過ぐ
目元涼しく「私カタクチイワシです」
竜宮の森を散策大海馬
鱧木清方美術館
絵師清方風も描きて納涼図
背鰭にて浮葉撥ね上げ池の主
下田稔さんを偲ぶ会 三浦半島剣崎にて
馬鈴薯の花半島は曇り出す

舟虫に危害加えることなんぞ
ふなばたを這ひて房ぼうしゆうぼ州法螺貝ちの脚
タカノハ鯛大きく息す南風の中
刺網にかかるがらくた蜘蛛人手
舟虫の梁山泊を覗きけり
夜叉五倍子の青実南風にごつつんこ
潮吹のほの明るさを掌にしたり
枇杷黄ふねばむほの明るさに百日忌
●七月―九月
行々子田夫野人の唄うたふ
葭切の伝法口調に大分慣れ
青胡桃この木とことん優しき木
海陸に鈍器打ちつけはたした神
房総産鮑ふね槽よりひつべがす
湯河原
保養所の庭木のみかん花盛り
道東行
シートベルトかちやりと締めて夏空へ
七夕竹搭乗手続カウンターに

七夕の水平飛行に入る空路
七夕の空を降り来て女満別
灼けほてる土にどすんとランディング
サロマ湖の空冷え来たり武者りんどう
えいおうと咲き出てエゾノヨロイグサ
武者りんどうこぞりこぞりて砂州に咲く
エゾニューアマニューみんな似ていてどれがどれ
アマニューと断ずるこゑも自信なげ
素足となり踏んづけてみぬオカヒジキ
入日急大傘持の太茎に
オホーツク渚を滑りをる荒布
青鷺がここにもオホーツク晴天
ご当地の赤蝦夷蟬といふを聴く
青鷺の子こつ子こに翔べと湖の風
北辺の日の未だ高く浜苦菜
オホーツク風いでだんまり縞蕎麦
浜苦菜ほろりと風に動く砂

エゾニューウのポンポン咲ける岬なり
夏草のウナギツカミといふを引く
置物のごとき青鷺置く干潟
羅臼町海猫は女めごゑを曳き曳きて
熊ノ湯に入るも一興若葉どき
はまなすも目つむる砂州の砂つかぜ
オホーツクブルーに夏の海無辺
これより夏砂州を舞台の花宴
はまなすに空気小流れつくりけり
寝冷腹抱へて槽ふねの狼おおかみ魚うすもの
おおかみうお黒の羅うすものはおりけり
市涼し買手つかぬおおかみうお
夕焼けの終の光の水平線
かしゃかしゃと番屋近くに鳴く虫も
光苔見ゆかと問へば「それとなく」
流木と別の白さのシロヨモギ
弘法芝弘法麦の族やからにて

棒立ちの大傘持に沖時化て
馬鈴薯の花曇日を好みけり
海霧抜けてフォッグランプは黄菅色
羅臼沖背黒鷗に海霧去来
国後島あとかたもなく海霧の中
魔がさしたやうに海霧湧きまだ引かず
水槽のホタテでんぐり返る夏
斜里町はサーモン色の夕焼けに
ドロの木より空蟬剥がしやりにけり
森若葉してセンニユウの高調子
蝦夷大葉子青空に花穂さし入れて
テラスのさき露のジャパニーズ・ローズかな
ハマナスに別名あれば
鐵路伸ぶ限り群落ゼンテイカ
青鷺の嘴を預けし砂州の天
一輪の影の揺れづめ浜苦菜
蝦夷鹿のきよとんとせるに出逢ひけり
残雪の引つ掻き傷めく羅臼岳

逃水の直路ビートの照り返し
止まらんと瑠璃糸とんぼ間合詰め
糸とんぼ止まる所が判りけり
生ビール内地の人よと云はれ酌む
露刈のごそつかせゐる羅臼露
山の露なればしつかり灰汁抜けと
北辺の日を余すなくハマナスに
太陽の三時の色の麦畑
この丘の麦のツー・トーン・カラーかな
麦畑継ぎ目なく風送るなり
大旋風つむじ生まるることも麦畑
榎松の根方にひよっこり銀龍草
滝音の呪縛振り切り来たりけり
押し迫る青嶺や巖棲息地
逃水や斜里岳とろけ出しにけり
遠郭公うたたねの耳開きけり
宝石函羽田上空ぶちまけしごと夜涼の灯

神輿早く掛声くたびれてはならず
山車獅子の晴れ着の唐草模様も古り
朝顔の大輪清水湛ふごと
かははぎの顔を迂闊に造物主
半島のかぼちやの花のパッパラパ
夏草や俳壇に撒く除草剤
衣食足り何の平成俳句哉
ブリューゲルのビア樽男ビール酌む
交し飲むビールの琥珀胃の琥珀
茶天ちやびらうど鷺絨かなぶんひっくり返りけり
翡翠の眼力疑ひなかりけり
皮剥は天下の珍味火を熾せ
たとふれば男の美学冷索麵
田村草風は二手に岐れゆく
偏見はすこぶるつよし車前草村
男気の廃れたる世の羽抜鳥
定年の一年前の立泳ぎ

玉堂の昔の川の夏の音
独活の花無駄と思へば全て無駄
真夏夜の黒鍵叩きつける指
百日紅盛りなりいざ極楽寺
土用浪一つ大きく勇魚いさないろ
土用浪うねりそこねるものあらず
海めくれ出して生まるる土用浪
美食家の歯音涼しうモモスズメ
夏空が救ひのやうにある日なり
雌日芝は引き雄日芝は引つこ抜く
昨日より暑くなるぞと朝の蟬
浮世うきよ絵太田記念美術館
髑髏圖も弱冷房裡国芳展
国芳の肉筆美人門涼み
幕末絵師国芳ひろぐ怪奇の涼
振りかざすだんびら涼し怪猫圖
大名行列白狐にたぶらかされゐる圖
シベリアが叩き込む黒埋葬図
香月泰男 涅槃

黒き顔黒き手眠るツンドラに
ツンドラの軍隊毛布を抜け靈魂
函を負ふ黒きフォルムは運ぶ人
吾亦紅高峰温泉ミロの構図を想ひをり
谷地渡る風に白シャツはためかせ
蕾む百合こづいて籠かごノ登山との風
風混める大谷地をゆく松虫草
木道に人影を見ず松虫草
だまなして霧の走れりゼンテイカ
霧冷えの肩に落ちくる縦雫
九階草霧淡くなり淡くなり
松虫草霧来る方を知れるなり
霧浴びし山の蜻蛉の羽根使ひ
吊鐘人参聞きを霧の私語ささめごと
地ビールにステーキ木目の頭てる卓
白雨のごとログコテツジのバーベキュー
牛蒡サラダレイモンドペイネ美術館に軽井沢風コッペパン

じり貧といふ鳴き方をせる蟬も
花火の傘爛れかつをのえぼしかな
炭酸のはじけるやうに閉ず花火
昼寝して腕むつちり如来肌
あめんぼう飛ばし過ぎなり乗り上げぬ
午からは頭も霞む夏期講座
がりがりと妻が自家製氷水
大型絵本覗き込む子の瞳の涼し
モンスタ甲子園ー生まるゝ夏の甲子園
三振を喫す唇鹹き夏
日盛りの中軸打線火を噴きぬ
もくもくと投げるエースにあきつ殖ゆ
常夏の島で鍛えしサウスポー
甲子園グランドを馳す大夕立
日焼せし腕ものいふホームラン
汗っかき太つちよ監督サイン出す
炎天を味方につけぬ勝投手

カンバスに避暑地の風も描き込めり
避暑便りペイネのポストカードかな
ポタージュを蜂嗅ぎつけぬカフェテラス
ハイカラな日傘と出合ふ軽井沢
風通るテラスにてピザ避暑家族
風通り佐久鯉の洗臉を待つ座敷
蟬の穴程の寂しさなどといふ
枝々の明るさ増せり白雨中
真夏夜の知らぬが仏不整脈
昼餉共にして夏瘦の弟よ
布袋草きゅつとくびれるところかな
蟹のいふ事情とやらを聞きやらむ
くらげ文様六文銭に相似たり
京劇に呑み込まれり日の盛り
晩涼の黒の勝ちたる斑まじの猫
割り込んでここぞと鳴ける油蟬
夕蟬にやうやう見ゆる鳴き疲れ

決勝の壁と峯雲峙てり
戦う汗涙となりぬ夕榮に
西日中バックホームの残像も
必殺を目論む妻の蠅叩
蠅叩湯吞巻き添え喰ひにけり
衣被できればごめんこうむりたい
ぬるま湯に浸りて雨降りお月さん
首尾問へばまづまづの出来松手入
小粒なる葡萄摘むに千手欲し
梅落葉散るにまかせて始末せず
葉蘭の蠅居場所を二転三転す
人間が単純になる湯に夜長
柿洪のやうな評言貰ひけり
露の日の顔の輪郭思はるる
扁平になりて千切れぬ芋の露
震災忌云い聞かす婆無のうなりて
秋津島颱風窺う頃となり

花火果て闇抱え込む雄物川

鶏頭の頭の塵払ふ雨来たり

この水気みずけ頬つぺた落つこちさうな桃

刀豆の天麩羅といふごわつけり

清浄光寺(遊行寺) 薄念仏会
遊行寺のすすき光沢持ち始む

薄は穂に清浄光佛在す寺

薄念仏唱ふや鏡縁澄むほとり

*鏡縁は時宗固有の内陣の板の間で

極楽の池を象徴的に表す

お上人手ずから賦算念仏会

*賦算はお札くばりのこと

「南無阿弥陀仏決定六十万人」

艶ありて甕の薄も念仏も

白芙蓉にじよ如常住のほとけなり

花すすきじゆつぼう十方衆生の願ありて

藤沢山野とうざくさんぶだうに色のり初めぬ

足わろき上人さんの庭踊

花すすき揺るゝがごとくおねんぶつ
念仏と薄と踊る一遍と

上人の虫音のごときおねんぶつ

月岡芳年 月百姿展
水面の月槍の寶藏院覗く

仲麻呂のまなざし凜と月の海

芝神明宮 だらたら祭(生姜祭)
大門は目と鼻のさき生姜市

かはたれの芝に廻りて生姜市

瀬谷 徳善寺 萩を見る会
道思い出しながらゆく萩の寺

白芙蓉見ながら体調どうと問ふ

無常迅速生死事大と萩咲けり

多羅葉の青き実善根積めとこそ

萩叢も萩見る会も旺んにて

知己に逢ふごときやすけ萩を見る

白萩の楚々たるを寄せ掃き給ふ

鋭さを内に押さえつ青すすき

月半までお向いさんの芙蓉咲く

一段と空深くなり葉鶏頭

覚め際に一つ伸びせり保己一忌

読みかけの書に目を通す秋の雨

通院日またぞろ扇子取り出して

風船かづらぼんやりと日を過ごしをり

長崎くんちおくんちくんちと鉦囃す

万屋町おくんち潮吹き鯨
シーボルト挿し絵に遺す鯨曳

おくんちのカラクリ鯨潮を吹く

小鯨の前曳祭の子がわーい

繰り出すは屋台鯨の親爺舟

本石灰町 御朱印船
祭足袋はたばた御朱印船を曳く

印度人の傘持御朱印船上に

荒木宗太郎便乗
日本の秋一見の遠眼鏡

栄町 阿蘭陀万才
阿蘭陀万才手書きの髭も爽やかに

あっぱれの阿蘭陀万才秋天下

初孫 美雨 誕生
飲みしやぶる爽やか赤ちゃんあくびする

下田さん
養生のその後は如何に枇杷の花

木瓜の実に小馬鹿にされてゐることし

鴟は聞き入れぬ入れぬの一点張り
枳殻に鴟の手仕事鴟の贅
遠からず蛤となる雀これ
香ばしき焼栗御説ごもつとも
綱引のづるづる旗色悪くなる
先代は大の庭好き万年青の実
人物評ざつくばらんに梨の味
沢蟹宇津谷の歩むその先靴で堰き
宇津谷の葛も了りの峠道
宇津谷の葎叩きの雨上る
だんだんと見えてくるなり棚の郁子
茲宇津山 慶龍寺に許六秋風の吟遣しけり
十団子の碑いし秋の風招よべり
青柿の尻辺に廻る雨滴かな
旅先の雨脚見つゝとろろ汁
彼岸花一本咲きぬ宿外しゆくれ
沢蟹のとことこ宇津谷地藏盆

里人の里芋作りこの家も
洗ひ場の底にうごめく大蚯蚓
秋燕を見たりのこゑに振り返る
落栗の真新しきはこれとこれ
茶畑のその畝々の朝の虫
罔鮎漁期も了り近くなり
くわりんの実なりし秋光集むるは
川波の緩急つけて芒過ぐ
十六夜の小腹に納む里の栗
十六夜の宿の枕を均しけり
十六夜の宿の障子を走らする
里芋の茎の色よき十六夜
鶏頭の小火出す火の見櫓下
山峡の百千の蟲夜を徹し
芒とる少年月を迎ふ村
川上も又川下も花芒
節々に臙脂の入る川芒

花すすき人家といふは寄り添うて
鶏頭の暮るる暮るといへば暮れ
天帝の如雨露秋霖とぞ云うて
大寺吐月峯の二間打ち抜き観月会
薩摩琵琶待月軒に徹りけり
重衡を弾ず無月の薩摩琵琶
天柱山闇夜転じて望の月
蜻蛉の訝しげなる眼に遭ひぬ
蜻蛉の極めて人間臭とくき季
隠坊の如きとんぼが前から来る
穂芒のまさに段平抜かんとす
この辺り倒れながらも泡立草
鉄漿蜻蛉の影おはぐるを追ひゆきぬ
考えの閃く如くおはぐる現る
糸揺すりやればどう出る女郎蜘蛛
霍乱平野を起して倒る稲あらん
民宿の茶請けの栗の渋皮煮

利口者猪婆曰くにまたやられけり
漁師曰く
金目漁さうさな八丈島辺りまで
長谷 御霊神社(鎌倉権五郎神社)の面掛行列
江ノ電をよぎり出発面掛衆
面掛行列ひようと「天狗」の先祓い
*面掛行列は「仮面風流」を今に伝える文化遺産鎌倉
権五郎景政の命日に当たる例大祭は神輿渡御に面掛衆
が行列するので知られる
神輿渡御おわたりを待つ間「鼻長」一服す
*面に十面あり「爺」「鬼」「異形」「鼻長」「烏天狗」
「翁」「火吹男」「福祿」「阿亀」「女」(なり)
外国人見物す
「鼻長」をわし鼻が見る面掛祭
面掛の「天狗」の高下駄のっしのし
「女」とりあけが孕み「阿亀」おかめに団扇風
鎌倉に裏面史ありぬはらみつと
*はらみつとは面掛衆のうち、おかめは妊婦の風態に
仮装し、大きな腹を抱えながら歩行する。それゆえ、
この行列を「はらみつと」と称したこともある。田楽に

よく出るはらみ女の流系と見たのであるが、里伝による

と、源頼朝が甘縄の非人の娘を懐胎させたので、年に

一度、彼らに無礼講の機会を与えた、その名残といい、

近年まで「非人面行列」とも呼んでいた

先祓い「天狗」ぐらつくこと幾たび

をさな子の鎌倉囃子に乗り「翁」

面掛けの一戸一役里祭

玉すだれなかなか夏が逝かぬなり

腕組みしてさてどう詠まん弁慶草

山茶花に毛虫一騒動ありぬ

灸花いつまで続くこんなこと

雄日芝のすれっからしのその穂先

腕つぶし強き矢倉の蚊に螫さる

スタンディングブツダと云はれ露けしや

饅頭に押す紅しかと国慶節

じゃんじゃらじゃん双十節の獅子現れぬ

中華獅子おどけ瞬きしたりけり

青龍の胴空を切る双十節

龍舞のくねり始めぬ秋天下

皿に盛るリング崩れるところを描く

西洋梨ごろんと一つ静物画

とりすます陶器のポット秋日差

上野駅出て直ぐ共同募金のこゑ

上野の山人出の秋となりゐたり

赤い羽根つけて上野の森に入る

太陽神ラーとミイラと昼鳴く虫

石像のテーベ市長と遭ふ秋昼

死者の書は畏多しと紙魚云うも

虫音のごと木乃伊の音声ガイド洩れ

身に沁みてナイルの青の石像護符

一室に木乃伊六體そぞろ寒

露けさのここに極まるカノポス壺

*ミイラにする際に肺胃などの臓器取り去って入れる壺

空伝ひ町内運動会のこゑ

川上澄生

浜っ子の澄生のガス燈火恋し

黄表紙七句眉唾もの黄表紙ひろぐ秋燈下

黄表紙のうがち欠けたる世とくしやみ

「模聞雅話」鬼の角切りうそ寒し

燈火親し「臍の下谷」を読み始む

秋はひねもす「鼻峯高慢男」読む

秋夜読む「扱さく化狐通人」

「他不知思染井」に深む秋

秋来るといふ目を鹿のしたりけり

林檎割りことしの蜜の多寡云へり

躍る身をあびせ倒して鯉墜ちぬ

赤ん坊をあづかる秋の空のもと

べつたら市べつたら市と訪ひ行きぬ

もう一枚上からはおりべつたら市

べつたら市ひやつとする日続きけり

市初日べつたら漬の値踏みせり

もちこたふべつたら市の空模様

冬の蠅小さき翅を折り畳み

顔洗ふ仕草幾たび冬の蠅

着古しのセーターはおり古本市

冬物の出し入れに妻余念なし

もうそろそろなどと話して毛布のこと

夜の寒し一枚多くはおり出づ

高齢化社会と百舌啼けり

十一月しよっぱなの風邪貰ひけり

大櫓建長寺 扁額もみづる「天下禅林」に

お風入れ慧可のぎよろ目に立ちすくむ

お風入れ道隆さまの洗面具

虫干しの開山語録と韓櫃と

白描の三つ目の白沢はくたくお風入れ

*白沢は中国で想像上の神獣。よく人語を解し有徳の

王者の治世に出現。建長寺では風入れの守護神とする

無準師範筆「菩提」
ぐぐぐいと引ける渴筆お風入れ

山芋の黄葉せる道のみけり

烏瓜からす天狗が好物の

建長興国禅寺破格の枯芭蕉

破れ着の大燈国師めく芭蕉

枯れ三昧一人愉しみ居る芭蕉

全うの一語に尽きぬ枯芭蕉

尻振りて玩具めく鴨近寄り来

ほぐれ初む嵯峨菊日比谷公園荅おひねりめく

菊花展卒業式のごとくなり

かかるのは手間のみ「如何菊作り」

菊作り答えがでると勧めをり

冬至芽の此処をと盆栽菊談義

アンドロメダ星雲ながら懸崖菊けんがいがいは

綿詰めがどうのかうのと一文いちもんじ字菊

煌々と厚物白菊スプーン弁

晴れ舞台てふ菊苗の色を聞く

何處となう畏き菊の前に立つ

審査員何處見て菊の出来不出来

堅物は菊にもありて塵寄せず

望外の受賞と云はんばかりの菊

要するに何處どう見ればよきや菊

石露の花世間話をせるごとく

西西の市 横浜真金町の市
三つ目で地下鉄を降り西の市

真金町交番裏のお西さま

灯が点り枯木の間のお西さま

神鈴の三つは忙しお西さま

半月に風の納まる西の市

新旧の熊手高々行き交へる

熊手の値耳打ちすれば「そりや無理だ」

値のあつて値の無き熊手よく売れる

むにやむにやとやりて熊手に値のつきぬ

縁起物働きの熊手だよ

熊手また売れたり火打ち石をちよい

とつくりセーター人波をゆく西の市

熊手買ふ気つぶのよさが身上ぞ

射的屋の音の中抜けお西さま

大熊手売れて手締めのよよいのよい

手締めには手締めの応酬一の西

西の市人の流れに縦くばかり

お西さま戻りの道の落葉風

浅草浅草 西の市ぶつかられ躰くるりと西の市

にぎにぎしく熊手鯛やら小判やら

熊手売手持ちぶさたの股火鉢

どれにせうずんと下がって熊手見る

派手好きの御代のきらきら熊手かな

もういっぽん先の道だよお西さま

熊手持つ拳と拳行き交へり

新仲見世仲見世抜けて羽子板市

略服に済ますもよけれ七五三

極月のちよるちよる動くおもちゃかな

愛着の古着のやうな冬日差し

物価高の一年杉箸割り損ず

駅前の木のそこかしこの聖樹の灯
年内に片づけるものの拔書きす
町内に枯木と月と銭湯と
銭湯が未だあり大つごもりの月夜
がちやちゃんと大つごもりのレジの音
数え日のもつさり顔が応対に
日本橋雪が舞ひ来てえらい降り
みぞれるといふこゑありて霽れけり
大衆魚真鱈の顔の冬親し
日向ぼこ頭の抽出より挿話
酒量落つ話さらりと年忘
風体をとやかく云はれ破れ芭蕉
鼻風邪の妻に味見を頼まれぬ
注連飾り手つ取り早く済ませけり
内祝ポインセチアを買うて来ぬ
鴟が鴟にちよつかい出して遣り合へり
逆上の鴟の癩癩玉破裂

共同湯屋根の落葉の分厚かり
共同湯霜にこはばる身をほぐす
編みシューズ落葉の匂ひ搔きたてて
枯木風日に三便のバス待てり
枯るゝ身に熱湯をこそ湯西川
枯蔓に卷かれ混迷深める木
拾ひ上ぐ紅葉の中の艶紅葉あで
枯蔓の横暴極まりなき立木
枯蔓の末路を晒す川つぷち
枯蔓の幹に食い込む馬鹿力
犬の踏む樺落葉の音ぬくげ
一つ木に集ふ鳥と柿の数
冬靄の和気あいあいの川景色
せきれいの霜の色して岩畳
上々に紅葉仕上がり龍王峽
僕キツネ私タヌキの店師走
息づける紅葉に急所あるごとし
逗子端山散策

鼻風邪の妻の言づて事細か
鼻風邪の寝付きよければ直るべし
掛かりつけ大田医院の八つ手咲く
タタツキルタツキルぞと鴟啼ける
ずぶ濡れの鴟の平気の平左かな
茸の名いちいち聞いて宿夕餉
湯西川
宿炬燵山の夜長を如何にせん
朝日さす霜の空林空山に
平茸を栗茸を指す箸の先
山鳥の脂浮くなり茸汁
高手
木の葉降るお品嘉助の山墓に
山宿の炬燵の酔ひがまはりけり
濁り酒とろつと炬燵火は赫つと
炬燵火をいっそう強くまたぎ宿
木の実どき落葉どき過ぎ落人村
道迷ふ朴の朽葉の幽界に
投函の小銭ひやつく共同湯

神業の柱状節理崖紅葉
蝙蝠のやうに下りて枯るゝ葉あり
ほうほうと云ひて拾へる朴落葉
林道の細長落葉丸落葉
爺じいさまの口許に似て隼人瓜
裸木の光と蔭の部分かな
がまづみの實やこの谿の鳥たちに
がまづみを漁れる小鳥無我夢中
落葉道どつこいここに走り根が
頭を掠め空林に入る冬の禽
ユリの木の皆落葉して木偶の坊
蠅螂の翅まだ青き十二月
いろいろある種子の飛び方草の実展
シクラメンばかしてポートレート撮る
髪刈つて頭の頼りなき冬青空
心臓の葉に加へ風邪薬
浅草の師走に遊び牛鍋屋

極月の火に煽られて中華鍋

雷門脇の日向の師走猫

青空に飛距離を伸し散る木の葉

街の木は枯れてタンゴの鼻濁音
ダリエンソ賛歌

コントラバス靴底でとるリズム冴ゆ

レーニン風唄い手の額灯に冴えて

路上に舞ふ落葉とブエノスアイレスの雀

ブエノスアイレス負け犬に吹く枯木風

枯るゝ夜をジーラジーラと唄い出す

口許が割れて洩れだす夜のタンゴ

ジョーカーの裏でくすりと夜の笑ふ

バイオリンずいこずいこと「颱風」ひく

バンドネオンに翼枯木の宙を舞ふ

痩せぼっちのキリストを吹く枯木風

第七句集 宿好

●一月―三月

お元日目許賢き鳩が来て
浅黄空おらが一茶の國の春
泥繩の一年が又始まれり
歳旦吟踏まえ所が大事なり
申し出ることくに年の来給へり
こごつぱりして定年を迎ふ年
待望の景氣上向く年ならず
初詣空がずんずん進むなり
年酒して赤熊しゅまのごとく目がすわり
年男さすれば龍となり舞はん
抜き放つだんびらのごと年立てり
千里眼年神霞む野に立てり
リラックスリラックスして年迎ふ
言葉にも矯め方があり姫始め
鏡餅ことし奮発したりけり
掌が飛んで来るなり歌留多取

食積のまづ柔らかきものつまむ
年賀状ああこの人のこの癖字
初雀トコトコトツと石畳
壁に杖立てかけてあり初句会
福寿草今年定年自適の日々が待たれけり
六十年寝起きの一間初明り
死んでゆく身故の花鳥風月とよ
鏡餅不景氣の年重ねけり
筆始め要らぬところに力入れ
連れ立ちて仲見世をゆく春シヨール
身綺麗になりて辰年迎へけり
人波に旨く乗りけり初詣
赤ん坊の笑ひ初めなり福は内
屑籠に二日の日差し移りけり
裘裘見て振り返る
泉岳寺粉雪じゃんじゃん降りにけり
梅林は蒼ばかりで素っ気なし

曇にも雪にもならず唯の雨

インフルエンザ

予防注射したもののさあどうなんだ

寒シの採尿咄嗟に出たりするもんか

着膨れて唯唯診察待つばかり

手袋をしてゐてうっかり落し物

朝比奈 熊野神社

切通し磐しぼる水凍りつき

切通し落葉朽葉を踏み付けに

三極と見しがまさしくさうであり

さて何本ここから見ゆる崖つらら

もう一本引きずられ落つ崖つらら

梅林に鋏のこと鋸のこの剪定音

梅林の剪定済めば鴉が来

柿の蒂カアの一ト声凍みるなり

山鳩のごとく身を揉み寒シ払ふ

とつつきの梅の一輪嗅ぎあたり

山歩き煤け木五倍子の芽に出会ふ

ざうざうと山の枯蔓滝なせり

鼻莫迦になるまで寒シの通勤路

寒曉の国道をゆく貌つんつる

街路樹の枯木のパントマイムかな

大寒の底光りせる檜青葉

探梅の探しあてたる一二輪

極寒をこくと一つ醬油の音

火の用心命用心寒最中

出勤の一人一人の余寒顔

痩せ杭の彼方に一つ浮寝鳥

ポケットの握り拳も氷点下

塗箸がはたまた牡蠣が滑るのか

着膨れてじつと一日家の中

寒晴れにああと鴉も諾ひて

寒晴れの飛行物体ジュラルミン

心臓が縮まるけさは寒いねえ

風邪引いて床に打ち臥す図は平目

風邪の身の海月さながら廁まで

僧正のそらそらそらと豆撒く手

八幡宮宮司を上座午まつり

その中に新あらの鳥居も一の午

午まつり氏子ら煎餅座布団に

三寒の黒竹粋な一商家

寒晴れの鼻梁に海の風少し

紅梅のいろの飛びたる訪問着

雷門潜り四温の中国語

貴女まあお変わり無くてと針納め

つつみ紙楚々と開きて針納め

針納む美風普く傳はりて

母

この道で生活たつき立て来し針供養

まなうらにミシン踏む母針納め

紅絹もみいろに浅草の空針納め

鼻の上にちよこんと眼鏡針納め

青空に木の葉一枚吸はれゆく

鳩の眼のくりくりけふは春立つ日

立春の肉屋の前を通りけり
酷寒に打たれて覺めぬ梅の性しょう
梅見ての余生などとはとんでもない
旧軍港浮寝の鳥もなかりけり
人を見て寄り来る鴨の日和貌
定年がもう目の前に水温む
鉢小物持出し春の土いじり
水温む池に棒切れ浮いてをり
水温む水面に顔を持ってゆく
春めくと家路半ばにして思ふ
砂場の子遠く見守る四温の目
すつてんと転んで掴む春の土
暖くなりて砂場の砂いじり
豆撒きの赤鬼さんと青鬼くん
一通り梅林を見て引き返す
寒がりには内弁慶に似て家居
のんのんと海上に出る春の雲

五分咲きの梅と聞きしが嘘ばかり
つくねんと柿の木いっぽん枯月夜
青空のまま昏れ柿の薔月夜
年金の本など読んで目借り時
仕事かたし来て春菊のごまよこし
山茱萸の弾けてぽつと夕日中
もめごとも一段落し桃の花
梅汚れ番の目白来ずなりぬ
花つけてとつても寒き日の山茱萸
土いじりすると抜けてはこべの根
世話なしの都忘れの株殖やす
月あるも寒さしぶとき戻り道
幼子に董のいろを言はせをり
クロッカスぐらと地表を吹ける風
辛夷吹き天地の間を抜ける風
花ミモザ黄み掻き立てて咲けるなり
船で来て安房の花菜に染まらんと

三一の弥太郎戀猫徘徊すさんびん
花桃は田舎娘の器量佳し
血色よき児童が通る春日中
鳥雲に年金のこと生活のことたつき
蝌蚪に見る定年といふピリオッド
あほむくもうつむくもよし山椿
痛み分けてふ語がふつと寒椿
苗札もびしよびしよに水遣りにけり
粗樫の葉に吹きつゝのる涅槃西風
日の差せば浮き上がり来る花三椏
土佐水木枝は木臘の光ゲ持ちて
枯れてをりウツボカズラの壺半分
やみくもに連翹の芽をつけたがる
チューリップの芽立ち囀り初むやうに
枝先に合歓の枯れ莢ひいふうみい
うぐひす餅それだと話促せり
棒切れをずると滑り蝌蚪の紐

茅ヶ崎 氷室椿庭園
洋椿和椿椿園巡る
鳥ごゑのときに絶えたり椿園
早咲きの椿椿と口揃え
毛糸帽椿の花粉付けて来し
日月のあかあか椿白椿
喋々と鳥語椿の林なす
初蝶のいとたをやかに舞ひ出しぬ
靴先で朴の落葉を返すべく
春めくと探りを入れるゝごとき日差し
快活に道問ふ青年白木蓮
春櫻ゆとりをもつて眺めけり
杏咲く情に溺るるごとくなり
杏は桃に一足先にと云うて散る
連翹も微苦笑年金にも課税
●四月―六月
接骨木の芽の付き方は唯杜撰
足出して生けるしるしをだんご虫

はげちよろの蜷の尻のあつあつ汁
土筆土筆ガウデイーの塔ここに建つ
馬刀突きといふ捕物に似たるもの
やどかりの新しがり屋宿替えぬ
増上寺総門前の植木市
つかぬこと伺ひますがと連翹越し
初桜風来れば又そはそはと
つくづくとさくら花満ち日に重る
腕によりかけてこれより糸桜
夕桜すつと色調落しけり
夜桜もぼんぼりの灯もほたほたと
夜桜の雪洞尽きるところまで
日永の亀首伸ばす方何ぞある
こんなにも亀があるとは日永の池
泳ぎ来る亀を亀見て日の永し
帰るさも日永の亀の甲羅干し
山道のここにどっこい蝮蛇草

年々にたちつぼすみれ淡きかな
岨道に六方踏むややぶれ傘
芽吹くなら櫂パッとパッと
階に池に落花の選り好み
やぶれ傘傘さしきればつまらなき
やぶれ傘臺が立つとはこんなもの
土筆ぼかんとしてゐるうちに命日過ぐ
風はたと絶えし桜の日に重る
踏青の三時となれば風冷え来
芽吹く山見てゐて画法朦朧体
ネクタイをして花見とは上野山
この人のかうゆう句が好きさくら時
相模野の青きを踏み来て手ぶらかな
亀鳴くを聴くとておかしからぬ齡
駒返る草定年を前にして
合いの手如潮騒浜の三味線草
歩く会雨天決行チューリップ

出来れば近場妻との花見何處にせん
漫然と櫂は芽吹き初めにけり
御忌御忌と鳥啼けるなり増上寺
真つ白な花に群がる風一目
なかなかの櫻と幹に手を掛けて
福島は桃桃の花霞東北行
落花ひとひら二本松少年隊
角館郵便局の糸桜
北国の餅肌いろのさくら咲く
花辛夷飛び込んでくる田沢湖線
鳥雲に直武描きし人體圖「解体新書」挿絵画家小野田直武
ほくり咲き秋田支藩の武家屋敷
まんずまんず寄ってたんせとタラの芽売る
もくもくと花冷えどきの樺細工
ひゅうと手が伸びて編み込む通草蔓
落雁売茶っこさのんでいけといふ
桧木内川高堤いま花堤

花堤万の莖を敷き詰めて
いぶりがっこキザミがっこに花の昼
川沿ひにセスナ機飛んで花見時田沢湖
水芭蕉水に萎ゆ花横たへて
山毛櫂描くコンテさくさく雪間どき
雪割れの雪を山毛櫂の根受け止めて
人間にくびるゝところ雪間の温泉ゆ
山蛙聞き駘蕩として長湯
石割のえらい桜を一目見ん石割桜
朝の気の漲る石割桜是
枝張りも根張りも石割大桜
あれまあと石ぶち割って咲く桜
ものの芽も盛岡弁ももそもそと
呆ける土筆と待てる釜石線
陽炎を搔き分け搔き分け釜石線
膝を詰め遅日の遠野物語
土筆生えコンセイサマの石ほとりつくす

泥鱒どんじよ捕りザシキワラシも加はりて
青蛙あおびつき遠野に雨をもたらせり

横柄な遠野鴉に蛙青む

田起しの小田の畦草なまなまと

カッパ淵遅日の祠一つ置き

カッパ淵杉菜の青を流しけり

永日の河童に逢ひにカッパ淵

遠野の子手っこつないですかんぼ道

語り部の火箸叩いて締めくくる

曲り家の三和土伝ひて昼蛙

ひつつめに腹のぬくもる夕蛙

対岸割烹の花を肴に枕流亭

さくら時堤ゆく人豆粒大

堤より花の散り込む遊び舟

落花踏み歩む堤よ北上よ

北上川の朝の水勢さくら満つ

花巡りホテル今日の泊りは武蔵坊

高館の落花しづしづ静の舞

清衡中尊寺が夢みし花の仏国土

繽紛と飛花の舞方衣川

たそがれの光帯びつつあめんぼう

来てみれば雀隠れの衣川

衣川やいのやいのと代蛙

たんぼぼに村内放送よく通る

一夜荒れ濁りのとれぬ代田水

毘沙門達谷窟天蝦夷えみしに睨み利かす寺

悪路王籠りし達谷窟おぼろ

悪路王此処に討たれぬ大馬陸

唇の分厚き日永の磨崖仏

達谷の岩屋へやぶれ傘の道

花は楚々岩は恢々巖美溪

溪底の甌穴に飛花あやまたず

発送須賀川の牡丹苗木は横浜まで

牡丹に寄す侍従長筆大御歌おのみうた

春先の牡丹の手入れもくもくと

牡丹守この須賀川の地味を云ふ

薬用としての牡丹の在来種

祖おや牡丹撰津の國より持ち込みて

すっぱりと芽二つ残し牡丹剪る

風嫌ふ牡丹の葉剪り大切と

牡丹は剪らねば剪ればよき花を

牡丹の手入れ総勢二十名

磊落な榊の落とせる春落葉

魁さまがけの一花百花の気概もて

階きざしの壁を見上げて蟻の居り

蟻蟻と見遣るその先亦も蟻

大風に吹き曲げらるる蟻の道

山門の蟻に見限りつけ小昼

亀の子は首から泛かむこと覚え

水馬試し走りの朝の池

ホバリングする虻に貌突き出して

一政の心頭の薔薇真くれなる
けふと踏む予感当りて薔薇崩る
この森の貴公子楠の若葉せり
ヒトゲノム解説せよと亀鳴けり
葉ざくらの葉末までゆきわたる風
絮たんぼぼ肺活量は人並み以下
ジョージ・グロス回顧展
ハイル・ヒトラー！鷲ペンで描く髭薄暑
日傘して次に浮き来る亀を待つ
甲羅干しなどして亀の子亀之助
萍に鎌倉の昼深きかな
蓮丸葉ついと流るる風起ちて
著我に雨たうたう来たねとご住職
傘行き交ふ紫陽花のだから坂
旧西田幾多郎宅
哲学を此処に深めぬ雪の下
擬宝珠の茎をするりと雨滴馳せ
あぢさゐのぼろんと零す雨滴かな
柄の大きかうもり傘より梅雨霽

偽八ヶ岳へ兜虫飛んだりまっしぐら
かぶと
日雷雷電関の碑いしがみに
奏鳴館(オルゴール博物館)
涼奏でオルゴール函シンフォニオン
白雨抜け泊りは星の白馬村
お花畑雨も疾走虻も疾走
白馬岳 八方尾根
ガレ場あり奈落より現る高山蝶
真上より天つ日ハツポウウスユキノウ
溪寄りの脇道閉鎖チングルマ
二株のハクサンシャジンケルンに待す
草臥れて瓦礫に座せばベニヒカゲ
遠雷が一つ鳴りゐて下山道
山小屋の窓辺に蠅の頓死せり
驟雨来空ゴンドラを送りけり
登ってさんざん下りてさんざん岳夕立
兎平駅にて夕立遣り過ぐす
珈琲を喫せりロッヂ「五千尺」
アマニューとアマニューの間雪溪見ゆ

江ノ電はゴトゴトと来ぬ梅雨枕木
●七月―九月
ぷくぷくの素足むんずと赤子立つ
濡縁に落梅三つ四つ寄せてあり
アトリエを包む潮騒花ダチュラ
サーファーの臀部凜々しく南風吹く中
葎切の直談判が続きをり
ほうたるの自家発電の灯の明し
ほたるにも戀の鞆当てありぬべし
ぶらさがり咲きが得手なり花ダチュラ
河童忌の横須賀海軍カレー食ぶ
上高地
鱒ぐらとその向き変へる鬚涼し
すれ違ふ蹠の涼大正池
カルピスを喫し涼める上高地
夏川に手を突っ込んでつめたしと
驟雨来て朝の大正池壊す
上高地降られに寄ったやうなもの

風の道即ち松虫草の道
混むでもなくまばらでもなく吾亦紅
ガレ場にて嘎れしこゑの昼の虫
後ろより兀と迫れる登山靴
積まれたる石の放熱夏空に
ふらふらと頭の上にくる岳蜻蛉
おむすび喰ふ肱を廻りて山の蟻
足垂らし涼みあるなりケルンの端
ケルン経て風届くなり車百合
岳蜻蛉日差しの強さ知ってをり
太陽は真近しエチゴキジムシロ
時かけて風の第三ケルンまで
夏の露ころりと白馬岳快晴
オオバギボウシ白雲翳り易くして
露は凝りゐたりタテヤマウツボ草
白雲の雲影よぎるカラマツ草
雪割草風透き通るこの辺り

雪溪の風の抜け口お涼し
チングルマ好みの風が吹いてをり
見晴らしは兎も角雪溪よぎるとせん
雪溪の舌の先なるチングルマ
マンモスの臼齒のやうな岩に蝶
トラノオのその先霧の粗く飛ぶ
アマニューにピカッとザザッと降るわいな
エゾホソイ山雨傍若無人なり
やたら落ち田舎っぺえのはたた神
雨脚のみるみる太しオヤマソバ
ウメバチソウ我等向き合ひ昼餉とる
ハクサンフウロガレ場の風に煽られて
八方尾根下山がたがた蝶番
健脚なご婦人トリアシショウマの辺
ハクサンシャジンリフト減速して頂上
お花畑雲の空中散歩かな
登り来てモウセンゴケに顎出しぬ

シヨウマ等ちらちら兎平かな
トレッキングシューズの先の岩鏡
白馬山麓星夜天然冷房裡
驟雨来ぬ白馬の美田輝かせ
スキー場写真木造リフトの世
白馬村細野諏訪社
夏の露払ひ諏訪社の五兵衛杉
北安曇野月夜高吟小田蛙
武甲山どんと構えて夏休
紅花隠元咲けば秩父に盆が来る
札所寺大鉢に生ふ布袋草
堂縁に一つ載せあり蟬骸
かんかん照り雀翔つさへ億劫な
灸花七番寺へ喘ぎ坂
巡礼の秩父はかんかん照りの道
秩父事件蜂起の鐘を蟬抱き
流燈のライン下りとなりにけり
長瀬
急湍にかかる流燈間合詰め

流燈の二つひつつき流れけり
流燈の脈打つごとく打過ぎぬ
闇より手伸び来て流燈すいと押す
流燈はおのが道筋照らしゆく
流燈のひかひか川面照らしゆく
瞬けば流燈もまた瞬ける
うつつらと水明り流燈そこを過ぐ
山峡の風戸ふっどで降りて鮎を釣る
虫送り嶺門平、立沢の虫送りに張りつく二集落
虫送り竹竿に鉦ぶるさげて
あきあかね先導つとむ虫送り
虫送り五色のノロセ持ち寄りて
盆がらを追ひやる掛け声山里に
*盆がらは農作物の病害虫のこと
山風に「ようづの虫も送るヨイ」
ゆく雲に「はやりの虫も送るヨイ」
盆がらにあらざる秋津里に殖え

虫送り撮りにケーブルテレビ局
村の衆手拭い首に虫送り
秩父神社 やこしおおも、かねのみこと
蝸聞き八意思兼命
札所寺二番で降られ夏の雨
青栗にさしもの秩父の雨上がる
こんにやくの茎しげしげと見て秩父
早稲の香の沸きかへる中巡礼道
札所寺百日紅に汗退けり
団扇など置きてもてなす札所寺
団扇風いただき一番札所寺
青田風吹き込む三番札所寺
街道はこれから灼けむ露葎
百日紅どうれと山門潜りけり
大滝村桑が長じてしまひけり
風船かづら祖霊送りに済ませしよ
しよりうようばった一巡りしてわが足許
花火見る旅も山下清めく

揚花火どんと武甲山の肩を突き
昇りつむ花火の青息吐息かな
両神山を指呼に頂上涼み台
湧く雲も胡麻の花いろ奥秩父
水団腹終戦日毎日あれから五十年
水団の戦後生まれを自認せり
水を張る手も逸りけり金魚鉢
曝書などせんとて一念発起の日
水を撒く母がもつともすずしさう
麦湯煮ることに精出す妻なりき
妻の夏吾が夏一つ屋根の下
年金の出る齡となり鳩麦茶
麦湯飲み暑さ負けせぬ夫婦なり
鳩麦を加ふ麦湯の香なりけり
栗の樹下髪を叩いて蟻落す
風鈴の広長舌を聞き遣るべし
職引きて麦湯の湯気のやうな日々

芙蓉淡々同窓会の日が近む
秋草も黄勝ちの野草摘みとりぬ
霧の中霧に日当る一所
踊り手が町に戻りて風の盆
八尾の風の盆
坂の町足のむくまま風の盆
石垣の上の町並み風の盆
川の音おわら流しの遠ざかる
おわら見て二階に風の通る家
風の盆朝顔の葉に灯の洩れて
足そろと運びておわら流しかな
おわら流しふらりと出でて町流す
太棹の影が法被に風の盆
夕顔とおわら流しの宵迎ふ
町衆の趣向の法被風の盆
おわら流し橋で一息入れゆけり
くらがりに鈴虫を飼ふ風の盆
編笠も月を象かたどる風の盆

仕事人間止めて風鈴吊る家に
蝉の穴ホーチンミンも斯く潜み
虫瘤の意気壮んなり真炎天
じり貧と云ふ鳴き方をせる蝉も
定年だあ定年だあと蝉啼くも
捕れたかと云へば虫籠掲げ見す
花火音立て込む家に飴して
花火にも前座・真打ちありにけり
片陰ゆくハローワークの呼び出し日
海水着はちきれさうよ如来肌
蒲焼きなど母に奢ろうかとおもふ
鰻召せ長寿の因むとの鰻召せ
シンクロナイズドスイミング咲かす四肢の花
ダイビング黄膚台頭アジア勢
大井川葛は暴走して止まず
月端はなの蝉ごゑ何処か衰へし
朝顔の遅まき咲といふがぼと

団扇風妻より貰ひ風の盆
風おさまる如く豊年踊果つ
紅引いておわら流しの出を待つ娘
夕顔に胡弓漂ひ初めにけり
おわら流し折り目正しき手の捌き
佳き風が出て来ておわら流しどき
素通しに川原の見ゆる盆の家
聞名もんみやうじ寺堂縁借りておわら節
一寸手を空に合はせて女の踊り
揃え脱ぐおわら流しの草履に名
今町のおわら流しの浴衣柄
黒羽二重法被衣桁に風の盆
八尾びと路地先に据ふ涼み台
一息に唄ひ切らねば風の盆
細き路地大きく使ひ総流し
おわら流しここで一服私も一服
おわら流しころと川原の石鳴れり

旅先の加賀の地酒に蓮の実
卯辰山前に白萩うねり初め
東尋坊美しやビールの泡透けて
東尋坊美しやビールの泡透けて
東尋坊岩間に昼の虫音澄み
切り刻むビュッフェの描線卓と百合
描線の威嚇と攻撃巴里凍つる
冬景色殊にビュッフェの垂直線
青芭蕉煽らるる日の清方展
清方のほゞづきの絵のほゞづき鳴る
清方の八百屋お七の紅の涼
蝸をまどろみの中暮れて来し
かまつかの彩なかなかに鄙ぶ寺
秋口に降りては埃くさき雨
きゅつと鳴る紅茶の砂糖秋の昼
つきだしに水もしたたる新豆腐
竜淵に潜みとろんと紹興酒
包み込むやうに秋雨降り出しぬ

ひっひつと聞こえて遠の秋の蟬
腹立つとみえて蟻螂斧振り上ぐ
安んずること木守に及ばざる
虻去るとはつかに石露の独り言
秋風にひとり歩きの嘘往けり
何處となく色づいて来ぬ瘤櫛
不細工は不細工なりにもみづれり
等類の右へならへに倦む秋夜
燈火親しめず雲脂より軽き句に
長き夜のどうでもよき句は読み飛ばす
そのかみの力士と云へば名寄岩
ほればれとするあんこ腹鏡里
東海の弓取り上手大岩山
あんこ形力士あづくるあんこ腹
かうなれば小細工効かぬ四つ角力
秋場所の力相撲となりにけり
突っ張ってはたいていなす技が効いて

澄み澄みて水も心も方円に
しがらみの地縁人縁まんじゅさげ
雨のあと直ぐ日が射して雁来紅
肝張つていきいき鳴ける朝の虫
羽蟻墜つ奇妙な夜となりにけり
のうぜんどの宙ぶらりんや糞暑し
昼月をあふぎ海月の波枕
庭石を二つ渡りし良夜なる
今日の月三溪園の松越しに
月祀る芒に添えてゑのころも
観月会琵琶の音締めを襖越し
颯風のたてこんでくるこの時分
颯風の道草食うて近畿道
颯風のアッパーカット喰らふ軒
内々の話にも触れ菊脛
翅ひろぐうすばかげろうガレの壺
雑俳と諧作つても作つても

舞ノ海大きな相撲取りにけり
横綱の巨きな張り手飛んでくる
どうにでもなれと当るが勝角力
尻はたきこ一番の大相撲
解説は相撲巧者の舞ノ海
勝ち越しのすまふに花を添えにけり
負越しの土俵勤むも後二番
横綱を取って投げたる晴姿
投げられて口をへの字の武蔵丸
踏み込んでやうやく初日の出るすまふ
待ったなしうるさきすまふ取る同志
持ちまえのがむしやらがでて負相撲
立て込める黒星同志「はっつけよい」
好調は躰に任せとる相撲
乾坤の当りに懸けぬ土佐ノ海
俳諧に我も自分の相撲とる

●十月―十二月

蝶せせる薬わなわなとまんじゅさげ
新米の穫れ高「んだな二十俵」
鳶の糞里芋の葉に垂れてける
まんじゅさげ生白の茎によきによきと
手折りみむかやつり草の彼のにほひ
稻雀上げ下げ崎の棚田かな
稲架組んで手刈りの頃の話かな
敬老日ころつと忘れをりにけり
虫のこゑじいんじいと稻稔る
ランチタイムは秋のシシリア風ピザに
ピザの秋アイダホスペシャル平らげて
十団子に添えて十団子由来状
顔つくる外出の妻に昼の虫
妻と吾と旬の秋刀魚を二等分
昼からの芙蓉曇りとなりにけり
洋梨のおいど優しきものの一つ
ちびつこの駆け足ばたばた運動会

老い進む三町内の運動会
物音のよく通る空烏瓜
懸案の一事果たしぬ衣被
女郎蜘蛛縦の糸張る手順見て
白芙蓉咲き加はりし庭の景
ときめきの色に出でたる実むらさき
閑日の昨日今日明日芙蓉の実
今年米うまかり今日に明日に処す
蠶螂は千人斬りの構えなり
青蠶螂生兵法の斧を振る
藁持って青蠶螂を指南せる
長き夜の寝惚先生文集読む
その辺の呼吸呑み込み松手入
隼人瓜弾けば陶の音したり
木犀のこまごま蓄むこと一途
もう一度見てから寝ねん後の月
静物画縞のオブジェの烏瓜

街騒に木犀零れ初めにけり
いかつくて何處か優しき青くわりん
犬蓼にけふの散歩はここ迄と
雌日芝に降り癖つきぬ野辺のそら
かやつり草背高きは摘み取られけり
市庁舎のユリの木黄葉始まれり
ご町内木犀の香のつなぐ路
虫瘤もみづる頃となりにけり
紛れ込む蠶螂を外に出し遣りぬ
蝶々に浪花をんなの粹見たり
瀬祭忌発句にもある著作権
七五三辺り走れる櫂の根
女郎蜘蛛楯円函数論知るや
雨衝いて啼き出す鴟の直心
しみづれる高雄ホテルの絨緞も
しぐれ聞きちりめん山椒一トつまみ
樹上には明恵 樹下には女郎蜘蛛

真つ白に明恵の咲かす茸なり
百段の上から落葉搔始む
一頻り萩刈る音か高山寺
ぼこぼこと明恵が頭くわりんの実
しぐれ避け北山杉の見ゆる簷
水引がすいと目に入る高山寺
お茶の実がしんしん冷ゆる高山寺
栄西の茶種育てし露の畑
しぐれては鄙ぶ高雄の柿もみぢ
梅尾のお茶の実に凝る雨雫
秋草を鳥羽絵の兎高掲げ
茶の青実曰く「阿留辺幾夜宇和」とは
茶が咲けば清貧一途の明恵見ゆ
川砂を敷きて時雨の通る庭
もみぢ葉は真言陀羅尼 義趣を秘む
神護寺の紅葉明りに一凡夫

金閣寺
日が当り轉りさうな梅擬
背負籠より十歩が程の落葉掻く
金欄の綾なす鯉と金閣と
万両の向うを通る水のこゑ
かえるで
楓の穴惑めく走り根よ
赤松に秋の陽赤と鹿苑寺
露けさの金閣見んと一歩寄る
金閣の金を破りて錦鯉
青松に金閣の金ン飛ばしけり
露の金閣屋根は榎と申されき
金閣を呑まんばかりに鯉の口
秋気満つ金閣を出て銀閣へ
龍安寺
龍安寺自問自答の鴟のみて
真昼間の石庭あるく蟻を見ず
佗助の自足の花とおもひみる
禅寺の油土塀に秋闌けて
石庭の謂れ露けき日本語に

碧眼も露の十五の石見据え
方形に秋の日容るる石ノ庭
山茶花のうち崩るるは自刃に似て
ズバリ散る白さざんかでありにけり
さざんかの会心の白龍安寺
つと寄りて轉法輪寺道をしへ
仁和寺
秋蝶のあれあれとほる仁王門
色鳥の出入りゆかし御室御所
諸鳥のこゑも染るやもみぢ御所
回廊に回廊を継ぎ萩の風
仁和寺の御室で降りぬ秋裕
秋蝶沿ふ仁和寺の塀長く長く
寶物に加え色鳥藏す寺
大覚寺
さるすべりもみぢ見ながら渡り廊
木斛に秋風の立つ大覚寺
大覚寺畳廊下の秋のこゑ
化野念仏寺
化野の露の佛の背のまろみ

石白く粗く化野露佛
化野の犬蓼の辺の欠け佛
化野の露を零せる多聞塀
祇王寺
祇王寺はその紫苑の右を行け
祇王寺の日暮紅葉の佛間にゐ
祇女尊女祇王尊女と紅葉観る
紅葉冷え佛御前のおん膝も
祇王寺の籠と音してちるもみぢ
滝口寺
横笛をおもひ染めたる色もみぢ
嵯峨野
化野の人肌ほどの秋日差
嵯峨竹の春にしてなほつづく徑
朝顔の種も採らずに嵯峨野道
露けさの丹波黒豆「どうどやす」
化野の柿の下ゆき日暮道
落柿舎
落柿舎の虫喰いもみぢ葉とす
落柿舎の庭木のそれもこれも柿
紅葉狩落柿舎辺りで日が暮れて

常寂光寺
好事家の嵯峨野もみぢといふを見に
天竜寺
兵火八度かうむる寺にして紅葉
もみづれる楓のいろは兵火のいろ
ほうほうと馬遠の作画秋翳り
枯山水巖顛頂に露を置き
いわし雲天龍寺船穹駈けて
拝観の最後の一人鴟を聞く
枯山水風化すすむる鴟のこゑ
ためらはず鴟は一刀両断に
「随處に主と作れば」と鴟の申すなり
洛北
鴟聞きて雨の一乗下り松
洛北の雨は大粒柿の実に
冬菜沿ひずんずん下りて一乗寺
曼珠院
もみづれる寺に預かる幽霊図
雨の日の障子明りに幽霊図
一葉よりもみぢ始まる曼珠院
亀脣る白砂と御坊指さしぬ

清閑を楽しみながら柿熟るる
丈山の髯を倣ひて錦鯉

丈山の清貧ゆかし木賊の辺

葉末よりもみぢ始る詩仙堂

雨の柿人間くさくもみづれり

沢蟹も雨にもみづる凹凸竄

色鳥のこゑを引出す梅擬

つつつと蕪村棕栢図にしぐれ馳せ

露の他省き尽くして銀沙灘

叭叭鳥を四方に翔ばせ露襖

哲学の道沿ひ鴨も散歩する

法然院雨に紛るる小鳥こゑ

心鏡に写し参らむ照もみぢ

永観堂早紅葉雨に色づけり

長き夜の灯を引き込みて先斗町

タクシーで乗りつけ二十日えべつさん

旅人もゑびす顔してえべつさん

細路地の四通八達ゑびす講

お薬師の広庭借りて弘法市

九度山の柿も売らるる弘法市

弘法さんの縁日みたらし団子焼く

煤けても不動明王火恋し

朗々とわたる紅葉の回廊ぞ

等伯の松剛直に秋草図

秋深む観音一体修復中

来世世見ゆるが如く堂障子

湛慶の作とうんぬん露御坊

宗達の竹描の象身に沁みぬ

若冲忌鯉に遊ばせ貰ひをり

秋霖も京の干菓子もこまごまと

左京区の雨のコスモス高う咲く

鴨を見て京の五条の橋の上

落葉一枚頭に載せてちちんぷい

ふくらんで風除く鴨の不格好

いっぽんの山毛櫨の実二萬猿漁る

人は好きずき楸邸の柿子規の柿

楸邸の柿攻む顔がありありと

銀杏黄葉落つときスイツチバックして

会心の紅葉むらぎも熱くせり

ざっと見ていちいちは見ぬ柿落葉

山茶花も人もいずればガタツと来

おいそれと返事も出来ず帰り花

わだかまりとある日解けて返り花

皆散るは文無しに似て大いてふ

いてふ散る輪舞に吾等瞬きづめ

強いられて大銀杏葉を落としそむ

女郎蜘蛛あはてふためく様見んと

秋の日にカキノ木ダマシといふ樹木

木も痩せて二、三箇しけたくわりんの実

厚物の菊の顛頂に蜘蛛の子来

展示日に間に合ふ菊の咲かせ方

とっかかり要得ぬ電話文化の日
悪さする虫に先んじくわりん採
くわりん酒の焼酎二升程と踏む
大きくわりんぐるり廻して斑むらなき黄
包丁の歯立たぬくわりん閉口す
たたみ懐旧二句いわし焙る祖父の手見え冬へ
お使ひはさらし鯨よ爺ちゃん子
天気図の裏日本に雪だるま
冬籠動かざること鰐のごと
職引きて冬籠る図は鰐のうたた寝
立冬に要らぬ雨など降り出して
立冬の床起ち羽織るもの探す
立冬の雨止んでまた降りさうな
立冬の雨にユスリ蚊でんてこ舞
ユスリ蚊に伴奏添えてやらまほし
立冬の我がものとなる新刊書
目につくもの皆がさついで冬は来ぬ

寒くなりけふも鯉鮓の昼餉かな
荅解く山茶花これは明明しあきつて後日
さざんかの落胆甚だかりしかな
山茶花の花立て直す暇無く
いつこうに何も起らぬ石路の日々
木の葉髪搔いて訴ふ忘れ物
龍淵に潜む好機を逸しけり
飽食の日々を共にす冬蠅と
雲脂飛ばす遊あそびごととして冬机
匂づくりも柿も分別顔をして
酒注げば朗々と鳴る菊脛
シベリアよりどんと吹き込む寒気団
天気図に明日の横這い寒気団
木の葉髪妻居てけふも本を読む
はやり風邪お鉢が廻り来て臥せぬ
着膨れ聞くこむら返りの直し方
一刹那初冬の鳶の影浴びぬ

落葉搔き朝から母の甲斐甲斐し
早々とポインセチアの囲み記事
咲き出せる石路に阿弥陀の頬ゆるめ
願はくば生まのまま召せと新酒着く
蠅螂の斧振りかぶり豪の者
腹見せて蠅螂ひっくり返るとは
其の斧に歯こぼれなかり枯蠅螂
素浪人風の蠅螂振り返る
蠅螂の登攀そこに壁があり
石路蓄む虻の翅音にあやされて
蜘蛛の囲にまんまと懸かる粗忽者
蜘蛛の囲が顔に迷惑千万な
同意なく此処に蜘蛛の巣張るべからず
蜘蛛の囲の顔に懸かるをエイヤツと
蜘蛛の囲の糸端探る目を皿に
獲物へと押っ取り刀の女郎蜘蛛
じたばたをぐるぐる捲きに女郎蜘蛛

腰据えて料理に懸かる女郎蜘蛛
山の日のもう一押しに木守柿
木守の余生といふは透けること
木の葉ひゅうと飛ばして山の風わ走る
葉を落とし櫂そびゆること想ふ
観察小屋窓を覗けば鴨ばかり
くにやくにやと嘴広鴨の影曳きて
青鷺の八頭身を水鏡
青鷺の探り歩きの一步づゝ
セーターの試着好みの木の葉いろ
毛衣の試着鏡よ鏡よと
ひろびろと酔牡蠣味はふ舌があり
匂も匂旬の酔牡蠣に若しくはなし
柚子絞り酔牡蠣はたほた旬のもの
菊脛のこる余生をどう使ふ
云はるるまゝ膝を崩して菊脛
長芋の短冊切りにひとり酌む

昼月の辺りで穂絮ついと消え
なあるほどこれが冬芽の付き方か
酉の市櫛落葉がすっ飛び来
お酉さま神武景氣の世は遠く
おかめ等が夕日呼び込む酉の市
手締めしてそれそれ熊手又売れた
熊手持つ空似の人や酉の市
熊手売使い込んだる法被着て
灯がついてよりの賑はひ酉の市
くらがりに襟を立てゆく酉の市
お酉さま人出ぬうちの車椅子
起つ風に身震ひ一つ酉の市
電球も黄金光りに酉の市
角店で酒ひっかけて酉の市
文化の日形状記憶シャツ干せり
こめかみの辺りしゃきつと冬立てり
經濟てふからくり空回りして冬へ

かさつける五體にじんわり冬至の湯
柚子湯して柚子より軽く浮ける身の
新橋の奥の細道年忘れ
実家^妻から千両貰ふを習ひとす
千両もて玄關飾り立てにけり
圧力鍋奮闘続く小晦日
数え日の本にも倦めば何とせう
買ひ置ききの焼栗つまみ冬籠
大年の空見渡して引つ込みぬ
おでん種白の大根をたばさみぬ
煙草屋の婆ちやん健在寒いねえ
糞る犬のすまなさうなる貌に冬日
冬服の右ポケットの底の塵
師走妻剥きかけみかん置いて起つ
水栽培針の根降ろすヒヤシンス
煮て焼いて正月料理お忙し
年の湯にしづしづと臍沈めけり

ブルゾンの浅きポケット冬が来る
鮮紅のサーモン切身聖夜くる
フルーツパーラーポインセチアに隣る席
葉牡丹小ぶりなにぶん景気振はずよ
妙案の浮かべるとく柚子湯の柚
梟の真に受けし貌そこにある
ニュアンスを変へて小藪の笹子鳴く
^{こしら}託る注連・松・牛蒡忘れまじ
時節柄小ぶりな松を飾りけり
年の瀬の煤ばむ顔を剃られをり
その時はその時と年送り来ぬ
柗の徒ならぬ花の数
着膨れのもたもた脱いで診察室
身勝手を通して貰ふ来る年も
試し刷り龍の賀状をおしゃかにす
天井の海老のいい色年詰る
「その内」はもう目の前に十二月

第九歌ふ誰も明眸瞪きて
ぴんぴんに空張りにけり枯柏
堂凍みに毘沙門天のひんむく眼
新刊書二三手にして煤籠
裸木の櫛の如菩薩仏菩薩
野暮ったき枇杷の咲き出す頃もよき
鮫鱈の毀れし貌が競^せられけり
冬夕焼会社勤めも大詰めに
小春日に犀の短軀を横たへぬ
出す出さぬ一悶着^{かね}あり暮の金
水仙花泉下にあまた眠るもの
おもちゃ屋のお猿ブンチャカクリスマス
おもちゃ屋の聖樹ちやかひか景気付け
目につきし佳句反芻して数え日
歳末商戦泥つき長葱もつてゆけ
職引きし年も詰りてやれ一年
冬ものの洗濯鼻唄バズデンボー

ザトペック逝けると冬のチェコ通信

鉄の肺二十世紀を駆け抜けり

人間機関車全力疾走終ゆ霜旦

ザトペック冬天を馳す登音す

冬の蠅発着ふとんの飛行場

青空へ飛び去る冬の蠅の音

めちやくちやな翅音愉しむ冬の蠅

おっとりとお柄にして冬の蠅

冬の蠅頭がだんだん澄んで来ぬ

冬の蠅球たまの躰をぶん廻し

太陽も軌道を外れん大嚏

蠅螂の背筋をぴんと張るときあり

風邪神の有無を云はさず擦り寄れる

「へくしよん」の大盤振る舞ひ致しけり

大舟に乗った気にして風邪の身は

風邪ごゑのうだうだ云うて茶を所望

風邪神に煙草の味を抜かれけり

鼻風邪の昼餉を問へる鼻濁音

鼻風邪のやる気なき身に鞭入るる

鼻風邪を温存するにはあらねども

鼻風邪に愚図る頭を整理せむ

鼻風邪を直す呪文のもしあらば

風邪神のもう四五日と居直りて

鼻風邪の鼻がむずむず直るらし

風邪神のけふ打晴れて御出立

平熱懐古と体温計を振る襦袍

木の葉相搏つ音やがて無くならむ

心臓の葉の後に風邪葉

そそり立つ一冬木見て職引く身

ポーナスのもう出ぬ冬を迎えけり

木枯の夜間働く温水器

とある日の氏子総出の落葉搔

初老とは櫟黄葉を潜るに似て

着膨るゝ人を見上ぐる鯉の目見まみ

隙間風どのみち立て付け直す家

袈匂ふ女と相席す

枯るゝ夜サンテグジュペリを飛行機野郎の本を読む

落葉には熊手ステーキにはフオーク

鳩止めて落葉終る木終らぬ木

早々と葉落とし清々しき櫛

狷介といふ性鴉に染みつきて

味はうて閑石翁の海鼠の匂

読みさせば落葉済ませし木々が見え

ポプコーン抛り込むとき小春雲

冬麗の砂零しては初老の手

松蔭の教へしところ冬紅葉

赤松に冬日押し照る豪徳寺

ポロ市や衣の厚きトンカツ屋

ポロ市や枝に引っかけ笹を売る

ポロ市の湯呑み茶碗を爪弾き

ベトナムの竹の鳥籠ポロ市に

ポロ市のビルマヒスイと言ふけれど

ポロ市の包みと包みぶつかれる

ポロ市のやかん頭の骨董屋

ポロ市に選ぶ和服の裾つまみ

ポロ市の戻り足腰くつたきた

頭から見下ろされゐる袈

袈女だてらに腕組みす

裸木と紅葉半々山手線

冬日向渡り歩いて病院へ

外来の患者持ち込む咳いろいろ

採血の針見ぬやうに木の葉髪

枯るる身に探りを入るる聴診器

着膨れて財布まさぐる一患者

茜空凍みて東京横浜間

冬木の芽篤くと見て其処離れけり

蹲る鳩を裸木見下ろせり

降り出して梶子の実に韻く雨

くわりん皆もがれし後も黄葉して
選り惑ふ箸にぶつかるおでん種
投函の意を削がれたるこの寒気
一冬木仰ぐ心もささくれて
落葉駆く慌ただしさに立ち止まる
柗の潰えし花の埃じみ
埃じむ眼鏡磨きて冬籠
数え日の眠気もたらす車窓の日
幾たびも使へる聖樹飾り立て
毛衣の品定めする旅車中
冬籠葉袋を身ほとりに
葉を落とし往時のままの瘤櫛
間引かれて残る紅葉をうち仰ぐ
性根据え大榊冬を迎へけり
デザートのみかんに灯影殺到す
はつらつと通りすがりの花八つ手
大銀杏黄葉間引かれ素寒貧

年頭の旅はいつもの顔ぶれで
寛容と厳格同居冬櫛
それぞれの星に名のあり年忘れ

てのひらに移して冬の蟻這はず
丸腰の裸木なれば寄り易し
瘤隆と立寄り易き一冬木
生返事たしなめらるゝ木の葉髪
目つむれば宙に浮く吾日向ぼこ
行き来して句作り算段枯木中
冬菊を前に病ひに勝てるひと
冬至湯に絆創膏も浸りゐて
山茶花をいたぶる霜の手をゆるめず
通勤^{懐旧}の鼻を尖らす寒さかな
龍の玉なんぞありそな館とも
八つ手咲き板塀が反る日向路
年金にて妻のやりくり冬珊瑚
修理費てふ伏兵に遭ふ年の暮
臨時出費あれこれ出でくる年の暮
年頭の旅の誘ひの声掛かる
恒例の初旅年金取り崩し

第八句集 随笑

● 一月―三月

せきれいの尾をうち振れば来る年か

年迎ふ空万全を期すごとし

鶉の実の数ほど福が来ればいい

初湯浴ぶ熱きは痒きことと知る

正月の風に当りに出で三歩

初雀羽音を残し消えてをり

嘴はしぶと太鴉と明日の見えない年迎ふ

初湯して考えごとは何だっけ

歳旦吟大活字で無難なり

回顧詠ばかりに尽きぬ歳旦吟

初湯浴ぶからすの行水始めなり

寿げる墨の光沢年賀状

鷹揚に年を迎へて送るのみ

初夢のマンボウ何と豊大

初夢の途中駄目だと思ひけり

初山河大いに羽根を伸ばしけり

一 張羅カシミヤセーター来て参拝

俳人諸氏口を揃えて春の詠新年号

歳旦吟それらしく詠む其処が駄目

今年もや句作言葉の砂金堀

初句会確かむ紙の裏おもて

慈姑食ひもう一波瀾ある世かも

松前漬先づ人参の歯当りよ

輪飾も既に六日の乾びやう

松過ぎの空を鳴らして風小僧

左義長の心棒燃えて炎々たり

火ひよつと男の踊れるごとくとんどの火

凧一遍像に杖を進むる捨聖

鴛鴦は分に過ぎたる晴着被て

読みさして聴ける凧挿話めき

年明けの定年といふ大海原

亀のごと気長気儘に年過ぎさむ

来ん年も雑事に力削がれまじ

走り根と一問一答初雀

行く方を定めず東風の吹ける道

初夢に昔のヨイトマケの唄

俳句莫迦ばかり集り初句会

漁始めインターネットてふ海に

円空の出遁読み初め「崎人伝」

年頭の雲一つなき美濃に入る

美濃紙の美濃を雪降る頃訪ふて

美濃衆と駅で落合ひ初吟行

美濃柿の蒂ばかりなる旅の空

宿木に飛雪張りつく峠越え

白樺の生の色しかと雪中に

雪原庄川においてきぼりのごと一戸

檜より檜に落つる谿の雪

太注連の形なに波打ち積もる雪

凍み柿に楊枝が程の針氷柱

弾き初めに瞽女もたらせしおけさ節

白川村夜陰につらら落す音

どぶろくに白川の夜を更しけり

炬燵して飛騨鯿談義一頻り

どぶろくに酔ふて凭れる煤柱

春駒の昨日廻りし村に泊つ

もてなしに正月舞ひの擦りささら

しづり雪軒びたりと止みにけり

屋台倉に屋台眠らせ積もる雪

高山の雪降る街の消火栓

初商円空さんのまがひもの

雪払ふ音のぶるぶる陣屋前

奥飛騨の木々に張り付く雪の音

除雪車のそのけそのけお通りだい

笑ひ初め円空さんのナタバツリ

雪吊りて陣屋等伯ぶりの松

雪積んで陣屋米蔵ねずこ葺

お白州の格子窓より雪明り

責台と抱石四枚凍て白州

かさこそと陣屋の高張打てる雪

凍む木ボクにちよんと目鼻の木っ端佛

円空の二寸に足らぬ凍み佛

藕の実のあらむかざりを鶴漁る

えんぴつで海牛つつく冬渚

冬麗の石蓐浄土を踏みゆけり

どんど焚く中でも松の爆ぜる音

次なるは「帆掛」でござい梯子乗

梯子乗富士へ乗り出す膝八艘

臨濟宗 建長寺派 円応寺 閻魔詣
道服のだぶだぶ閻魔詣でけり

転読のこゑは肝より初閻魔

かいつぶり素潜り芸の荒削り

北鎌倉氷つついて歩きけり

滝なす蔓中に一つの烏瓜

山蔭に村の手作りスケート場

煮凝の頭の方を吾に呉るる

満目の霜に一步を踏み出せる

大寒の蛇口の水のすとすと

自生して太平洋に向く椿

睦月に逝き世の寸法に合はぬ人

馬頭尊春は名のみ野辺の風

くつくつと鴨も寒さを諾へり

出し抜けに「雪やいっぽんつけとくれ」

どぶろくの上澄み雪は夜に入りて

先づは斑むらやがて庭面を覆ふ雪

雪このまま積もれば音をあく庭の木々

雪降りりくつがへらんとする鯉に

雪大降り小降り何処まで読んだっけ

ひたすらに落ち来る雪ともつるゝ雪

本降りと教へられけりけさの雪

磯馴松雪がくつつき始めけり

雪掻きの真似事する子裏通り

氷割れ現る水の生々し

初雪のそれがこんなに降ろうとは
昼過ぎて雪は本腰入れにけり
降り甲斐のある雪巨いなる松に
南天は雪に負ける木払ひやる
向う三軒睦まじげなる雪霰
はらわた
腸が古びん昼の雪ちらちら
雪霰光を光追ふ如く
難題をもたらせること宵の雪
急がねばならぬ暮雪の降りやうや
雪だるま雪につつまれまたあした
夜に入りて雪はしぶとさ見せにけり
くらがりに変貌を遂ぐ夜の飛雪
職引いて雑炊好きな母のそば
寒鯉を封づ氷の曇りけり
悼みごと重ねて睦月如月と
昼は雑炊夜はシチューに風邪寄せず
鬼は外はつきり言おうはつきりと

山内の冴ゆる日に干す僧のもの
紅梅の蒼ぼこぼこ鉛筆描
常磐木の青勝る日の涅槃講
さんしゅゆの古木ぐらつく涅槃吹
パンジーを植ゑる陽気となりにけり
庭の土瘦せて葦のいぢけ咲き
お節句に間に合ふやうに桃の咲く
内裏雛目の付くところに骨董屋
雛壇に享保男雛のしゃちこぼる
雛飾る日より日差しのやはらぎて
独りごちつゝ置きゆける雛道具
玄関に飾られ小物雛ばかり
雛見つむ雛より細き目つきして
八十路の母はこべら提げて立話
さんしゅゆの炒り卵咲き朝の日に
桃の花噂話に終止して
郷土史家愉しむ桃の源平咲き

風に張る氷紫ならんとす
小競り合ひしながら春の雪落ち来
春立てる空に闕のあるごとし
東京湾いちめんに雪ぶちまけて
昼の雪ますます粗くなりけり
即吟派遅吟派梅を探らんと
大雪に竹たぢたちとなりけり
バラ枯れて玉簪を遺しけり
立春の半島へ発つ踊子号
梅ふふむ月も半ばのこゑきけば
金盞花挙げて畑土代赭いろ
金盞花砂の目潰し喰ひけり
梅見客熱海の見番うち過ぎて
お涅槃の日の青空を鳶ながす
建長寺ご坊雲集お涅槃会
涅槃会の杵音巡る御仏殿
涅槃会の腹の底より楞嚴神呪
りょうごんしんじゅう

納税期鴨は汽水に遊びをり
風少し吹いて真鴨のよろけ縞
若駒が跳ねて蕪村の南蘋画
蕪村展
銀屏に蕪村の打てる凍み米点
べいてん
春や春蕪村の武陵桃源圖
走り根にも瘤もつ櫻春近し
恋猫にうって変はれる日も近し
首筋を吹かれて恋の猫となる
あひびきのわが世とばかり恋の猫
既にして接骨木の芽の出臍程
白木蓮すつくと晴夜疑はず
一花だに咲きためらへる辛夷無し
花辛夷風納まって物足らず
青空に辛夷ととんび大揺れに
いい加減咲いて辛夷の花散らす
亀鳴くに間ある古池巡りけり
大空のもとの祭典犬ふぐり

犬ふぐり一寸離れて牛はこべ
雨闇に紛れ降るなり入彼岸
露を先づ湯搔いて春の水仕事
貴人のごとく箸付け蒸鯉
パンジーの好みの彩の固め植え
水くびれひろがり流れ芹の森
足許を先づは築きて田芹摘
芹摘む婆一つ大きく伸びをして
萍のあはひあはひの漆闇
やつとこさ地べたを出でて破れ傘
破れ傘生ふ裏山の道愛す
木五倍子咲く時分の山と分入りぬ
花木五倍子簪に似て「よーいやさ」
これも咲く裡かと見上ぐ花きぶし
二輪草暗緑浄土広がり
この谿の落葉に肥ゆる二輪草
このところ霞む記憶と山菜莢と

干菓子に型俳句にも型目借時
ひと雨を齎す蛙の手柄顔
岩登りかけてその儘日永亀
轉りの歌姫にしてラテン系
ほんたうの処濁して椿餅
鯉群れて撒餌とり合ふ仏生会
志ん生の呂律恐ろし玉子酒
銭湯の熱くて痒し桜どき
春宵の胸撫でおろすやうな灯よ
桜草植う家いやに殖えにけり
鳥帰る電気自動車走る世も
だっこしてまたおんぶして花の山
彼の若木よくぞここまで初桜
日永亀干割れ危ぶむその甲羅
野毛の桜昭和の戦見て来しと
花冷えのコンドル無垢の襟巻す
横目にて象は吹雪ける花を見ぬ

涅槃図に坐り直して魅入る人
大風のドンと家搏ち春一途
蠅生る家居ばかりになまる身に
本伏せて蟻のみさうな庭に出づ
夕冷えの白木蓮に翅音絶え
月浴びて夜叉のはくれん突つ立てる
夜気帯びてはくれん百羽発たんとす
月交え白木蓮の夜の宴
継ぎはぎのその日暮しや諸葛菜
面白うなりて社の万の芽
芹摘める二人話の届く距離
春の雷先づは太鼓の小手しらべ
蠅の子の飛距離まだまだ知れたもの
●四月―六月
蠅日に日にちからをつけぬその羽音
ごり押しの手亀の子岩に乗る
蛤に舌も納得島遊山

花照る中チンパンジーは何誇示す
水中の蝌蚪の紐揺り止まぬ風
花どきの鴨のうわまえはね雀
むまさうな蕪に似て円相圖
蕪の禅画禅味の風吹かす
日永なる仙崖の猫いや虎圖
達磨圖にべたと花冷え花押かな
天界へ跳んで白隠雪嶽描く
白隠の書画踏み破る花ごころ
黒凍みの南天棒の南天棒
外人墓地十字架の間を落花抜け
不景気をぼやいてみても紫荊
この先も斯うした花の日和あれ
山中に達者なりけり大桜
上枝より落花飛脚の発つごとし
あとは散るばかりの花にふふむ酒
むさき身を花の押照る中に入れ

花筵抱え挨拶交しをり
花の間鴨千鳥ヶ淵広がりて広がりて
濠柳芽吹く向うに新聞社
山巻金沢八景 野島山いて有象無象の雑木の芽
落花受く地べた凹凸ありにけり
接骨木のこちらに少し増しな花
オオヘビガイ出土貝塚飛花よぎり
退屈でペンペン草の撥こづく
似通った彩して芽吹くみな雑木
花屑の犇めき合へる轍あり
花の間を何処まで飛翔長き鳥
花屑の中のひとひら返す風
花畳なはり大観の朦朧体
先手取るごとく咲き出すこの桜
花吹雪次の一ト吹き待ちある眼
花吹雪そびらに駈け出したくなりぬ
花吹雪く度に両掌をひらく人

立ちつくしそのまま浴びぬ花吹雪
かんばせに受けて花吹き余る風
花房へすうつと鳥の首が伸び
花つきのよき木とあふぐ二人連れ
桜誉むこゑもいろいろ女衆
朝夕の殊に夕べの花の相
奢るとはめっそうもなき家桜
花眩しむ人を眩しみ通りたり
あかがねの亀とおもへば首動く
間近に來目許くりくり花の鳥
紫荊不景氣づらをする勿れ
あまたるう空暮れゆけり仏生会
花吹雪人の話の腰折りて
忌寿福寺に參ず虚子一門の靴の数
虚子の忌の杖を持ち換へ立話
隆として柏楨老樹虚子忌かな
仕出し物届きて虚子忌の旦那寺

花御堂ぐるぐる廻りに近所の子
掌を合はす誕生仏に喜捨の音
甘茶懸く女の肱のすつと伸び
花御堂守は檀家の古老にて
浴仏に妙なるものを降り注ぐ
杖を突く音のぱったり飛花あふぐ
諸葛菜忍性墓蒙古退かせし僧の墓
花は花楸は楸にて押し通す
大仏を割愛したる花疲れ
水仙光則寺を四柱に束ね花御堂
空青う青うなりゆく仏生会
海棠に負けぬ笑顔を撮りなされ
花御堂参りの男女なんによふと途切れ
判らぬはこの手の花よ花貝母
女共とやかく云へる花貝母
石畳飛花着地して石のいろ
吹雪くたびこれはこれはの山ざくら

夕雀花屑蹴って発ちにけり
君其処へ牡丹の脇へ吾撮らん
真昼間のひとけ人氣疎げな牡丹かな
桜餅芳香うれしき限りかな
ぼうたんを揉みに揉む風打合へり
辯へたと牡丹に疲れ見えにけり
花あほる風千変す紅牡丹
牡丹吹き通りすがりの巫女を吹き
三浦勲氏一周忌富士岳麓 本門寺
うらうらと雉子歩まんか汝の忌日
三浦夫妻同墳にねむれば
裾野駈く雉子に夫あり妻子あり
宴開けて花びらいろの貫主さま
漉油こしあぶら採りにそろそろ春の山
燕くる畑毛温泉湯はぬるめ
田蛙聞きうたたね心地畑毛の温泉
田蛙のかいかい雲から貌出す富士
はるじよおん富士も薄紅帯びて聳つ
午報告ぐ酸葉に雀の鉄砲に

春霞富士はうたたね決め込みり
田雲雀の揚りどうしに喉乾く
見そめたるごとくげんげの辺に跼む
指圧師の家の蘇枋の花盛り
乙鳥飛び海道筋の大社
三嶋大社
花は葉に東鑑にのる社
桜葉降らすや三嶋大明神
甲羅干す亀見て日永いや気長
八重桜大社を巫女の往き交へる
八重桜險重たくなりにつけり
東海道三嶋の宿しゆくのうなぎ食ぶ
鰻繁の黄のおしぼりの囀りさう
柿田川
湧水にミシマバイカモ波打てり
木々芽吹きトビケラも羽化忙しき
羽化一番乗りのとんぼと出合ひけり
湧水見てサナエトンボに出会う径
云うてみてトウカイタンポポ佳き名なり

柿田川根芹に直にあたる水
春光を芹に振り撒きゆける水
馥郁ともくれんの芽のかぶり物
たかな
筍たかなを例えて云へば男気歟
潮に先づ足を浸して浅蛸掘
取り外しきく蜥蜴の尾置いてゆく
母の日のおかあさんてばおかあさん
水面這ふ虫に田螺の大雁塔
武山 三浦富士
つつじに虻図体あづけ蜜吸へり
山道に毛虫の落ちて忙しき
飛んでくる虻真つ黒け二輪草
木洩れ日に群れを恃める宝鐸草
鎌倉
楠若葉むんむん御成小学校
覚えたてのくさばなにして草の王
魚佐次割烹
夏座敷茶のうまければおかはりす
源平池
デッサンの浮葉浮葉の間合ひかな
宮鳩の若葉曇りのでつぽう

岸田劉生展
劉生の習作春の坂の草

劉生の道の画ばかり夏近し

葉桜を猶猶蒼く風吹けり

無為の日々葉ざくらを風養へり

旧浜離宮庭園
大き蠅牡丹臭さを帯びて発つ

さしかかるぼうたんの名は陽明門

ぼうたんに疎んぜられて発つ蠅か

たんぼぼの絮の一つを壊しみる

鈴蘭に横より突き出すむさき顔

かたばみを捨てて電話に出でにけり

職退いて一年経つか桐の花

港区の街路樹ドッグウッドなり

卒業期の渾名キューピーてふ先生

蒨葎草妻奨めればそろと箸

栄螺の蓋裏返しみてひとり酒

栄螺の蓋卸によからむなどと酔ひ

壺焼やリストラの風吹ける世の

天皇賞走破の馬体湯気揚げて
港祭り 横濱国際仮装行列
祭見の立ちんぼ疲れ馬車道に
白服に浜の豆ツ子鼓笛隊
横濱にゾンタカタツタ祭くる
パレード率て皐月のハレーイダビイドソン
税関のブラス五月の空展け
職退いて
黄金週間でふ語嘗ての響きなし
新茶淹る湯加減のこと添え文に
藪北の新茶新茶と云ひ注げる
播粉木の音のづるづる若葉冷え
子供の日近し葉っぱのフレディ読む
まてば椎若葉もりもり小公園
愚図ついていつになつたら五月晴れ
御不浄と云ふ語遣れり著莪の花
毛虫つく頃の柁と見てとほる
連休の若葉曇りの初日かな
連休の中日の毛虫退治かな

若葉風若葉雨とが入り乱れ
燕来と先に云はれてしまひけり
ぼうたんを見限りて風荒吹ける
俳諧のよしみの酒をそら豆に
装観音崎ひも定九郎めくあめふらし
海牛のモウモウ歩きしたりけり
海牛をおいてげぼりに忘れ潮
蟻地獄石ころ一つ振舞はん
かがんぼ斯様に物に掴まり躰寄す
あぢさゐの彩の違ひを見てゆかん
花蘇鉄黒船の世は嘸やさぞ
真鶴の魚付林の総若葉
南風に奏づは弁天様にまします歟
佳き風を振舞はれけり夏座敷
吹かれゐる夏の櫂の鉄火肌
木より落つ毛虫地べたを一目散
すつとした顔になりたる心太

読み切るとひとり気負へば青風
家ぬちに風を通して葛ざくら
海を揺り山を揺り立て大南風
天が下菖蒲の剣葉折葉かな
杜若空には雲の覆ひ物
黒毛虫妻譏ること譏ること
岩に手を掛けて退ければきよとんと蟹
色と云ひ隣家の薔薇に遜色なし
叩かれて雨にくたんとなる浅沙
毛虫垂る糸の辺りを横払ひ
この池を目当てに現るゝ青大将
判じ物めくなり蝮のけふの道
神木を遊び場にして鴉の子
蝮の道筋書き見えぬコントに似
度忘れの頭叩いて丈山忌
黒揚羽一息入るゝ大樹の根
すべてこれ泰山木より落つ木の葉

ユスリ蚊のお祭り騒ぎ生まれり
紋もんしろう白蝶とおじゃましている引き売女
螢見に行かんと軽く腹拵え
螢出る迄の四方山話かな
ホタルの句書き取る手許如何にせん
一匹は上ずるやうに飛ぶ螢
ほうたるのモールス信号打つごとし
海はもう手ぐすね引いてごめの声
手放しに海が招くよ海紅豆
伸びをする雀の居りて梅雨晴間
稔下田稔 田中灯京 泉下にてほたる灯京はたる連れ立ちて
目次に目あそばせ梅雨の日の読書
金亀虫さうかさやうか灯を遣ろふ
ぶつかるは糠蚊のたぐひ払ひけり
遠雷は陰口に似て崎つ方
棒切れでかまえば蠟螂ご立腹
柁垣うどんこ病のなすがまゝ

蚊ばしらの柱を何處へ持つてゆく
つつかけで出て庭先の蟻を見ん
羅を着こなし上手水海月
ざくろ散る凶事相次ぐ世となりて
紙を切る音のそりそり梅雨一間
あぢさゐののつぺらばうに雨ざんざ
紙魚を詠むころ世過ぎの足しにせん
老鶯の間髪入れず玉のこゑ
御威光の具足をみする大百足
著莪叢の凄みを増せる不動脇
でで虫の角のほとりへ寝ばけ貌
禿めくうひうひしさも合歡の花
そよ風の何ほのめかす合歡の花
にんだうの花の自墮落雨の底
泰山木高みに咲いて月に逢ふ
亀虫の匂ひ持ち込む梅雨の家
あぢさゐが飛ぶ飛ぶ回メリーゴランド転木馬

なめくぢの請願届き雨三日

甲斐甲斐しく若葉日を撥ね馬刀葉椎
で虫の大きいなる伸び朝朗あさぼらけ

存分に泰山木の零切る

拍子木が鳴りてほうたる舞ひ始む横浜 自然観察の森

なまなまと葉を透き歩く草螢

大螢降下わくわくする子らへ

ほうたるのサマリヤ人といふところ

竹林螢の宿はこの奥に

ほうたるの今日の興行終りけり

螢臭き掌をおし広げ見せにけり

汗をかき日々を勇んでああ昭和懐旧 二句

走馬燈僕の時代が遠くなる

梅雨入の湯舟にでんでんむしの唄

けふからの夏を向ふに廻したり

雀蛤と化せる次第をつゆ知らず

ほつりんと剃り残されし梅雨の髯

さくらんぼ甲乙丙の丙の味

振花の翩翩梅雨の中休み

四人で聞いて確かに夏の虫よつたり

まだ鳴かぬ蟬のどうしていることやら

南仏料理卓に一輪挿しガーベラ

釜茹での蝦蛄に夕映始まれり

●七月―九月

夕立に赤蟻川止め喰らひけり

「豆腐ノ辯」読み漁りゐて昼寝かな風俗文選

団扇手にとりてぬるめの風起こす

夕焼けに顔を燃やして発句修羅

ピーマンのやうにむくれて距離置く妻

冷し酒世迷い言など申すなよ

手も脚も腹も化粧ふて女郎蜘蛛

栄螺の腸良薬にして弾む酒わた

濃く淡く蟻の影曳く百度石

端居して孫の手をもう借りる齡

端居しておもひ巡らす眼となれり

蚊帳潜り出でしとこで覚む昼寝

相方の寝相や団扇持ちしまゝ

祭の喧嘩男は似たりよつたりで

箱根路の何だ坂こんな坂竹煮草

岩たばこ宿創業は明治なり

灯を取りに箱根の山の兜虫

ごろ寐の夏又来て厄介かけまする

行き過ぎの一つや二つ蠅打てる

死ぬ程の暑さ人能く生かしけり

布袋草程の明るき世を欲れり

松葉牡丹咲かす家などたとんと失せ

荒雫梅雨ならではの泰山木

椎の花やたら妄想掻き立てに

嵌め物の類ひあれこれ夏座敷

夏座敷楓の風を取り込みて

冷索麺見た目も味の内也と

鰻喰うて間延びした顔店を出づ

皮剥の小さき鱈振る鎖夏法

莫迦戦争諸が主食の座につきて

杏の核真つ赤に蟻の総掛かり

初老とは木陰に涼むやうなもの

日を追うて旺んなる夏如何にせん

とぼけたる貌のうまづらはぎの句

草河豚のどうにかこうにか喰へる奴

クーラーのああ埃臭さ試運転

たいがひにせよとまくなぎ打ち払ふ

茄子漬時が薬と養生す

板塀に蠅虎の岡っ引

父の日の昼寝セットのプレゼント

洗濯物家に暑さを取り込めり

ヤップより届き主治医の夏見舞

巴里祭定番鳩の手品かな

病院は緑陰ナースは白き風

快眠を心がけ夏へこたれず
せつかちと思はるもよし団扇風
温床を蹴って泥鰯の浮き上がる
浮かぬ顔姉の金魚と見比べて
虎魚産み落とせし親もこんな貌
大金のごと磯鮑押しただく
沢蟹のカタンと転けて宇津谷道
盗み歩きする蟹数多るて面白
かなぶんの支離滅裂となり当る
ごきぶりを見とがめし妻さあ大変
ごきぶりを前にわくわくする一打
徒に大きなエンジェルランプペト
すずめ蜂患部のごとき巢を作り
嘶家の扇のごとく器用なり
皮剥の革財布などあらまほし
冬瓜の老人食を出されけり
ただ甘き玉蜀黍を蔑めり

萱草を燭仏ヶ浦と見立てて仏具岩
佐井人の海胆突棒の甲斐甲斐し
海照りて鬼の手作り岩を灼く
老鷲も下北訛恐山
牛頭馬頭の徘徊暑し恐山
霊場巡り水母のやうな出で立ちに
羅の仏下ろしに畏まる
恐山日傘抹香臭くなり
石灼けて粉塵に帰す恐山
恐山黄泉の下見にあらねども
恐山盛夏団体割引あり
獅子独活の藪から棒に恐山
恐山巡りの白靴憂々と
林代の浜のやませに身をすくめ
襲ひ来るやませに立往生の松
ぼんやりと夏霧のこる山間部
赤松の美林にやませ忍び足

素裸を朝からたのしむ誕生日
一枚の巨きな青田みちのくは
福島東北道の桃の夕焼けどき長き
いっぽんの合歓咲く彼方古戦場
古戦場こころ一帯青すすき
烏賊釣りの漁火鬼の目ん玉大
海峡のこちらは内地宵待草
草刈って海峡に向く一祠
青森檜葉半島の背をなしにけり
鉞半島突端の大待宵草
烏賊と海胆さざゑちりばむ半島絵図
お国自慢などしてバスは青嶺越え
バスの旅盛夏の下北くんだりまで
夏の露昆布干し場の留石に
海峡の舟虫にして黒光り
下北の一夜干し烏賊星の下
硝子の泛子ごろり夏場の大間崎

バスの旅俱にし岩手県の蠅
栗の咲くここまで三陸大津波
この村の津波避難路栗の花
旅をして陸中海岸海鞘どころ
釣竿を青嶺に向けて川漁師
川ぐいと曲る青嶺を引き寄せて
釣人の居る瀬居らぬ瀬青山中
ようこそと宿の燕がとんぼ切る
峡燕群れていちにち暮れにけり
悠々と暮れて青嶺のいま黒嶺
燕の糞掃きて湯宿の番頭さん
旅の衆朝が来たよと峡燕
ドライブイン四方の青嶺に見下ろされ
旅疲れ夏川に眼を落としゐて
溪流に土用鰻を活かしをり
やませの魔手蠟燭岩に伸びにけり
遊覧船やませの底を這ひ廻り

海中に落ちて広がる海猫の糞

浄土ヶ浜蟹の称ふるお念仏

アイスクリームこんもり小岩井農場製

しつちやかめつちやか団体客のわんこ蕎麦

やつと出て岩手時間のどぜう鍋

芋麻ちよま知らず東海道の一筋も

斑猫は肉食の彩泛べけり

蕪村また大器晩成種ふくべ

武器馬具と昼寝覚めたる人の言

あそこからかう来るかぜと端居人

芋殻焚きなど大切にしませうや

夜をうとうと暑さに馴れるまでのこと

のうぜんの焚き付けられてゐるごとし

この大暑逃れんための一ねむり

大昼寝して沙悟浄の国にかな

すててこのすつぽんぽんは佳かりけり

蟻殺めばそこに駆け寄る蟻一つ

スタイルは細魚に優る水着かな

青簾吊るや寝てよし覚めてよし

蟻たちの固持して原始共産制

気圧されてぐうの音も出ぬ大暑かな

暑さめと己に言葉ぶつけけり

仕きたりの花鳥の絵柄岐阜提灯

家にごろごろ暑さの持つて行き場なし

ふて寝して暑さの通り過ぐを待つ

降りて来て二階の暑さ嘆きけり

鼻の利く蟻ゐて干菓子探り当つ

蜂飛来即眼圧といふ言葉

すててこで出てゆき速達受け取りぬ

男つぶり上げて戻れり片陰道

旺んなり朝の峯雲も食欲も

朝の蝉うんざりする日が始まりぬ

肌合ひのよきを好みてすててこ党

階段の壁が遊び場守宮の子

やあ守宮お主ところで何代目

毛髪の間にはほろつと汗生まれ

団扇置き昼餉に呼ばれゆきにけり

シャワー浴び吾が前よぎるアフロディテ

泡沫のなほ立ち昇る昼寝覚

しげしげと鏡の眉の茂りかな

投函に出でて蹤き来る夏の月

緑陰に莫迦げて大き忠魂碑

掛けたる肌着の釦貝の涼

心棒に狂ひを生ず真炎天

何處へでも首を突つ込む蟻の性

向日葵は海を見据えぬ巨匠の瞳

噴水の整ひ過ぎてよそよそし

綿飴にぶつかりさうになる夜宮

シンコペーション真夏夜刻むジャズののり

昼餉のあとごろり鰻にでもなるか

にんげんに祭り雀に真炎天

大擗戦ぐ神社に涼みに来

自墮落と譏られやうがまた昼寝

目をぎゅつとつむつて開いて炎天へ

夏帽子妻の云う被れというに首を振る

通院の炎天の道ゆく他なし

先生に日焼顔見す診察日

診察のそばかす裸裏返す

診察は束の間炎天また戻る

暑にめげぬための麦湯を沸かしおく

腸の水の山彦昼寝覚

ぱたと落つところを見れば豆かなぶん

冷房を入れず自然の風待ち派

風鈴の少し慌てゝ鳴りにけり

何しても中途半端に軒風鈴

蝉ごゑのあの啼き方は手捕られし

ごきぶりをどうしてくれやう丑満刻

花火尺玉横須賀花火大会東京湾を凹まする

シンシナティキッド連発花火かな
花火の煙ゆらゆらかつおのゑぼしめく
揚花火連打ドンブスドンブスと

ピザ店の大扇風機頭上より

炎ゆる日をピッツアヨーラの海鮮ピザ

ビーチバレーの日焼けピチピチガールかな

雀の他みんな暑さにやられけり

この暑さどうかしているペンキ塗り

ペンキ塗る青空がまだ灼けぬうち

南瓜煮る妻に俳句の出来栄え問ふ

まだ鳴かずどうしたことか油蟬

煮えきらぬ風鈴の音とつぶやけり

頭振りけふの暑さを諾へる

莫迦げたる暑さに馴るる他なかり

ピカザザと天地俄にさうざうし

雷果てて現にかへる顔と顔

飲み仲間直腸断てりと夏見舞

小山梧雨兄

いっぽんの手拭首に花野行

グライダー大格納庫霧閉ざす

吾亦紅霧の冥さを帯びつゝあり

どうどうといなし花野を巡る馬

一条の霧を抜ける日の光

覗き込む下山路霧を背にしたり

霧を来て鮫肌いろの両腕

石ころ径霧に眼の利く蜻蛉来て

吾亦紅独りごころを通す黝

吊鐘人参羽虫においでおいでせり

ししうどの花を霧来て閉ざすところ

老鷲のさうともさうとも珠のころ

思い立つままに旅して来て夏野

霧らふ山下り来てホットミルクかな

ごきぶりのどうでもよきが髭を振る

冷麦茶ありて重宝しておりぬ

なまる身をしゃんと正せる冷麦茶

そこらぢゆうとり散らかして蟬音の中
ここに来て炎暑一掃通り雨

玉突きの玉めく台風天気凶に

朝刊をさてと開きて丸裸

芙蓉萎え申しそびれしやうな形

わめき散らす蟬あり我に鼓膜あり

朝蟬の誦経の尻切れとんぼかな

百蟬の息ひそめけり朝の杜

寝物語などして暑さ一頓挫

なほ猛威ふるふ暑さにはだけ寝る

目が覚めて此処如何な國蟬しぐれ

啼き納め方にも作法法師蟬

煙る花畳み込みけり烏瓜

とうぐわんを食みし其の夜の大寝言

青ぶだう日毎に凌ぎやすくなる

山巔に立ち老鷲の気分なり

先生が引率ニッコウキスゲの径

霧ヶ峰・車山高原

冷麦茶葉の如く頂ける

ありふれてゐる定年と白粉花

かまつかの紅蓮を見栄とおもふ日も

ごによごによと云ひて夜蟬の紋切型

晩蟬のこゑ押つ被せ押つ被せ

ほれほれと土用雀を翔たせゆく

シヤワー浴ぶといふより滴らす

芋殻焚く新聞紙は吾が持ち

落蟬のころりと参る姿かな

思ふともけふを限りの蟬ごゑと

さるすべり咲きつゝ散れる空まさを

土壇場の蟬の声音と思ひけり

浮袋並べ干しある月の庭

墓地越へて二夕夜続きの踊唄

劍客シラノさながら夜蟬の呟くは

通り雨長らふ蟬に落蟬に

よい匂ひして来ぬ土用の焼にぎり

とんとんと砂糖スティックアイスティー
軽装がベスト炎天あるく旅
乗り合はす夏の嘗ての通勤車
ぎしぎし水戸 酒沼 那珂湊の枯れざま海は荒れ模様
盆波の生めるあぶくのたゆたへる
民宿の裏手のへくそかづらかな
いちめんの稲穂明りに目の馴るる
退院のその後を聞けり芙蓉の辺
象亀のやうなテントもキャンプ場
逆光の鯔の間髪入れず跳ぶ
三人が三人扇子取り出せり
扇子もつひとは扇子を遣り木蔭
蜺は朝鰻は午後と漁仕分け
時化するぞと牢名主めく舟虫が
藪蚊打つ自とこゑも添ひにけり
天牛の背を一息に押え込む
秋草といひて一草引いて来ぬ

落蟬のごとく仰向きぐうたら寝
被るのがめんだうなだけ夏帽子
蝉わつと鳴き出す前にしておくこと
蛸や椅子の片脚浮いてをり
散水の葉蘭打つにやぼたぼたと
梨貰ひ大きい方をののさんへ
梨を剥く皮のぶらぶら定年後
作務衣の紐三つ目結うて炎天へ
畏くも玉音放送花かぼちや
肉声に肉声ぶつけ油蟬
炎天にもつてゆかれし大飛球
ピッチング入道雲の高さより
割れ鐘の蟬の独壇場に入る
颱風は颱風として葉嘸む
向日葵の王道青すすきの覇道
あらあらしく落ちて来るなり葛の雨
颱風の出方を待てる外房線

はたた神ダイダラ坊を起すなよ
梟好きピカソの遊びごころの壺
訓示垂る大向日葵と思ひけり
あさがおに夏も了りの尿の音
秋風のそろと笠間の石狐
目の馴れてふうせんかづらの在りどころ
店先に水打つ鰈の洋服屋
さうかさうかお盆休か散髪屋
迎火焚く横を挨拶して通る
新宿の地価折り込みの氷水
日盛りの老人割引く映画
風の来る方を開けおき芋殻焚
青空がまるごと灼けて玉砕日
涼まんと帆船模型置く茶房
炎天をマリオネットのごと歩し来
ハンカチをベルトに挟む齢でなし
去年は一寸降られし芋殻焚

風来坊颱風こっちへ向つて来
颱風やうち倒さるゝ樹が凶器
颱風の腕力のほど身にしてみて
生木剥ぐ風の鈍刀颱風裡
颱風来て玄関にわかに物置場
颱風の合間蛮勇ふるふ蟬
颱風のあとのなんだいこのあつさ
少しづゝガタのくる家颱風裡
颱風一過パンパカパンと晴れわたり
蠅叩遺品のごとく扱へる
胡瓜揉みぼりぼりやりて昼餉了ふ
梨といふ天然ものの水の味
ひょうたんから俳諧を出す粹なひと
褒貶はふうせんかづらのあなたなる
こゑも褪せ茶の出がらしのやうな蟬
机に稿に羽蟻の落下傘部隊
灯を取りにきたぞと網戸の外の蟬

原稿に降りし羽蟻に迫る指
押つ^へ庄せとわが連れ合いは蟻嫌ひ
灰皿に灰横たはる終戦日
夜半の虫煙草ふかしに起きて来ぬ
夏瘦て花玉石鱗また逃す
蚊に喰はる妻が夜中にむずと起き
蟬の法華經^{二十一}句
不受不施と日蓮坊を慕ふ蟬
忍辱の鑑^{良医の喩}に蟬の啼き通す
顛倒せる蟬の太つちよ一凡夫
方便の一つに蟬の小便も
ご法話に蟬随喜して靈鷲山
啼き了へし蟬のころりと仏国土
けふも又蟬の頭陀行樗の木に
法師品称えて蟬の生まる也
世尊に掌合はせるごとく芙蓉閉ず
大施主のこゑを代弁油蟬
森深く蟬八百の眼瞳きて

往生の手形に写経法師蟬
息つけり蓮華数顆のかほる中
三乗
選ぶなら樗の木食頭陀行派
羽化の蟬地涌の菩薩の化身にて
身は空に放ちて蟬の糞掃衣
定年は如何にと蟬の頭陀行者
法師蟬多宝如来のこゑ以て
忍辱の心の裡を法師蟬
成仏を明日に蟬の富楼那の弁
蟬音断ち靱彦の釈迦説法図
銀砂子撒ける蓮池のいと涼し
芙蓉咲き生・老・病・死持ち回り
蟬は木に登る六根清浄と
喚く蟬二百億劫経て成佛
虚空会の説法蟬のこゑ借りて
念力をキリキリ蟬の大神通
蝸に三十四身変化佛

竜口寺蟬音の念彼観音力
昼寢覚六牙の白象降り佇ちて
蟬は今普賢の行説く大団円
ロシア船籍^{二万噸}
ラバウルへ南下勇魚のシャリアピン
甲板にて星座教室天の川
船の旅プールではしゃぎ夜はダンス
ガヴァジューストラック島の片陰選り
椰子の間百葉箱のやうな家
タロ芋のとてつものなきを掘る島人
妻の云へる
腸の為よろしき牛蒡召し上がれ
蓑虫の糞はおほかた簡単着
踊巧者踊見巧者風の盆
山芋の播粉木に鉢踊り出す
けだるさが目に見えて退き初嵐
珊瑚樹の実や百日をうち過ぎて
灸花今はかうして日を送る
葉鶏頭勢いづいて来たりけり

処暑処暑と今朝方の蟬さう鳴くも
首都圏ニュース稲の作柄稍良と
夕飯の支度そろそろ蟬音減る
どかどんと犬へこまする大花火
フィナーレのいけいけどんどん花火かな
紫薇花下に極楽おもへとや
蟬ごゑのヒリつく中を投函に
単純で明快が佳し花芙蓉
こおろぎが畳のうへに上がり込む
晩蟬の明けても暮れてもこの一手
昏倒の蟬を箒に懸けにけり
珊瑚樹の赤貧洗ふがごとき実よ
健気にも蟬が樗に取り付く図
鬼やんま飛行高度を上げにけり
達者なる足腰秋のあめんぼう
それならと紅葉の頃の宿をとり
かまつかのてんでこ舞の風の日よ

蟬の瑠璃ちらつと脳裏掠めけり
新藪を水に濯げば紅はしる
棧橋の先に鯰跳ぶ弁天屋
鳴群るゝは寄合に似て池の央
鯨釣の装備の一つ烏龍茶
懐古
まんじゅさげ此処を黄泉路と違へ咲く
玄関にて鳴くこほろぎの居候
金澤山弥勒院跡まんじゅさげ
きんざんざん
大犬蓼この雨何時か上がるだろう
お隣の芙蓉が咲いてホツとする
虫の鳴く左沢線トコトンと
あてふたわ
羽前山辺羽前金沢稻刈りどき
かねざわ
途方もなき稲穂の寄する小学校
見渡して芋煮の鍋の据えどころ
羽前長崎
芋煮鍋そら嘖く芋をさあさらえ
鍋蓋におたまの鎮座芋煮会
芋煮会差し入れありぬ香の物

芋煮会蠅も仲間に入りたがる
ぎしぎしの錆びを塩辛蜻蛉貰ひ受け
陸羽西線
真ん中をへことやられて風倒田
稔田に交りて稗のまんめんじん
稲雀飛来選り取りみどりの田
蕎麦の花はや戻りてよそよそし
鈍行の中まで稲田の照り返し
古口
刈草を抱へて投ず最上川
最上川舟下り
八目鰻捕る川の向かうの頑固爺
やっめ
秋風にだば発ちますと舟下り
露どきの魚の眠りに棹さして
船頭の地下足袋さやに舟下り
最上川あきつの止まる破れ竹瓮
もくもくと藻屑蟹漁濁り川
最上峡秋天を抜く土湯杉
最上川舳へどんと秋の風
みよし
コスモスの風にのんのん舟着場

秋雷の一つ転がる山向う
稲つるみ全幅を見す最上川
草薙温泉
旅先の藻屑蟹めく目覚めとも
秋霖をついて朝より八目鰻漁
やつめ
昼の虫電車はなんぼ待てば来る
本合海
かやつり草翁も泊てし川港
最上川いつも揺れゐるすすきの天
本合海渡しの向う稲の海
秋の風最上川面を吹き広げ
秋燕濁りやまざる最上川
花すすき雲を飛ばして最上川
秋蛇に遭ひし女の気色ばむ
秋の日にぬくむ渡しのごろた石
花すすき河の流れのやうにかな
子規庵へ
糸瓜忌の鶯谷で落ち合ひぬ
風冷えて蕎麦うまさ日の上根岸
秋晴れの日の子規庵のガラガラ戸

子規庵のつましき間取り昼の虫
子規庵の屋根這ふへちま蔓八方
子規庵の素通しガラス戸冷まじや
子規庵の戸袋の反り虬虎
ひやつく日笠森おせんに逢ひそな辻
子規庵の見取り図秋も深まるに
子規居士の体温計とやいと露けし
居士臥せぬし居間より露けきものはなし
子規庵の糸瓜こづきて立去らむ
瀬祭忌天気どどん悪くなる
糸瓜忌の傘立に傘十四五本
寛永寺
秋風が当りて上野戦争碑
不忍池
蓮葉をめぐりにかかる池の風
煽られて蓮の棒茎ごつつんこ
蓮葉の大き葉を揺り大き風
草津 西ノ河原
霧籠めの朝は一際硫黄の香
いち早く湯川水草黄葉せり

小鳥来る髯のベルツのその頭上
胸を張るスクリバ石像黄葉冷え
しびれてはうめく草津の夜長の湯
やや寒の朝湯文人気分かな
露天湯に靈芝れいしのごとき老いの尻
川床に湯花川原にすすき咲く
湯花咲く湯川のうへの秋の空
青どんぐり湯川高鳴り流れけり
湯畑草津湯畑の秋やとてつもなき湯量
霧まみれ婆ちゃん湯の花ひさぎをり
明治十一年ベルツ 昭和十年ベルツ花 草津訪問
碑にその名露けきベルツ花
うそ寒の湯揉み赤帯赤湯文字
連れ立ちて湯畑巡る夜長人
霧らふ宿ぎうと舁めく草津町
霜草津町 共同湯巡りの日の朝湯うめてもうめてもや
朝露に触るゝ足許湯中り呆け

箒・塵取・秋寂ぶ板の間共同湯
節黒の杉板囲ひ夜長の湯
もうもうと湯気立て蒸籠の朝ばたらき
蛾の骸窓の辺りに共同湯
夕霧にチヨイナチヨイナの時報かな
地藏湯の道順聞いて夜長人
長き夜の熱きが薬地藏の湯
草津夜寒こんな湯加減殺生な
草津朝寒我慢比べの湯となりぬ
浴衣着て妻も飛び入り湯揉みシヨウ
草津うそ寒とんだ熱さの掛湯浴ぶ
やせ我慢して入る夜寒のぐらぐら湯
湯花咲く夜長の宿の湯引き樋
まんじゅうの湯気の淡さに町霧らふ
檮落葉光泉寺軽く肩打つ化石句碑
湯けむりにふすぼりもせぬ月の貌 一茶
霧籠めに一茶の句碑のふすぼり貌

文字面の「草津道の記」露けしや
句碑の横風にばらけし芒の穂
霧殺生河原に呼びかく殺生河原の拡声器
霧に擦るマツチのぼうと硫黄の香
一本の樺見ゆ他は一切霧
秋風の吹き渡るなり酸性湖
火山弾上にぬくもる秋の蠅
監視員詰所の前の濃りんどう
恨めしや湯釜は霧に覆はれて
糸瓜忌の癩癩玉が破裂せり
秋風に安住敦の渋い顔
ちまちまとよく抓みしよぶだうの皮
進みゐるくわりんの尻の虫腐れ
芙蓉咲くこともふとしたことのうち
さふらんや一ト日は些事の積み重ね
ブラウンシチュウ灯と火恋しき頃となり
それとなく秋は来にけりポタアジュに

コスモスの空へ風船離せし子
あきらめがつきコスモスの吹かれざま
運動会近しよプラス風に乗る
いとこどりして立つ句評ふかし諸
栗硬きは茹で足らざるや出来悪しや
またも来て猫の寝そべる干し布団
蠅螂の一剑客に出会ひたる
蠅螂の構えはト伝無手勝流
蠅螂の一棒切れと渡り合ふ
蠅螂と戦争一つ日の下に
蠅螂も戦もキツと身構へて
先づ出方窺ふ戦も蠅螂も
秋風も戦もひよいと起こるもの
ゑのころはうぶで真青で澄みきるそら
餌付きの金魚貰へり義弟より
水も入れ替へて金魚の新居の秋
鳴がやがや云うて蓮葉枯らすなり

おのが香に木犀我を忘れたり
降り出して木犀我に返りけり
木犀の家木犀の家隣

くわりんの実蟻の門渡りなかりけり
バツタ跳んで横浜未来都市のうへ

和服の胸張りていそいそ菊日和
箱根越え胸毛の馬子図広重忌

留女の藤沢宿図広重忌

鶏頭の駈けだしさうな若冲忌
買物の帰りに見て来し月のこと

あり余るもの木犀の香と時間
柿冷ゆるそんな季節となつてをり
はたはたの柿に手を焼く啜っちゃえ

柿ほったほたなれば包丁役立たず
どうしてもそこへ眼のゆく柿の蒂

颱風のいい加減さに振り回され
晩年の既に始まる揚げ零余子

かまつかや報道一ト日テロ一色

テロ続報二転三転鳴日和
弔旗垂れ雁来月端紐育

天高く法螺貝吹けりテロ退治
秋風にどんどんすすむテロと呆け

日蓮忌昼から混める池上線
両の掌を湯呑みにぬくめ御命講

お会式の赫つと灯の入る妙見堂
風吹けば熾るがごとくお万灯

風吹けば風のいる帯ぶお万灯
万灯の傘浮き上がり浮き上がり

お手綱のこよなき真白御命講
本門寺坂下に詰めお万灯

さきがけの万灯一つ橋渡り
万灯引く衆の白足袋白法被

団扇太鼓紺の腹掛けして搏てる
万灯の提灯持はご住職

軽雷の飛び入りもあり雨名月
雨止めば確かめに出て今日の月
漂鳥といふのだそうだその椋鳥も
稻雀何處か窃盗団に似て

●十月—十二月

小鳥来る樟は見通しよき樹にて
きな臭きものには倚らず木の葉髪
背高鳴あわか赤い鼻緒のじよじよ履いて

十夜講お婆の白河夜船かな
臍毛濃き運動会のお父さん

虫食いくわりんたうたう落ちてしまひけり
蠅螂の暢気な父さん歩きかな

日向好き枯蠅螂の妙好人
木瓜の実の道楽息子よく肥えて

火の見の下槍鶏頭の小火ありぬ
鱒刺の一撃をもてテロありぬ

かまつかの赫つとイスラム原理主義

万灯引く法被に山号寺号かな

池上の万灯の湧く星のそら
万灯の花懐といふところ

御命講芙蓉に洩れて医院の灯
万灯に子を高々とてんぐるま

うち過ぎぬ団扇太鼓の二波三波
夜風出づ万灯いろの綿飴に

家包の葛餅膝に池上線
死してなほ墓に大小猛り鴟

人騒の墓域に及ぶ御命講
槇の実のやたら打つ墓高麗屋

雷蔵の墓を袈裟切り鴟のこゑ
小鳥来て中村八大ねむる墓

墓のうへ鴟が唄ふぞ田谷力三
墓所に降る木の実を聴いて露伴・文

木を離る木の葉くらりと露伴墓
櫻もみぢ一片文の関伽水に

鎌倉 大巧寺
二階にて謡ひの稽古石路日和

陶器めく郁子に紫一寸入る

杜鵑草手にし座興に啼かせみぬ

お会式の触れ書き杉の板塀に
本覚寺

梅檀の実のまだ青き寺に寄る

山門下自然薯掘の自転車か
妙本寺

萩優るぼたもち寺の植込は
常栄寺

ぼたもち寺寺門の萩に乱れなし

蜘蛛の糸端を宝篋印塔に
安養院

庭石に二つ茗荷の忘れ物

十夜寺そこ聞きゆく日暮道
光明寺 十夜

鎌倉の波おとなしき十夜かな

十夜法要堂を破らんばかりの鉦

堂抜いて心耳を洗ふ十夜鉦

十夜講凡夫に交り尼ごぜも

十夜講畳を擦りて坐につける

十夜僧肅と引声阿弥陀経

十夜法要囃す鉦方念仏方
ねぶつ

堂上に車椅子上げ十夜講

婆の眼をこすりこすりつ十夜講

鶉の木の太くて立派十夜寺

潮の香す十夜参りの戻りみち

締めりなき一日鴟も聴かず暮れ

定年は鰯の退屈地でゆく秋

尾のごときものが一閃鴟なるや

片づけてはならぬ机の物に秋日

屑籠は大き程よし露の家

郁子は実にこの家の主見たこと無し

この家には犬が居る笹枇杷の花

石榴より硬き頭のテロリスト

そぞろ寒誘へるものに秒針音

人臭きくわりんの匂ひ掌に移り

これ以上裂けやうもなき石榴描く

初鴟のこゑ近隣を巡りをり

鷹化して鳩となるとは莫迦げたる

いちじくは子供に還り食うぶもの

鴟切なし雨止む気配さらさら無く

さざんかのはや花零す粗忽者

濡るる身を固く引締め雨の鴟

徒食の身ぶらぶら石榴にも似たり

見る者をつつみ込むいる芙蓉咲く

朝な朝な鴟に親しみ机拭く

虫の夜といふには虫を知らずに来し

鴟にして殉ずるころ大いにあり

秋風をこんな呼吸で詠めと逝く
悼 飯島晴子

先手とる気概を鴟に呼び醒まされ

片岡球子ドカンと冠雪富士を置く
画業八十年 片岡球子展

酷評に怯まぬ錦秋球子富士

自然薯の偏屈を押し通す形
三浦晴子さんより自然薯を賜る

一家言あるべし山芋掘りとして

自然薯のそれと知らるる長包み

念の入る自然薯の荷を解くとせん

自然薯とおもふ荷ほどき面白く

自然薯の荷を解くここをかうやって

自然薯の包み開けば土の香す

髯づらの自然薯蝦夷の顔したり
えみし

自然生背筋一本通りたる
じねんしんせう

根性の据はり方見ゆ山の芋

何で臍曲げてしもうた山の芋

自然薯のかうなるまでの紆余曲折

自然薯の汝ならではのねぢれやう

自然薯の異形は美味の証にて

自然薯の髯蓄ふは富貴の出

ひょうひょうと風のごと来て自然薯掘る

石路日和ところでこれから何處へ行こ

日々鈍る足を鍛えにどんぐり山

むかご落つ人目届かぬ所かな

この方が面白さうな蓼咲く路

花野行きよなら三角また来て四角
茶のベスト着込み鴨見と洒落込まむ
にんにくと煙草の話文化の日

鴨池を発たんとやっさもっさして

鴨よりもハキハキともの言えよ君
努力論 鴨日和ルビを頼りに露伴読む

濁り酒入っていますか酒屋さん

自転車が踏みつけゆきぬ楓落葉

爛熟し当節流行らぬこと云ふな

検査結果遊走腎とは菊の花

アフガンにテロ前庭にサルビア咲く

けん玉の腰を屈めて冬に入る

うまの合ふ夫婦となりてとろろ飯

すぐ人のせいにする癡猛り鴨

啜るたび爺むさくなるとろろ飯

新牛蒡どちの雑談牛蒡語で

横たはる様は涅槃の自然生

逗子市役所
全館を覆ふに足らぬ葛紅葉

朝寒やまたあべこべに肌着着て

ほくと零余子噛めば中年過ぎてをり

義理欠くまま十一月のこゑをきく

けふひどく冷え込み鴨の畳み啼き

岩伝ひしやらんしやらんと女滝落つ

奔放は滝の放てる音にこそ

捌けたる人のごとくに芒枯れ

秋草の長きは長く摘み揃え

秋草を摘める長短取り混ぜて

これ煮れば冬が近づく焼豆腐

自然薯播る妻は大佛坐りして

この彩に安んじ梅の紅葉せり

つまらなき色して梅のみぢ葉は

柿の木のへうへうと彗つ枯れて彗つ

師走てふ物入り月が目の前に

夕鴨のこゑの一撃さざんかに

三十棒鴨も喰らへり坐禅堂

宸筆ものかは紙魚の確信犯

禅林の冬雲動く潦

打ちつけてめりこむ魚板紅葉寺

坐禅堂上を肅々冬の雲

方丈を大きく使ひお風入れ

お風入れ丸山応挙は虎が得手

風入れの絵図の地獄の責め道具

眼鏡拭き浄めて拝観文化の日

山麓駅造花紅葉も酣に

ぼけ封じ三尊に山もみづるよ

やあ紅葉八番札所のぼっくりさん

ぼけ封じ肌着購ふ紅葉寺

おびんづるさまに前山紅葉して

木の実降るぼっくりさんの寺日向

首筋の辺りがすうと冬立つ日

人の言気にしてゐては木の葉髪

升^{のぼ}さんは別格柿の味も亦
ぐんと冷え今日着るものに大わらは
色鳥来これだけ森のもみづれば
三世代みんなめかして七五三
文鎮の鼻の貌夜も更けた
心電図厚着を脱いで楽にして
患者皆着膨れ病院狭くする
稍寒の投函の音聞いて去る
冬浅き畳にひろぐ肌着類
町内の紅葉処を一巡り
落葉搔石畳より手をつけむ
縣廳前馳すバス銀杏黄葉いろ
公務員銀杏落葉を踏みしめゆく
貴人^{あて}のごとく桂の黄葉みる
遣り残すことがいつしか溜りて冬
極月の趣常の日差しさえ
薄塩に定年過ぎのピーナッツ

冬来ると櫂の聰明櫂^{ドシ}の鈍
日向ぼこするにも何處か気の引けて
無駄骨をおる事嫌ひ木の葉髪
お手本と云へれば云へる牡蠣の意地
大根台地葉^{三浦岬 城ヶ島}つばが眩し眩しとも
流木に冬麗の砂零しみぬ
五百椿林寒潮音を断ち
島の鳶こゑ逆落とし篠枯らす
水仙の避けやうもなき潮飛沫
磯菊の汐傷みして黄の名残
煤掃了ゆ不^レ服と云へば本の位置
暈けて映る写真眺めて冬籠
やれやれと云うてまた年送りけり
小春日に大滝秀治の話術^レ
忘年会妻にはありて吾になし
蓑虫の養温めぬし日の陰る
柿の蒂町内の空つながり

短日のバスのおでこが見えて来ぬ
麵麩抱えゆく本牧の日短か
改めて妻の冷え性花八つ手
桜落葉して界限を錆びつかす
こぢんまりした家ばかり冬珊瑚
庭先に劍襖の葉水仙
妻もまた気がついてをり冬ざくら
一団の鴨を脇見の鴨一団
水鳥の幽紋あたり暮れかかる
夜の落葉ヘッドライトをよぎり消ゆ
錆止めをあかあか塗りて年用意
皆楓落葉紛るゝものの無し
同型の楓紅葉の全しや
落葉掃くことめんだうな目つきして
冬兆すスパゲッティに鷹の爪
十二月八日の薄きおみおつけ
閑日に馴れ親しみて冬珊瑚

お歳暮に庄助さんの國の酒
年の瀬は露天湯なんぞ願はくば
夜の鴨に騒^{ぞめ}きのありぬ納りぬ
炊事了へ一息つけり蜜柑のまへ
蜜柑置きよいしよと妻の割り込める
煤の日の片づけ本の拾ひ読み
膝小僧冷えて来たれば酒支度
熱爛もここまでといふ自覚あり
水鳥の羽搏ちごたへのある寒暮
水鳥の睡りに徹^{ひたこ}す直心
裸木の無心が心憎き日や
蠅螂に横を向かれてしまひけり
冬銀河何處ぞとあふぐ千鳥足
初お目見え天気予報の雪だるま
おのづから一団を為し鴨すすむ
鴨群るゝ日向つづきに家鴨あて
鳩人を面白さうに見る

がやがやと鴨みて池を凍らせず
松立て、ひとり呟くこれでよし
宿木を見つけしこゑの高弾み
柿の蒂つまらなさうに日を浴みて
柿の蒂夕日外れてしまひけり
正月花抱え女の声掛けゆく
年の瀬の散髪待つ間の漫画本
蓬髪に分け方問はる木の葉髪
年の瀬の裏番組も鍋料理
白菜干す御天道様に尻向けて
日向ぼこ猫に去られてしまひけり
寒八ツ目吸ひ付くものを選びざり
鋤焼を漁り尽くして鍋残る
今宵煮るべし国光といふ林檎
鏡なす空に枯木の物狂ひ
ガサ市のけふを強気に吹く風よ
喜多方ラーメンらずと啜れば北風ひゅう

自転車のベルに追い立てられ師走
この黝きをねずみの糞とはよう云ふた
葛湯溶き年金ぐらし長丁場
数え日の小遣いはたき買へる本
数え日の蓬莱島に亀眠り
数え日をタイムスリップして邦画
数え日の力が入る硝子拭
数え日の猫も私も日をよるべ
数え日の日の入る部屋で耳掃除
師走妻算盤はじく眼をしたり
これは観たことある映画煤籠
茶碗蒸し腹に行火を入るごと
手のこんだ咲き方をする蟹さぼてん
怖れ入る君の一言爛熟し
人ごとの御用納の日となれり
夫婦して磨く玻璃戸の年の塵
煤の日の妻の届かぬところを拭く

脱帽といふ他はなき枯木瘤
木の葉髪とどのつまりは年経たり
出番なき古事類苑の煤払ひ
力みなき冬の櫓と見てイてる
ぎくしゃくとしたまま年を越しにけり
裸木の走り根の先ここまでよ
とんでもなき縞鼻の胸の内
冬そうび虚空を統べて気韻さへ
冬至湯の湯気まうまうを纏ひ出づ
冬至風呂上面うめたぐらいでは
河内山宗俊もどきが年の湯に
目の粗き脱衣籠年詰りたり
締切日大つごもりと別にあり
ぶつつける力が余り寒玉子
年の瀬の何と云つても紐育
松隆と樟隆々と十二月
一茶忌の小遣い少なくなりけり

下田稔さん
年の瀬の黄泉にも句会あるならむ
俳句莫迦通す一年亦過ぎて
浄闇に年の火爆ぜぬたて続け
逝く年の背をとんと突き鐘一打
湯豆腐に微塵の脂泛きにけり
下履きをバタンと冬至の湯屋を出づ
蓮根の連れ子つぎつぎ現はるゝ
ビーフシチュー煮詰めておいて煤払
鮫鱧の強つくばりの口許よ
鼻風邪を引いてずぼらな仕事ぶり
黄粉餅喰ふたる顔の撫で掃除
花八つ手晦日払ひの世のはるか
顔立て、鼻勿体ぶった様
御勝手にお唄ひなされ年忘
夜神楽や些細なことを大仰に
し残したこと年越してやればよい
ややこしきは皆先送り年逝かす

さういつた訳で胡蘿蔔喰はぬ訳
煮凝の半信半疑鮒の目
ぜいたくなもんや火鉢が懐しき
目端利く冬の鵙とはなりみたり
一茶忌の福神漬を囓み鳴らし
一円玉邪陰にされて十二月
短日のぬいぐるみ置く心臓外科
日溜りの布団のやうにうちとけて
鼻を師とせるおもひなくもがな
鼻にはぐらかされて帰るのみ
凍みに凍む虚空蔵さんのどぜう髯
日向ぼこめく一年がもう仕舞
ばうとして昼の焚火にあたりゐる
千布団日和や吾の出番あり
日はあらぬ方へ布団の蒼ざめる
出あいしがしら朝の冷え込み口にする
千布団広げて夫婦二人分

布団皺直して布団干せる妻
家内うちよりこゑそこらの布団取り込めと
布団取り込むは一ト日を蔵ふごと
蓮根の穴のあなたに黄泉路見ゆ
花八懐旧つ手敵の母艦が潜む庭
唐突に冬の日暮れて犀の尻
手をこすりつゝ云ふ暖房入れやうか
手をやれば柿のつめたさ椅子の肘
風邪引いてだうにもならない頭です
鼻風邪を紛らすための根こん仕事
鼻風邪にだうだう巡りの考えごと
弔ひに落葉臭さを持ち込みぬ
柗や人を評すに言葉揺れ
落葉搔櫛大樹にとりかかる
落葉搔櫛の根っこをガリガリと
金沢文庫 称名寺旧伽藍発掘調査
冬青草根こそぎにして発掘溝
飽食は冬の蠅にもヤツと発つ

その内が来年となり大つごもり
生前の話となりて桜鍋
煤逃げも小遣錢でゆける処
日向ぼこ年内といふ柵の内
この年を締めくくる顔吾もしたり
いま暮れて今年が終る枯木星

第九句集 寒暑

●一月―三月

むらぎもの据わり処を歳旦吟
寝床にて初刷バリと鳴らし読む
銀鼠に空の整ひ大旦
正月は黄泉にてと又一人逝く
なまはげが立去り蓑の零れ屑
持ちのよきラジオより洩れ御万歳
新橋の飲屋の鏡開かな
新橋の似たやうな路地松飾り
腫れものも湯に温もりて三ケ日
初湯舟湯口近くに身を沈め
ほうと息大きくついて初湯舟
いっぽんの白長睫毛初鏡
安房(保田 嵯峨山 江月)
フェリー接岸初声の飛び交へる中
乗初の安房へフェリーの始動音
乗初めのフェリーのうねり臍の浮く
船室のノブの輪飾り風に鳴り

遊び田のうすらひつつく三日かな
水仙に句帖をひらく男かな
水仙は今年早くてその見頃
地下街は何處へも通ず松の内
餅花に財布の紐のゆるみがち
旧正の髻を振り振り鯉寄り来
郊外に出て一月の風の富士
枯萱に磧のただっびろき空
七福神巡りのバスが停まる寺
赤城山一ツ年取る面構え
林に雪田に雪村に残る雪
塩原行
年立てる音も新たに箒川
箒川鴨横向きに流されて
鶺鴒か雪の川原をすつ飛んで
白鶺鴒とんと川原の雪醒まし
露天湯へどぼんと入らねばこごえちまふ
顔擦って川原の雪気野天風呂

野天風呂晨の雪気も何のその
宿泊簿記す傍ら鏡餅
湯の里に遊ぶ正月湯三昧
山の温泉に骨抜きとなる三ケ日
温泉三昧はたして鼻風邪心地かな
雪明りして岩風呂の岩の相
初湯殿ふぐりすうすうしたりけり
初湯舟五體の透けて捨いろ
青年が湯壺へどんと初湯波
元日の湯花透く日のあら尊
湯の町の明けて三日の川床鳴る
初商温泉まんじゅう湯気しゅっしゅ
雪まろげ男まさりの女の子
箒川べりの湯宿の初灯
氷柱宿暇つつぶしに夜更けの温泉
大地より温泉の湧く鼓動はこべ草
身構へてその前通る軒氷柱

炬燵一つ真ん中に置く間取かな
隆々の鬼の金棒軒氷柱
雪降れば湯気倍にして饅頭屋
助っ人に山の快晴雪卸す
根雪道ここで転けたら百年目
温泉場雪掻き根雪ひつぺがし
段差また段差根雪の温泉場
きっかけは向うの岸のしづり雪
雪中の堂縁近く牡丹の木
雪みちを二代目高尾の墓へつけ
塩原高尾辞世句 寒風にもろくもくつる紅葉かな
雪に上に高尾ゆかりの寺紅葉
七草の朝湯あとから利いてくる
初芝居梅沢某の股旅もの
初芝居苦節云十年の面
左義長の風向きをみて火付け方
とんど火の最初パチパチやがてバン

左義長の灰降り慌てて髪押さふ
きな臭き世の左義長の大ほむら
左義長の爆ぜて松・竹・檜の音
左義長の火疲れといふ面持ちす
風上げの下手も上手も先づ走る
風上げの子の渚まで一目散
風 遂に風向きとらえたる
風平衛感覚使ひけり
風の尾のながながしきを誇りとす
砂浜に落ちて砂噛む奴風
賀状来ぬテレビをテレビと書く世代
お白州に詰めあるところで初夢覚め
これとても着水の裡鴨滑る
蘭展へ軽き足取り銀座まで
妃殿下の出品の蘭とつつきに
蘭展の蘭の招きにあづかりぬ
洋蘭の種を明かさぬ咲かせ方

蘭展の客層もまた見ものなる
奇天烈も奇天烈蘭の仲間とよ
場違ひのやうにおもへる蘭展に
洋蘭展鼻が華やぎ始めけり
蘭展出で銀座通りの人となる
みそさざい寝床ばなれも潔く
定かなり得難き人と枇杷の花
聴診器こんどは背中初検診
護謨の木にぎっくり腰の愚痴零す
暴君の腰痛なだめ寝る寒夜
蒲団出て月面歩行のぎっくり腰
こらへある嘔怖しぎっくり腰
ぎっくり腰咳く凶は曾呂利新左衛門
ぎっくり腰感極まらば囁らん
ぎっくり腰遅日の電話鳴らせおく
湿布して氷河期迎ふぎっくり腰
旧正の妻の手を借りぎっくり腰

ぎっくり腰悪寒は馳のやうにくる
腰痛に利く温泉があらば天竺まで
腰痛に竜の落し子めく歩行
腰痛の一撃脳天真つ白に
襦袍被てぎっくり腰の言ひなりに
暖房がどかんと入るにぎっくり腰
時かけて苺をつぶす腰痛持
腰痛の抜けず日差しは春めけど
金柑のありたけ点る観音堂
ぶらんこの下の余寒の水たまり
暖房音せはしく朝が始まりぬ
替る替る臘梅に鼻持つてゆきぬ
咲くときは一緒と梅の賑やか好き
校庭の水仙しんと授業中
青空に銀嶺走るだるま市
丹沢山系新らの雪置きだるま市
だるま市行きの増発バスぎうぎう

きさらぎの暦を切つて落しけり
白加賀の老来ますますかほる花
箸置きの陶のひひなも飾りけり
雛飾る妻は件の手付きして
さしあたり雛の調度を並べみん
恋猫の恨みがましきこゑ収め
恋すてふをみなの猫の富士額
垣繕うことも根氣の続くうち
桃・満作咲きてとんとん拍子の春
満作の花ろうたげな氣息かな
日向水木連翹の黄を眨めて
耳たぶに岸辺の日差し水ぬるむ
満作の昼素通りの郵便夫
山菜黄と云へば和菓子の黄味しぐれ
犬ふぐり屯す郵便受の下
接骨木咲くぼつぼつ旅に出るのもよき
春陽がやがやフェリーターミナル

市の日が眩し目無しの達磨にも
白鳥が来るやうになり本塾村
白鳥の青空目がけ翔つ十字
白鳥の飛来足掛け十五年
白鳥をかぞふる頭揺れるたり
白鳥のために屑菜を切つて遣る
青空より枝下ろされてユリ並木
三極に日照時間伸びて来し
江ノ島の裸弁天東風吹けり
雑談の合間に鴨の移りをり
税務署の窓越しに見る鴨の池
確定申告済ませ鴨見て帰らなん
春水といふ輝きに不足なし
水音またおろそかにせず春の水
小さき段差ありて水鳴る春うたた
春の水鳴るか鳴らぬか身を屈め
犬ふぐり浴びる旭の真新し

ひつじ田のほとりで列車列車待つ
房花摘み部落絵の春の襖を引きにけり
ストックの畑裾蛇口起ち上がる
金魚草摘み居る処に団体客
花作りホース引き込むपी畑
土地人に教はり花菜に沿ふ径
まんぼうの走り廻れる花菜の沖
花摘みの缺曇れり花渋に
隣り村ペンペン草の畦往けば
畑ほとりより出す花菜の宅急便
矢車草風出て潮色急変す
男来て三脚降ろす花菜畑
芹の水女のそれと跳ぶ声す
春めくやまんぼうの絵の防波堤
船室にあらせいとうの香の満てる
日持ちよき安房金盞花仏壇に
あらせいとう三日ばかりをかほる家

満作の小出しに咲ける臆病花
動物園上野動物園の点呼うさぎの前
春眠のゴリラの地下足袋めく蹠
日向ぼこするコンドルに成り下がり
徘徊す虎は四温の毛皮被て
蟻喰いのそはそは春の土を嗅ぎ
姿見の在らばとおもふ丹頂に
春水に河馬のうたた寝四六時中
胡座かく蜥蜴はこうもり安のさま
花ミモザ羅馬軍団現れよ
日に痴れし山茱萸日々の眺めとし
餃子リヤンコと注文入れる春の飯店
月ヶ瀬梅林
極上の烏梅うばいを産す梅どころ
奈良晒三寒の糸織りかけに
仏都修二云奈良馬酔木が咲けばお水取
お水取近づく空を風の行ぎよう

お水取矢来を焦がす粗火の粉
千年の口伝が生きてお水取
行僧のいっしょうけんめいお水取
お水取上堂松明天華とす
お水取耳で観みること覚えけり
決めた事決めた通りに諸葛菜
長閑な昼煙草はラッキーストライク
室咲きの地味であて興そそる花
雛罌粟の蒼の考え深げなる
諸葛菜些事より他に無き老後
蠅生まれ四辺にはかに活気づく
待春の肱付き椅子の深さかな
郁李は見る人に見ゆそんな花
東横線すれすれに咲く白もくれん
金沢文庫称名寺
やっとな春やっとな水皺頭てる池
近寄る程白木蓮の生の色
芹摘みにこゑ掛け遣れば佳い返事

水取に少し間のあり鹿せんべい
お水取ホカロン売り込む茶屋親爺
板東者我ら修二会に参じたり
修二会見物茶屋の親爺が先導す
お水取諸注意を先づ奈良県警
水取待つ人の頭かしらのぐらぐらと
チョロ松明まつが三本上がる二月堂
修二会僧大松明をぶん廻し
老若の目鼻ふすぼるお松明
お松明拝火教徒にあらねども
お松明招福火の粉撒き散らし
火の粉浴び修二会警護のおまわりさん
お水取肩の火の粉を払ひ呉れ
水取といふ営みのとこしなへ
劫初の火劫初の水のお水取
声つぶる僧の声明お水取
くらやみのなかの相伝お水取

一寸だけ春めく山の花きぶし
蝌蚪探す野蒜摘みには飽きたと見え
破れ傘こころ辺りとおもふ辺に
破れ傘控え目といふ出立ちに
破れ傘ことし見損じなかりけり
含羞の一つの容破れ傘
物の怪の何時離れたる破れ傘
啓蟄の三脚を取り敢えず置く
被写体とするには動き過ぎる鴨
弁財天日永巳の日の銭洗ふ
銭洗しろへびさま弁天春は巳の日の験げんあらな
穴出でし蟻目をこする祠の辺
日永の土佐路面電車はリスボン製
●四月―六月
野毛山の十日も早き山ざくら
潮吹く馬刀天に唾する如くなり
足型に三種類あり鳥雲に

尾根辿れば当り籤めく山ざくら
早咲きの花のいたづら心かな
鶉の花懐にかしましや
勘違いして咲く花に相違なき
花の情一人なれば酒にせん
こんな日が三日続けば花吹雪
落花嗅ぎ年寄る象の浜子さん
花を見る目配りにさへお人柄
灌仏の柄杓のやりとり見ず知らず
花は今高知の城下に来てみいや
武州金沢八景 乙鱸海岸
黙々と手を運ぶのみ浅蜷掘
浅蜷掘吾れは干潟の南端を
浅蜷掘腰を伸ばして一くぎり
磯遊び馬穴覗きにくる子かな
浅蜷らの小田原評定鍋の底
靖国神社
かんばせに靖国神社の花の風
えらき坂の花の靖国神社かな

御社に花の東京の標準木
東京の花見がてらの通院日
花どきの乳首の脇へ聴診器
花を見て花の生み継ぐ風を見て
林間を真一文字に花吹雪
花の間尾長が通り過ぎしのみ
墨堤に花人となる足慢ろ
花堤さてとこらで折り返そ
花吹雪こりやまたなんと佳き風情
風太郎よこぎる飛花に眼を上げて
うたた寝の風太郎にも隅田の春
けふあたり出向きおかねば散る花ぞ
花見支度し居れば雨や肩すかし
お花見のおあづけとなる朝の雨
鼻先をよぎりて飛花の舞踏団
満開のけふを逃して何とする
無理強いをして花奪ふ風の暴

大鴉姿くらます花の奥
子と探すおたまじやくしの密集地
鳥がゐて写真家がゐて桜の木
花の山絶えず子供のごゑがして
花筵山の夕冷え払ひけり
鉛筆でつついて示すぺんぺん草
私語一つ洩らさぬ二輪草の群れ
山ざくら遽か下界といふものあり
動くもの一物もなき花の景
朝風に流離流離と花散るも
山中に何時かは亡ぶ大桜
一行に飛花ふるまへり山ざくら
花ほつほつ咲き出す山に悪路なし
走り根の傍へが花の死に処
お天道様山の桜に花授け
一雨のあと立ち直る桜かな
山桜天を伝ひて風響き

一昼夜風に揉まれて花濃くす
腰どんと地べたに据えて花見かな
山ざくら散るとき音色あらまほし
夜桜の人に混じりて華やが
天空へ喉のすりへるまで雲雀
搔き当ててゴツと鳴れるや鬼浅蜷
はためける辛夷に千軍万馬の風
ご老體前はばかり日永の湯
日永の湯人足風の男あて
沿線の桜見ながら羽田まで
ジャンボ機の胴にミッキー春休
春服に鶴のマークのクルー嬢
瀬戸内の桜見え来て機は下降
春の日のぼかぼか山陽自動車道
春の瀬戸原付バイクでタタタタと
しまなみ海道
渡し賃七十五円よ瀬戸の春
生口島 耕三寺
デコポンに瀬戸の夕日の大きこと

風一夜天草浮いて生口島

献燈は丸亀汽船樟若葉

瀬戸内にモデルになりし島あれば
波たふたぶひよつこりひようつたんの春

瀬戸内のおむすび大の春の島

瀬戸内を雑貨など積み春の船

渡り来ししまなみ十橋昼霞

来島海峡単車で飛ばす半ズボン

石手寺に花は散るのみ徒遍路

春雨に濡るる石手寺石手川

道後公園
貸し練炭貸し莫蔭夜桜真つ盛り

花冷えの坊ちゃん列車待機せる

坊ちゃん湯
道後の湯古りて天井扇風機

古老懐古
一銭貫うて湯銭五厘の湯の長閑けし

山下清入つてぬさうな道後の湯

一茶も入りし湯なれば
道後の湯願まで浸かりおらが春

おぼろ夜の湯の梯子して椿の湯

松山中学校跡
濠端の花見に夏目金之助

子規堂
子規筆記幾何学の本のどけしや

子規堂の電燈の笠春の埃

つばくろは鍍絵の速さ内子町

内子座の前でつばくろとんぼきる

宇和島
潮臭き宿毛の雨に徒遍路

鯛生簀由良のさんちやく入江かな

土佐鶴に鱧の湯晒し春の雨

雨の中漁して鰻の地獄どめ

春驟雨船端叩く川蝦漁

四万十の橋四万十の春の雨

雨合羽光らせ鮎のがらびき漁

高知
絵看板潮噴く鯨が泳いじよる

路面電車ひよいと除けゆくつばくらめ

海明り早生り枇杷は四国一

宿の膳何はさておき姫かつを

おぼろ夜のしば天踊り余興の座

春雨にぐにやりと曲る土讃線

海鳥啼きお遍路マップ備ふ宿

金比羅参り燕出入りの一服茶屋

花人にはいごめんよと上り駕籠

花吹雪ばつぱと金比羅大権現

花見客もう百段に顔見合はせ

五人百姓花に広がる風流傘

花人の足腰問はる象頭山

汗拭いて七百八十五段の労

夫婦して啜るや春のざるぶっかけ

しゅうさん
紫雲出山瀬戸に霞をもたらせり

倉敷
風流の始め柳に佇むは

歩きつゝ地ビール「独歩」喇叭飲み

糠雨に凄味を増しぬ浦島草

芹の水干上がる窪地に蝌蚪蝟集

町雀雨の落花を足蹴にす

称名寺古図には無かり花の布置

ぎこちなきところ未だあるあめんぼう

大船 竜宝寺
花御堂ぼつりぼつりと人の訪ふ

人絶えて風訪ふばかり花御堂

樹下にゐて雀もさくら薬浴めり

ちよこなんとお堂の前の花御堂

風薫じ作務衣で通す日なりけり

堂縁に甘茶の菓罐汲まれよと

閑にして寂たり牡丹の間の土

夜桜の冷え込み上着一枚分

めかり時映画はシルバー料金にて

野毛 大道芸
スキヤキソングうららにワンマンバンドかな

大道芸なべて陽炎ふ自由席

大道芸蒸す日を火噴き男かな

パントマイム天使の輪っか夏空に

うたた寝すつつじの上の瑠璃蜥蜴

雪舟展
拙宗と名乗りし頃のかわせみ図

雪舟の水と霞の勝景図

つばくらの眼を借り天橋立図

睡るとは不覚穀雨の散髪屋

ふーんと来る春の蚊にしてあな近き

熱き湯を押し退け入る菖蒲どき

菖蒲湯をざんぶりと出づ赤仁王

噴水の背骨をしゃんと立てにけり

噴水に飽きしその眼を森に遣る

つばくらめカレーの市民の頭上越え

毛虫のごと空攀づジェットコースター

茅花どき旅の一つもせよと云ふ

赤詰草白詰草に勝る丘

著莪に降る雨や雨水のはけ所

散りざまの何たることかチューリップ

ユリの木の花はと街の空を見る

うたたねのホトケドジョウの髯立派

満腹や毛虫の下見でもせんか

さざんくわの毛虫の下見的中す

大蚯蚓仏となりて大異変

風の中紫蘭の内緒話かな

百葉箱葉ざくらの青一途なる

越後まで足を伸ばして田草月

未草目白押しとはこんな様

えごの花虻のお尻の大きこと

葉隠れの朴見んものと一步横

日に熱す一千枚の未草

山古志村 虫亀闘牛場
山古志の牛の角突き一番手

横綱牛幸左衛門に祝儀花

横綱牛藤七相手をじると睨め

其の上の牛の角突き二十ヶ村

豆虎の怪力見せん牛角力

つっかけてごつんと受けて牛角力

赤牛が一枚上手牛合せ

牛合せ勝者の赤毛引き回され

牛合はせ三才牛の尾にリボン

よう放し山古志村の雨最中

*ようは土地言葉で魚の意。

よう放しは鯉の池入れを指す

よう放し支度盥に鯉を入れ

ががんぼの猿猴宜しくぶるさがり

快音を谷に響かせ草刈機

養鯉池雨に緋鯉のうすぼんやり

田の蛭にラジオ體操第二番

牛合はせ済めば田植が待ちぬたり

田植笠棚田の真下に見えてをり

足音に蛙の田蛙算を乱し

青葉木菟ほらほら啼くよたてつづけ

相槌を打つごと別の青葉木菟

出雲崎(雲の浦)
出雲崎燕街道貫けり

このみやのもりのこしたにこどもらとあそぶ

はるひはくれずともよし 良寛

花桐のあなたの佐渡は暮れずともよし

良寛の里あぢさゐの万理都関

良寛の里 璞あらたまの蛙こゑ

酒米の田植も済むや和島村

木村家 良寛戒語百ばかりありと聞けば

良寛の戒語空木の花の数

木村家の庭に雨乾ぬ車輪梅

良寛墓所陸泉寺尋めゆく頬に植田風

良寛の綽名からすの夏迎ふ

良寛墓所毛虫も托鉢姿して

蛞蝓に好かれて良寛さんの墓

良寛像足許埋む桜しべ

小肥りの毛虫良寛墓石馳す

通草蔓良寛の書の筆運び宇奈具志神社(出田の宮)

夏けやき戦ぎて耳に盈つ葉音

*何れの処にか蒸炎を消さむ 独り愛す出田の宮

民々耳に盈つるの蟬 冷々林を出づるの風

国上山源八新田田が植りくがみやま

国上山青葉の葉騒鳶挙げて

国上山青嵐湧きくるめく葉

雲高山国上寺とや桐咲かせ国上寺

良寛の疑団も斯くや松ぼくり五合庵

堂縁にかがんぼ縋る五合庵

*乙子神社 炉辺一束の薪 誰か問わん迷悟の跡

何ぞ知らん名利の塵

竹の葉散る名利の塵を払ふかに

乙子祠おとしの木苺の実を頂戴す

乙子祠わかに稚き蜘蛛囀を張りにつけり

竹の葉散る良寛の世を語り草

海猫寺泊のくわいくわい佐渡へ発つフェリー

烏賊釣船きんきらきんの百裸灯

えつさ丸素木の箱に朱鷺基金フェリー(赤泊)へ

船室に雑魚寝卯波の為すまゝに

卯波立つ沖へ乗り出すえつさ丸

亀の頭のごときが朱夏の雲の浦

船窓に高卯浪みて横坐り

佐渡島畳々として照り卯浪

いちめんに夏めく潮路えつさ丸

流れ藻の長短首夏の佐渡航路

佐渡島赤泊至る処に小判草

朝の舟揺りつ浦人銀葉草ギバサ掻く

入江より漕ぎ出て朝のカツチキ釣

*カツチキは鳥賊の子

藻畳の中にて蟹の目覚むらん

かがんぼの交みては飛ぶ複葉機

宿の膳こんがり焼きの黒ハチメ

*ハチメはあこう 赤魚

参道に吹き込む真野の植田風大膳神社

能舞台脇正面の草刈れり

蜻蛉も一差し舞へる能舞台

能舞台真野の蛙の囀し方

能舞台蛙も一手仕る

葺替職人上と下とで押し問答

田蛙国分寺の貝摺り合はすごとくなり

金北山根本寺けふは晴れたと田のどぜう

面構え佐渡随一のどぜうとも

芍薬の珠日に熱す根本寺

田蛙も塚原問答根本寺

強水こひみずに佐渡の田植の始まり

*強水は岩間より流れ出す冷水

二時間と何んぼの夏の佐渡航路

山滴る島を離れておけさ丸

日焼けして二等船室雑魚寝組

二等船室隣より来る夏の蠅

水脈を見てフェリー船尾に氷菓舐む

其の上の病院船は氷菓なみいろ

道一本引き込みアカテガニ三浦半島 小網代湾の森

気散じの虫首擡げチゴガニ見に

蟹奔らせ白南風渡る巾着湾

チゴガニの遠目利く中闖入す

チゴガニの百千萬と我対す
チゴガニの応援団の白手套
チゴガニのラジオ體操散開し
チゴガニの鉄上げ下げバツタンコ
チゴガニの踊を真似て去なんとす
芦騒の煽りくらひてコメツキガニ
コメツキガニ穴に脚かけ警戒す
鳶の糞メロンの蔓を汚しけり
農作業南瓜の玉敷岬晴れて
仕方なくあめんぼ覗いてゐたりけり
儼ぬやう手の打ってあり梅雨食品
迅雷の三連発に天地裂け
京劇の殺陣稽古めく雷最中
雷光に木像ガルーダ眼を剥いて
雷の尻すぼまりに海の方
落ち方と云ふものあるうがはたた神
言葉尻濁せるごとく雷了る

葭切に念を押されてゐるごとし
梅雨入の鰐逃げしが御用となるニュース
雨の日の蘭鑄を見てリラックス
行末はペレか芝生に球蹴る子
横浜自然觀察の森
源氏疾うに平家これから螢谷
ほたる待つ谷戸にわくわくしてゐたり
今日は居ずホタルガイドのボランティア
ほたる火の人に當たるもおかまいなく
この谷戸に月と私と草螢
ときに雄渾ときに可憐に谷戸ほたる
螢火を団扇に受けて粹な人
ほたるにも気に喰わぬ風あると見え
木道をあゝるく螢の速さかな
遅れ来し人にほうたる居るには居る
隠り沼に遅まきながらと出づ螢
さてさてと螢見の腰上げにけり
螢狩戻りがてらの街明り

大リーグすててこ観戦愉しめり
軍配の返りたるごと夕立来
あさつての方から聞え軽き雷
カアネーション妻母として贈られき
少女らのジープンの毳半夏生
甚平著て貴方も齡と云はれをり
臘梅東慶寺の実におやおやと人の倚る
去り状を見て来てほたるぶくろの辺
雨の日の葉影うつすら岩たばこ
見染めたるときのときめき文字摺草
文字摺草一つの他は皆消えて
あじさゝると学生諸君の溢る寺
あめんぼう覗きゐるのみ他意あらず
あじさゝゐをすたとんと過ぐ横須賀線
格子縞羽織り毛虫の三太夫
アラヨツと蠅の一心太助かな
鉄の音遠くよりして薔薇騒然

孫蟻に呼び掛く「どこへゆくんだよう」
村田英雄逝く
梅雨なんぞ吹き飛ばす唄皆の衆
俳梅雨「人生劇場」高らかに
新社員夢あらばこそ「王将」を
新社員世渡り吉良の仁吉たれ
水替えの金魚を洗面器に揺らし
金魚の死因松笠病とや突き止めて
夏鴉開口一番「夜が明けた」
朝靄に起き出す蛾族節足類
蠅の死のあつけなかりし脚挙げて
ラバウル懷古 船旅へ夏の密雲生る中
ロシア船員跣足であるくタロ芋島
ごつたがへす菖蒲田の徑譲り合ひ
たぐり寄す夏掛その内夜も明けん
蠅憎き世の懐かしや畳撫す
明易の己に見えぬそけ髪
梅雨雀乗りて屋外瓦斯ボンベ

威嚇して地を掠め翔ぶ親鴉

御神域しんと鴉の子育てどき

子鴉の姿もやがて樟の森

みるからに榊はとつつき難き花

東高根森林公園

宝鐸草森の冥さに眼が馴れて

あめんぼう木屑のごときがやたら跳ね

水遁の術もて泛けるあめんぼう

溝萩の綻びかけに目を細め

鬼やんま追い駆く目線振り切られ

あめんぼをぼかんと佇つてみてあたり

雨降嶺晴れ藪の畝々もつこりと

梅雨の家居あれもこれもと妻頼み

身の内の退屈の蟲鳴き出す梅雨

豆飯の湯気の立つうちいただかん

明易の言葉は韻きやすきかな

人語なし明易の鳥ひた啼くに

使ひ古る座右の辞書と梅雨に入る

梅雨入の八百屋そこそこ品揃え

ぎょうさんな実をつけ貧乏症の枇杷

だんご虫転けて宙搔く脚清ら

実梅採る母が長棹えつさつさ

夏の灯に売るアボガドのされかうべ

梅雨の家居飲食おんじきの手間かけまする

衣更へて手足すうすうする一ト日

身の危険察知蜥蜴のダッシュセリ

合歓の花一雨あるやも知れぬ闇

河骨を掠め流水間断なし

薫風称名寺に仁王の視線やはらげり

青葉木菟いつしか寺に来ずなりぬ

緑さす富貴寺の面取り柱かな

●七月―九月

微風湧くなり朝顔の瑠璃の淵

妻との旅すぐにまとまる麦落雁

馬面剥うまづらの外れに外れたり左右の眼

お披露目のごとくヨットの快走す

昔日の海向日葵の瞳の中に

雨降嶺を唐竹割にはたた神

炎昼の干鱈の茶漬かつ込めり

孫おなごなるもなんと蟻に極刑加えをり

口染めてきんとと色の氷水

両手もて孫の扇げる団扇風

夏旅プランお岩木に寄り龍飛に寄り

旅のプランじょんがらを聞き海鞘突つつき

電話繋がりにんごの弘前観光課

ねぶたの件でおたづねしますと電話口

山車神楽鉦は痴人愚鈍トシキヘンテコと

眼をぱちくりさせて見送る武者倭武多

ヤーヤドー倭武多は鬼火掻き立てて

しずしずと見返り天女遠退ける

扇燈籠おぎとろの熱気にゆらぐ立見客

羽後の空深く竿灯黄金咲き

行先の皆目判らぬ蝮の道

雑兵のごとく駆け出すわらし虫

平泳ぎのあととは出鱈目犬っ掻き

夏掛を一枚抱え漂流中

アイステイ―茉莉モリーチエンハオ春毫試し飲み

アイステイ―ストロー吸うとき顔細め

炎ゆる日にふかすキャメルといふ葎

かなぶんの堂々巡りむさき家

虻一匹迷い込みたる音薄暑

老頭ローシロ児に浜昼顔が毎日咲き

風鈴の音色乱打に変わりけり

杜に棲む巢懸け鴉を皆敵視

胡桃割るそんなやり方あつたのか

明日葉を嬉しがらせる所降

男梅雨吉良の仁吉の一節を

新橋の飲屋の裏路地走り梅雨

麦湯の滋味吾らが元氣の源よ

起きだして朝から麦湯沸かす妻

ナツメロに夫婦してのる銷夏法

がら空きの電車ひやすに弱冷房

扇風機万遍なくといふことを

お化け小屋呼び込み男の甚平着

度忘れを暑のせいにするよくあること

いつもならかなぶん翔んで来べき頃

風鈴の手持ち無沙汰といふ風情

高からぬ鼻も汗かく日なりけり

古団扇扇ぎ損ねて肋打つ

のうぜん花どうやらかうやら風が出て

蟬啼かぬ分だけ凌ぎ易きけふ

體に佳き麦湯毎朝沸かすなり

山頭火の本の中から遠くわつこう

痩せぎすの身なれど汗がなんぼでも

ビニール製団扇手首の疲れるよ

顔でも洗ひ直す暑さも極まれば

やりきれぬ暑さと己にこぼすなり

放つとけばころがり落つる汗の玉

麦湯呑み午から体力消耗戦

汗地獄それもよからう徒食の身

この上はごろ寝に如かずこの暑さ

瘦っぱは病ひに勁し夏桔梗

夏桔梗あるべきやうはを自問して

夕かぜに息浅くつく夏の蟲

水撒いてやろうかほとぼり覚めぬ路地

読むことはここまでにしてあと昼寝

読みかけの本のほとりに三尺寝

昼寝して飛脚行き交ふ東海道

昼寝覚やつと合点のゆく風情

午睡より覚めしところへ水羊羹

昼寝覚潰れしこゑを立て直す

體には毒よと夏掛かけ呉れぬ

家居とは金魚うるちよろする構図

老體に近づく裸にも産毛

人前妻をもう憚らぬふかし藪

ふかし藪さる人なんつたつたって戦中派

独立記念日空にポンポン爆ずものあり

此処にもや時流に乗らぬ水馬

まんじりともせざる夜の明けにいにい蟬

野分あと街は輝く万華鏡

予報官今年は見極め難ければえいと梅雨明宣言出す

奴豆腐ヤッコの上音頭とるのは花かつを

聞こえ来ぬ「暑つくるしいことはいや」

水打つて木に葉に石に當たる音

たどたどしきにいにい蟬の節廻し

枕辺に団扇やりきれなき一夜

投げ出しある団扇を掴みざまあふぐ

悪態つく子鴉近所の電柱に

近所まで出張り鴉の御曹司

あつさり和白旗掲ぐ甚平着

酔ふたればチャンスとばかり蚊の寄り来

電話口孫出てあうむ返しの暑

腸妻によき献立牛蒡一点張り

畳の目見遣り睡後の漂流感

おお何と酸っぱ杏に瞞されし

杜の子鳥通行人を小莫迦にす

灯が貧しく見えて西瓜の種わびし

落雷を逃るゝための唱えごと

皺む腹甚平におし包みけり

町内の祭り
コンビニも町内の裡御神燈

走り根を除けて夜店を組み始む

夜店建ちけふの稼ぎを待つばかり

金魚屋の親爺の顔も一とせぶり

祭寄付受付すずかぜ来るところ

玄關に子供神輿の祝儀置き

祭来るそれを目当てに孫が来る

飯店の円卓扇子を遣りながら

横浜国際花火大会

世直しのつもりの花火がドカドンと

どんじりに控えて音も凄花火

青天の霹靂しととはこれ蟬の尿

よき智慧が泛かばぬ道理この暑さ

夏掛てふ健気なるものうち被り

ピザ・パスタ何にでも合ふミニトマト

みんなは途中で止めてしまひけり

俳諧は肚はらでするもの冬瓜汁

蓮根の俳画懸け暑を煙に巻く

冷房のどすんと入る音の又

なるやうになれとはだけて夕端居

灸花首を傾げて見る人も

曉齋の百鬼夜行図おお涼し

烏瓜の花煙幕を張りにけり

藪枕をひよいとつまみて頭かしらに当て

入院病院、大部屋に入れては切りいたちごっこの部屋冷房

はたはた翔つさうかと云ってやりたくなる

始めて鳴く蟲と思へず達者なもん

夏掛の引つ張り過ぎを押し戻す

冬瓜料理病院食に何處か似て

昼寝せん頭のもやもやのとれるまで

総体にとぼけた味の冬瓜汁

汗拭いて縦に走れる手術痕

百日紅詩は独断と心得て

万太郎の前書きに似てつくつくし

頷いてばかり大暑の電話口

昼寝覚てのひらの斯くやはらかし

夏バテの我が身思へば酢豚など

夏掛を優にはみ出す足二本

すててこで古本整理ああ汚まじな

甚平に捌けて口調も応対も

つくつくほうしつくつくご飯がもう済んで

やるせなし麦湯に氷片二つ入れ

藪枕を投げ出すそこが仮寝所

一切は過去と云うても震災忌
暑ければ頭に負担なき戦記物
団扇風眠気しりぞけしりぞけて
戦艦の一部のごとき蟬の胸
蟬の胸部時計の内部に酷似して
夕立後のごとくすかつとしてゐたし
ほゞづき錆木清方揉む女の手許よく描けて
何云うてもみんな言訳団扇風
朝曇さきほど薬飲んだっけ
蠅叩く術練達にまだ遠し
夏枯れの詩囊繕ふ術知らず
夏バテなし漫画を糧の青年は
なぐり描き劇画のやうな驟雨くる
パネルジン効き過ぎ水腎症の夏
前後して友の逝くなり蟲ほほづき
玻璃の蟬腹部まじまじ見られをり
辞書は机上に開きおくもの秋初風

凄いのはこのから先よ稲つるみ
冷凍みかん齧り旅路の汽車ぽつぽ
胡麻餡の油湿りの月餅食ぶ
素裸に電極五箇所心電図
黄昏れてくるまでビール我慢しぬ
蒸す一夜唄が洩れ来て「碌でなし」
朝曇り気概ばかりが雄々しくて
屁理屈の罷り通らぬ油照
真綿締め大蛇おろちのごとき暑さとも
浴びせかく野次のやうなる暑さとも
詐欺に遭うやうや猛暑に出合へるは
頭のうへ酷暑の通り過ぎるを待つ
暑さにも十両級と横綱級
水打つて収まるものを収まらず
胡座かきそこに居座るどっこい暑
やうやうに暑さ収まり厨ごと
朝曇り鈍く光れるドアのノブ

手にとる本手にとらぬ本秋隣
余分なことばかり考えぬて晩夏
おとぼけの花火も交じる前半部
ぶりかえす暑に打負けて易きにつく
山妻の暑さ凌ぎはコップ拭き
一わたり西瓜の種をうち眺め
三井寺歩行虫みいでらごみむし訳も分からず詠んでみぬ
ここ迄と長夜の本の耳を折る
西瓜の種一つ鎖骨に付いてをり
頭の裡に樟脳舟を走らしめ
この木さしづめ蟬の井戸端会議の木
ぶだう食ひ見合はす顔のちよと酸っぱ
ずいぶんと泳いだつもり本人は
ここ迄が咄のさはり幽霊譚
関節を鳴らしてみせぬ端居人
片脚のかがんぼ悪びれてはならぬ
出来不出来は西瓜の胴を叩き聞け

どうやらけふは暑くなりさう番茶の香
法師蟬薄荷のやうに頭に沁み来
正調といふべき蟬に耳を藉し
朝蟬のしゃんしゃん手拍子足拍子
ご近所を騒がす蟬も一頓挫
軒へ蟬早速鳴いてみせにけり
落蟬にいつもの空があり真青
引継もいと簡単に楠の蟬
熊蟬の熊坂長範啼き出すよ
お騒がせしましたと蟬木を離れ
遠き蟬さらに遠くを風吹けり
落蟬の落ち方むろん頭から
脱藩者めく蟬街道外れて飛ぶ
けふの無事告げ合ふごとく蟬啼くも
蟬音絶ゆ木が悄然と佇つてをり
公園の広場を蟬のまつしぐら
就中意味あるやうに蟬の啼く

鳴く番がなき唾蟬とやがて知る
唾蟬の羽音ばかりが大きくて
晩酌や蟬音遠のくばかりなり
青空がずり落ちて蟬転落死
あらぬこと考えて蟬、音の鈍る
頼むからもそつと抑え啼けよ蟬
法師蟬出だしもたもたして居りぬ
先客にとまどひながら止まる蟬
哲人の風貌しかと蟬の面つら
行きずりの松から転倒したる蟬
三門博
リズムよく蟬の唄入り観音経
捻子埋ビスずむ胸の手ざはり遠き蟬
いたづらに力んでみせる蟬は野暮
夕栄えも手伝ひ蟬の愁嘆場
蟬しぐれてふ特大の坩堝抜け
団扇絵に街道あるく馬子と松
団扇持つてあつちの部屋からこつちの部屋

身を離るときの快感汗の玉
汗は先づ顔から噴くもの探し物
意気上がらぬ世嘆き蟬もこんな調子
ゆくゆくは樟脳舟の船長に
金魚屋の二軒張合ふ祭かな
昼寝して我は当家の山頭火
昼寝覚出づる言葉のあぶくめく
胸中に小さき虹懸け三尺寝
昼寝して恐竜の影よぎる夢
昼寝して手足遠のく心地せり
着てみせて旅装のきまる日焼妻
軍神は茂みに佇てり忠魂碑
蚊の敵機来襲されば返り討ち
万歳をして落つ蟬の手をそのまゝ
たまさかに聞く鳥の音も日の盛り
日盛りをあれもこれもと欲張らず
一切の小細工無用いわし雲

蠅取紙詠める世代を同じうし
扇風機の風が洩れなく来るやうに
気つ風よき啖呵のごとき涼気とも
湯上がりのすつぽんぽんは佳かりけり
夏瘦の腕ただ組みて無為無策
風鈴のただ働きの労おもふ
娑婆といふ紅蓮を堰きて網戸あり
シャワー浴ぶこんなところに雀斑かな
一日了ふ壘の麦湯も底尽きて
虫を聴くゆとり生まれぬ夜風のなか
煮立つたる麦湯さましてゐる背中
麦湯なまぬるくひとりでとる昼餉
舌先が莫迦になるまで氷水
汗かかぬ魚を羨しと見てゐるも
永久に拭く汗の貌ともおもへりき
汗拭いたへて須臾の間仏がほ
汗かくだけかいて魂すつぽぬけ

打つて出るおもひ強かり炎天に
立つ虹に見合つた言葉ぽんと出で
洒落て詠む気などさらさら竹酔日
引とり手なき古本の早山
端的と云ふは夕立の上がり際
降つて湧く涼しき風を待ちゐたり
虹のこと古事類苑の天文部
実家にて油売りくる日焼妻
人の手のかからぬものはなし夏野
*乱開筥 道路然り用水路然り
へうと水のみに起ちたる生身魂
芋殻火吹く風のうごきを見てゐたり
病人の吐き出す枇杷の種大き
亀相して濡らせる西瓜臭き胸
ナフタリン臭きアロハに手を通す
胴廻り一寸足りない海水着
ピンボケの柄のアロハをこしも着て

お岩木は雲のスカート履き夏野
 この奥に津軽家霊屋姥百合咲く
 ねぶた山唄見る津軽民謡酒場にて
 旅人も声を限りのヤーヤドウ
 津軽公御紋牡丹の炎のねぶた
 見送り絵小雪舞はせて雪をんな
 鏡絵の関羽だんびら振りかざし
 溜息を誘ふ鏡絵九紋竜
 見送り絵常磐御前の被りもの
 鏡絵に武者の素っ首十あまり
 鏡絵のこの透明は何處よりくる
 鏡絵の女美丈夫太刀かざし
 鏡絵の大蛇は青く鬼赤く
 跨り打つ佞武多太鼓の撥の反り
 子供ねぶたヤーヤドウのこゑ絞る
 扇おきん燈籠の紅蓮見送り立ちん棒
 ちびっ子の手に手に金魚ねぶた提げ

雷公のもぐら叩きに遭ふごとし
 秋雷の豆を煎るごとく空ら響き
 押入に片さるゝごとく雷了る
 また元の木に舞ひ戻る蟬のあり
 今日やること葉のむこと汗かくこと
 これといふ宿題はなし夏百日
 茹で上がるもろこしの黄は僧衣の黄
 晩涼の津軽じよんがら哭き三味線
林火忌
 彼の日のごとく権兵衛坂は灼けをりぬ
 日盛りを煌めき渡る風のあり
孫に示す
 この通り蟬は素手もて掴むもの
 せみとらせてくださいと子の門に立つ
 盆花の色よき花の取り合はせ
 榊大樹果たして蟬はここに居る
 蟬しぐれあたり暮れ来て先細り
 蟬逃ぐるぶうんと熱き風起たせ
 夕立の音の間合ひを詰め来たる

雲漢へ飛ばされさうに大太鼓
 白眼の張飛関羽の武者佞武多
 婆と孫やんやのピカチュウねぶたかな
 うつしみの顔へねぶたの灯の透けぬ
 旅をして夜毎のねぶたねぶたかな
三内丸山遺跡
 夏鴉遺跡の丘に何漁る
 屋根草も夏草のうち復原棟
 車前草に覆はれ竪穴住居の丘
 車前草踏み遺跡ガイドのボランテイヤ
 玉澤のずんだ餅目に涼しきよ
 白玉や奥羽の旅はここに果て
 盆踊ここでお仕舞い子供の部
 一人脱け二人脱けして踊の輪
 稲びかり天の裏側垣間見せ
 夕立来て東京湾をぶったたく
 一、二枚青葉飛ばして大夕立
 夕立中健気なる灯の点り初む

夕立にこりやたまらんと馳せる蟬
 夕立来て地に喚くもの疾駆す
 大翼たたむごとくに夕立熄む
 蟬捕りの子を指図して通行人
 転げ墜つところが墳や秋の蟬
 垣内はずんと伸びぐる捕虫網
 昼寝より覚めてどこぞの馬の骨
 脳震盪間違ひなしの蠅叩
 喰はれたと妻の差し出すふくらはぎ
 出し殻のやうな蟬の音絞りをり
 冬は蟬鳴かないよという児の話を耳にして
 夏といふ概念掴み始めし子
 終戦日深くしゃがんで厠の蚊
横浜港
 白日傘行き交ふ新装大栈橋
 大栈橋波をデフォルメして涼し
 ホテルニューグランド前飛ぶ秋つばめ
SCANDIA
 オーダーのビールさうだなハイネッケン

操舵輪壁に懸けあるピアホール
芋殻束半分残し霊迎え
門火焚く用意かさばるもの多し
芋殻焚き了へたる指の煙くさき
箸の水切つて乾かす魂祭
焼茄子の直火強めぬ盆厨
扇面のをんな艶たる秋扇
桔梗の荅の爆破遂げてをり
後かたづけやうやく終り手火花す
麻婆豆腐食うべ八月乗り切らん
夏枯れの糶場に口細鯨かな
騒然たる雨を嬉ぶ芭蕉林
吊革の揃つて揺るゝ盆休
土用浪暫し泡沫漂はせ
青柿の雨滴びしゃりと浴びにけり
夏負けもせず来て蝦のチリソース
ひっぱたかれぺしゃんこの蚊の垢じみて

お蔭蒸す土偶体形疎んずも
しじみ蝶一つは寂し二つゐる
地に沿ひて石ころ色のしじみ蝶
しじみ蝶庭の何處かに飛んでゐる
視野に入り視野を出でゆくしじみ蝶
孫おうむ返しに「せみさんしんでいる」
古書守に暑いと云へばええ暑い
えのこ草コップに挿せば茎交叉
ポカやつてもう追ひつけぬ浮輪かな
肺活量大き歌手にて熊祭
伊藤久夫
熱海かみ
その上は華族の避暑地お宮の松
八幡平
エゾオヤマリンドウ秋を告ぐ峠
火口湖へ降りゆく昼の秋あかね
八幡平夏の名残の梅鉢草
畚岳遠望りんだう咲く峠
アスピーテライン上りの草もみぢ
番頭曰く
すすき見て露天湯に汗流されよ

まあなんて言おうかこの味むかご飯
コンビニで零余子なんぞを買おうとは
指立てて蜻蛉止まらす子の真顔
野趣溢る出湯は塩辛蜻蛉いろ
湯治小屋嘗て十六芒原
自炊棟ありし辺りは皆すすき
湯治小屋錆び虎杖のその向う
露けかり自炊道具の料金表
湯治場に天下の一品山清水
風邪引かぬことが取り柄と湯治人
蠅叩持ちつゝ雑談湯治人
手に取りぬ何の錆穂か判らぬを
自炊棟裏のすすきの花盛り
竜淵に潜む秘湯に四肢伸ばし
噴湯ときにケコと蛙のこゑ出して
硫気浴ぶ芭たまったもんぢやない
へちやばこと泥湯噴出薄の間

虫すだく坊主地獄の陥没箇所
草もみぢミニチュア火山の裾野にも
湯疲れや長き夜に倦み生あくび
ぎす鳴いて玉川温泉岩盤浴
湯治場の錆び木杭に秋あかね
秋祭り山車の松前鉄之助
盛岡秋まつり(盛岡八幡宮)
風流山車秋の八幡下りかな
風流山車出を待つわんこそば屋の前
冷酒にして口当りよき岩手川
わんこそば屋の二階に詰める祭衆
鹿踊諸流の中の春日流
花巻まつり
風流山車見返し遠のく刈屋姫
鹿踊鹿八頭の揃い踏み
羅須地人協会跡地の鳥威し
赤のまま賢治作りし弥助橋
花巻ノ雨ニモマケズ初鴟来
地酒酌むばっけの佃煮肴とし

*ばっけは落の臺

遠野

はあ、むがしはと始まる民話露けしや

秋うらら河童と馬コの物語

遠野民話聞きゐる両の耳さやか

曲り屋の遠野民話の身に入むよ

寄つてつてがんせと遠野の胡桃売り

鶏頭の頭かしら化け物めく遠野

かんながらちぎれんばかり鹿踊

*かんながらはドロの木の削り皮

雌鹿めじし狂おじしひ雄鹿闘おじしひ倒れたり

*雌鹿狂ひは一匹の女鹿を男鹿が奪い合う鹿踊の演目

しし踊おほこり十八番の柱懸りかな

*柱懸りも演目の一つ

腰ざしのゆらゆら奉納鹿踊

南部ばやし造花紅葉を稚児負ふて

鹿踊伝えて遠野十五ヶ村

河童が涸河童も秋思に耽るべく

蛇口より水の塊防災日

牢乎として櫛一夏逝かせけり

なほ翔びて縋るものなき秋の蟬

秋徼雨野草画展に長居して

須く太藺青天目指すべし

一日が了る麦酒の泡見つめ

ビールの泡鼻の辺りでぶつぶつと

新涼の燈台五十万カンデラ

これ当り落は流行りのベニアズマ

小石川植物園彼岸花ツンツカツンと咲きにけり

高麗・巾着田散らばつて散らばつて日とまんじゅさげ

稲田描く油絵の具を盛り上げて

恵林寺に風のごと来て薄どき

一位の実熱血快川果てし寺

凡そ軍勝五分を以て上と為し・木斛の大き実信玄戦陣訓

なほつづくコスモス街道ナイスデイ

家一つ毀たる跡に玉すだれ

あり合はせの芋の煮しめに一膳飯

重くれるくわりんに月のまどかなり

月の前はばかり通る雲一つ

衣被剥きつゝぼやく何のかんの

土産の栗栗飯にしてなほ余る

しじみ蝶止まるまで見て草っぱら

きちきちの一途な翅音径外れず

蟪蛄の三角の貌キューヴイズム

ぺしやんことなりし秋の蚊塵と捨つ

萎びさす椽の実死蔵といふべきか

薊には棘あり用心してかかれ

果し合い活動写真のすすき原

烏瓜粋な青縞装ひて

間引菜に昼酒の箸上げ下ろし

鶏頭花空気違へば彩違ふ

●十月―十二月

武州 金澤山 弥勒院称名寺
薬わたる一匹の蟻まんじゅさげ

秋の浜流木を目に収むのみ
紫蘇の実を好物として食細し
種を採る音の暫くしてゐたり
秋の灯に湯呑の絵柄廻し見ぬ
いきさつはどうでもよけれ秋の風
秋草は茎を活けるがごとくなり
婆同志お十夜の灯に濡れにくる
眊に紅ほとばしる芒かな
虫の音におつとりとまた性急と
俳諧の落穂拾いの夜は更けて
玄関に雨月の靴の匂ひして
雌日芝を抜く寄り道の手始めに
蘇鉄らのずんぐりむつくり無月かな
燈台の鉄階を霧濡らし初む
イヌビエとも相性のよきねこじやらし
敗荷を見にゆくといふ酔狂な
敗荷より俳句授かるまで長居

稲明りさし込む中や湯葉造り
鬼怒川温泉
温泉は近場がよろし鳥威
ロープウェイ
山麓と温度差五度の早紅葉
団栗一つ供ふ湯神の御神体
山頂駅鉄鎖に止まる秋あかね
草虱まだくつつ着かぬ穂の若し
上昇の蜻蛉頭を振りぐんと振り
蜻蛉の流さるゝ方鶏頂山
奥鬼怒
序の口の山の錦といふべかり
もみづれる山の快挙と申すべき
あららぎの泰然栃の自若の秋
拾得の装いで来て菌狩
紅葉且つ散りて溪流走らする
村営バス揺るたび熊除け鈴鳴れり
山深くもみづるものの一変す
秋澄みて一連なりの山のいろ
村営バス朝刊下ろす露の村

白菊の月輪黄菊の日輪と
蜂屋柿高名なれど見たことなし
蓑虫の着たきりすずめ押し通す
待宵の湯呑をつつむ両手かな
秋草を倒せる雨の定めなき
月祀るすすき折り来し此通り
月下にて山田の案山子隙だらけ
水飲んでそれからする事無き夜長
さう思ふことのたびたび秋の風
仁丹の看板のこる野の錦
いきり立つ秋の蜂見て眼が荒れる
野ぶだうに雑多な彩を与ふ雨
その君が葉掘りとは爺むさい
文面は至れり尽くせり柚味噌のこと
うちまじるもの一つ無き蕎麦畑
今市
薦紅葉して今市の杉並木
今市のそらく蜻蛉権現晴れ

履物のとり散らかって紅葉宿
椽の実を呼び水にして椽餅売る
茸どき宿より出せる宅急便
女夫淵温泉
取敢へず終点で降り紅葉狩
八丁の湯
露天湯の上をくる蜻蛉にでつくわす
小流れをなせる余り温泉赤のまま
ロッジ風湯宿丸太ももみづるか
櫛紅葉十を数えて湯壺出づ
とと
団体さん今到着の紅葉宿
加仁湯
照葉して五體あられもなき岩湯
松のぼることたやすけれ薦紅葉
今正にもみづる加仁湯の掛け湯浴ぶ
脱衣籠えんまこおろぎ宿しけり
日光澤温泉
団栗の青きが打ちて磐の音
野葡萄の不粹紅葉も興の裡
良寛の草書さながら色葉散る
いろは
紅葉狩内助の功に報ゆべく

山漆紅葉急なり滝の前

温泉ゆに浮かむ羽虫一匹一青葉

天つ日に透けざるは無し沢黄葉

宿浴衣もみづる山に向ひ干す

日光沢しづける岩もみづらん

紅葉沢落石すんでのところにて

先代の苦勞咄や薄紅葉

紅葉して引湯泉質二系統

黒ぶだう閻魔の舌となりにけり

雄日芝はいつか芒になりたくて

十月の日の温み程ハムスター

十月の日の入る後部座席占め

返信の筆も鈍れる秋早

水道の雫切る音良夜なり

七五三着くずれ直し処あり

簪やりボンや髪置迎える子

千歳飴一寸持たせて貰ひけり

野毛坂に団栗落ちて転ぶ距離

団栗落つ得たりや応と鋪道受け

百獣の王寝てばかり空つ風

十一月ホンドタヌキの空寝入り

十一月こんな日和が宜しくて

空風や鎖骨に触るゝ主治医の手

冬の鴟素寒貧とはなりにけり

又喰うてニュースとなりし月夜茸

夜なべの肩凝りゐて蟹の甲羅ほど

文化の日ふうせんとうわた活け込みて

捨聖片瀬の黄葉舞ふ中を

朝寒空「けふははつきりしませんね」

塵一つなき禅林の鴛鴦の水

烏瓜配して備前小物売

江ノ電の昔千鳥の翔ぶ砂丘

懸崖の舟型菊の五六艘

極月海ほたるの東京湾に船ごちやごちや

水鳥の行方追ひある鼻に風

自然薯のいやに素直な栽培物

伊勢山皇太神宮
七五三気ばってあげるお賽銭

林檎の荷解かんと鼻唄交りかな

ぶるぶるとファックス始動冬籠

ファックスの吐き出す紙の徐々に冬

町内に湯屋が健在冬の月

焼蕎屋まだまだ遠しやきもきす

せいこ蟹蟹井にして唐錦

散歩途上出合ひし犬も冬着著て

空風にガサツな歩き方通す

お隣りと同じ植木屋松手入

濁り酒銘も凜々しく「美少年」

除夜詣飴玉なんぞ振る舞はれ

年の火にかざすパパの手こどもの手

晦日つごもりの風出て空の煤払ひ

竜の玉龍太語録が生きてをり

チョウ鮫が鰐の顔して冬休

数え日を亀の正字の部首調べ

炭を焼く山が冷え込むまへの籠

冬日消ゆオコジョのやうにすばしこく

あんかうは癖のなき魚箸伸ばす

底冷えに遇ひたる鴨の真顔かな

海鼠の匂大いにうけて羽振りよき

これちようだい まつくる黒助凍てなまこ

抜書きの反古をかかえて寅彦忌

職退きて只の親爺のちゃんちゃんこ

常着にして見苦しからぬちゃんちゃんこ

毛布など一枚足して寝る夜かな

質屋の路地小走りに冬が来て

自然薯のすすきの褥取り外し

自然薯の包み方からして律義

齡取ったかな蓮根はやや苦手

吸はる牡蠣舌同類と思ひけり

鴨の陣崩してしまふさあ知らぬ

お香々こうこと酒あれば佳し桂郎忌

レモン添え外食めきぬ牡蠣フライ

牡蠣啜へこれから喉の滑り台

干蒲団取り込めといふ例のこゑ

海鼠噛むその眼返事を保留して

爛熱し泣かされましたよあなたには

大河内伝次郎くしゃみして冒頭

勢ふもの身ぬちに満ちて除夜詣

第十句集 素抱

●一月―三月

肌着に首するりと通し迎ふ年

初湯してうすぼんやりとおもふこと

正月のもう散らかせる居間跨ぎ

わが町の航空写真初刷に

手の空く妻今初刷をまとめ読み

喜んで孫に振り回さるゝ年

換氣して四日の風に生きづきぬ

八幡宮破魔矢握りて五十段

初懐旧飛脚通路も埋まる映画館

齊奥塩原 新湯温泉の日髭をたたいてあたりけり

ふらふらと湯中りに似て舞ふ雪も

餅腹を暫し伸ばして貉の湯

画家たらんおもひ雪山前にして

熊笹の雪にへこたれあゐる姿

雪捨つる雪気に頬の鳴るごとし

雪上をドドと車の鎖音

共同湯木目がうれし宵の雪

つららつらら隣のつららみて育つ

ざうざうと頭の冴え山の粗き湯に

初春や出湯のラドン含有量

湯上りの牛乳昼の雪見つゝ

雪塩原温泉掻いて橋より落とす男かな

めでたかり蜜柑に種子のあることも

松過ぎの少し熱めの湯の加減

会場にマスクの市松模様かな

肝心な話はマスクとつてせむ

風邪薬もつたいなくも剩りけり

結氷湖足踏みをして暖をとる

へし折つてみたくなるもの氷柱の意地

晩生なる蜜柑に当り外れなし

豚汁とんの豚を浚へる煮立汁

顎引いて冬のぼたんを撮る構え

離れ寄りためつつすがめつ冬ぼたん

一遍像寒暮を歩き出すところ
目白翔ち目にも止まらぬ一を引く
霜柱意志を通して阿らず
股引をもう手放せぬ太郎月
一月の孤りごころの雲ぞ佳き
金柑を生らせ死ぬまで棲む家ぞ
松とれて太田胃散もなべて暇
締め直す蛇口の緩み一月盡
完熟の蜜柑手にせる初三十日
春節や人波の上の朝陽門
春節や銅鑼の巨濤に吞まる路地
春節の飯店気前よき盛り付け
春節の関羽煙たげ支那線香
春節の円卓ぐるりぐるりかな
豚饅頭ぶたまんを山積み春節セールなり
魚団子スープの湯気に春節来
曇り空春は何處かで足踏みして

妙法寺
江戸に名を挙げし杉田の梅の齋
木瓜の花もつてまはらぬ俳句好し
チューリップ植えた通りに芽を出せり
不細工よ牡丹ボッの木の枯れざまは
春日中寄り来る鳩の遠慮がち
袖の雲脂指で弾きぬ春遠し
氷見て戻る他には用はなし
手袋の片方拾ふてみたもの
せきれいの翔び歩き又翔び歩き
もくれんの蠢立つ冬芽こんなにも
クロッカス一輪春めく日も一輪
寒椿落ちねば心に落としみぬ
石を替ゆ蠅と退屈同士かな
半島の山に春来とやって来ぬ
山茱萸の日暮れ惜しまむ片田舎
白梅の客気類さす風の中
犬ふぐり川はなめらか音立てず

野草観察みんなほほうとシモバシラ
あれこれと今年の風邪の諸症状
裸木のこよなき艶がすべてなり
尋めるなら何處そこの梅囲み記事
立春の一語を以て押し切られ
寺町の梅の遅速を見て歩かむ
枯蔦の系図を横に拵けり
二つ目の雪達磨あり作りかけ
股引を履いてゆけとよ事事し
金沢八景 乙鱈海岸
ぼんくら馬刀掘り返されてしまひけり
永日の袋イソメに逃げられし
海苔拾ふ海苔の如くに漂ふて
逆光に海苔掬ふこと百万遍
ひとり来て冬の石蓐の海つぺた
海苔育つ海は広いな大きいな
紅梅に佇めば土ふかふかと
早過ぎることは承知の上の探梅

心情は今も氷柱のごとき人
柿の蒂無造作も斯く極まれば
一切を封ず氷の初一念
冬日輪古佛の笑まふ如くなり
剪定の音の小さくはつきりと
樹々にこゑ懸けて廻れる春そこに
着膨れたやうな俳句の道具立
梅林を一巡りして退場す
同じ道黙し戻れば冴え返る
何もせねば木石の類枯日向
指採車窓に桃の咲くを見て
三春のここに始まる濤の音
これと云ひ見るもの無き中藪椿
金縷梅の黄色は中華菓子佐野美智さんのいろ
春荒れに転倒せらるかお大事に
介護バス来るを婆待つ春なれや
春告げに来る風今か今かとも

来る筈の春が何處かで道草す
文旦は親分その他はその子分
烈風ものかは梅の狭気かな
日比谷公園
鳩を見て翹ふ視線も春めけり
皇居前
皇居前東西南北日永人
皇居前手を振り歩く日永人
二重橋交番脇の柳の芽
梅屋敷 梅林
狂歌堂真顔の歌碑に梅の風
海苔拾ひなどに精出し二月の日々
ぞんぶんに海苔拾ひして手近な海
節分草節分草と尋め歩き
鶯の伝来のこゑ破綻なし
鞘走る音して竹の葉の降れり
おじやして一息つける雨の昼
鴨蹴つて水裏返る春なりし
桜草殖やせり妻の名は陽子
折り鶴にひとり遊びの日永妻

春星の間合を一つ一つ見て
紙風船春を手玉にとるごとく
春の鶉こんな日もあるこんな日も
伊予柑を凹ます力聚めけり
のどけさは五家宝噛みしあとの兒
春の蠅庭石はまだ冷たかる
三寒と四温のぎったんばったんこ
もう一彩むらさき欲しき雛あられ
デザートに年々大き苺かな
先づ以てデコポンのこのデコボコ感
都内にしてもう咲く大島桜かな
犬ふぐり殊勝といふに余りある
先達の魚氷に上る句を鏡
永き日の寺に石工の手弁当
金澤文庫
堂裏に古草武州金澤山
いぬふぐり
犬陰囊あらぬ文數字をあてがはれ
水輪生み継ぐ雨以て春意とす

づけづけともの云ふひとや花貝母
摘草の人のくつき離れたり
ぼかと生れ干潟のひよっこりひようたん島
流れ海苔鴉のごとく翔けるあり
出刃持って小柴の寒海苔百叩き
何でも綴ず孫のホチキス音長閑
紙風船ぐちゃぐちゃにして興ず孫
怪獣ごっこ紙風船にもう飽きて
田浦梅林
犬ふぐりひとっこひとり来ぬ山に
鶯の啼くや母音を先立てゝ
強情な野梅の枝と見て過ぎし
こんにやくのさしみふるふる雨水かな
剪定の枝荒括りして段畠
平日の梅林に人こんなにも
登り口オオイヌフグリちりばめて
紅梅を丹念にみる夫婦もの
頃合ひを見計らひ咲く梅律義

梅林に吹き募る風尽きるなし
紅梅に侍りて一言あるべきか
をみならの眉のほとりの梅の花
早梅の芳香よどんではならぬ
寒ければ一直線に進むのみ
白加賀に長居豊後に又長居
魁の梅好き者の一団か
梅好む齢となりて佇めり
ともかくも交通不便この梅林
観梅におもむく一団前に行く
犬ふぐり心許なき日影得て
乙艦海岸
浅蜷掘る大潮小潮小潮の日
雛あさりぼちよんと波間に擲てり
浅蜷居る證しそここ砂多くば
潮吹を邪慳に退けて錆シヤベル
浅蜷掘りし手がからからになりみたり
春の潮上げてゐるやら退いてゐるやら

二三箇所試し掘りして浅蚓掘
莫迦げたる潮吹を又掘り当てぬ

少年時代、マメコブシ蟹をまんじゅう蟹

と呼び親しめば

韓信の股潜りかやまんじゅう蟹
沖を見てゆけば石蓴に足とられ
鳥雲に性懲りもなく戦すか
伸び縮む鳩の瑠璃首春隣

今もある文房具店丁字の香

山茱萸の黄が開け放つ朝なりき
川明り余寒明りと云ふべきや
梅の上に聳ゆ富嶽も相模ぶり
桃どちのけふは節句と云ひ交し
ここに来て天気足踏み柳の芽
風きつく崩れ出したり鴨の陣
伊予柑に手の脂ぎる五十代
鯛釣草うらはらの世を明るうし

春なれや土搏つ雨の返点

まんさくの隙間だらけの花愛す
心臓の温み掌移し賓頭廬さま

冬ざれの天道虫は能く歩く

腑に落ちぬ古草の径途中まで

潦それみよと云ふ寒さかな

ふらここは青天井より垂れあたり

宝籤春の陽気に乗せられて

長閑なる日和と顔に画いてあり

直に聞くことは佳きこと桃の花

啓蟄や元の地番を覚えぬて

映るもの枯れ一色や鴛鴦の水

支那満作風に緩みの見えにけり

山茱萸が咲いて初陣めける日よ

山茱萸咲く笙・箏の樂あらな

満作はお天道様のおかげ咲き

浅春の横にひろがる濤の音

晴天三日節句を待たず桃ひらく

お茶碗と同質のおと寒卵

王道は山茱萸の黄を貫きて

汐干狩時間を暫し棚あづけ

潮吹に親方風を吹かす馬鹿貝バカガイ

若布汁これはやっかい吸ひつく蓋

春は未だ浅く塔婆の前のめり

手品にも芸風ひらひら春めく指

巻きゆるく日永の遺伝子・滑り台

ヒトラーの雄辯満作前にして

満作の鉤ハイクンクローイツ十字靡かせて

紙雛に倒れ易くて金屏風

突き立てしシャベルにしとど春の雨

小物いろいろ殖えし雛を飾るかな

べべ濡らす如雨露遊びもたけなはに

山茱萸に日はまだ粗き洗濯物

渋さとは恰好よさとは山茱萸咲く

寒鯉の鱗あほりたる水玄くろき
人參は三月のいろ煮て和えて
人參を撰とらねば生活習慣病
失敬す大島桜の花房を
寒桜ほゝうと腕組みながら
毛むくじやら齒朶打つ暖雨生々し
雛流三浦半島 芦名 淡島様しぼつんと来たる鹹き雨
雛流し催す宮の五百椿
雛流し椿の宮の直下より
細れ波ひひな流されゆくわいな
建長寺裏のぼたぼた椿かな
啓蟄や耳搔き棒の塗剥げて
帝王山菜莢明り取り込んで
あらよつと電気毛布に滑り込む
遠浅の海と聞くさえ春めきて
干潟現る順序がありて海松の海
なまくら出刃もつて寒海苔叩くかな

好き嫌ひ直らぬ齡はうれん草
猫柳だいで陽氣がよくなつて
名ばかりの春嘯いて反れる月
三寒のどつちつかずの夜半の月
庭土に滲み込むまでの春の水
好きな時好きな事して日の永し
どうでもよいやうに山菜莢なりにけり
寡れもう取り繕へぬ花さんしゆゆ
老人の指図けむたし花貝母
があがあと家鴨が鳴いて水草生ふ
啓蟄の亀現る苔のほひして
ぺんぺん草奏づる風が出て来たり
白詰草真つこと冷たかりけるよ
彩どりは京劇の赤寒緋桜
残寒の竹林に首さし入れて
だうもかうも天気外れて紫荊
雛壇のありし辺りをかい撫でぬ

大風にうち負かされし水仙花
浦風にあびせ倒さる水仙花
恰好をつけて避寒の旅などと
押し黙り見居り花菜の虻の所作
涅槃図にたるむ処無し増上寺
●四月―六月
上からも下からも人花の山
花筵てふ大仰なもの持たず
腰下ろすところへ飛花の次から次
この齡になりて春晝てふものを
愛らしき苔からしてゆすらうめ
見通して奥行のある花の山
禽ごゑのひろがりすばまり花の山
のほほんとしてゐし鴨の残されし
そんなことしなくても水温みけり
藪椿こんなところで径途切れ
大根を洗ふ機械か人ひと気なし

花菜晴れ漁師は漁に精を出し
花虻の音聞く限りきかん坊
これは粹キンクロハジロ小さきちよん鬻ある鴨で
をととひのさくらがふつと浮かびくる
さきほどの花も佳けれど此も佳し
人ひと気なきときをさくらの旺んなり
ひとびとは立ち去り櫻は残りけり
さゑずりのありかは花の奥の奥
枝移りして花の鳥こゑ大きく
花の山騒がしにくる目白かな
人ごゑが近みさくらがそはそはす
てのひらに飛花を掬へば浮き立つ彩
すいと来てこんどは小柄花の鳥
一通り見せ呉れ目白の軽業芸
ぼちよぼちよと水の流るる芹田かな
さんしゆゆの黄を振り撒くは善意に似て
猫の恋人目なんぞにおかまいなく

さんしゆゆ見て思ひ当たるは鉦のいろ
鴛鴦装う晴着は大正浪漫風

花なづなペンペン草の名を厭ひ

犬ふぐり集落のごと點在す

かりそめに春水の翳生れては消ゆ

永日の亀の正字に窮しけり

金澤文庫 称名寺 裏山
蝸蚪の國腕白どもに伏せておく

萍のしんと緑の一帝国

萍の隠蔽工作始まり

耳聾す風天空に花こぶし

芹摘の中腰に耐え切れずして起つ

諸葛菜要らぬ戦争引き起こし

紫荊嘘で固めた戦して

紫荊一方的に非を難じ

身勝手な戦の行方つちふれり

春場所の土を噛んだるはたき込み

春場所のとんだ所ではりま投げ

雪柳佛花と決めて幾星霜

金澤八景シーパラダイス
爆撃の体勢に入るエイを見よ

驚きのテッポウエビの衝撃波

オニダルマオコゼの口中ちよと動く

孫と瞻てナマコ忍者の黒装束

大海馬背びれひらひら昇天す

リーフィーシードラゴン遊歩の迷彩服

見つめられ居りて箱河豚ぽつとせり

大岡川 観桜
おしどりに吹雪ける花の余り風

ペット屋におたまじゃくしの御玉哉

花吹雪雪洞にまだ吹き足らず

弘明寺観音 観桜
赤塗りのひょうげた仁王飛花よぎり

分葱買ふ弘明寺観音お膝元

この山の一押し桜咲きにけり

竹の葉散る奥へ奥へと魅せられて

棒切れで地図を描ける花の許

野毛花見
花愛づる毛唐の大首横濱絵

横濱の花を観るなら掃部山かもんやま

紫荊戦はアラ一の思し召し

この静寂しじま破るものなく朝ざくら

花屑に風そろそろとたちつてと

花散らす風の無理強ひしたりけり

落椿展観幕府滅亡史

称名寺鴨も花見と洒落にけり

花愛でて今様本田平八郎

鳥よりも人よく遊ぶ花の山

はたきなどばたばた春の楽器店

花啄まむと鴨身をひねり

精米所横よりのぼる花の山

かるめ焼きなど賞味して花の人

花の蜜くすねに来たる大き鳥

枝のさきまだ咲く余地のある桜

何事かまくし立てたり花の鳥

亀鳴くややうやう主旨が伝はりて

脂っ気抜かれ戻れり汐干狩
指挟まれ大馬鹿貝の糞力
大道芸祭囃すやオツペケペー
のれん出す野毛飲屋街虹立ちて
野毛山の春の夜浅く辻樂士
穴まどひ間が悪さうに消えゆけり
うす膩泛く青大将を正視して
穴出づる虫の裡なるだんご虫
ぼうたんの咲けばついつい嗅いでみぬ
花くわりん夜間飛行の灯のちらちら
販売機春夜連なる灯の區劃
春なれや見上げてチャンチンモドキの木
カガミ貝縄文人も化粧ひけむ
馬鹿貝^ばの舌雀の舌に酷似して
浅蜷縞流行りの縞もありぬべし
馬鹿貝の舌を使ひてのけぞれる
道北行
男山酒造雪山正面に

酒水は万年雪水男山
和寒^{わつきむ}の防雪林横ふきのたう
白樺の用途かつてはスキー材
秋つこと土地人の云ふそのみどり
町木はヤチダモ残雪うち敷きて
道北の残雪退いて里青む
榛の木の芽吹きまだまだ天塩川
家ぽんと置いて名寄の雪間かな
浜頓別
押麦を白鳥に撒く作業員
白鳥のあれゆく浜頓別のそら
皆若く白鳥撮りのテレビクルー
白鳥の録音係こゑ拾ふ
白鳥の放送中継風の音
目の子算ざつと一万コハクチョウ
鮭トバでちびりちびりと男山
宗谷岬
あざらしの腹の上なる春入日

*秋つこは秋蒔小麦

隈笹に残る雪見て最北端
海猫の糞皚々宗谷暮れんとす
野寒布^{ノシヤツブ}と宗谷の間の昼がすみ
利尻島霞もやもや引き出せり
訛り暖かガイドは礼文高校出
ふきのたう全島まかなふ発電所
昼食に煮付礼文の黒がしら

*黒がしらは鱈のこと

まなかひに礼文近みて春かもめ
礼文沖ほつけを追ふか木つ葉舟
きうきうと海猫鳴く岬カスベエ干す

*カスベエは土地言葉でエイのこと

海猫・鴉ごちやませ礼文の風に乗
海猫退けて埠頭を占むる島鴉
潮青む礼文を皮切り雲丹採漁
沖ゆくはりマン海流カスベエ干す
突き進む船首礼文は霞みづめ

海上に利尻全容霞切れ
海上に霞める利尻その内着く
岳樺呑み込む海霧の迅さかな
須古頓の風に揉まれてほつけ干す
蛸漁のその大方は朝の内
利尻島
フェリー追ふ春の鷗の数減りて
春光をやはらかに投げ利尻富士
利尻町春寒灯の入る赤提灯
父ちゃんと母ちゃん居酒屋焼ほつけ
活ホタテ開きほつけに地酒酌む
利尻メカブおじやうましよ当店は
値の張つて然り利尻の厚昆布
島土産利尻昆布のピンからキリ
小平町
親方の漁場差配の赤毛套^{あかけつちう}
春の蠅番屋の客に蹤いて来ぬ
留萌
留萌川留萌本線春景色
玲瓏と雪頂いて暑寒別岳^{しよかんべつ}

又の旅夏と定めて青富良野
畦青み雪嶺しざり秩父別ちつふべつ
榛芽吹き神居古潭かむいこたんの川景色
富良野産ラベンダー入り線香とよ
氷点下四十一度てふクツキー
杜覆ふ青葉の階調宜しけれ
散りしきる桜に欲しき越天楽
模糊と見て桜のなかに末期の眼
その頃となれば花見に徒心
遠浅の海の牧場にあめふらし
浅蛭掘道具倒れと云うがあり
潮吹が鳴いて潮時告げてをり
人様の馬穴まあしほ覗くは浅蛭の多寡
厨房に浅蛭のぞめきうしみつ時
馬鹿貝の塗り剥げたるはもう齢よ
この感触大馬鹿貝に他ならぬ
砂抱いてか黝き馬刀の虚せ貝

一休の数ある頓知芍薬玉
桐の花寺の和尚はむらさき好き
花殖やす和尚の心根矢車草
桐の花ぼかんと眺めぬしが去る
桐の花先代の顔もう忘れ
買物籠菖蒲の尖が見えてゐる
葉菖蒲の香ごとくるめり新聞紙
春になり雀鳥と名の付く草
鳥雲に人は葬り葬られ
キツネノボタンその実みどりの金平糖
拾ひ来て海髪より造る美顔水
石蓴搔だぶつき気味のゴム胴着
種あかす手品などみて目借時
翻車魚の肝和え春と思ふべな
端午の湯踵きれいに磨きけり
野遊びに女はあてにせずにおこう
ぼんぼんだりあ昔は良かった能く遊んだ

海牛の頭上を跨ぎ浅蛭掘
試し掘り干潟のあちらこちらかな
汐干狩擡ぐ尿意を如何にせん
皴苦茶婆貝を剥くやら蠅追ふやら
庵原より宅急便で新茶着く
新茶淹る湯気の向うに送り主
茶摘み畑手送り主曰くが回らねばうち捨ておく
樺若葉して石畳冷え込めり
面白さうに剥く露なれば私にも
蜥蜴の腹なんぞ見をればもう昼どき
第六感当り風船逃がしたる
籠枕ことしの頭慣らしをり
ゴールデンウィーク籠りて何すべく
干鰯など水に戻してとる昼餉
緑陰の雀とんとん走り根越え
観音の胸元よぎる初燕
大船竜宝寺の玉繩の一寺手広く芍薬植え

菖蒲湯にざっと浸りて若返る
葉菖蒲の邪気祓ふ氣にあやからん
釜利谷のをばさんの売る地のトマト
渡り蟹甘藻の林はすかひに
古きよき時代の垣花ねずみもち
新茶なみなみ注ぎていつもの日の始まり
ともかくも昔はよかつた銭葵
芍薬の一念三千想ひ玉
樟の花八幡神社鎮めけり
雷いかづちに出し抜かれては道急ぎ
朝の蛾のかぶさる露の葉の一つ
緑陰に未練残して去る素振り
角刈の昇き手匂へり三社祭
男梅雨おろかに肥ゆる榊大樹
ひめじよおん朝方一度降ったきり
いないいないバアを決め込む梅雨入富士
緑さす窓を雨滴の徒競走

梅雨の玻璃阿弥籤めく雨滴馳せ
川幅をゆつたりと持し梅雨大河
父の日の昼をふんばつ勝烈庵
横浜駅西口梅雨のアンブレラ
萍をひつくり返しゆく大雨
鳩も目をくりくりさせぬ青あらし
でんでん虫雨が当りて角曲げぬ
昼蛙愚の骨頂と啼くなめり
雨のあと薔薇壊す風ありにけり
湯西川ハンカチをすこし余分に旅支度
山藤のむらさき散り込む魚道あり
分け入りし山ならではの一新樹
ニュートリノ天網を抜け新樹山
ニュートリノ達してをらむ新樹山
敦盛草母衣らしきもの抱え初め
林間にさんざめく鳥新樹雨
前山の新樹に吸はる昼の雨

新樹山臨みてアイスマルクかな
出湯出づ脛のすうすう新樹冷え
山女釣荒くれ岩をひよひひいと
一行の瞬き仰ぐ新樹雨
山径を降らるるままに新樹雨
身の内の門外れ若葉の湯
新樹雨顔にぼつんとあとばらばら
鳥ごゑの語尾尻上り新樹山
新樹雨四辺を打ちてまたたく間
大粒となりて新樹を襲ふあめ
新緑に慣れたところで山下る日
写生して山の新樹のもくもく感
河原石皚々天より下り藤
藤見事見事とぞとこゑ車中より
花あけび引率の子は上級生
山峡の燕巢造りこれからよ
新緑の此岸に村はかたまりて

新緑の押し寄せてゐる一山村
新樹高しいつまでもゐる鳥の向き
花通草物音一つたてぬ村
栃若葉山の天気恵まれて
岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬
桐の咲く民宿で売る遊魚券
路を過ぐスクールバスの空車
オムレツのやうにやはらか新樹山
旧道は細々常磐木落葉みち
山藤とおぼしきが垂れ向ひ山
奥鬼怒川温泉バードウイーク森のみどりに染まるべく
代田水いまにも雨が降りさうに
いつ降ってもよささうな空花空木
雷又雷尾根の新樹を震はせて
いかづち雷は会津の方よりそれつきり
板の間に落つかなぶんの硬き尻
湯疲れのそこはか溜る新樹雨

湯けむりも櫟若葉ももくもくと
杉落葉積もり旧道絶えだえに
鬼怒川温泉新樹山連なるまゝをスケッチす
若葉風温泉街に吹き込めり
目黒 自然教育園夏草にかにつりぐさといふがあり
水垢の亀にも年季梅雨に入る
牛蛙人さしかかれば音の詰る
目に余ることも鴉の子育てどき
軽鳧の子の一羽後塵拝しけり
軽鳧の子の入り来るを待つファインダー
軽鳧の子の従順なるとならざると
葭叢の中に蜻蛉の通り道
この沼を往き来蜻蛉の二匹は居る
眼中に吾無きごとくやんま過ぐ
沼底のどぜうの欠伸ならむ泡
糸蜻蛉進むリズムはピチカート
十葉にも植物園の標示札

蛇ながむしの唯々通り過ぐを待つ

糸とんぼ茎に取り付くその角度

水馬未だ埃の大きさに

あぢさゐの雫を浴びぬやうに抜け

燈心蜻蛉とうすみは瑠璃一色の針とんぼ

羅慈恵医犬に患者付き添ひ過ぎにけり

診察室二十番出て梅雨の街

一患者ふうふう云ふて団扇風

病廊病院売店にてに外来患者あふれ梅雨

商品のお出かけメイトは梅雨の杖

もうそんな頃かや屋上ビアガーデン

ざくろ咲き通院かんかん照りの道

吹き起こる白南風長淵剛の唄

アマリリスラジオのヴォリューム一杯に

堅干しの筆りカスベエ晩酌に

*カスベエはエイのこと

梅雨のラジオ早口にしてください

斯く肥えて押しも押されぬ獅子頭

廻り道する赤蟻に事情あり

更衣即ち着古るし作務衣かな

柏餅誰にでもある佳き時代

大味な彩のつつじに飽き飽きす

酒気帯びて男はさうよ神興昇

奇想曲薔薇にふさはしプッチーニ

あぢさゐののつぺらぼうがうすばんやり

冷奴地震の起こるメカニズム

一人留守おおせつかればがらんぼ来

萍の支離滅裂か整然か

ビール酌む札文カスベエむしりつゝ

斑ふちなるは猫のみならず金魚にも

ひよいと思ひ出したる蚊帳の入り方

変なこと覚えてゐるよ瓜の種

鴨居見て蚊帳の吊り手の懸け方など

かたばみの花見るものの無ければ瞰る

蝮の道当てありさうで無ささうで

いぶかしみ見て過ぐ蝶の蒐まる木

老眼と乱視ごちやまぜ梅雨をみる

雨の赤つつじびんぼけ眼鏡の度

角振りてでんでんむしは唄ふ虫

いんげんの季節の三色御飯かな

尺蠖の探り直せる空の奥

納豆菌掲げて健康食品売る

蕃茄に塩振りすぎとこゑありにけり

江戸川区金魚ガイドを取り寄せて

グラビアの風鈴に耳すましけり

たはむれにモンローウオーク南風のなか

ほら見てよ薔薇が奇麗よあんた達

椎咲いてむっとするなか狸穴坂ましかなざか

皆百円香奠袋も虫籠も

屑籠は大きめが佳し夏はじめ

三夏その首夏告げわたる風なりけり

用足して丸善に寄る東京首夏

草々の容をなぞり夏の蝶

黒揚羽すと消え飛石あるばかり

こんなにもベルト重たき夏ズボン

ハンカチは嗜みのうち忍ばせぬ

蛇くちなわを滑り込ませて沼無風

すすむ胴水に密着させ蛇くちなわ

蛇の舌まざと脳裡に刻まれぬ

蛇よぎる水脈須臾にして跡かたなし

水上を突き進む蛇不敵なり

蒐まつて軍団めける水馬

六月のピザ生地寝かす雨の昼

引っぱれば飛び出すティッシュ走り梅雨

蚊の姥が雨に追はれて玻璃にくる

サイダーの大きなげつぷ墓めける

夕立のそのたまさかに苗倒る

こ奴めとお小言貰ふ藪からし

油虫に手を施すも出るには出る
手に当てて切れ味試す鋸草
葉山沖わたるアンドンクラゲかな
ヒザラガイ見るさえ薄暑覚えけり
鑑摺あぶすりのヨット馳すなり薔薇の窓
原色のボデイスーツに梅雨のダイバー
その華麗なること水を蹴るくらげ
水を掻く分だけすすむ海月かな
梅雨払ふ笠置しづ子のよいわんわ
これなんとかしなくちや十葉はびこる庭
ちよんまげが街練り歩く開港祭
白南風埠頭帆船ファンで賑はへり
鮎あじどきの佳き風のくる酒匂川
再生紙裏も使えと亀鳴けり
釣人房州 富浦に野暮な問い掛け梅雨を云ひ
半分は遊びの鱧の渚釣り
この先に径無ささうで浜大根

変はり映えしない団扇をことしも亦
雨上りわけても枇杷の雨雫
ビール乾し辺りの風がぬるくなる
脛打つていまいましきは夏机
糸を垂るそばから鯨が掛かりけり
いまもつてご鼻肩があり氷店
にゆうべえと蛸漁の沖見渡して
吾が前を走りゆく蚊に手を出さず
さつきから目くじら立てゝはたた神
トマトに振る塩目分量一寸過ぎし
時の日や曜日たつきに疎き生活ぶり
出来悪き坊主のやうな路地の枇杷
管理人室の横手の枇杷たわわ
書き止めし句のたわい無し昼寝あと
傷み方あれこれありて古団扇
蠅帳の見当たらぬ世も亦佳きか
みな清潔に蠅帳の失くなりぬ

天草採序てくさじりでに引ききし鶏冠のり
現八犬飼現八の麻張り房州団扇かな
釣り上げしねずつば三匹缶からに
釣人のいらにべ無き応えボソと梅雨
梅雨の航連れ添う鴉トウモロコシ宜候と
甚平着見て振り返る甚平着
甚平の好きがわかつてくる齡
甚平の紐結ふ手つき馴れてきし
往き交へる螢大きな方を追ふ
毎日を気楽に気楽にかたつむり
午後からの梅雨のやつつけ仕事かな
寝そべりてクイズを解ける梅雨曇
団扇と辞書放つぽらかしてある座敷
手に届くところに団扇のある生活たつき
蜘蛛の罫に病葉二、三ちらし掛け
その後のことはどうでも団扇風
ペデュキュアの女ヨットに乗り込めり

直ぐ崩れては形なしの入道雲
日射病倒れし其処はジャカルタで
水中りの洗禮を受くジョクジャカルタ
その嘔吐鮮烈にして水中り
夏瘦せて術後回想拝み太郎の湯浴みなり
心太冷水もつて口直し
何處からか蠅の入りくる家なりし
射干や家を毀ちて家が建ち
表札の町名旧きまゝ梅雨へ
蝸牛程の私の運動量
銭湯の跡地射干咲いてをり
ピーマンに日は差しながら雨の降る
古団扇骨傷みして風へなへな
父の日の素足すうすうしてあたり
ずぶ濡れの螢袋の一輪挿し
露零す螢袋に道草す
花しやうぶ見つめて風の見えるまで

大吟醸

父の日の加賀鳶の封切りにけり
夏空馳すアンパンマンは強かりき
黴どきのバイキンマンをやつつける
保もつまいとおもふ空から五月雨
虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分
萍の取拾つかぬざんざ降り
栗の花しじろもどろとなる天気
八景島 シーパラダイス
蜜月の真つ只中の白詰草
若者の手をとりあるく白詰草
遊船の波切り進む白詰草
おもはゆき振花の辺に汝と坐る
檳榔樹ヨットスクール開校中
あぢさゐのスケッチブック絵葉書大
携帯電話ると四葩の辺に受けぬ
大南風途絶えてへなへなヨットの帆
ヨット操る男サルビア色のシャツ
みずくらげワルツのステップ踏むごとし

屑籠に蟻の潜伏発覚す
菓子屑を嗅ぎつけ来たる蟻ならん
家に入る蟻の根絶やし寝巻被て
横浜 自然観察の森
風の綾捉えて螢上昇中
風絶えて螢の宿は藪臭き
蛍との交信何を以てせん
突如吹く風に蛍の灯を落とす
蛍発つ粹な噂の起つごとく
棲み分けてここは源氏の蛍谷
迅きこと飛脚のごとき蛍なり
ほうたるを吹き消す風と点す風
手探りの径をほうたる点し呉れ
ほうたるに殴りかからんばかりの風
ほうたるの風に浮き名を流すごと
大風に蛍あはてゝ落つこちぬ
風出でて蛍の宿の早仕舞ひ
榊霰砂地をうがつ男梅雨

山車出して風に当てをり祭月
仲違ひダチュラがそっぽ向いてゐる
火取虫飛び廻る輪を拵げつゝ
青簾風に色目を使ひけり
物音をはばかり起きれば梅雨雀
明易の誰か蛇口をひねる音
短夜の体内に水ゆき渡らす
五家宝に居る居る蟻の偵察隊
掃除機に追はれて梅雨の部屋を退く
火取虫光輪放ちつつ飛べり
ががんぼの五體満足あひ眺の棧
金魚の名アズマニシキは四股名にて
梅雨どきの何處を見据えて金魚の目
葉桜の毛虫垂るるによき暗さ
雨上る地明りのして立葵
かう派手に這ひ回られては蟻退治
板の間に蟻打ち据えてぺったんこ

早起きが仇の寝不足籠枕
湯上りの団扇はどこだここに無し
新じゃがの入る料理なら何でもよし
毛虫居るだけで全てを物語る
十菓を引き来しと云ふ言無けれど
手に当るものはと見れば藪蚊なり
新じゃがの薄皮ほどの幸せも
金魚屋のグッピーの眼が忘れられず
振花のういういしさがこみあげる
海に水母陸くがにあぢさゐ漂へる
吸呑みのやうな花つけすいかづら
あぢさゐの色脱けて雨締り無し
甚平の食い込む紐をゆるめをり
雨の夜をいやに元気な蚊が出でて
ほじくれば幾つも出てくる西瓜種
飲み頃と持ち出してくる梅酒瓶
定年後扇子が家に遊びをり

大リーグ観戦団扇持ち替えて
父の日のあらためて見る脛なりけり
徒然に梅雨の抽斗開けてみぬ
石垣より吹き飛ばさるる蟻見たり
膝小僧うらはずかしき半ズボン
雨乞におそ頼の真似事したりけり
醬油壘押さえに梅雨の置手紙
宅配の人にあはてる裸かな
相応の薔薇の門あり領事館
マタドールレッド激しやカフェの薔薇
繁茂せる十葉へたに引かぬがよし
たはら麦程の軽みの一句欲し
花合歓に曇天覆ひ被さりぬ
からつきし雨に弱くてたはら麦
金魚屋の布袋草よく肥えてをり
薔薇どきの噴霧器門に置き忘れ
気まぐれ梅雨降ってきたかと取り込みもの

大濤に手玉にとられみずくらげ
水は尿にゆっくり変はり明易し
夕立熄み雨音の輪を狭めくる
曼陀羅華咲けば豆州の妻良おもふ
旺孫なる夏に生まれて嬰の名美雨
ありとあらゆる容器並べて水遊び
ごろ寝して畳の蟻に親しめり
あぢさゐの花のあはひの水の膜
あぢさゐの精気そろそろ脱けてくる
濃紫陽花雨の塊り落しけり
山青葉もつて客人饗す寺
カサブランカとかや云ふ百合咲き出せり
雨音に追いかけるゝ蜥蜴かな
振花の根がぶち切れて口惜しかり
麦焼酎あほりあほりてカチャーシー
草蚩そこそこと指さすさき
夜の蟻携帯電話を跨ぎ越ゆ

ピーマンを多めに妻の手製ピザ
トマト好き故にピザ好き紅茶好き
半夏生ピザの具手を替え品を替え
この暑さ身体を馴らす他なければ
気休めの団扇あふぎとなりゐたり
纏はりつく暑さは開き直りても
ビニール製団扇の朝顔色褪せず
コンビニに行くにも帽子・夏手套
こんな日はビールが佳けれ酢のものに
打水の垣越ゆ水の一塊り
鉢底に貰はれて来し金魚の眼
しばらくは貰はれ金魚の品定め
まだ鉢に馴れぬ金魚を寝しな見て
灯点して鉢の金魚を散らしけり
熱帯魚所帯臭さを捨てゝ見る
金魚など飼うて年金暮らしの身
金魚また死なせてしまふ金魚運

萍は破れし穴を繕へる
あやふやなサイダーの味雨籠り
暁の虫音交りの雨降れり
合歓の花風に散々雨に散々
ごたごたと物を置かぬが夏座敷
緩きもの肌が覚えて更衣
病葉落つ鋼はがねの音を立てゝ落つ
夏の雨白黒映画の画面ぶれ
蜘蛛の囿に捕られし顔の後始末
笹正宗鯨山椒にすすみけり
干しわらび乗りて会津のわっぱ飯
夏座敷豆麩浮かせて会津椀
●七月―九月
駒草を囿ふ鎖の霧雫
苦瓜料理出され箸つけみしものの
冬瓜汁すすまぬ箸を奨められ
桔梗蕾みて鞍馬天狗の被りもの

揚羽蝶雨後の路地より発ちゆけり
通行人
こんにちわ上がりましたネ梅雨のあめ

母の記憶虹より淡くなる勿れ

草むしりして来て茗荷の出来云へり

ひとり酌むビールを余す夕べかな

金魚玉留守を任されるたりけり

悼 名古屋章
ドンガバチヨの声優梅雨に隠れけり

梅雨雀フェンスを上り下りしをり

かたばみの花の淋しきかぎりかな

ちっぽけな青柿にしてお恥ずかし

あやかしを畏み畏み海開

濤音に犬の追はるる海開

知らぬ間にあらあら薔薇のうどん粉病

屋上の風を肴にビール酌む

立葵歩いて直す病あり

白木権母に忘らる日が来るか

雨一日金魚が浮いて死にさうに

撒く餌に金魚なついて来たりけり

すててこの上よりあはてゝ履けるもの

とある日の梅雨の合間のコップ拭き

すててこの膝のところが薄くなり

すててこのまゝ玄関に出やうかとも

梅雨の本ブックエンドに挟まれて

習性
金魚餌を貰ひ一礼後ずさり

蕎麦ポーロおやおやこれは梅雨湿り

突っ込んでいやはや蜘蛛のねばる糸

蜘蛛の囿の幾つもあれば破り甲斐

晴れ間縫ひ薔薇に噴霧器鳴らしをり

藪からし怪しき光り放ちけり

軒風鈴風のいふこときかぬなり

強く吹く風に乗り換え碧揚羽

簡単に生きる金魚を見本とす

鉢の金魚一つ一つの無分別

薔薇真つ赤チラシ一切おことわり

蔵王山麓・酪農センター
蔵王見てアイスクリームてんこ盛り

遠刈田郵便局に入る燕

蔵王・お釜
霧の中バスはもたもた蔵王嶺へ

霧の中ガイドお釜がある筈と

足許の白山千鳥の他は霧

白靴の一団お釜を覗き見に

念力で霽れるお釜の霧でなし

霧濡れのお釜の石に御注意を

山小屋はヴォイラー焚いて昨日まで

飛瀑音筋といふ筋伸ばしけり

草刈つて蔵王縦断道路脇

蔵王温泉
湯をうすめうすめ夜霧の共同湯

ミズゴブの突きだしビールうまかりき

*ミズゴブはミズの実

霧の夜の湯町の上湯下湯かな

朝湯して湯花は霧の淡さなる

露天湯の湯口の硫黄霧呼べり

戻り湯の湯町坂がち霧にほふ
夜も更けて霧に灯ながす老舗宿
濃霧の夜壁越しにこゑ共同湯
ガタの来し下駄箱霧の共同湯
土産物屋をひやかし霧冷え宿泊衣
シャツ通す冷気朝霧湧き止まず
朝霧の樹間ほのぼの明るめり
蜘蛛の囿に朝霧の粒あからさま
庭園灯さ霧の他に訪ふものなし
霧退くと思へば寄せて白樺に
朝霧に散歩の下駄の緒の緩し
坊平
高原ゴルフコース敷地のヤナギラン
うまごやしスキーヒュッテを取り囲み
エンジンブレーキ響かせ下りる夏蔵王
さくらんぼ狩のツアーのごいっとうさん
さくらんぼ狩の観光バス横付け
さくらんぼ狩をある日の天童晴れ

試食してピンからキリのさくらんぼ

さくらんぼ天近きほど甘きとぞ

さくらんぼ熟れし証しの一光点

夏帽山寺の囲む山寺案内図

菩提樹の実ほとりより発つお山入り

沙羅咲いて且つ散る根本中堂前

万緑に磐を配す立石寺

ころり往生阿弥陀を拝す夏衣

杉皮の赤むきだしに夏の山

額に汗お山詣での首手拭い

十葉の見目うるはしき立石寺

蟬の尿ならぬお山の通り雨

赤紫蘇にお山詣での汗拭ふ

掛けごゑを専らに登る青葉山

玉の汗五大堂にて一休止

五大堂風あり扇子納めけり

磴巖し十葉の辺に弱音吐く

汗止まぬ上り弱音はあきらめに

仁王門汗し過ぎれば膝笑ふ

磴攀ずる蟻の一步を重ねつゝ

丈六佛涼しみ拝む御居処かな

かにかくに玉の汗かく千余段

梅雨どきの湾岸道路灯の連鎖

狩衣に風はらませて大祓瀬戸神社 夏越の祓

祝詞の間蟻を見つむる大祓

神主の出を待つ木履大祓

むにやむにやにむにやむにや和せる大祓

蚊とんぼのやうな神主大祓

草原の端つこ押え捕虫網

文字摺草団地の芝に交り咲く

洗濯物畳まれてはと蟻逃ぐる

取り込まる洗濯物に子かまきり

捕虫網押えたままで大きな声

熊蟬の大捕物となりにつけり

ゴキブリ駆除家の隙間といふ隙間

藪つ蚊の敵機来襲眼を凝らす

ゴキブリ駆除硼酸だんごをへエとみる

よそゆきの水玉模様天道虫

冬瓜の煮方煮崩れ防止策

吝ん坊のごとく冬瓜煮てとろ火

冬瓜の銀あん下処理とは何ぞ

晩酌の松魚にちよんと擦り生姜

口中に飛ばす枝豆いい感じ

土左衛門欲しがる海の開

土左衛門盆波に乗り材木座

ノースリーブ横須賀をゆく独立祭

洗濯屋蒸気しゅっしゅつと独立祭

軍艦に四万六千日の波

街ぼこりさらりとながし烏龍ハイ

コカコーラにおくび連発独立祭

生まれくる子のごとに尽く願の糸

突堤に舟虫しやしやり出て祭

石齧る音も混じれり草刈機

祭の中しやくりつゝ泣く女の子

砂金沢八景 乙鱸海岸の城築きし王子潮浴びに

浮輪の子くらげの拾いごっこして

はしやくごと尻をぷりぷり浮輪の子

職退きて今夏で三年竜のひげ

楊梅の朱ヶ夏落葉方円に

大方は妻の筆跡願の糸

「金魚さんご飯ですよ」と餌やる孫

のうぜんのうぜんの散りやうさしづめ振袖火事

料亭ののうぜん下火となりにつけり

コンビニに盆供のセット出廻りぬ

釣具店祭提灯戦がせて

朝の入江ええ恰好して鱸飛べり

線香花火じゅじゅじゅじゅと牡丹より

線香花火踊る小松葉大松葉

線香花火終の柳は公家のひげ
あらあら徹下駄箱の靴搔い出して
黒揚羽おつとこちらの道でなし
朝顔の花に従ひ葉もくたり
節電や掠れて鳴れる軒風鈴
鼠尾草も売られスーパー花売場
居間塞ぐ裸寝妻に咎められ
夏萩のはらほろひれと葉の靡き
風鈴の引き込む風の裡にをり
夏の夕虫の語らふ繁々夜話
百日草今どきこんな花咲かせ
かはほりの妙な飛び方正飛び
かはほりやなかなか暮れぬ墓地のそら
近道は墓地の脇道盆踊
彩と云ひけふの朝顔奥床し
しどろもどろに鳴く蟬ありて雨の中
煮え切らぬ鳴き方あればいにいに蝉

氷菓買えと孫の奥の手泣威し
首振の一芸をもつ扇風機
長生きをしさう風蘭見て曰く
風蘭を見上ぐる人のうしろに佇つ
風蘭はそらそらあそこ木瘤の下
風蘭を見て来し夕べ雲呑食ぶ
神輿昇道路端にて腹ごしらえ
立話山車の引き手の減りしこと
山車を曳く中に友あて木遣誦す
蜻蛉捕パパお手本の忍び足
虫籠を覗けば何と瑠璃蜥蜴
朝顔の一時に咲き勿体なし
サルビヤやいつになつたら雨あがる
へくそかづら凡打ばかりの草野球
珊瑚樹の実を過ぐこころうらぶれて
珊瑚樹の実やご本尊修復中
孫吾をあふぐ団扇のへなへな風

ふくらはぎ蟻に登られこそばゆき
雷が西瓜に入れし縞模様
蝉捕りを中断塾に出かける子
石鹼玉飛ばす子追ひかけ壊せる子
ゆすり蚊の気炎挙げをり祭まへ
砂浴びの社の雀祭前
夜店の材鉄パイプなど持ち込まれ
水舎から水借り夜店支度とよ
裸電球柱に巡らせ夏祭
コンビニのとつつきで売る盆のもの
金魚屋の親爺かたへに蚊遣香
金魚屋の親爺と金魚の共喰談
金魚の糞掬ひて待てる店開き
金魚掬ひおたまじゃくしも入り交り
掬はるゝ金魚は隅にかたまりて
よその子が気になる祭浴衣かな
楊梅の街路樹中華街近し

連れ立ちて物の流るゝ夕立川
夕立に足止喰いぬバーガー店
朝顔の明日期す蓄五つほど
家中に玩具踏み場もなき炎昼
峯雲の漲れる日を産見舞
笑み涼し何を夢見て赤ん坊
祭済み元の冥さの八幡宮
わらわらと乾きて蟹の砂だんご
石鹼玉吹ける側から壊されぬ
同慶の至りの冷酒注ぎ合へり
寝言云ふ孫預かつて明易し
梅雨最中とんだ葉の副作用
鼻先に「夏だ！旅だ！」の車中ピラ
夏キャベツ盛り沢山に勝烈庵
ビヤガーデン雨の匂ひの木椅子引く
灼くる道ほじくり返しその上に
掬ひたる出目金の黒抽んでぬ

髪洗ふボトル二つやさてどちら
波に乗り余世は海月の風来坊
遣りつけぬ仕事たたりて三尺寝
新参の金魚が鉢を一巡り
御旅所の氷の下の烏龍茶
日雷孫のご機嫌斜めなり
充分に引きつけ置いて蚊を叩く
生りものの容歪みて梅雨の果
蚊の奴めまだまだまだよそれと撲つ
脚つまみ白紙の上へ蚊の骸
ふうせんかづら唯見てゐてはつまらない
虫籠に蟬の御報謝ありにけり
破裂して石鹼しゃばんのしぶき岩っ角
夏草の穂先くるくる回す風
朝顔のけふ咲き惜しみ一つだけ
朝顔の花能く見んと中踰み
天灼けぬ白さるすべり地に灼けぬ

峯雲より滑走ジェットコースター
蟹さんの型押し遊び灼け砂に
海を見て浮輪ふうふう膨らます
はまなすの花と実の数実が勝ちて
断り無く入り来し蚊なれば平手打
で孫で虫の角さえさはれぬ女の子にて
庭中のでで虫蒐め一つ木に
角つつき子はでで虫の調教師
近頃の蚊いぶし随分いい香り
小柴産地鰯の干物血筋透く
竿の上滑り易くて蝸牛
蝸牛妙な明るさ遺しけり
でで虫の引つかかる殻さてどうする
人の吐く炭酸ガスを求めて蚊
掩体えんたいに蝙蝠巢くふ終戦日
大夕立煙草ふかしてやり過ごす
採血の血止する間の百日紅

空模様怪しくなれば白粉花悄しよげ気
虫籠提げ蟬など捕ってちようだいと
嬰の寝巻ピエロの水玉模様の夏
葛の毳かこらで道の尽きをるよ
鉢植えにして朝顔の鼎咲
夏蝶の眩しき野合見てゐたる
朝鮮唐棉たんたん狸のふぐりぞな
あめんぼの親玉カヌー漕をすべる
ぎこちなく曲りバツタの飛翔線
日盛りの波倒れんとする際の照り
老人の我流体操カンナの辺
夏曉の散歩の顔の血色よき
かなぶんを捕って抛りて戸をびしゃり
灯取虫黙らせんため灯を消しに
二階に赤子階下になぶん喚く家
潜みゐし昨夜のかなぶん灯を取りに
赤ん坊の欠伸おしゃぶりママ昼寝

夕立あと町空響き易きかな
火取虫こんど飛んだら百年目
炎昼の玩具転がしある一間
お願いを連発する子夜店の前
ビール酌む腹のくびれに眼を落とし
葛饅頭お産に一人目二人目あり
振り塩の穴の目詰り梅雨長引く
捕虫網戻りはママがうち担ぎ
潮浴びの手の萎びをり焼むすび
捕虫網破れかぶれに振る始末
向日葵の謹厳実直背を正し
蚊を撲つに眼を宙に漂よはせ
だんご虫節々返す薄暑光
けふ暑くなること確か斑鯉まだら
赤ん坊に敷布妙なる天の川
碧天へいきなり到達雲の峯
白芙蓉鎮まらぬもの鎮めをり

夾竹桃一難去つてまた一難

炎天下三半規管に従ひて

羽蟻また紙に包んで捨てにゆく

畳ある限り羽蟻はそこへ落つ

蚊の止まる耳搏ち据えて耳が莫迦

とりあへずこちちの方へ炎天下

夏休テレビひねればドキンちゃん

焼茄子にまづまづ食のすすむなり

茄子を焼く熱気厨に籠りたる

仏壇より借りくる文月のチャッカマン

妻用意の昼餉小さな蠅張に

アイステイーぐびぐび飲んでまた寝る子

糸屑が絡まってゐるすべりひゆ

首根っこ打てる花火の大罨

横須賀のサンダル履きの開国祭

一夜にして自転車捉ふ蜘蛛の糸

空蟬の興はや失せて掌に残る

空蟬とHOPE机上に昼蘭けぬ

空蟬を机上に置いて散歩果つ

空蟬のやがて忘らる机の上

空蟬も蟬も入れられ一つ籠

空蟬の爪先少し焦げてをり

腑分け図のごとく詳しく空蟬描く

空蟬のかけらも入るらむ長寿薬

みんみに云ひ負かされてをることし

捕虫網継ぎ足す棒が見あたらず

僕捕りし蟬見て呉れと眸の云へる

ここに来て蟬鳴くほんの二三日前

蟬を捕る極意暫く鳴かせてから

風鈴を鉦と聞く日のありにけり

南部鉄風鈴その名に羞じぬ音を

この暑さ躰がついてゆけぬといふ

浜木綿のざんばら髪は幡随院

ほぼ鉢の真ん中金魚の平常心

ひっぱたかれ潰されし蚊を払ひ退け

祭の夜半ベソかいて蹴きゆく子

夏掛を挙げ句の果てにぐるぐる巻

一夜経て悄然からすうりの花

古簾取り替えやうかこの辺で

滴れり三葉虫の昔より

羅の二人は佳けれ納涼図

短夜を寝ねんとするに肋に手

症状の因もとの知れたる涼しさよ

一切を天に預くる涼しさよ

日々のこと天に任ずる涼しさよ

線香花火一本頒けてもらひけり

棗の実エホバのこしらえたりしもの

山林に蟬の蛮声おとろえず

鍛えたる角いつ使ふ甲虫

河童忌の肋撫づれば風の起つ

夏瘦は風体のみに非らざるよ

尻腐れ座りづめなる布袋草

鰻の香ながす鰻松あな憎し

鰻松に入り来鰻のやうな客

ルーペもて紙魚の歯なんぞ見てみたり

古漬に顔を顰める土用かな

羊糞が何故か効きさう夏バテに

かうなれば蟬の殲滅計りたし

空蟬の鋼の脚のとこしなへ

空蟬の宝庫と巡る八幡宮

虫籠の棧に掴まり弱りをる

なまくらな鉄を使ふ大暑かな

アッパーカット啖らひしごとき真炎天

分銅の飛び来ることく黄金虫

スペースはづらして作る冷蔵庫

大山の水が命の冷奴

窓に人ちよんと描きて芭蕉林

夕顔の大首役者めく花よ

桔梗の蕾祈禱の調度に似る
木鋏に木渋かたまる土用かな
パリパリ感好きでレタスとフランスパン
口はさむ余地なき蟬の天下なり
野次馬のやうに馳せゆく蟬見たり
蟬音沁む洗濯ものを取り込みり
車前草に埋もれて道は在るには在る
かるめ焼おたまの上の銀河系
陶工の筋金入りやきりぎりす
蠅螂の美学を学びジャコメティ
蠅螂の斧見よ一点豪華主義
質蔵に月高まりぬ寺前町
蚊柱の柱のづれを立て直す
肅と蟬発たする天下一の鐘
蜻蛉がお手本人力飛行なる
蜻蛉の好みて止まるダンボール
朝曇黄のうちかすむ女郎花

黄は艶なり長けては灼くる女郎花
くさぐさの団扇の中のお気に入り
胡瓜皆すんなり基準値合格品
冷蔵庫に西瓜入れあるぞと出掛け
額艶やかに蠅螂の妙好人
鶏頭の随筆何とかまとまりぬ
落とすものあと命だけ秋の蟬
水飯みずめしの彼の日々母の語り草
もう一つ鳴く蟬殖えてまったくもう
サンダルを履き違へ来し甚平着
タオル一枚はおる裸やバツ悪し
綿飴孫買へと伝家の宝刀泣きを入れ
台風の眼の中にゐて蟬憶せず
葛蔓の何を仕出かすこの勢ひ
一連隊大人に伍して炭坑節
踊の輪間合の空けばそこ詰めて
ここまででは子供の時間盆踊

昼寝覚我翩翩とひるがへり
自転車を漕いで灯点す夜の秋
啼く蟬の後先もなく一緒くた
残照の退く中緇でも見にゆかん
蟬ごゑを薄め薄めて夕風吹く
虫の夜をピアノ小刻みダリエンソ
バンドネオンは虫の息継ぎダリエンソ
夏夜刻むリズムの権化ダリエンソ
墓地越えて風の運べる踊唄
夕風にすちやらかちゃんちやか盆踊り
晩蟬のきのふともなく音を絶てり
ざら紙に蟬の一句を書留めん
精一杯立ってゐるなり秋海棠
台風の巻き添え喰って鳴く蟬か
古簾一枚吊りて籠城す
真炎天雀憶せず足許へ
夏の夜のうしろに廻る灯影かな

つらさうな顔して通る西日中
一切を放置してをり西日中
痛恨の極みの峯雲突つ立てり
蚊遣香背中の方が手薄なり
蚊遣豚おもしろおかしくこの後のちも
踏み外すことが愉快でひきがへる
八月の負ふてゐるもの何々ぞ
古団扇きゅつきゅと骨が鳴るやうに
うるさかり先生口調もかなぶんも
七節蟲の単なる棒があるき出す
関節を秋海棠も持つてをり
もう先が無いぞ無いぞと蟬しぐれ
かなぶんの打身の音をひたと聞く
蚊の刺せる辺りぷっくり搔き壊す
閻魔庁正門脇の百日紅
風鈴の空打ときに見せにけり
うつくしゅうみえる家々野分晴れ

電線のつくづくとある野分あと
台風を生める地球と金魚玉
金魚玉如何に台風荒れやうと
蟬手づまりそんな感じのする夕べ
野分あと長々起きてみたりしよ
濡縁で聞きぬ夜蟬の腹話術
仙厓の布袋図さながら夕涼み
夕月の一刻経つてその高み
武士ものふの風貌なるも蟬非力
野分あと斯く減る蟬音拍子抜け
放浪の木を替え蟬の山頭火
朝蟬の寝言まがひのこゑ一つ
手探りでさがす夏掛あらぬ方
燃えさしの無きやう芋殻焚き了えぬ
芋殻焚く頃ぞとひねる新聞紙
鳴くまでの手順を踏みて法師蟬
野外映画鞍馬天狗のをちさん出づ

大西日覚悟のほどは出来てゐる
蝸牛そこで迷うて何とする
空蟬の背に刻めるは梵字とも
ごきぶりを打馴れてゐて打洩らす
打つ前のまだら縞蚊の凄味かな
先急ぎ西日をさまる当てもなし
変調は杞憂で済みし涼しさよ
台風の素通りてふはなかりけり
自転車生身魂で駄まで運ぶ帰省の荷
ご先祖生身魂に遇ふ面持ちであらせられ
子蟬螂かまって斧を向けらるる
汗のものともかくここに置き申す
盆の挨拶妻がおもむく西林寺
盆近み蟬音そろそろ空いて来し
蟬の音の納まるを待ち門火焚
庭先の何にしやうか盆の供花
魂棚の賑やかしとて葉鶏頭

骨傷みしても現役古扇子
水着より潮したたらせバーベキュー
木に縋る蟬のまたもやドジを踏む
お花畑リフト二つを乗り継いで
右左だう廻ろうかお花畑
雲海をとよもし航けるエンジン音
夜の蟬も十七文字も紋切り型
かなぶんに飛ばれ驚く夜の寝所
捕虫網産土の森一漁り
見当をつけずに飛べる正に蟬
氷河つるつる尻餅ついたら百年目
かへり見るときには滝の威厳失せ
不動滝名前負けして落ちにけり
滝不動苔むすなまくら剣かな
まとまりのつかぬ滝水とはなれり
滝壺へ瀬を替え道の続きをり
滝しぶき女はキヤーと云ったきり

剪りて来し盆花にまだ日の温み
飲食の腹足りてさて門火焚
茄子の他仏は水を糧とせり
きのふけふ仏がそこに居る端居
タイル張り魚屋の売る地のたかべ
盛る夏妻は地力をつけつつあり
喰いちぎる盆の蒟蒻おお熱し
芋殻火に降り出す雨のすまなささう
吾知らぬところで蟬のぼっくり死じに
たたみ込む暑や死神に手を貸して
人はローン蝸牛は殻を負ひ晩夏
酸橘得しされど秋刀魚は旬ならず
夜の秋赤鉛筆が見当たらず
揚菓子の拍子抜けして秋湿り
浜木綿はタカラジェンヌの長まつげ
朝顔は花より種子に精出して
墓参栃木田沼とて葛生に近き片田舎

雨の日の今日の句材は金魚鉢
ピースからホープに替えて終戦日
マツカサー銜えパイプの終戦日
終戦日目当てに組まるドキュメンタリー
先頃の案山子の装なりのモダンなる
田沢湖は青嶺の間に手の窪ほど
孫六温泉
黄花のそれコウゾリナとか云ふ草か
混浴の洗ひ場奔る青蜥蜴
山間を雲ゆく晩夏の孫六湯
孫六湯山の蜻蛉は岩場好き
山道の腐れ木株に木の葉蝶
混浴の慈母観音に目の遣り場
堰とどろ山に秋くること早き
湯治宿つと山清水引き込んで
捨てゝある湯宿の蚊遣灰白し
紅すすきほどにあからみ山の湯に
混浴の五人に秋日あけすけに

混浴のアダムがイヴに蜂指さし
混浴の脱衣場秋津の入り来たる
混浴の蜂の来る湯に今一度
混浴の真上の大き茂みかな
孫六湯前夏川の展けたり
混浴の女岩踏む跣の音
混浴ひようの飄ひょうと上あがれる赤裸
黒湯温泉
蟬しぐれブナすらすらと生ふる森
真清水に蕨の塩抜き湯治宿
がまづみの色づく頃の山の湯に
混浴は熱め折々秋津くる
混浴のずばり入る湯に秋津来る
鉤の字に湯治棟あり初すすき
大釜温泉
足湯して簀の子に止まる秋津見る
大曲
駅長の粋な計らひ花氷
帰るさの横手の花火蔵の間
小安峡温泉
稲不作うつつたふ婆の冷夏の眼

きりぎりす灯を取り損ね露天湯に
川原毛地獄
蟻枋を黙々のぼり黙々下る
黒揚羽おどろに川原毛地獄越ゆ
泥湯温泉
側溝に蛇の亡骸うち捨てられ
夏鳥海山ちようかいはるばる来たる者にこそ
鳥海山の夕榮ながく送り盆
西馬音内にしまね
鳴く虫も鉦のやうなり西馬音内
皆浮かれ戯け地口の踊唄
皆踊る笛に鉦っこハギ衣裳
嬢じよっこ達めかして西馬音内盆踊り
踊る夜を嬢じよっこ真紅のしごき帯
彦三頭巾キタカサツサと踊りけり
彦三頭巾白鉢巻が夜涼呼ぶ
一踊りおじゃれ篝火盛る間を
盆踊り爆笑もののエロ音頭
櫓の上囃子地口のいかかはし
よう踊れ西馬音内女にしまねこのハギ衣裳

嬢じよっこ等の踊り浴衣を見てたんせ
盆踊りホームステイはお寺にも
踊り見に二万石橋うち渡り
盆踊り甚句ことば詞ことばは野趣あふれ
亡者踊り鼓、鉦すりがね打鳴らし
晩涼の橋の向うの寄せ太鼓
亡者踊り夜半の篝火掻き立てて
撒き砂を踏みしめ亡者踊かな
撒き砂に願化踊りの雁形舞
彼の世にも搏ちて願化の鉦鼓
西馬音内夜更けて踊り達者が出
願化踊り篝の薪目減りして
夜も更けて彦三頭巾の虚仮踊り
見物衆踊る腰つき見てたんせ
優に六尺彦三頭巾の踊るかな
篝の前こごとと亡者踊かな
豊年踊り地口も婢腹かが満作と

踊果つ町筋簀なほ染めて
帰るさに編笠抱え踊人

踊り見て宿は雑魚寝の公民館

羽後牛のステーキ青嶺滴るに

またたびの青実おまけの一掴み

朝市にミズの瘤買ふ旅の者

朝市の足下目遣れば箒茸

丸茄子朝露弾く梵天丸

水茄子の笹売り朝市たて込めり

夏川ほつと湯田 湯本温泉のここらが熊の通り道

笹峠 蝸や夕日の里は見えながら 子規

紅すすき湯田の町並見えながら

子規ここを下りゆきしか鴨花

秋あかね和賀流の句碑の肩選み

きりぎりす奥羽山系横たはり

湯田人の朋もてなしの鯉揚げ

平皿に呆と口開け揚げ鯉

ミズ涼し辛子のからみ具合よし

湯けむり上げ和賀流の里のたうもろこし

和賀川の鮎瘦せ瀬につく頃ならむ

べこ虻は炭酸ガス好き車中にゐる

晩涼の胸に砂寄せ砂ゆっこ

汗だくのおでこ拭はれ砂ゆっこ

額に汗尻に火がつき砂ゆっこ

またたび酒漬けゐて羽後の旅名残

風通る所に身を置く夜の秋

歳時記の表紙藍鉄夜の秋

落蟬のまた此処にも思ひかな

落蟬をヘッドライトのよぎり消ゆ

方寸の景見て死ぬる蟬ならむ

蟬を捕る子のためにあり八幡さま

捕虫網蟬を大地に押さえ付け

頭を寄す子ら一人が蟬を押さえ付け

手すさびに処暑のコップを拭き並べ

声つくりままごとあそび蟻さんと

ばらばらに鳴いてけつかる処暑の蟬

芙蓉咲くや一方的なあかるさに

いま正に蟬の天下といふべかり

茄子汁にすこし早めの夕餉とる

混濁の一日なりしなすび汁

茄子汁の味噌の香残暑の香なりけり

佳き風の四通八達夜の秋

夏惜しむ豆腐に絡め豆板醬

あけつびろげの港のヨーコ ヨコハマ 夏

ことさらにことしの残暑手強かり

おのづから秋となりぬる爪楊枝

ピザ食うて残暑なんぞにへこたれじ

ぎらぎらと日差すなかにも秋意かな

高低を選ばず止まる蟬となんぬ

暮見とがめられてはもぐり込む

夕蟬の一段落や飯にせん

処暑のそら土器かわらけいるの火星現る
第二子もおなごと聞けり鳳仙花
萍の仕掛成程斯うなのか
ツッキーニ実結ぶ蝶の肝煎りで
駆け足で雨くるアキノエノコログサ
落蟬の一つは玄関灯真下
落蟬の足蹴にされて一、二転
指圧教室海馬のごときを稽古台
指圧教室夏バテの筋掴まれて
秋興の経穴ツボの名くさぐさ人体図
肩ツボに潜む肩井ケンセイ指圧して
竜淵ツボをゆく登音つぶさに夜の秋
湯治場の山深ければ葛の花
蟬止まる所に拘る太郎杉
豆腐一丁あれば御の宇冷やし酒
夏満月妻のうながす処に佇ち
葛あらし葛の横腹見せにけり

焼酎は薩摩で飲んであれ以来
火星大接近妙なる夕顔に
茄子汁や妻のきりもり四十年
アロハシャツ色地味にして柄派手や
何にでも被せるラップ西瓜にも
寄りかかる妻ゐてなにかと助かる夏
醤油瓶昔磨けりブラシの花
晩夏はや煮詰め過ぎたる豆腐汁
熊蟬が朝から納豆粘り出す
殻負へる蝸牛より倅せに
泡盛に時間稼ぎをしてゐたる
金魚の死母には伏して言はずにおく
めうが採る数の目当ては特になく
蠅虎即曉斎のかみつき貌
玉すだれ裸叩いてゐる男
端居してみな遠のけるものばかり
萍の水栽培を厨にて

気づかひの梅干茶漬忝なし
夏萩や地べたを伝ひ風起てり
訃報聞く梨の皮剥く音の中
数珠玉を採りて化仏の薬壺にせむ
油蟬一列縦隊なせる幹
会葬父郷 葬送の人に躓きゆくしじみ蝶
書家にして露の世あとにせられけり
天が下灼けある墓誌に余白あり
これはこれは喪服にぶつかる稲子麿
古里のはたはたみんな祖おやの貌
はらからと喪服を灼かる炎天下
こんなにも灼けある墓石西林寺
墓地の草しみじみ引きてをりひとり
扇風機悼みの風を送るなり
夏葎人を葬ることに馴れ
秋海棠思ひ至るは相田サク
懐かしくサクがあるなり夏座敷

島田家の溝萩常のいる湛え
葬りて西日切り裂く中にをり
骨壺に葛生の青嶺見せ戻る
骨壺は溝萩盛る家を出で
出流観音 満願寺
蟬しぐれ寄進杉苗拾萬本
出流山一足早く水の秋
沢沿ひにのぼり満山秋海棠
ががんぼのぶらさがりをり滝不動
滝水のとどろに大徳出づる寺
星野遺跡
赤紫蘇畑繩文人の棲みし丘
この丘の木の実が主食縄文人
大谷観音名にし負ふ石の大谷の蟬しぐれ
大谷石佛秋寂ぶ唇に紅さして
秋そこに横臥屈葬人骨に
上野周辺
ずぼらな吾東京に出て二科を觀る
遠くを見るゴリラに園の晩夏かな
秋づくと上野の山を歩きけり

東照宮 松崎鉄之介句碑
偉丈夫な鉄之介句碑蟻攀ずる

上野山精養軒の蟬しぐれ

蓮見たくなりて上野の池之端

くさぐさの碑の中スッポン感謝之塔

紅蓮上野の山の負け戦

蓮の実の青き実弾抜きて見す

こなたよりあなたへ渡る蓮の風

岩崎邸百合も進取の香り立ち

岩崎邸木斛の実のあかがね色

建前の柱に蟬も招ばれけり

検針のこんどは瓦斯や日の盛り

亭々と晩夏を送るホルトの木

かなかなのあと艶消しの油蟬

歩くなら坂本あたり法師蟬

啼く蟬のただならぬ時過ぎゐたり

その羽音でつきり蟬と思ひけり

百日紅樹皮の剥落続きをり

栗おこわ持って実家へ妻いそいそ

云ふならば初老夫婦の夕涼み

実習の指圧のいろはもみぢの手

なまり節喉につかえて万事休す

新涼の柳手といふ指圧法

夏痩せて妻の指圧の稽古台

茹で栗の当りばかりと言う訳には

寝酒などともとやらぬ夜の秋

鳴焼のわが家の味は極甘め

夏葎掃出窓の高さほど

おっとりとして過ぎてゐては羽抜鳥

草の名はそこそこ虫の名はぜんぜん

茗荷汁気兼ねなき友いつか減り

目もさやに秋は来にけり牛蒡の葉

萩と露色のつり合ひとれてをり

地に降りて人に動じぬ秋の鳶

前山に残暑色濃くのこりけり

少しづゝ山は色づく榎の実

山萩の地味でゐて且つ和むいろ

女郎蜘蛛朝は黄金に張れる糸

蜘蛛の囿もあさみどり帯ぶ芦の間に

幾何学を篤と学びし蜘蛛ならむ

鉛筆でむかご落として一つとや

車前草の穂の逞しく夏送る

鬼やんま棲みつく山に露降りて

なまる身にすっかりせよと氷水

悶伽桶の水鳴る一人の墓参かな

線香の付け火に手を焼く墓参かな

墓洗ふ向う滴る唐沢山

蓮田に潜む少年ぎんやんま

少しづゝ暁の色貰ひ榎の実

秋草と一つ括りに野辺の草

秋草を厨廁に頰ち活け

青花を摘むとき露が手に当り

顔にくる今朝のあつさや会葬日

活け込みて卓上秋の野辺とせり

トカトンと秋も始めの家造り

草叢をごそつかせぬしは蟋蟀

指圧爽やか突手柳手拍打叩打

雷夕立関東大気不安定

胡桃割る小部屋のなかに控の間

鴟の昼絵本のつづきせがまれて

鶴鴒とただちに判る翔び方よ

燈火親し袖珍文庫二色刷り

秋の灯に詰め替えてゐる旅靴

●十月―十二月

穂芒の末路思はず風吹けり

広がれる鱈の水輪のゆき着く岸

つぶらなるなんきんはぜの実好日や

無聊とて秋はかまけるもの多し

囿の央に押し出しのよき女郎蜘蛛

初鴉の喋々来意告げてをり
心臓のお薬六粒露けしや
鴉のくる一劃青空見えてをり
死人花薬は変じてむらさきに
仙厓の拙き月のなぐり拙き
見当のつくこゑ過ぎぬ秋簾
秋冷のさし込む膝を二夕さすり
前後しててんでこ舞のしじみ蝶
しじみ蝶捕らむとすれば擦り抜けて
秋日受く額うつすら膩じみ
黒揚羽手離す一茎揺れてをり
車前草の穂の擦り切れし岬みち
木瓜の実の一つとてつもなく大き
揚げコロッケ油噴きゐる秋日和
あやす嬰は地蔵の重さ秋の暮
小心の秋の雀も餌貰ひに
雀あぐ秋の小さな土埃

月光に色を奪られてまんじゅさげ
手にとりて豊平の初氷
旅立ちや朝寒の息弾ませて
手始めに山の頂もみずれり
高山宵祭
布袋からくり神髓見する秋の空
布袋台金冷まじき機関樋
天高くからくり繰れる布袋台
布袋台覗けばからくりあやつり衆
秋空を金欄屋台押し移る
下三之町の宵闇屋台来る
宵祭屋台の端は神楽台
高山の宵闇屋台の目白押し
星空ゆく屋台提灯夢うつつ
五百提灯屋台の後後から
屋台曳かるさん法被姿かな
星空に聳えわけても鳳凰台
高山に思ひ知らさる月夜寒

高山の月を歩ませ練り屋台
屋台曳き廻し
御所車金具さやかに大八台
栗材の台輪屋台秋日差す
宮司さま馬でばかばか御神幸
ごじんろう
秋空へ打ってこどもの鬨鶏樂
御神幸一文字笠キツと締め
御神幸しようごい隆と押立てて

*しようごいは神替わりの樹木

冬青(そよご)の訛りか
城山公園
山寄りに町は造られ朴もみぢ
照蓮寺
花すすき仏拜んでゆかれよと
色鳥の目も覚めやらぬ御神域
自然薯黄葉城山の径明るうす
高山の護国神社の栗小粒
東山寺町
棗の実想ひにいろいろあるやうに
素玄寺の芒丈なす荒法師
水澄める宗猷寺町たもとほり

色鳥は山から来たり宗猷寺
洞雲院
秋うらら山辺の寺の一位垣
遠来を寺の紫苑にねぎらわれ
辻々に秋の日を浴み秋葉さま
江名子川水音棗に響かせて
水の秋石樋渡す江名子川
川べりに棗ここたく鉄砲町
朝市の地べたを覚ます鷹の爪
朝市の味見くさぐさ赤蕪
かぶら
一人泊つ長夜に飛弾の味噌せんべい
棗の木青実ここたく製麺所
旅先の飛弾に酌めるや薦豆腐
飛弾人に棗の砂糖煮手ほどき受く
飛弾国府・清峯寺
力草円空佛見に寄らむ
鶴巢村刈田越しなる円空堂
坂がかり円空堂へ嫁菜みち
円空堂鉄錠外す音露けし

うそ寒の頬つりあがる円空佛
観音の千手は剣冷まじや
空稲架はあたかも牛の四つん這ひ
スクーターとばす農道刈田晴れ
山門にスズメバチの巢林昌寺
冷まじや地獄絵仕置の白女體
赤錆の棗も交じる川辺の木
鯉一転秋水を遡るあり
和ろうそく作り冷まじ親爺の手
一人酌む酒は蓬萊宿夜長
秋簾五枚連ねて真宗寺
古川の町貫きて川澄めり
段のぼる気多若宮の秋の蝶
古川の秋の蜂ゐる総鎮守
上気多の段々畑の稲の株
徒組は割喰う旅や蜂を除け
祭待つ茶房にキツネメイクの男

行列の狐のあねさんかぶりかな
みやうみやうと霧の乗鞍スカイライン
亜高山帯のもみぢの色はと見て
乗鞍の霧を糧としさるをがせ
乗鞍の紅葉如何と登りつめ
乗鞍のことし色悪しななかまど
乗鞍の紅葉にスリップして下山
落葉の中踏み当つ走り根の撓み
栃黄葉打つ雨音に包まれし
阿弥陀光桂黄葉の押し照るは
乗鞍の雨来て黄葉素っ飛びり
日雀啼き大日岳の霧霽らす
水飲むをルリボシヤンマとしておかう
木道に人に蜻蛉の寄り易し
乗鞍の巖も黄落せんとせり
乗鞍の霧にトウヒのかくれんぼ
秋麗ら眼にせる白樺一本目

ひとりでに唄が出てくる花すすき
乗鞍の秋磧より林道より
白樺のほつりをながれ水澄めり
水檜の実の落つなかに休憩す
大磐が目隠し露天湯ヤチダモ散る
赤もみぢ黄もみぢとことん愉しめり
檜の木沢もとより水檜黄葉して
湯元の辺穂の真つ黒な猫じゃらし
黄葉どき髪膚完爾と硫黄泉
乗鞍の黄葉嵐と云ふに遭ふ
草洪のほひ抜けずよ夜寒の湯
黄落の泡の湯で乗る五人組
上高地
上高地ビジターセンター木々の秋
山化粧ふケショウヤナギも化粧して
大正初期植ゑしカラマツ黄落期
サワグルミ端正な葉のみずれり
先づ洒落た葉なりハルニレ黄葉とよ

霧好きは一位に如かず摩利支天岳
肝木の熟れ実は鳥に美味からず
上高地帝国ホテル樅の秋
黄落の雨の跳ね見ゆ木道に
大正池雨にもめげず浮塵子飛ぶ
秋の雨大正池の砂礫打つ
シナノザサ秋水音もなく流る
鴛鴦がゐる増水の梓川
木道の終端黄落振返る
梓川ヤナギもみぢの散り込む瀬
清流は曲つてみえなくなり秋風
安房峠まだら模様化粧う山
濃尾バス尻を振り振りもみぢ山
鮎並でありし覗かせ貰ふ魚籠
根釣して葉山の鳶に啼かれける
石路綻ぶその数好日とや云はん
褒貶は成り行き任せ石路の花

穂芒に声在りとせば御空より

御用邸巡查眺むる秋の海

日比谷公園ガーデンニングシヨウ
公園の秋トピアリーコンテスト

サフラン買ふ客筋それとなく見をり

サフランの一球おまけこゑ弾む

秋空にジラフ仕立てのトピアリー

フィアンセに菊束捧ぐトピアリー

トピアリー秋のイルカのジャンピング

秋楡のみづる日比谷公会堂

かうなつて仕舞へばさんか散る他ない

医師の云ふ風邪軽んぜず山茶花どき

一団の黒の礼服石路日和

高々とさざんか垣の壁なせり

序幕から蜻蛉が飛んで村芝居

生きあせり無くもがなとも氷頭膾

紫蘇漬の紫蘇の粒嘔む一人酒

秋雷のさあらぬてい体に鳴り出せる

秋雷の果てはザとくる雨の快

秋の雷どすんと荷物おろすごと

なほ容とどむ朽木に蝸牛

秋草を食卓に活たつきけ愛づ生活

肌寒や雨の青どんぐりを見て

擦過音身ほとりに殖え秋半ば

雨の鴟隣へ移る諍しやうひごゑ

秋晴れのヒバを降りくる猫の爪

自転車の遠乗りをして鯨の海

秋風に釣れてひらひら海たなご

草叢にラジオ響かせ根釣人

根釣人脳梗塞のことをぼつり

突堤にリハビリ兼ねて根釣人

突堤に半日ねばる根釣人

根釣人帰り支度の函一つ

新松子掠めて飛べるヘリコプター

柏楨の茂み宿りの雨の鴟

中継ぎに吾が家の一樹雨の鴟

様子見の開き加減や雨の菊

その生活たつき手に取るやうに萩便り

こんなこと似合はざれども懐手

風の日は湯が愉しくて冬隣

菊花展日和と家を後にせり

木犀や同窓会に出向く道

木犀も記憶も薄るるばかりにて

所在無き雨日を汝も女郎蜘蛛

敗荷大船植物園にたぶらかされてゐることし

敗荷に風のつれなくなりにけり

敗荷の顔向けならぬてい体に惰気

青蓮の器量の程も斯くなりて

敗荷の無頼たること尚止めず

敗荷の全うせるものここに見き

腹藏なき敗荷となり天が下

水破る音のみしりと蓮の奥

聖樹の種証せば発光ダイオード
送金を了へたる安堵石路の前
サフランの花の馬鹿馬鹿しさに惚れ
冬菊に佇てばすぐ来る夕べかな
試飲の顔大きくゆがめ木天蓼酒
冬菊をいとほしむ眼を誰もせり
下積みのあくせく知らぬ都鳥
喜んでピザ生地を伸す十二月
シーサイド・マリーナ聖樹の辺のデイト
うる覚えの聖歌ミッシェンスクール出
暮れてなほ母艦遊びや青木の実
段取りをさらつてをりぬ冬日向
金柑の笑顔そこらに振りまきて
古俳諧ほどの目出度さ万年青の実
潮水に海鼠生かして風鳴る日
晩酌に海鼠おだぶつする夕べ
海鼠に髻あらば弁士にうってつけ

海鼠に小便そんな愚行もしてみたく
頭掻く海鼠なんぞも見てみたくし
海鼠食ふときは鳩尾暗くして
指さしてこれが海鼠の中の首領ドン
海鼠噛む顔を四角に三角に
海鼠噛む歯がまだありて好々爺
海鼠酔に漬ける殺生いたしけり
硬直の酔のもの海鼠勘弁な
酔海鼠に錆つく顎を使ひけり
これやこの身につまさるゝ海鼠の腸
酔海鼠に顎の運動いちにつきさん
このところ海鼠倣うて黙しをり
大海鼠無理難題のごと置かれ
裏返し海鼠の何だこの突起
海鼠の脚あらかた疣に退化して
籠る間も時移りをりはずみだま
チンゲン菜油を飛ばす十二月

振り込みの控隠しに十二月
巨人物故俳人逝く年そここに大き穴
数え日の朝の日に舞ふ綿ぼこり
臘梅の花くたくたになつてをり
年寄りはず屋を好む枯十賊
戻れば肅然として冬けやき
焼鳥の串まで焦げて酔迅し
吾がかぶり振る人參を妻買へり
手狭なる机の上の冬日差
同床異夢冬の花火を俱に見て
きなくさき戦が間近焼鳥シシカバブ
世間体一つ外せば冬青空

第十一句集 石鏡

●一月―三月

万年青の実陳ひぬていやはや面白し

我が起てる埃の見ゆる大旦

池氷り居るといきいき申しをり

広がりて氷らぬものに鴨の水脈

鴨急ぐ方面白きことあらむ

水鳥の羽ばたくことの終に無し

氷らざる池半分を鴨往き来

初閻魔鎌倉 円応寺眼光通らぬところ無し

初閻魔鼻腔より息出し入れす

初閻魔凍みを振り切る大木魚

かんばせに転読の風初閻魔

初閻魔転読僧の夷ごゑ

あべこべに肌着着たるか大旦

草亀の一投足に日脚伸ぶ

年祝ぎの餅召せ井戸神廁神

じつくりと廁窓より初景色

人日の耳搔きの塗り剥げてゐる

ザラ紙に鉛筆とりて歳旦吟

初詣参道だだっびろきかな

年賀用生菓子鶴亀しつとりと

誤植訂正はやばやと載せ新年号

うろ覚え唱歌張り上げ初湯殿

年祝ぐに洒落てのむ酒ジンライム

年立つと宣ふ鹿のやうな貌

軽トラ三浦半島 盗人崎ック横付けにして大根引

光降る大根台地の大根引

大根台地はたて涯はたてに狂ふ沖つ波

覆る白濤を背に大根引

潮けむり大根台地のどん詰り

背をどつく新手の風や大根引

天つ日と風を糧とし岬大根

みしと来て葉欄に節分まへの雨

明日節分雨草木をうるほして

鎌倉五山一位禅林の梅固し
建長寺 節分会
扁額

梅万蕾爆けて「天下禅林」に

豆撒けり天下禅林天空に

追儼法要転読海東法窟に

びびびと追儼会の燭伸び縮み

法堂に太鼓どんどろ追儼寺

節分興行びん助一座かつぼれを
櫻川びん助一座

袂持ちミス鎌倉の福まねき
八幡宮 節分会

春招く和菓子「ぎざはし」段葛

探梅の手土産鳩の豆落雁

春望の甲板三百六十度

昼霞天然ガス積む船の影
LNG

安房へ船立春を経て海大人し

東京湾横断フェリー春溝切り

立春の洋上に我解き放つ

浪漫あり海猫舞ふフェリーターミナル

踏切の傍に菜の花のほほんと

悠久の青空があり花菜の上

菜を摘みに車は袖ヶ浦ナンバー

押し移る日翳は見えず花菜畑

和田浦に遊んで鯨のステーキを

ひつじ田の照る中往けば老け込みさう

和田浦のあらせいとうのかほる徑

和田浦の金柑海に照り負けず

南房の花摘み濤色スターチス

ハウス物あらせいとうを家苞に

古草につらつら安房の日の射せる

花菜見に足を延ばして江見大海

花菜の香むんむん太海小学校

錆锚アロエ枯草部落の端

笹鳴のそつちへ行けば島の端
仁右衛門島

笹子来て島の竹藪こそつかす

渡船待つ仁右衛門島の冬日向

少しもの足らぬ花数ハケの梅

甘んじて小さき野蒜も引きにけり

雑木山百度鳴りて寒明けぬ

立春を相変はらずの坊主山

それではとものは試しの紙懐炉

紙懐炉そんな齡では無けれども

芹の水覗き込むにも先づ足場

芹引けばたらたらたと水一縷

そつけなき彩の白梅眇に

盗み見をしてゐるやうな藪椿

探梅といふにはあつさり戻り来ぬ

城郭の一部をなせる梅の花

寒明と探りを入れるやうな眼を

春寒の家押す風の音どすん

春の雲見てゐる我も押し移る

改札にべつとう時化の欠航札

欠航にて安房の雛壘栗摘がふい

群衆の隙間に落ちぬ年の豆

大根畑西風に雀の顔細め
にし

あんこ玉薄皮冴えに冴えにけり

只横に竝べてひひな飾りけり

春荒れの吹っかけ来たる真夜の雨

春荒れの叩きつけてはひつpegがす
びやくじん

崎人に白群青の空大根引く

鏡風切干は痩せ細りけり

万作は微風を糧として漫ろ

雛飾る孫二人目の春なりけり

接骨木の芽のもし囁くなら平語

先達あり渡る鳥にも吾が身にも

梅汚れる頃ならむ瑞泉寺

山梔子の実に手をつける鴉なりし

春は曙けふあれすべくこれすべく
あらせめ

遠景の暮れてゐるなり退紅空

春そこに通草細工の鳩車

川風に鼻昂然と冬磧

日が入り過ぎても困る冬机
部屋に一人焼酎の香と漂へる
山梔子の実に夕栄えのいつまでも
谷戸冷えてはうれん草に甘味増す
春が来る港鷗のモニュメント
通りすがりの人の云へる
癌といふ爆弾抱え谷戸梅見
探梅にうつつを抜かず顔ぶれは
刮げ落とす梅林の土しぶときを
おにぎりの包解く音梅ほとり
探梅のはてこの道でよいのやら
春の川渡りとよもす東横線
手を遣りし先に首筋二月盡
シベリヤを食せばいよいよ寒明くか
眼鏡のつる擦れし一処寒戻り
山椿人目があればはばかられ
ぎうとこゑ居ること確か春の鴟
正面に現れてまさかの春の鴟

素っ首をくるりくるりと春の鴟
さんしゆゆの彩させる芽の暮れかかり
裁ち物の音のぞりぞり春の昼
行きずりのこれある哉の花ミモザ
桃の花鄙びごころを大切に
海へ出てよりの俊足春の雲
辛夷の芽躍らす風のひっきりなし
陽気まだどっつかずの冬木の芽
摘草の籠はとみれば野かんぞう
晩酌に摘む芹これだけあれば佳し
芹摘の一人ひよっこり頭を擡げ
さうですか食べられましか野かんぞう
野遊びの帰り支度か服叩き
母上に八十八度草萌えて
スタジオに持ち込む河津の初桜
啓蟄のかさぶた剥がす男の子
豆の芽のどれも万歳してゐたる

始祖鳥のやうな文様氷面鏡
でも好きとだんご虫掌に這はせぬ
クレヨン画へんてこりんな蝶飛ばせ
己が浮力持て余しをり通し鴨
きさらぎのどの顔も皆勝れ見ゆ
玻璃に風どすんとばかり春浅き
春荒れがつつかけ来りて家が鳴る
春疾風聞きある我が身がらんどろ
梅咲かせて廻る美き風吹く日なり
春水といふこゑ大きめに出でて
礁攀ぶごうなの六根清浄と
些少の借り皆持ち合はせ鳥雲に
結構なミモザと云ひて仰ぎをり
ゼンマイと云ひかけコゴミと云ひ直す
土産さて静岡駅の山葵漬
青竜の如き山葵の擦り下ろし

墨堤の浮浪者に湧く朝ざくら
飛花当る雪洞舟和の芋ようかん
キキと舌焦げむばかりの轉りや
平日の山のさくらを一人占め
花疲れまくりしシャツの袖おろす
しばし居る木椅子は花のつめたさに
横須賀の海に張り出す木の芽山
山鳥の呂律に合はせ花の散る
平日の桜の中を通りけり
里山の下り口三つさくら季
烈風にどうするどうする山桜
花冷えのしんしん山鳥黙すとき
蛇口より水迸り朝ざくら
花見弁当ひらけば鳩の優しく寄る
里山の見馴れたる景芽吹けるか
谷戸住みの醍醐味は是花吹雪
水道で洗ふ掌赤し初ざくら

花なんぞ見向きもせざる畑鴉
すかんぼや女はとかくがやがやと
田蛙のけくけく啼くは先がけ組
春水に小鷺の臍の惚れ惚れと
真昼間の生唾のんで照花菜
遠く見し菜の花を今至近距離
田の底の朽葉に蝌蚪の身を寄せて
こどもごゑ生々木五倍子生ふ山に
桃の咲く畑の縁に道付いて
畑の昼菜の花いろの尿をして
桜狩たふんと水筒背に鳴りて
根っこより見上げ端山の大桜
馬の背みち山の桜はまばらが佳し
蠅生る家にぶらぶらしてゐては
沿線の花見切符を撫しながら
地下街で稲荷購ひ桜狩
ドラエもん映画ねだられ春休

なずな季田沼の通夜は泊りがけ
青む麦こんなに早く逝くなんて
もう一度呼び掛け暮春の枢窓
花冷えの底出棺の釘打たる
花の昼茶毘に附す間の腹ごしらえ
紫木蓮もくもくと日を送るのみ
米寿母の云へるまで生きたついでの花見せむ
花吹雪易者は八卦うち振りて
明日雨の予報に繰り出す花の人
日曜の花散らす雨罪作り
花の日々御飯ふつくら炊きあがり
花筏日を経し彩を泛かべをり
朝寝して通勤の日を遠くせり
いつ見ても櫛の芽吹きへんてこりん
気安く咲き気安く散りし桃なりき
夕暮を呼び出してゐる白山吹
洗濯物掲げ出づれば春の星

大人しくしてゐる春の蠅でなし
匙をもち苺をつぶすこと一途
紙碑として一集編むや暮の春
とろとろと木の芽明りの甘茶仏
ゲートボール春昼をなほ単調に
今月は西向にしむく土ちひ四月盡
あはあはと暮春の露の炊き合はせ
戒名をノートに控え春の暮
松の芯浪うらうらと寄せにけり
ユリの木植え街もモダンに人もモダンに
齋藤齋藤緑雨
緑雨の忌コラムニストが取り上げて
毒舌家齋藤緑雨の忌なりけり
野毛野毛大道祭
大道芸立見燕が頭を掠め
南風に載せジャズ風ちんどんミュージック
大道芸川端柳吹かる辺に
南風吹き抜け野毛の縁台将棋かな
薄暑の野毛髯のチャップリン笑ひ集とる

大道芸ネタを小出しに野毛薄暑
風船より軽き身ごなし大道芸
炭酸水ハヤシライスの木村屋にて
南風の中パントマイムのはじまりはじまりー
野毛の祭当たり馬券のやうな空
皐月賞ある日の野毛の酔っ払ひ
はがき書く皐月の水性ボールペン
青あらし通るところが判りけり
青梅雨のくどきチラシにくどき彩
グラビヤの五月の暦ガレー船
逗子駅前あやっぱりと燕見き
目の粗きフェンスを潜り梅雨雀
萍に吾が空けし穴もう塞がる
酒は会津肴は三浦初かつを
酒酌むや鯨山椒に会津っば
退け時の一年生過ぐ桜の実
つつかける雨に処置なし青あらし

赤鼻のピエロ一札五月空

広辞苑割れば新緑殺到す

ジャスマインの芬々馬鹿に蒸す日かな

青芝を蜥蜴は泳ぐやうにして

連休は何處へも行かず柏餅

一夜干し烏賊のカーテン風岬

連休の二日目若葉曇りかな

毎度のことかたじけなくも新茶かな

蝸牛連休出歩く当てもなく

ペット屋にざりがに入荷五連休

東京のつつじといへば根津権現

蝸牛課題は生活習慣病

楠の花咲いて薄暮を募らしむ

菖蒲湯に貝の切り傷いたく沁み

人怖じせぬ雀皐月の鳩に伍し

楠の花水屋に水のおふれをり

メモ書きの押さえに皐月の醤油壺

衣更へてたよりなき襟掻き合はせ

棕櫚の花生々垂れて負け惜しみ

柏餅人物談義言ひ得て妙

若葉して青葉す杜に神在ます

十匹で何んぼの和金売れゆきよし

閉じてまた開く金魚の口可愛し

麦畑を追はれ鴉の減らず口

菖蒲湯の菖蒲に倣ひ横たはる

はおるもの一枚足せと梅雨予報

鉛筆は2Bが好きこどもの日

古茶淹れて七番日記続き読む

停車してホームが足らず麦畑

人焼ける畑麦畑からからに

何だろと見上げて朴の残り花

朝顔蒔く穴ぼこに種子一つづゝ

朝顔種子浸すに休眠するやつも

遊園地若葉風切る複葉機

ひめじょおん作り込まない庭が好き

海鞆料る妻は手馴れたものである

くるぶしをぶつつけお痛甚平着

蠅虎稚くも貌老成す

お気に入り房州団扇使ひ初め

街往けば正面からくる青あらし

青嵐煽られし身を立て直す

しよぼくれし灯に床延べる梅雨疊

ふっ切らむ老いのしよぼくれ森林浴

コスモスの種を蒔きをり細目して

角々を確かめありく卓の蟻

ほおづき縁日近し愛宕の杜冥く

夏草の丈なす皇居内ポスト

二重橋柳丸々松亭々

ヤットウの皇宮警察森若葉

神奈川の縣花尋ねて崎山に

螢袋山土蒸れし香を放ち

三浦半島 小網代湾

馬刀葉椎みどり溶け込む油壺

小網代湾蟹の棲み分け聞く干潟

甘藻場に甲烏賊の寄る夏近し

浜大根何處から降りても小網代湾

コメツキ蟹健啖にして砂団子

茱萸をもぐ女の腕の種痘跡

小網代の森の育てし赤手蟹

川蜻蛉飛んで翅色薄めけり

穴掘れり森の隠者の赤手蟹

チゴ蟹の小心者に芦の風

チゴ蟹の万歳小旗持たせし

ロンパリの蟹の目干潟観察会

茉莉花に皆鼻持つてゆきにけり

煮冷ましの茄子汁底なし沼めける

立読みも堂に入りたる甚平着

夏潮の煌めき寄する国府津駅

緋カンナに国府津の海の展けたる

国府津駅菖ふかすに片陰無し

瑞々しき水木花挙ぐ塔ノ沢

濃あぢさゐ登山電車はぎくしゃくし

素つびんのノハナショウブに逢ふ水辺

山妻にノハナショウブの季ありし

繡線菊見る目元もやもやしてきたる

極めつけタカネグンナイフウロかな

繡線菊の盛り過ぎしはピンぼけに

お弁当ニツコウキスゲに向き合ひて

霧湧かす花別名をゼンテイカ

もう一声葎切あらぬところより

葎切は詭弁を弄す如くなり

青すすき道をいっぽん通しけり

青すすき仙石原は風に富み

ラムネ玉ころりと仙石原晴れて

郭公に得したやうな顔をせり

足どりのどんだん軽くなる郭公

箱根 宮城野温泉会館

水木咲く青山にして温泉の湧ける

万緑の中の一川ルアー釣

ルアー釣箱根のみどり映す水

弥次喜多の湯とや燕に軒を貸し

泰山木花の始末をだうつける

夕燕揚げて時報は「箱根山」

弥坂湯に箱根巡りの汗ながす

連歌師の墓を常磐木落葉搏ち

あらがねの光放てり泰山木

ひるがほは時間を湛えゐることし

萍は一つから殖ゆその一つ

筋通すことが第一今年竹

湯上がりの手首の赤し鯉時

書き損じくしゃくしゃにして紅緑忌

目の合へば少しどぎまぎして守宮

大玻璃戸守宮の吸盤護謨仕立て

●七月―九月

鷺を見て青田曇りの庄内路

板蕎麦を待つ間頭上の蠅を追ふ

茶屋の婆勸む民田茄子抓む

霧の香に八百萬神在す羽黒山

霧の坂羽黒詣での息整え

二の坂で音を上げ聞けり時鳥

汗たじたじ羽黒権現三の坂

羽黒山足下を蟻も登りをり

参道を少し外れ摘む木苺を

南谷ここがさうかと扇子出す

黒蟻の這ひあるばかり南谷

幽冥の蝶たゆたへり南谷

涼しとも蒙古撃退成就の鐘

羽黒山大鐘露を生みにけり

羽黒権現姥百合に霧ながれけり

夏雀山居倉庫の瓦に跳ね

甲板のウッドチェア―に海猫の糞

合欽若木叩ける雨も象潟ぶり

若葉して敏達七年噴火の山

この向きの夏秋田富士よかりけり

ブナ青葉して鳥海山の保水力

プランクトン食うて夏牡蠣太る海

鳥海山の夏場の雨の桁外れ

葱坊主越しなる象潟小学校

蚶満寺裏の青田の目に沁めり

雨しぶく露店に夏牡蠣注文す

鳥海山の溶岩めく夏牡蠣二口に

夏牡蠣は鳥海山もたらす雨の味

旅人の喉に納まる夏場の牡蠣

首筋にヒリと梅雨入の酸性湯

梅雨蝸湯治話が長くなり

半夏生朝が来てゐる自炊棟

くさぐさの病ひ秘し入る青葉の湯

煮炊きの火こもごも半夏の湯治棟

漫画本手にし半夏の湯治人

硫氣に顔撫でられ夏曉の露天風呂

夏曉の湯浴びに湯治の床もぬけ

同音にヘエと女ら銀龍草

呼ぶこゑに後戻りして銀龍草

雨の水輪出で入りつして細菌

銀龍草女五人に囲まるる

木道よりもうせん苔に目を落とす

ワタスゲの雨吸ひ過ぎて絮の惰気

天候は出たとこ勝負夏山行

後生掛の湯治棟見ゆ虎杖越し

後生掛の燕挙げをり地獄谷

一驟雨青森榎松濡らし去る

生保内節短夜の湯に響かせて

自炊棟その間を飛ぶ岩燕

揭示して句会の予告湯治棟

湯治棟浴衣など吊り仕切りけり

浴衣干す針金ハンガー湯治棟

かがんぼの閉じこめられし湯治棟

雑魚寝すや団扇片手に湯治人

六月の自炊棟廊冥く長し

蚊の姥に消灯時間湯治棟

うしみつのががんぼ離る脱衣籠

郭公にぼちぼち起き出す湯治人

自炊棟短夜明けて煮炊きの火

郭公に湯疲れの身を漂よはせ

湯治人ボソボソ話しゐる夏夜

ぐつぐつと煮ゆる泥湯や雲の峯

湯けむりの翳這ひゆけり青すすき

雪溪の風に榎松頭を削がれ

雪溪の風にウインドブレーカー鳴る

雪溪の風を受けつつスケッチす

雪溪の半ば風向き変りしか

雪溪の風がたらさうヒナザクラ

話声びたりと止まり岩鏡

青嶺攀ずよろよろ岩手県北バス

旅人に盛岡駅の作り滝

海猫の糞透明に夏至明けにけり

水揚げ場鯖鯖鯖の大海港

さざゑ漁仁右衛門島の岩隠り

ふなばたに箱眼鏡のみ新しや

水視見漁^{みずきりよう}木地新しき箱眼鏡

船名入りリヤカーしこたま鯖積んで

古書即賣案内元は紙魚之會

冷奴堅牢箸をつけむとす

蕃茹に塩たっぷり昭和生まれなる

もめごとや野毛坂下の夏の闇

傍らにビールの空き缶かはたれどき

老人の間食モンキーバナナかな

棕櫚の花一寸バナナを思ひ出し

すべりひゆ繁茂なにぶん古き庭

捕虫網出会ひ頭の蝶逃がす

メリハリつく家居風鈴吊りてより

独酌の胸乳へ送る団扇風

鳴神の幕引とんと目途たたぬ

夕立の音立てゝ街呑み込めり

朝顔のくたんと十時廻る日に

町雀けふは夕立まぬがれて

遣り過ごす韋駄天驟雨バーガー店

箆枕年金暮らし快適ぞ

浪々の身をいまさらに昼寝覚

林火忌を憶へばそれに連なるひと

林火忌の朝動き出す街の音

白昼の真中に覚めて白縮

あらためて大暑と聞きて太吐息

空蟬は白雨飛沫を浴びてをり

空蟬をおっかなびつくり抓む指

油虫触り犯せるものの数

油虫下見の現場灯さるる
パソコンの画面を舐めに油虫
音曲に合はせて咲くや烏瓜
烏瓜窺ひ咲ける夜の怪し
熱帯夜はと覚め夢のもうこりこり
太幹にしてなかなかの百日紅
青芝がぐんぐんボール落下点
鰻をり光湛えて桶の底
鰻描く腹を真白にたらし込み
漁減りて海星ばかりが揚がる海
真夏夜をチャンバラ好きの映画好き
煮浸しの鮓を返す八月尽
船蟲に持ち場持ち場のあるごとし
切返すごとくに白雨上りけり
徒浪の盆供曳きては打寄せぬ
夏草に雨横なぐり五能線
藺枕に首転がしているうちに

かさぶたを搔きこはす癖八月尽
鮑金一丁持って海底へ
犯人を妻見破れり夜の秋
また夕立こどもだましのやうな空
ラバウルに灼けし零戦見て船旅
朝顔に水やる朝の内がよし
よその子とすぐうちとけて水遊び
曉蛸教ふるこゑに重なりて
白雨の仕上げに風を送りくる
急雨来る韻き裸にはおるもの
紹興酒晩夏の酔ひのよるべなく
品書は天候次第夏魚茅ヶ崎地魚料理店えぼし
妻湯浴む間のげそ煮の火を守れり
とんカツのツマのパセリのやうな日々
ひしひしと水の暮れ来て鶴に鶴影
走り根を洗ひて夏の雨あがる
鰻屋の主好みの歌麿絵

蒲焼に呪文のごとく山椒かけ
昼寝覚五臓の位置が不確かで
煮立てゐる味噌汁の香が朝顔へ
あめんぼうちよっかい出され遣り返す
困の蜘蛛にさうさう獲物なかりけり
八幡船ばはんせんさながら夕焼け雲南下
雄日芝に雨透きとほり透きとほり
顔叩き力士勝気を呼び込めり
首捻り宙を睨んで負け力士
インタビュウはあはあぜいぜい勝力士
過ぐるこゑへくそかづらと言ひ捨てに
銀杏の生る木生らぬ木思召し
つんつんとへなりと野辺の秋草は
地区図書館朝涼の顔集はしめ
図書館の中庭に秋待てる樹々
秋色のこれより亘る街並木
朝顔の残りの花期を尽してや

穴感前にしどぎまぎしてゐる妻
来客にすててこの腰泳がせて
萱初穂泥亀新田たりし地に
峰雲の力づくにて作りし塔
腹に据えかね居るところをはたた神
芙蓉の明るさ例ふるものの見つからず
午から晴れ芙蓉の気色とりなおす
好例と引き合ひに出し集るたか蟻
昨よりけふ気力の優る紅芙蓉
かまつかに殴りかからむばかりの雨
苦瓜の渋面雨に叩かれて
隼人瓜当世風を通しけり
小用を足しに葎の真ただ中
長たらしき呼び名の花火揚がりけり
あめんぼの罅迫合の何時果てる
芙蓉咲きこつちを向ひて呉れぬ花
聞き分けて違ふ虫の音三つほど

新涼やあらかた骨の膝小僧

芙蓉咲きけふもぼんやり日を過ごす

茶の間にも寄せて颱風余波の浪

颱風禍まざまざチャンネル切り替えても

寐落つまで耳を遊ばせぬる良夜

さきに寐し秋夜の妻の後向き

石火矢のここに炸裂まんじゅさげ

天下の險もみづるにせよせぬにせよ

ぶらさがり止まりが好きで秋の蝶

芙蓉散り法器のやうなその落花

秋草の風に打合ひ古ぶ穂よ

はるばると秋刀魚は南下この刻も

竜淵に潜む色愛で紹興酒

万願寺とうがらしとや火恋し

賀茂なすの素の味秋はもうそこまで

糊の効きわるき秋暑の古切手

その殻も薄手に秋のかたつむり

曇日のひかり押さえてねこじやらし

屁理屈の一つもなくて水澄める

秋草や舗道余熱を持ち続け

蜘蛛の囿の獲物にこれといふもの無く

秋の蚊を打ちて血しぶき浴ぶ膚はだえ

履物に妻の温みや後の月

養生は一生のこと水引草

コンビニの老人向けに売る秋果

秋風が見えるが如く眼鏡拭き

二人して食ふには大き梨折半

梨を剥きその一片に楊子立て

梨なんぞ剥いて無聊の手を濡らす

刺客史記篇読む地虫鳴く夜の底

花サルビヤ旺んに空気澄みあたり

とりとめなく秋の日注ぐ草っ原

湯立神楽日に日に秋の日は透きて

秋麗の宮司は佐野家湯立舞

まんじゅさげ薙ぎて悪餓鬼健在ぞ
ゐのこづち払へるこゑの大わらは
沓履きて古刹の秋のあめんぼう
そこ動かぬ蜻蛉にたうたう根負けして
墓域より人家へ飛んで曼珠沙華
秋暑のこと家鴨に言つてもはじまらぬ
めつきり秋らしくなる日をピザ焼いて
相撲見て膝を叩いて晩酌や
負相撲鬚が全てを物語る

満腹の腹先すつかり虫の闇

草虱はたき合ひある音のする

浄見寺 大岡越前守墓所
忠相の生れ在所や諸島

風小僧落としてゆきぬ山の栗

毬栗の淡彩愛づる草の上

落栗の路考茶いろ帯び幾日経し

吉田牧場たか
秋の蠅集る牧牛見せ呉れし

秋天にかざし獣医の注射針

日に爆せるものの音して牧の秋
牧牛の尾を振る他は秋の風
蜻蛉の咄嗟に我を交はしゆく
風が風追ひ越しゆけり狗尾草
しじみ蝶降り立つほどに道露けし
菊芋の長けて切なきまで青空
人体の不思議展 東京国際フォーラム
タブー視の垣の払はれ人體展
正視して絶景秋の人體展
うそ寒しプラストミックてふ手法

*組織や器官を出来るだけ生きている

状態に保存する技法

そぞろ寒自律神経系標本

人體展もみづるものに骨格筋

尿管は腎臓を出て水の秋

做蛇笏(誰彼もあらず一天自尊の秋 飯田蛇笏)

標本としての脳天自尊の秋

做漱石(仏性は白き桔梗にこそあらめ 夏目漱石)

佛性はここにうそ寒神経網
鼻に通る秋風人體展出でて
金尿かなぐその如き零余子を掌に下山
蜻蛉に無き石段が吾にあり
北鎌倉始めての路敷めうが
綿虫に道を訊きゆく多聞院
言うならば葛這屋敷荒れ放題
土盛りせしそこが山頂草の花
洋梨の油絵掲げ洋菓子店
秋空になすりつけたるやうな雲
またたびに降りだしさうな出羽の空
山ぶだう酒持病直せと賜はりぬ
秋雨と云ひ陋巷に満つるもの
白式部孔子基督釈迦の智慧
銭湯の煙突月と睦むかな
大露に衿搔き合はせ驚きぬ
触るもの全てに露の影し

除けきれぬ雨の小道の猫じやらし
数珠玉や使い途なき三角地
追憶の熟れ無花果は蠅呼ぶ木
金網の外にも内にも猫じやらし
ねこじやらし老若の穂の入り混じり
お年寄駄菓子はおぼる敬老日
黄落どき葉っぱのフレディ舞ふ林
点線の虫音と棒線の虫音
朝寒し犬は糞まるもの糞りにけり
足揃え搏たれし秋の蚊なりけり
美術の秋上野にぼんと降り立ちて
空の澄み一つとっても奥会津
秋雨が降れば抱へて取り込みもの
無患子鎌倉宝戒寺のよく落つ頃を訪はまほし
秋の夜の明るさ違え二夕間の灯
秋風が攫ひに来るよ机上のもの
川渡りかう来し猪と事細か

あんこ腹あづけて力士がぶり勝
その巨漢恃める力士ボカ多し
地卵の色の満月上りけり
武州金澤明けて朝月松の上
美味けりや佳し藩の器量を云ふ勿れ
靴の紐結び直せり十賊の辺
五輪塔片報国寺寄せられて竹の春
寺の名が即ち地名地虫鳴く
落鱸はらふし漁東京湾のとば口に
氷ごと背黒せぐろ鰯を揚げて漁仕舞ひ
鱸跳ねあまは天羽漁協のトロ箱に
秋燕の翼返すや伊豆相模
椋鳥と少し汚れた鳥を指し
●十月―十二月
看取りの日々芙蓉は花を幾つもつけ
かまつかのこれが限度といふ紅蓮
看取るもの看取らるるもの天高し

言いくさの猪より荒く猪貶す
余所者に聞かせて猪の悪さごと
かうすればああ出る猪のいと憎しと
峽住みの畑作猪と根ン比べ
誕生日より栗づいて栗ご飯
だいぶ手を抜かれ案山子のご面相
月光に育つくわりんと思へりき
ののさんに一つことしの庭の柿
仲秋の雲片づけに風が出て
独酌あわびの間を夕月移りつゝ
夕月の色のいよいよ栗きんとん
酒のあと水恋しくて夕月夜
頂けり中に生傷ある柿も
月よりも慎ましきもの対ひの灯
言うなれば奉書の明るさ花すすき
露の浜犬にも流行りすたりあり
秋草のこの名も妻の知るところ

せいぜい知る秋草の名を独りごち
秋風に浮き足立てるものばかり
蚊除けスプレー たっぷりかけて子を放つ
へくそかづら駄花のみかは実もあるぞ
朝の川鯉の一つも跳ばぬかと
雄日芝はざつくばらんを通しけり
句作りに博識要らずイヌコウジュ
穂絮の他軽んずものに植物通
雑草あらぐさにいちいち名あり秋の野辺
おとつと露のまだ干ぬ草っ原
種子零す鶏頭なげいやはやひどい形
エンゼルトランペット教会チャペルの庭に垂れ
狗尾草も庭草の裡愛で暮らす
お隣おほりりのなかなか大きくならぬ柿
明日の良夜待ち切れざれば酒無心
白帯びやくたいびて満月の路地は愛しきやし
満月はいつもここより家並あひの間

ちよこまかがちよこまか抜いて運動会
徒競走シャッターチャンス一度きり
列車音稲田をキタカタキタカタと
山麓を横へ横へと稲雀
稲雀何處へ飛んでも磐梯山
磐越西線稲の睡気が移りさう
裏磐梯
民宿の帳場あづかる通草籠
湖畔亭紅葉そこそこ客そこそこ
五色沼
一鳥も降ろさず秋の沼の雨
がまずみの実の赤雫切りにけり
青どんぐり雨明りして山の道
讃集めをり山中の櫛紅葉
紅葉狩こゑ掛けられてこゑ返し
紅葉狩雨の足許ばかり見て
そこはかともみづる沼の名無し草
張子人形陸軍さんの髯露けし
喜多方
稲刈りがもう済み虚空蔵さんの村

飛石に載りて迎へる今日の月
横須賀 良長院 下田稔の墓
稔の墓お隣りの墓菊とりどり
潜水艦霧雨隠りにその艦尾
狗尾草濡れぬやう穂の出来てをり
ど忘れ夫婦の話題弾みて衣被
紅芙蓉手荒な風を嬉びて
くわりん酒のとり後ひく三年もの
くわりん酒に目のなき妻のどんとろり
いかんともしがたき空やけふ無月
浮かぬ空模様十五夜台無しに
いちまついちまつの望みはありてけふの月
ぬうぼうと無月の家路辿るなり
朝露にあらあら濡れてしまひけり
秋雨に時折びくんと躍れる葉
筆ささと芋銭のスケッチ秋の生りもの
ひらがなで大きく書かれうんどうかい
運動会みんな手を挙げゴールイン

蔵屋敷
味噌蔵の土塗り引き戸秋寂びて
大和川北方風土館
杉玉に喜多方の秋紛れなし
ぐい呑みを買ひ足すこともまた秋意
蔵店は月見名残りの芒活け
試し飲み弥右衛門さんの今年酒
一升瓶千本分の新酒樽
笹屋旅館
喜多方の蔵もつ宿の鶏頭図
起きあがり小法師ゆらゆら立てる秋
商秋の白虎堂とは菓子舗なり
飯盛山
杉落葉惨と散り敷き自刃の地
舞い込める青葉いちまい自刃の間
鶴ヶ城櫓々に秋の風
天守閣あきつがこんな所まで
秋晴れの天守閣より生徒のこゑ
秋雲の移ろひ易く鶴ヶ城
末廣酒造
蔵店の土間まっさきに秋の暮
秋の遠足車内さながら鶏舎のごと

安達太良山晴れてあきつを湧かす谷
おやこうこ
親孝行て
安達太良山別称
爽やかに土地人の云ふ乳首山
ちちくぶやま

二本松十万石の秋日和

東京より俳優招き菊花展

菊人形池田屋騒動真つ只中

おん齡に始まり菊師の行脚談

菊人形吉良上野介平伏す

大砲を差配の隊士菊人形

観菊の接待二本松婦人会

菊花展城の階きざはし水打つて

蹲り菊師むしろに根仕事

独眼流正宗の菊差し替え中

繕ひの蘭草はヤロウ菊人形

*ヤロウは蘭草の中でもつとも強靱

なもので畳などに使う

秋も半ばの東京より来て智恵子のそら

秋興の智恵子生家の間取りかな

稲積みのもしや狸の化け損ね

出で立ちは郷士のさまに群稲棒

二本松駅にも佇ませ菊人形

菊花展けふより始まる城目指す

気に入らぬ箇所をとことん老菊師

莫蔭いちまい引き延べ菊師一仕事

莫蔭いちまい丸め着せ替え了ふ菊師

老菊師修行時代を一くさり

菊人形面輪面輪に目がゆきて

見たきもの先づは菊師の仕事ぶり

城内の厠拝借老菊師

引きつけて離さぬ菊師の話つぶり

家苞は菊師の雑談与太咄

菊人形胸元疎ならず密ならず

馬つこはいささか手抜き菊人形

菊人形「たいしたもんだ」とこゑ挙がり

在来線乗り継ぎ見ゆ菊人形

二本松晴れの或る日を菊花展

けふ初日の面うち晴れて菊人形

城下まで自転車で来て菊花展

日当れり着せ替え中の菊師の背

老菊師少し生活のことにも触れ

着せながら菊師の一ト生手短に

菊師の談「ここに居付きて五十年」

二月自ら云へるで生計たつる菊師とぞ

秋の暮鶴ヶ城出てあらぬ方

手庇に西日当れる鶴ヶ城

唐突と云へば木屋の金木屋

また一寸行つて金木屋の家

コスモスの雨来ぬうちの器量佳し

コスモスにぼろんぼろんと雨の降る

くだくだしき木屋の香に突っ込みぬ

木屋の花屑カレー粉めく散歩

鯨を釣る頭上を鳶の胴ながれ

ここ残し秋刀魚の食べ方知らぬ妻

金木屋腐してふ雨なかりけり

金木屋零れ土塀の瓦に跳ね

金木屋掃く身にもなつて下さいと

日々通る靴音日々散る金木屋

霧雨に箱根七湯めそめそと

自然薯の掘り手巧者よ汝が夫は

はたはたが何血迷ふて大井川

川向うざりがに捕りの金谷かな

出水して常水二尺五寸の川

蓼の咲く家並み外れに口取宿

人足に定年ありて雁渡し

乳通七十八文川の秋

大井神社小流れ巡らせ秋大祭

大井川安堵の神の秋大祭

彫り露けく金魚奉納三百尾

道中飛脚奉納燈籠そぞろ寒
静岡県 島田 帯まつり
練り歩くやっこの毛臍秋の風
元禄より百余度ほど帯まつり
大鳥毛真澄みの空に投げ渡し
中老の扇ひらひら屋台曳
上踊りサアサ島田の夜のとばり
藤娘早抜き自慢の上踊り
上踊り雨の五郎に火蛾飛んで
上踊り一寸法師におひねり飛ぶ
帯まつり杵屋社中と同宿す
ししうどの花のほとりに捨て蒸気
川根茶を車内販売ボンコツ汽車
登山届ポストぼとぼと霧傘
登山帳前黒帽子岳をピストンすと
野ぶだうに湯けむり流れ町営湯
霧冷えの先客ひとり町営湯
けんぼなし昨夜の嵐の落としもの

江ノ電の一寸走って鯨の海
蜘蛛の囿に一つの攻防見たりけり
女郎蜘蛛屋敷と云ふに躊躇せず
波間に空瓶ぶかり川崎洋死す秋
ばった跳ぶはた迷惑な跳び方も
家鴨があが云ふなか水草紅葉せり
林檎は駄目柿はなんとか衰ふ歯
新聞の切り抜きジヨリジヨリ冬隣
腫れものに触るが如く熟柿食ふ
スタジイの根の暴走の冷まじや
渋柿に妻はとほほと云ったきり
しじみ蝶躍り越ゆものある限り
しじみ蝶日向の端から端へ飛び
しじみ蝶股間を抜けてゆきにけり
雲脂光り衣をまろび落つ石路日和
鎌倉八幡宮おとしやま
常磐木の大臣山より色鳥来
初秋刀魚世話焼き口調殖ゆ妻と

台風に脚掬はれて百葉箱
鉛筆で叩いて蜘蛛の糸の端
鯉跳ばぬ川を淋しみゐたりけり
初鴟のキーツとあられもなきこゑよ
しゃくれたる貌のショウリヨウバツタかな
けふも亦来啼く初鴟メープルテイ
大佛へ向ふ人の頭鴟日和
秋小寒地魚まとめ買ひしたり
大鯉の真水突き上げ野分中
秋霖に家鴨も口をつつしみて
十月の催しものも全て果て
空澄むと旅する定年万万歳
椎の実にづるりと滑りずでんと尻
雑草の実にもうち捨て難きもの
敬老日番組玄米健康法
ポスターに紅葉づる鎌倉始発駅
江ノ電の踏切女郎蜘蛛見上げ

越後に地震播磨に颱風なんてえこと
強引に柿ぶつ叩き止めぬ竿
舗道に石榴落ちなば快音放つらむ
疎遠また致し方なし帰り花
月見だんご供えて妻の横坐り
熟れ柿に匙が添えられるたりけり
山妻旅先等にて路傍の石を拾い集め来る癖あれば
石拾ふ要領をもて椎の実も
また拾ふ団栗拾ってどうするの
椎の実はあらかた落ちたか落ちたやう
けふの団栗加ふきのふの団栗に
これはこれだと云ひつゝ桜紅葉褒む
火の始末等して長夜さあ寐よか
風禍・震災かうむる人に澄める月
暖房を焚けばあぶれ蚊のこのこと
芒いっぼん手折りて山に別れ告ぐ
くたくたになるまで遊ぶ秋の暮

やたら生ることしのくわりんだうしやう

菊に佇つ母に一言かけたき日

自転車にて近場の雑木紅葉見

横浜市立 金沢動物園

平日の動物園にくる小鳥

紅葉冷猛禽類は眼をつぶり

ユーカーリにつれなく落つる秋日とも

秋日中手をもてあます手長猿

犀の尻釣瓶落しの日を遠に

木の葉舞ひ象はステップ踏むごとし

うそ寒の犀に向ひてグッドバイ

お見事と云ふべき自然薯届きけり

自然生頂く果報ことしもや

自然生届けに長身配達夫

鴨来頬にちよつぱり紅さして

茸樽猿の菌形の生々し

少女等は昔ブルマー運動会

折り返しべつたら市を物色す

世間体そんなものはと破蓮

鳩小屋に十月の砂敷き込んで

角力見てをれば辺りの暮れて来ぬ

颯風の眼窩豁然青菜畑

八幡宮ばらばら小鳥来そめけり

竜淵に潜む槽ふねより豆腐揚ぐ

掬ふとき掌におよがせて新豆腐

揚舟の爐の下草もみぢして

錆锚狗尾草の穂の古りて

一筆箋付の自然薯届きけり

居心地のよくてかうなる自然生

大盛の飯に穴開けとろろ汁

菊花展初日の菊に氣勢あり

急霰に家鴨の雄声突つ走る

寐溜めせるバクに落葉のはらはらと

秋霖に心さだまるすさびごと

水の上に返り咲くもの日曜日

隼人瓜ポパイのつくる力瘤

隼人瓜ポパイに敵ふものはなし

苑の芝桜落葉の突つ立てる

何處となく尻に火がつく十一月

スケッチす十一月の塀と坂

鴨すいすい日曜画家の視野よぎり

ハイカラな瑠璃首立てゝ鴨巡る

孫 美雨

吾に優るもみぢ葉拾ひ来て見する

孫 珠海

木の実どき己が弾みで珠海歩む

団栗を莫迦云ひながら拾ひをり

てつきりもみづる筈の漆が小火程度

神の留守タンス預金に手をつけず

二〇〇四年十一月一日発行

新札の樋口一葉長居せよ

縣廳前落葉と市バス駆け抜けて

木の葉散りぶつかる市バス系統図

陸続と落葉降る中市バス来る

ダイケアバス黄落に頭を振り振り来

落葉臭き街歩き来て天井

そのうち皆聖樹に伊勢佐木町並木

鈴懸散る一寸だらしのない木々で

踏み鳴らし甲斐ある鈴懸落葉とも

分隊の鴨本隊に合流す

白花瓣やつさもつさの厚物菊

掛茶屋に鴨見て風のひやつきぬ

西の市見て来て牛の荒井屋に

*横浜 曙町 荒井屋は鋤焼き発祥の店

牛鍋を待つ間マフラー横に置き

牛鍋を堪能しましたモウと立ち

牛鍋屋ぎうとベルトを締めて出づ

佃煮の蝗の脚に突つ張られ

琵琶島の端はなにて鯊のよく釣れる

神の鳩そこ退けそこ退け七五三

黄くわりんのおでこしゃんしゃん日を浴みて

こりやあびつくり菊に跨りある蠟螂

もうそんな季節か風邪のコマーシャル
枯るゝ夜をダイナマイトの綾戸智絵
湘南キャンパス黄葉のもとの生演奏

云ふことをきかぬ障子を外し遣る

大船植物園
植物園リヤカー持ち出し落葉掻

火の用心ポスターに「火はおこりんぼ」

懸崖菊あらまあ真つ正面にかな

菊日和奈良の最中を貰ひたる

立冬と聞けば内心ああさうかと

三毛猫の木に爪研ぐ冬はじめ

枯木攀ずあの猫金魚盗った猫

強くなる雨脚を菊怖れけり

雨ありて一色増しぬ山紅葉

菊作り読本仕立てに難易度付し

断つてばかりの家居秋ぐもり

魚食べ骨太らしむ文化の日

足の筋違ふへまして冬籠

痴呆すすむ母と小春のメーブルティ
柗の銀漢なせる葉叢中

肌身には感ぜぬ余震柗に

マイペース崩さずにゆく皮ブーツ

靴音も路も単調皮ブーツ

皮ブーツ一直線に路は伸び

乗り合はす電車にぼつぼつ皮ジャンパー

団体用乗降口ある駅の秋

紅葉谿手すりがありて大助かり
鳩ノ巢溪谷

紅葉づれる断崖秩父古成層

紅葉川聞けばカヌーで下るとよ

紅葉狩眼鏡を拭いてさあこれから

錦繡の秋パノラマの鳩ノ巢荘

瀧けむり双竜の翳帯びにけり
双竜の滝

紅葉見る吾らに階魚道にも
きさばし

木の葉時雨今しもグッドタイムینگ

鳩ノ巢の紅葉愛でつゝ見ず知らず

紅葉冷え薄着後悔してみても

二つ目の吊橋こども紅葉佳し

無線もて後尾と交信紅葉狩

山女釣れ紅葉に腹を返しけり

危ふきに女近寄る紅葉狩

滝見茶屋ざつくばらんな紅葉かな

紅葉見の序で氷川の三本杉

アフラヤン
油漉青紅葉づる日原街道ゆく

柿紅葉やっぱりよかったこの径で

冬の虹のこのこ蟹が這ひ出して

冬青空歩きたくなる日を歩く

厠にも菊の明るさ持ち込めり

鱒ちりの箸を落としても酔ふや

鱒ちりが冷めて話のちぐはぐに

白湯もってポットを充たす冬始め

妻にとり我は口きく八つ頭

冬廁かはりばんこに席起ちて

菊活けて後片づけの葉のほふ
大巖が行く手を塞ぐ紅葉川
予報士が雲を動かし霜予報
横文字を車中に拵げ木の葉髪
皮ブーツ肩に手をかけ試し履き
凧明治神宮に乗馬倶楽部の看板鳴る
白息を吐きつ一体馬と騎手
躍動する馬と女とその白息
西の衛士詰所の前の落葉搔
菊花展即ち煙草慎みぬ
冬の噴水モーターアトめく動き
練兵場たりし跡地を落葉馳せ
内科B外来咳を持ち込んで
先生になかなか呼ばれぬ木の葉髪
東京の落葉こそつく通院日
木屋を散らして夜間飛行音
黄菊咲く花菱アチャコの笑顔して

冬雨といふ物音の今四辺
木の葉時雨股旅姿の吾を想ひ
割干の辺下田稔兄の雑談が最期となり
鉛筆は皆とんがらせ冬ごもり
裸木となりて歴然瘤瘻
冬帝に云はれてそこに立つてゐる
櫛今すつぽんぼんに気負ひなし
落葉踏みしだく韻きの新世界
羽抜鳥沽券も意地も疾うに無し
飛ぶときは貌を斜めにしてバツタ
厚着もそもそ腕まくりして注射かな
滑り台欠伸してゐる落葉どき
柿紅葉葉にしたき一級品
注射あと何處かだるくてホットレモン
もたついてつるうめもどきといひなほす
下仁田葱煮ゆる前から崩れさう
様変れど冬の子供の遊びかな

柿もみぢ明りに何ぞ云ひたくなる
地震襲ふその轍中越地震 三句テッ忘れ紙懐炉
花鳥風月なんのかんのとマグマの上
御正忌の鯉を空輸の一仕事
蜂の巢の容が風邪の熱の眼に
必殺の機を窺ふや枯蠟螂
てのひらに桜落葉の移り香す
冬迎ふ暮しのリズムアンダンテ
酔漢の駅指しあるく月光裡
酔漢の背を押す夜の落葉風
熱爛や出逢へるひとを大切に
有難味薄るゝ旗日枇杷の咲く
パチンコの勝組のゐる焼鳥屋
独りでに点く冬街灯世は進み
ボンジュースなどに温もり冬籠

*ボンジュースは夏みかん汁入りの砂糖湯
湯気上げて祖母の世の味ボンジュース

横濱ベイブリッジのハイカラ橋に冬の虹
冬薔薇妥協なき色不二の白
冬籠手許に置ける園芸誌
葉ぼたんの意気軒昂を買ひ来たる
小春日の声が先づして猫がある
身に入みて湯屋閉屋の主の辞
犬の尿ぺんぺん草の枯れし穂に
冬籠り妻と足型見比べて
転進といふ語のふつと稲雀
朝日影海より根府川蜜柑かな
街路樹の木の葉舞へるやマネキンに
着膨れて身につくものは唯ものぐさ
流されてゆかむそのまゝ年の瀬へ
月明に母船の如く吾家あり
横丁に屯し立喰ひ焼鳥屋
焼鳥の串を数へて扱てなんぼ
焼鳥の釣銭脂ぎる掌に

散歩道こんどは何の返り花

手の届く所には無し烏瓜

汽車走らす石炭一屯水七屯

大井鐵道

お年寄り許りの結社文化の日

札つきの三毛猫通る文化の日

とり落とす画鋏を採す文化の日

槽底に豆腐屯す神在月

茶房の窓スプレー描きのサンタかな

霜旦の大地登音返すなり

鯊釣少年の君らの今日の釣果はと・・・

もんもんのもんを破れず縞臍

釣人の眩き鯊に落としけり

鯊は水底で釣師は岸辺で虎視眈々

水底の冥さ帯ぶ鯊釣られたる

潜水艦繫がれ数え日の入江

泛く原理鴨と同じや軍艦は

クイと啼き鴟冬帽掠めゆき

冬の靄東京湾は事もなげ

公園の搔き出し落葉だう使ふ

イヴの電飾庭木をうまく使ひけり

走り根を入れて落葉の吹き溜り

錦木の錦を蔵ふ季来たり

暖房音どすんと耳から温もれる

マネキンに更に短くなる日差し

菓局の前を転べる落葉かな

湯豆腐のしかじか是を叙したとて

一体に年寄りじみる歳末吟

優海鼠何を付度して寸評

氷川丸年の湊に繫がれて

大將が蜜をうんぬん冬林檎

痩せ痩せて閉じ金現るる古曆

雛子方庭燎にわびに浮かび上がりけり

神楽笛火の粉が先に舞ひにけり

神真似て神の遊びを巫女の舞

神楽歌和すに和琴わごんの蛙かごゑ

楽人は埴輪のごとし神遊び

神々の遊びを三日月見そなはず

神遊び笛はしゃかりき中天へ

笛颯颯和琴淙淙神楽歌

笛走り和琴は転び神遊び

寺寶なき寺こそよけれ冬満月

駅前の木の五、六本聖樹とし

哲学の一つも持てと冬林檎

シヤコバサボテン咲くと泡立つやうに云ふ

緞帳が下りて来さうな暮れの空

冬に入り兀と鷺鳥の鼻の瘤

年の瀬の渡しにゐたりそぞろ神

授かれる名案に似て返り花

冬の雨明け方一度降ったきり

サンタも出て歳末商戦巻き返し

熱爛やこの徳利と幾星霜

蒲の絮飛ばす合図をそぞろ神

着膨れ妻よると手貸せば「だいじょうぶ」

葱の管後生大事に何封じ

暇人の覗いて不思議葱の管

一芝居搏ってやろうか枯月夜

つり銭出自販機の原理はすオートマトンといふ学問

煙草買ひにちゃんちゃんこではおかしいか

眼が生きて佐島の潤目うるめ鰯活魚店

大つごもり飛行機音のこもる空

柿の蒂つくづく年も詰まりけり

釣れたとも寒の鰈のこんなのが

浪曲たまに魂揺たますられて逝く年か

年の瀬懐日の柱に凭れ虎造節

意地境地そんなもの無く年逝かす

あさつての方に日移り干蒲団

そこ起てば冬の日に透く部屋の塵

寒釣のこつちも見ずに釣れねエト

鶴鴿もところこ師走歩きして
口鉄砲あまりに鴨の多ければ
白鳥の来る村の地理電話にて
神の留守ゴミの分別微に入り細
くすくすして漫画に魅入る暖房車
電飾の仕掛け昼にてあらはな樹
庭木にも庭木の晩年冬日差
散髪屋覗き一声「こりゃ駄目だ」
手に取りぬただ何となくこのマフラー
紅玉の皮煮崩れずクリスマス
袈似合ふ大柄スタイリスト
萱刈の廃る日そこに見えてをり
あと五枚だうにかかうにか賀状書
橋脚にへばりつく牡蠣歳晩へ
郵便貯金記帳の音もはや師走
衣食足り団地布団の満艦飾
暖冬のいたづらに梅騙されて

逝く年の片棒担ぎゆくごとし
イヴ近き街ゆくブルゾンポッケに手
屑籠の影が伸び来ぬ大三十日
愛車さる家のポルシェびしょびしょにして年用意
畳屋の畳のしごき納めかな
紅玉煮る砂糖どっさり使ひけり
林檎煮る香が厨より本を読む
なんだこれ皮のぶかぶか蜜柑なる
正月用みかんにもあるLサイズ
どれ一つ話のたねに仏手柑
クリスマス嘉す発光ダイオード
年用意年々妻は手を抜きけり
爛熟し弁明する気さらさら無し
鋤焼の煮えてぐつぐつしか言はぬ
おでこよりふらふらと起つ日向ぼこ
懐炉などみつともないが取り敢えず

古曆太田とあるは通院日
黄泉にても鐘百八ツ聴こえをらむ
師走妻少しは休めここに坐せ
冬あたたかシルバー料金映画にも
反古ひねる快感冬はもうそこに
煤の湯に新しき創古き創
人集まる集まるところに飾売
飾り買ふ高齢同土言交はし
気のつけば財布も持たず暮の町
手に足に掛け湯じんじん冬至風呂
妻の云ふ冬夕焼けをどれどれと
カーフェリー船首にいつぽん松飾
カーフェリー渡り納めの水脈太し
冬空を仰いでけふの雲の多寡
冬雲のおもおも水平線迄覆ふ
首筋にマフラー絡めカーフェリー
飴・蜜柑など物色し船待つ間

カーフェリー土産売場の安房花菜
船室の一席とりてあらせいとう
甲板に出づれば北風に面張られ
雲間よりスポットライトめく冬日
髪に憑くストックの香も安房土産
浜金谷驛前セキレイ歩みをり
あと五日ばかりを残し浜焚火
咲きたくて花菜うづうづしてゐたり
きしきしと水仙畑を過ぐ羽音
花アロエ漁師臭さの脱けきらず
金盞花保田くるみ呉れしは千葉日報
水仙に富士を配せる入賞作
寒暁の光の痛棒啖ひけり
寒暁の矢面に立つわが瘦軀
暁光に射し貫かれ地の一切
寒暁のその光が徐々に白を増し
冬の暮切羽詰まって翔つ羽音

素浪人風に立ち枯れ棒葎

スピードスケートカチカチバックストレッチ
スピードスケート断トツリンクレコード出る

旧く狭く深き地下鉄十二月
長谷柑生さんよりみかん贈られて
紀州より蜜柑文左の心づけ

着膨れて福神漬を零しけり

柚子湯の袖鎖骨の辺りに寄り着きて

著ぶかれてこの一着に終止せり

奨めらる鮪の三味線・潜水板

言外にくみとれるものおでん酒

木の葉髪刈られ仕上げに耳の毛も

熊ことし荒れて在所に出るニュース

麻酔銃もて撃ち山に戻す熊

格好悼いい川崎洋は冬鷗

チャールストン伴奏バックにスケート露西亜ペア

フィギュアのリフト高々ニューヨークニューヨーク

フィギュア解説ニコライステップとは何ぞ

疾風また旋風ともなりスケーター

十二月八日無風の横須賀港

探偵社の車内広告十二月

トンカチはリズムと心得十二月

東奔も西走もなく年逝かす

柗は気が付く前に散つてゐる

この年を評すに釦の掛け違ひ

煤の湯に冬もすててこサと脱げり

立ち読みの正月気分芸誌

待ち合はすその眼に聖樹とハチ公と

千両にいい値がついて街師走

焼鳥屋提灯一つ椅子七つ

旧賀状取り出し偲ぶその字面

こすりてもおちぬ袖の煤冬至風呂

野毛飲屋街に繰り出す冬帽子

オカッパル岡晴夫たうたう出たか年忘

下田稔兄亡き人の十八番を唄ふ年忘

極月の針跳ぶ ALMA TANGUERA

* ALMA TANGUERA Ⅱ タンゴを踊る人の心

年乗り切る術の一つに宝籤

世は進み飾る聖樹は新グラスファイバー素材

助っ人に聖樹歳末商店街

毎年のことよ聖樹の新趣向

マンションのおねしよの布団あつかんべえ

マスクして歩行の何處かしやちこぼる

極月の魚佐次に魚漁りをり

くるぶしを暮れにぶっつけ大きくじり

SOUVENIR SHOP スカジャン北風に吊り

聖樹置きどぶ板通りの福引所

クリスマスセールにNATOの軍服も

海軍の街に納の水天宮

身に芯のごときものあり日向ぼこ

冬桜花の手薄なところかな

青空を伝ひくる冷え冬ざくら

第十二句集 暮津

●一月―三月

あらまあのこゑに吞まるゝ初筑波
初雪をはたけり鳥の発つやうに
降り出して脇目もふらぬ雪となり
降る雪の意地を失くして水雪に
つままない雪が小雨になるなんて
怪人二十面相枯木の合間より
植込みにしゃらんしゃらんと初みぞれ
背焙れば叩くが如し年の火は
初刷を寢床に引き込み読めるなり
こんな日がいつまで続く初詣
しるこより雑煮齡といふことか
初晴れにひとつ体操でもせんか
古亀の池を見渡す初景色
晩酌に子持ち昆布かこりゃいいや
日を遍く正月の松優れたり
二日から甲羅干しせる池の亀

亀の首二日の空へ差し伸べて
だいそれた初夢をもう見ること無し
初売のすずらん通りころりんしゃん
紙幣きつ出す音四日のキャッシュディスプレインサー
参道に見るべきものは初雀
餅に飽きバリリとやりぬクラッカー
三ヶ日おだやか四日風吹いて
蘇鉄の実手にして戻る初詣
大蘇鉄とは大らかな恵方寺
初夢は尿意に断たれ跡かた無し
コンビニの繭玉一寸つつきみぬ
昇天をまぬがれみたり日向ぼこ
風出入り四日の旅行代理店
けんちん汁伝はる寺の総枯木
通り過ぐ木々が陰しく見ゆ大寒
谷戸尽し鎌倉に聞く笹子かな
日延ばしにせぬこと大事冬雀

羽搏ちては凍ることなき夫婦鶴
何やかや云ひては海鼠に手を出しぬ
実時の文庫跡地梅早し
最上川べりに捨てられ古竹瓮
力学の原理に適ふスキーせよ
焚火して何だかゆとりのやうなもの
日向ぼこ長身瘦軀折り畳み
えらさうに聞こゆる咳が出てしまふ
火桶より火桶の見ゆる牡丹園
三箇所^三に火桶設え牡丹園
遠近の牡丹に目遣り火桶に手
一塵も止めぬ鴛鴦の身だしなみ
鴛鴦映す水の最も美しき季
酢豚酸し正月料理に慣れし口
荒ぶ世の春をどっこい^{「国芳 曉斎なんでもこいつ展だイ」展}曉斎展
曉斎の拳骨啖ふ新春展
留守居して残り福めくみかん剥く

大塔宮を目指せる水っ洩
青木の実神域しんと澄みわたり
寒禽の潜めり護良親王廟
梅早し紅葉が谷といふところ
梅を見に人出ぬうちの瑞泉寺
ともすれば消え入りさうな冬桜
梅咲いて方代無心を乞ふた寺
初商量り売りせる紹興酒
段葛破魔矢と破魔矢すれ違ふ
寄り道^{大塔宮}の官幣中社の梅早し
厄詣りの飯店古^{すぶた}老肉食ぶ
銀髪に破魔矢いとよく映えにけり
初吟行鉛筆^{逗子 小坪}もて指す洋上富士
丹沢に雪うなばらにうねる浪
椿落つ小坪の蟹の横這い径
雲菟むところ三日の風の不二
おてんと様通して畑の梅咲ける

雀らも群れをつくりて正月す
元朝の煙草を買ひにボテボテ着
松過ぎの洗濯物に差す薄日
思考力鈍る厚着はせんでおこ
初日影取り込むソーラーハウスかな
句を敲き敲き歩きぬ水っ洩
新春の蹴球魂^{サツカ}激突す
狛犬のごとく切り込み初ゴール
本覚寺
覺見え十日戎の寺はそこ
初戎乾びし風が吹きにけり
福笹に当り矢紛れなかりけり
福笹の大福帳が風に舞ひ
偽小判出回る世にして初戎
福笹に吊るるゝもののおもしろや
真っ赤か十日戎の日暮れ雲
寒茜けふの一切了はらせて
寒ム空は承知只々歩くのみ

寒鯉は黎明の色つと動く
左義長を渚に待てる水っ洩
逗子消防第七分団とんど守る
妻の首すくめどほしよ爆竹に
爆竹の今か今かがバンと来ぬ
顔そむけどほしとんどの火の壁に
福達磨燃ゆる火中に何念ず
飾焚き白くふすぼる福だるま
眼が痒くなりて左義長果つるかな
左義長へ消防団員トビ担ぎ
左義長の火懸けの役は千支の子ら
左義長の藁灰渚に張りつきて
鳶口が何本も出でどんど焼き
竹鳴るは節破る音どんど焼き
年の鐘撞く音色にも人間味
ぶるといふ音して鶯に鶴止まる
水差しに水満ちゆける音も寒

酷寒と蛇口ひねればさう聞こゆ
成人の日の諸星の華やげる
寒明けとふんぎりつけるやうに云ふ
猫がまだ己押さへて寒の日々
日向ぼこよいしよと起てば目がさまよひ
冬の蠅見直す素早き翅使ひ
乾燥諸焙れば月の隕石孔
何たること大寒の酒切らすとは
寒中を咲き通す花物好きや
硬直し国道ゆけば霜の声
大寒の夜を閉づビロード地のカーテン
湯屋板間厚着剥がすにてこずれり
寒曉の強き新聞掌に重る
寒晴れに正体晒すものばかり
おお寒むと躰こすりて起き出しぬ
電気毛布先づ強そのあと適温に
古電気毛布温度に斑のあり

神田明神
青木の実つやつや銭形平次の碑
一月の川一月の谷・
一月のその句を褒める向きもある
水底の木の葉にも年巡り来て
寒蛭少し音を上げ煮らるるか
風邪の身の何處かひくひく起ち上がる
潔き起床が凡て冬百日
膝さすり寒さをこそぎ落とす妻
小松屋石材店
界限で一、二の容姿石屋の梅
亡き主の目利きのよくて石屋の梅
鼻紙を使ふ妻見てさては風邪
如月の簡に過ぎたる見舞状
心字池隅から隅まで氷るとは
孫の手が何處にも無くて鳴雪忌
妙本寺
しろがねに著我は睦月の日を返し
日の永しラジオは禿げを話題にし
平潟湾
ある時は吹雪くが如く春鶇
球根を植え込みし掌の皺みゐて

寒海苔を肴に酒はまだ飲むぞ
頭上を雀ひゆんひゆん鶯替日和かな
大島紬でんと着込みて初天神
鶯替や破格の鶯が先づ売れて
ひょうきんな目をした鶯の替えらるる
懐に滑り込ませぬ木彫鶯
菅公にゆかりの諸々初天神
太鼓橋こぞりわたれる初天神
これみんな鶯替を待つ人の列
鶯替の列の後尾はここですか
納め鶯大小よくも並べたり
携帯の懐中鶯も売られをり
控えゐる巫女一並び天神花
国産マツチ創始者 清水誠の碑
ボウボウと枯れ木 国産マツチの碑
横十 間川に日が射し芦枯らす
初天神戻りの藤いろ紙袋
湯島天神女坂下うぐひす来

お茶の間を彩どるものに雛あらはれ
●四月―六月
食う菊もありてよきもの一株植う
蝶の舞書体で云へば草書体
写生の眼花と画帖を往き来して
大石の昼行燈にさくらは似
鯉に伍し亀の泳げる仏生会
住職は頑固なお人紫菀
花見むと来しリハビりに気散じに
酔どれのそれぞれそれと散る花を
花奪ふ風に尻尾のあるごとし
朝桜禽掻い潜り掻い潜り
日曜画家絵筆に含ます花のいろ
夜ざくらを口あんぐりと開けみる児
夜桜の雪洞高くここ低く
たんたんと咲く夜ざくらに飛行音
花の下ベルのよく鳴る三輪車

十日程花遅れたり建長寺
建長寺 回春院
諸葛菜巡らせ尼ぜの起居かな

ここ最も奥まる塔頭濃山吹

下駄履きの作務僧春笋抱えくる

洪鐘おがねに飛花の当たりてはたと落つ

椿落ち載り損ねたる石畳

茹であげてこれっぱかりのほうれん草

エナメルの靴先に飛花舞ひ込める

沿線の花に急かされゆくごとし

先づこんなところ櫛の芽吹きとは

郁李や早め早めとなる起居

とびつきり遠くへとべる飛花一つ

花見衆持ち込む小ぶりの瓦斯ボンベ

花見客に唸る屋台のバッテリー

夜ざくらの酔ふて地に置く紙コップ

靴脱げる処が玄関花筵

走り根の出っ張り避けて花筵

石組の石を押すなり花筏

横須賀海軍鎮守府
鎮守府の苔むす桜何見て来し

いちにち雨心に烟る花を観て

燈台の足下からすのゑんどう咲く

飛花舞はず風の一変フォルテツシモ

苗木売る市立つ即ち散財す

植木市立つや神社を問借りして

立読みの春の園芸雑誌かな

空耳に盈ち盈つ花のせりふかな

日は蘭けに蘭けて悶々八重櫻

湘子逝く馬酔木も花の鉦打ちて

春愁レントゲンふ吾が骨格を医師と見て

病人に個室大部屋春蘭けぬ

八重櫻足懈く道戻りけり

夕風に揉まるる桜ここから帰路

ぶるぶると俵形してしゃぼん玉

突き出せる子の掌に大破しゃぼん玉

妻うっかり五月蠅さばえを入れて仕舞ひけり

植木市薔薇前にして施肥講釈

曲がる術知らぬ五月蠅さばえの飛び来たり

芍薬の蕾弾けば固し固し

茎立たつきや素なる生活たつきにいつか慣れ

春疾風それに倍する花吹雪

盛りの牡丹危惧する程の雨でなし

御首みしろしを風に撲たれしチューリップ

風絶えぬ一日牡丹の獅子奮迅

桜葉降らせて雨の粗くなる

徒然なるままにけふ過ぐ翁草

妻伴れて若葉曇りをウォーキング

馬鈴薯を植え了へはたく手がかさかさ

毛虫ひそかに事運びしが発覚す

発覚即リンチと毛虫心得よ

六十余年あつといふ間や種痘痕

種袋裏に記しある発芽率

汝が植えし松葉牡丹も喪に服す
喪の家の厨の玉葱発芽して
骨壺と新樹の中を戻りけり
朝顔の双葉本葉と喪の日過ぐ
夜は明けて茄子炯々と納骨日
雀啼く平屋の家の明易し
はつなつの花を絶やさじ新仏
喪の家の明易ければ鳥のこゑ
骨壺の一つ置きある夏座敷
会津出の汝を弔ふに会津の冷酒ひゃ
気安さの千代さん無き家明易し
ひやひやと夜の手が触れて眠草
厨より話に加はる五月妻
うなづいて答へるときの瞳の涼し
喉佛大のころころ枇杷の種
枇杷の種落とせば木の音したりけり
認知症病みて熟れ枇杷滴らす

シンプルがベスト皐月の装身具
六月の植木鉢をぱちぱちん
日雷母が正気に戻るとき
眠草なんなら君も触れてみな
眠草突つく処がなくなりぬ
液肥与ふペチュニア・サフィニア・ロベリアと
古漬胡瓜茶漬けの候となりけり
一物のごとく胡瓜のぶるさがり
へエと云ひ葉下の胡瓜覗きある
これと決む朝顔苗のポリポット
あぢさゐがのさばり出して家の裏
バルコニー「マサイの矢尻」鉢に活けミニプランツ
更衣首にほくろのある女
茅花茅花と茅花の戦ぐやうに云ふ
合歓の花咲いてベティの長睫毛
だ孫美雨んご虫愛づる姫君梅雨の庭
姉妹交互に手出しねむり草

枇杷滴るこんな筈ではなき母に
虫共の鼻も曲らむゼラニウム
恥部を見る顔付きをして蚯蚓見る
軟体の蜥蜴は水のごと流れ
総領の甚六にして蝸牛
なめくちの所業リンチに値せむ
いつまでもこどもは瓜の花
双葉もて百の朝顔翔びさうな
なめくちは極刑草鞋虫は放免
墓直木三十五の墓のうへ痩せ古柿の柿若葉
窓開けゐて吾も若葉の湿りもつ
くろもじ若葉雨降つてよし晴れてよし
新築の家成りレッドロビン垣
*カナメモチの一種
代蛙一雨あつてもよささうな
浅蜷腕押さえつ地震の止むを待つ
茶ぼこりのかすかにあがる新茶淹れ

梅花卯木ほとほと雨の止まざるよ
高齢のもう起きて掃く夏落葉
莫迦をみる初生り西瓜承知で買ふ
吾が一つ覚えの臺灣バナナ買ふ
納豆の風味のアボガド出回り夏
どう見てもこれ育ち過ぎアカンサス
つきあひにも距離といふものジャスマン茶
消息のその後ぶつたり花ぎぼし
隔たるものどんどん隔たり冷奴
生り方も見てのとほりのミニトマト
銭葵元警官の家にして
卯の花腐し思案ああでもかうでもなし
劍崎当りが適當磯あそび
冷奴へたに動かぬほうがい
吾が棲みし借家健在柿の花
布袋草表紙に掲ぐ一俳誌
青鳶や叙事詩展開せるとく

葛堀に青龍一頭放たれぬ

熟れ枇杷や敢へて云ふなら人缺月
悼勝赤年男

竹落葉拾へり痴呆軽度の母

若竹のそつちは剪りて是残す

九州は梅雨入と聞くアマリリス

降る雨の真つ直ぐ葵に倣ふべく

紫陽花や死に支度にも手本あり

雨烟り繡線菊ぼんやり咲くところ

孫預かる故の散財夏祭

根っからの音痴に生まれグラジオラス

助産婦の家の和蘭あやめかな

聖域を犯すごと百合剪りにけり

ほたるぶくろ悼みは時を経て薄らぐ

男滝へは女の足で十四、五分

徒に十薬引けば梅雨近む

どくだみや皆何處か病み葉漬け

この家で命全うしたき虹

生かされて生くる御教え未草

葉ざくらや日の斑を顔に胸肩に

蜻蛉飛ぶ定期航路のある如く

蜻蛉つるむ音のかきこそかさと墮つ

植木鉢取り退けなめくじ狩りにけり

夏の蝶8の字翔びに興じけり

団扇絵の逆巻く濤の風受けて

市立ちて一鉢なんぼの鬼灯売る

青山椒隈取り深く毛虫の貌

絵葉書に貝のイラスト夏見舞

あぢさゐの地味に応じて醸す彩

朝顔の掴まる処用意せり

石畳かつんと打ちて夏落葉

柿の花妻懐古の実家に近く棲み

梅擬この粒花があんな実

緑さす料理一品一品に

了見を一通り聞き葛桜

岩牡蠣と云へば象潟合歓咲くころ

ヨモギスジハモグリバエの跡か是れ
菊

傷跡のこんもり夏至の胸板に

老人のでれつと涼む湯屋板間

螢の出問ひ合はせれば昨夜五頭

剥き甲斐あるそら豆にしてこれっぽち

剥き売りのそら豆に鏑雨後の街

はんぺんを肴に父の日の晩酌

飛び込むは蛙ガガブタ覆ふ沼

風上にノハナショウブを愛づること

ノハナショウブ一町先の風が見ゆ

太藺見て吾もゆらゆら揺れもたり

行々子もぐり込んだる菝葍原

繡線菊にぼんやり道の続きをり

英名は洒落ゐて夕菅デイ・リリー

未草そこ離れむとして眩暈

オニシモツケじんはりけふは蒸す日なり

団体客箱根空木の紅を愛で

しやかしやかと仙石原の夏の虫

風露草雨すれすれに落ち来たる

蚊とんぼのぶらさがりをる谷地柳

駒草や岩場岩場の岩の彩

ポツチャンと跳ねしは梅雨の稚魚でした

海を見て扇子パチパチやつてをり

気のせいか箱根空木に雨ぼつり

梅雨の湯舟に銀座カンカン娘の唄

往時の逗子サマータイムといふがあり

匙よりもずんと大きな苺であり

くろもじの宿す雨滴を南風払ふ

雨癖のこれからつくよ著莪の空

ペチュニアは雨にからきし駄目な花

小肥りな躰を伸ばしなめくじり

ずぶ濡れに雨のペチュニヤペったんこ

ぶん投げられ糶らる鱧のメタリック

●七月―九月

つままれることをいやいやする毛虫
病葉の散るがきっかけ降り出せり

旅は寄り道夏牡蠣育つ日本海

一様に寿命は伸びて心太

ゆすり蚊と名越の祓受けにけり

瀬戸神社

勤め人茅の輪せかせか潜りけり

蛇の髯の花気がつけば雨小止み

天気予報出掛けに聞いて竜のひげ

もう齢かビールのピッチあがらずよ

朝の蛾とぶつかりさうに草っ原

月光にダチュラ怪人佇つごとし

夏風邪にうだうだ咳きとお恥ずかし

夏風邪の眼を茫々の海へ投ぐ

夏木伐る使はぬ筋肉使ひもし

パイナップル熟れきつてゐるお仏壇

蚊を打ちては草引く手順繰り返す

自動点滅街灯梅雨の灯を点す

射干咲きあたりジメジメして来たる

夏風邪引く面目なしと云ふ他なく

見るからに雨が重荷のカサブランカ

火取虫火取始めの音のおどろ

鱧・鮑・甘海老地物お任せ寿司

雨の日も夢見る合歓の下田港

搏てる音頼りなければ蚊を逃がす

大胆な女ひとと水着を見て想ふ

彩どりを抑えし水着長女なる

ガーデニングなんて洒落ても汗仕事

端居してまじまじと見る爪の土

薄光る切傷撫でて夕端居

花合歓の上を舞ふ揚羽うはの空

罌粟の昼キュンと音して砂糖溶け

かなぶんの現行犯を投げ撲ちぬ

一言に気分害しぬなめくじり

朝顔にあいにくの雨上がらざり

藪つ蚊をまたぞろ誰が引き込みし

梅雨晴間うどん粉病をやむ庭木

向日葵の意気軒昂に接す朝

長雨がたたり向日葵ひよるひよる立

汗っかき前置きにして言訳云ふ

汗流るむずむず虫の這ふやうに

踏めばそこ雨の滲めり白雨あと

手つかずの溝萩に風拡がれり

溝萩の謔けさ破り泥鱸捕

竹木石何でも登る蝸牛

燕ゆく方が海なり逗子銀座

霊界の入口に百合佇つごとし

七月の食器洗はれ積まる音

パイナップルえぐ味の針が舌を刺す

雷の楔を入れる、相模灘

雷獣の千里を駆くる光が見たり

海の家ぼつりぼつりと建ち始む

当浴場の鏡広告なら(有)三宝社へ

rel.。係員参上

鏡広告てふもの湯屋に吊忍

板の間にへタリて銭湯納涼図

雨の日もお祭りさわぎ凌霄花

白粉花散るは浪費といふ風情

団扇畳にほいと投げだし昼寝せり

瓜の種そこと云はれて顔撫づる

蝸牛さうださうだと領けり

朝顔蔓おいおいそこは物干竿

ビル風に涼んでゐたり病院裏

シネマ冷房空席冷えに冷えゐたり

ラムネのごと Fin の三文字昇り来る

さくらんぼ片目つぶりてまだ酸しよ

繡線菊の愛くるしさに接しけり

けふも又雨かやれやれさくらんぼ

飯の量注文つけて鰻の日
鰻喰ふ客を横目に鰻喰ふ
山滴る箱根に手づくり豆腐屋あり
さくらんぼ茎を抛るが面白き
男手の何でも突つ込む冷蔵庫
足速き夏の魚は酢でめて
「あ、雨」桜桃口へ運びつゝ
遠雷は響かず雨が蓋をして
薄暑来て始末の悪きチヨコレート
芋殻火を跨ぐ仕種が身について
抜け気味の夏風邪妻よ無理するな
鉢植えの蕎麦屋の風船かづらかな
風往なすことにかけては宮城野萩
当地ではアサマキスゲと呼ばれもし
アメリカ芙蓉国家斉唱することし
亀虫の一団鬼灯荒らしに来
風鈴の臨時の舌とてボール紙

蠅を退け遣るに止どめぬ老の箸
文机へかなぶん落ちて紙の音
急ぐ蟻そこで道草喰へる蟻
指の蟻吹き飛ばさむとして三度
暴かれし蟻の寝殿造かな
蛞蝓の光を溜めて薄笑ひ
麦こがし老と片づけきれぬこと
力要る老いの脱糞麦の秋
図に乗りて蓮に乗り上ぐあめんぼう
暑き日々俳句詠むにも糞ちから
ポーチュラカ何處かとぼけしその響き
ぢゃんぢゃんと火焰樹の花咲き継げり
少し手に余る花なり夜顔は
献身は人目につかず鉄線花
云ふに窮してそこまで云ふか水中花
氷水真つ赤なやつに歯が浮いて
冷奴本心さらりと云ひ退けし

花ダチュラだらんとびちよびちよ雨の路地
凌霄花テレツクテンと咲き昇り
この家にはこの家の家風おかたらのお
荒梅雨にぶつくさ云ひても始まらぬ
子蟪螂生意気構ひたくなりぬ
追憶を肴に老の麦酒乾す
散髪してサツパリすれば暑のやはらぐ
かうなれば開き直りて氷水
氷水搔き止め遠きもの見つめ
冷し酒お先走りもいところ
山妻のこまめに合せと汗のもの
鉢朝顔ご丹精とぞ褒められし
虫刺され酸の如きを裸身に
ザツと雨ササササと風軒簾
スコールは洋上はるか固め降り
向日葵に劣らぬ笑顔のヘルパーさん
蠅たかる所をそれとなく見居り

扇風機夜はぼつねんと座せるのみ
脛の創これは彼の時夕端居
身ほとりに好みの団扇取り揃え
昼顔に尽きざるガードレールの白
銭湯のタイル流るゝ泡涼し
燃え尽きる迄燃す芋殻の切れっ端
雑草は露を蒐めて魂祭
ごきかぶり団子喰らひて御用となる
少年の溺愛鋏形剣闘士
暁斎河鍋暁斎の蜘蛛出づ月の怪しき夜
妖怪の親玉何故か女郎蜘蛛
水打てば庭木喜ぶことしきり
ほっとせる貌を納涼夕雀
かなぶんのその実じよからぬ虫と聞く
かなぶんを音として聞くよからぬ音
かなぶんを色として見る至福のいろ
黄金虫吾が掌たなこ蹴りあるく

空襲警報下、母幼稚園に迎えに来ること

再三と聞けば

ぶんぶんやぶんと飛び来し艦載機

詐欺類発

尺蠖や擬態は怪しき商ひにも

芋の露面白ければ覆す

尻のさき待ち針いろの糸蜻蛉

油虫厨をちよろちよろ醬油いろ

一人舞台ひとり演ずる火取虫

血を吸うてあからさまなる藪蚊の腹

夏風邪に昇れる月のうすぼんやり

唇のごとくなめくじ歪みけり

この匂ひ鮒の煮付け夏の月

暑に徹るこゑてきばきとヘルパーさん

金魚掬ひまだ諦めぬ姉の意地

凌霄花散るに興じてはめ外す

昼寝してカタクチイワシの群るゝ中

翅休め昭和の遺物扇風機

瘡蓋の黒くかさばる大暑かな

追ひ回し遂にデメキンゲットの子

がさつかせ茂みの虫を捕る雀

快音と共に昇天手打ちの蚊

指の間残る大暑の菓粒

元氣づけ赤紫蘇巻のにぎり飯

ポケットの小銭ちやらちやら炎天へ

莫迦となる錠や西日の硝子窓

帽子などなくてもへつちやら炎天ゆく

骨折のそれでも使ふ古団扇

家居とは無言なる行大早

床擦れの我が身離れぬ早かな

ぎすぎすした物言ひになる油照

油照起死回生の一手欲し

もう一軒寄ってゆかねば日の盛

土けむりぱっぱと打水ばたばたと

打水のぼかぼか木の音草の音

納豆のやっかいな糸朝ぐもり

夏バテに百合根など佳し煮てお呉れ

かほる方振り放さげ見ればカサブランカ

夏期講座先生三角定規もち

体調を崩してどうする焼蒜

しけた音残して揚がる昼花火

冷蔵庫内部は蛙の胎に似て

往生すぎうぎう詰の冷蔵庫

手を変へてトマトの料理朝昼晩

肉じゃがの鍋に漁る大暑の肉

ご無沙汰の鰻に箸をつけにけり

家暑し駄菓子にろくなもの無くて

曉蝸桐箆筒にも沁みにけり

曉蝸四声が程に途絶えけり

朝もぎの「つ」の字「く」の字のへぼ胡瓜

へぼ胡瓜ヘルパーさんにお裾分け

商店街海鞘を横目にうち過ぎぬ

夏掛の柄古ぼけてごる寝かな

丁寧に生きて蓮のこちら側

朝曇妻の指さす食べこぼし

寺々の中でも出色この紫薇は

昼寝覚盛り白みてそっけなし

定食屋蠅帳があり勝手にとる

だるさうに横たはりある夏の海

青芭蕉風にはためく湯屋の帰途

西瓜の出来上出来で無しスカでも無し

はつきりせぬ虹の七彩折衷案

退職の挨拶兼ねて夏見舞

網走の市にて初見オオカミウオ

暗闇にてカサブランカの香のふい打

山百合の匂ひを削ぎにザツと雨

盂蘭盆の仏飯一夜にて乾ぶ

ごきぶりを追ひ遣る妻は総身もて

家居して大いに退屈水中花

菓子袋くしゃくしゃにして暑を譏る
昼寝より覚めてはてさて妻いづこ
鉛筆はH金亀虫の固さ
とんカツの旨き盛夏となりにけり
水切つて醤油をかけて冷奴
白塗のバルコン滑る蝸牛
夏旺ん紅茶はベルガモット入り
でっぷりした夜店のおばちゃん焼蕎麦焼く
匂ふ海これより花火一萬発
団扇の辺通りすがりの蟻一匹
くらがりに何運べるや真夜の蟻
この涼しさ訝り肌着に手を通す
夏着数枚年金暮しはシンプルに
卸かけ麻のしちめんどくさい肌着
遺品よく片づきをりし夏座敷
バンザイのこゑこびりつく仏桑花
水中花葉は処方箋に基づき

忘れがちそれでも金魚生きてゐる
布袋草残り金魚は死に絶えし
葛鰻頭何が喰いたきかと問はれ
暑氣払やるかと妻は探り入れ
籐椅子に腰を浮かせぬまた余震
片膝立て地震に身構ふ端居びと
甚平の腰泳がせて地震最中
地震あまりに激しく網戸に手掛けしまゝ
大相撲地震の画面に切り替り
蜘蛛の糸こら辺りとたたつ切る
雷にい行くうしろを断たれけり
夕立に何處か伸び伸びして晩酌
逃げし後また来てわれを弄する蚊
迎え火は共に 送り火はひとり
ただ魂消土用の地震のなすままと
ところどころ言葉が消され大夕立
真炎天ピシと音して割けるもの

上ずつて蟬音何とも幼かり
君の磊落南瓜の花に相通ず
夕顔の妙なる闇を蛾の羽打ち
藪つ蚊か脛に感じる圧少し
ぶんぶんは緑の鎧着し騎士^{ナイト}
ポンポンと咲いてポンポンダリヤとぞ
ハーモニカ上手な軍曹シネマ夏
夏瘦の肋凹ませハーモニカ
巻き舌に夜涼呼び込むエルチョコクロ
真夏の弦切り刻むカナロ・エン・パリ
昼寝覚檻樓が起き出す如くなり
棒のごと瘦軀横たえ暑の極み
追憶^{ジヤカルタ}
水中りコーラン聞いて遙かな目
惣領に生まれて夜濯ぎなど不得手
暑はいまだ序の口ご自愛なされよと
一線を越えてどどど大夕立
炎天来し笑顔が家に上がり込む^孫

夕立に降られて肌着総取り替え
へたる夏何かと云へば生卵
ゴム引つ張りばちんとやりぬ海水着
羽蟻退け遣れば又来て小奴めが
てのひらを返すごとくに夕立来
夕立のあと何處となく大胆に
大夕立など何糞の一油蟬^{ユゼン}
夕立となりて万象雨隠れ
夕立に容あるものみな打たれ
二階より母の見てゐる大夕立
夕立の涼気杉より檜より
地を抜かんばかりの釈迦力大夕立
夕立といふ一快挙ありにけり
夕立といふ快音を広げたる
夕立のみるみる上がりつつびんしゃん
ふしだらな部類に入る凌霄花
旱星創は乾かすこと大事

パジャマ這ふ蟻を畳に下ろし遣る
求道的たること今も雲の峰
雲の峰崩るることを厭はずに
艱難は切り抜けてこそ緋のカンナ
音を上ぐるものゝこゑ聞く暑の極み
蜻蛉を捕ふにへんな手つきかな
考へて大暑を味方につける策
程々に手を抜くことも鎖夏のうち
真つ当にあたらぬがよし朱夏万端
午は昼寝に徹すと決めてやせつぼち
濯ぐべきものくらがりの一隅に
ものさしの目盛薄るゝ大暑かな
風死すなか脛毛の薄きところかな
この暑さお手あげ水をのむばかり
水たつぷり飲みみて眠気と暑気払はむ
牛よりも鈍し大暑の身のこなし
草刈らむと踏み込む藪蚊の梁山泊

サルビアやその場しのぎの日を重ね
うだる日を背を押すやうに送りけり
仏壇のおさがり貰ふ盆雀
蟬の穴探し切りなしもう止めた
ご近所での蟬捕上手肉屋の子
したたりを許さぬ蛇口終戦日
水のみにつく昼蟬音の締め無き
岳父の世話そんなこんなで一夏過ぐ
蛸に鳴きねばられて夕日の樹
コンビニに蟬と蟬がら持ち込む子
空蟬の一つひつつく常夜燈
歳時記の蠅の例句も古りにけり
大木にとりつき鳴ける蟬反り身
青菘に当りてあらはなる風筋
盆の家いい塩梅に風が抜け
天上より萩を押しつけ吹ける風
萩に風姿乱せる萩に風

サーファーに勝手の違ふ風が吹き
サルビアの一斉咲きといふに遭ふ
朝顔の蔓に誤算のあり漂ふ
夕立にちからづけられ食すすむ
炎ゆる昼人に二つの呼吸法
潮浴びのでぶちゃん波を跨ぎゆく
ぴっちり水着着込めばいるかの胴
蚊いぶし吸ひ脚をじたばたじたばたす
雨降ればもうめちやめちやに未草
後樂園池に蓋する未草
鰻の肝横目に見て過ぐ街薄暑
水底についと向き変ふ岩魚の斑
人一倍長けて気位高き百合
夏の夜の字幕に友情出演と
夕雲を見つゝ涼とる妻共々
のうぜんになまぐさき風起ちにけり
向日葵の育ち盛りの大きな葉

向日葵のぐでんと水を欲しがるさま
捕虫網ぬうつと蟬の背後より
ぶるぶると鳴かぬ朝蟬木を替えて
襦袢のごと寝ねて夜蟬の短鳴き
朝蟬の鳴き出すまでの樹のしじま
女郎花容れて一景なまめきぬ
雲の峰あら崩れ始めけり
けふの暑さ鰻のぼりと聞き凹む
テロ企つ奴は穀象より劣る
炎昼の古漬噛めば澄みし音を
真夏日のがちゃんど瘤に触る音
向日葵を一呑みにして陰しき雨
大象の大暑の牙の薄光り
脂っ気もうなき髪を水洗ひ
盆に入る朝の煮炊きの炎をながめ
大井川渡りざりがに採りにゆく
少年時代 回顧
連結車輛の数の当てっこ終戦日

鐵路に釘均らす遊びを終戦日
その本は今も何處かに終戦日
空ら響きして脛の蚊をうち洩らす
滾る暑の底の方より油蟬
雲の峰肋バタバタ叩きみる
炎天に思ひ浮かばぬもの名前
暑にああと四、五軒先の赤ん坊
糲穀の音の中なる曉蝸
曉蝸一つ遠くに際立ち来
桃剥くと妻のむっちりせる上肢
ぶんぶんの遊び半分灯を取りに
ごきぶり打つ力余りてこの始末
気がつけば形無きまでごきぶり打つ
端居してしみ・しわ・ほくろなど数ふ
実向日葵故人の笑ひかけるごと
向日葵の見通せぬもの無きごとし
向日葵や真にひとりとおもへるとき

蟬音いま空中楼閣なせりけり
界限の木々に目配り蟬捕る子
やせつぼち灼ける海見て怯みけり
浮袋二箇膨らまず役はパバ
蟬の穴ここに集中する訳は
杜の蟬勝手に幕を引きにけり
鳴くしきやない蟬のいちにち了りけり
直言こそ待たるものや栄螺の腸わた
句句評に触れて何を申すか昼行燈
器用に世渡りて海月の優柔を
浮ついた海月の部類に吾も入るか
ヒリヒリと蟬音あたりが暮れてくる
減る蟬音聞いて山妻厨に立つ
蟬殻のそこで時間が止まりをり
朝蟬の勢ひたてるが元氣の素
蟬時雨人は勤まることをして
手短に鳴ける夜蟬の空元氣

蟬の穴同士近くて愛しけれ
百日紅花より幹の至福相
西瓜壳軽トラで来て店開き
くたくたよ三時の葬ならずとも
物故者一名俳誌八月号末尾
赤裸々に生きていりやこそ百日紅
ともかくも生きていりやこそ冷奴
口癖の「生きていりやこそ」夕焼見て
蚊を入れぬ蚊帳の出入り慣れたもの
もう既にこゑの森なす朝の蟬
朝の蟬潮のごとく退くときあり
朝蟬のいつとはなしに一潮流
蟬捕の蟬を鳴かせて通りけり
芙蓉食ふ虫は小奴でありにけり
浮輪の子嬉々と寄る波跨ぎゆく
とりあへず海月のやうに浮いてみな
百蟬せんの中の一蟬たち優る

どんぷすと岬辺りの遠花火
朝蟬に鼓舞され我流体操す
蟬殻を剥がし欄干歩ます
賽銭箱のぼり詰めたる蟬殻あり
捕虫網かなぐり捨てて鳩追ふ子
文机に書きかけのものつくつくし
ゆふがたは涼しきものと期待して
夕かなかなやつつけ仕事一頓挫
死してなほ蟬の目鼻の剛健に
大川に溺れて真水のみしこと
蟬止まれりや何處でもよいといふ風情
蟬捕りの極意は逃げ来る蟬捕れと
空蟬の風雨に目鼻古びざる
よく探さないで物云ふ暑さかな
先生は暑き日選び逝きなすった
瘡蓋や一夏過ぎむとしつつあり
鼻っ柱少し日焼けて水を遣る

秋刀魚食ふ敢えて値段は聞かずにおく
早起きを励ます蟬も減りにけり
端居人臍の掃除をして居れり
神主のやうな顔してバツタ現る
白日下色を増しつつをみなへし
妻は鯛わたしは平目熱帯夜
一日の疲れ蚊遣に巻かれあて
くるぶしに透く静脈や日の盛
象牙の箸浸しあるなり晩夏の水
日盛りの音たて壊す菓子袋
ひまわりの一哲人にゆき遇へる
蟬殻を終には壊し始めし子
鳴きざまの朝からなげやり秋の蟬
凡百の蟬に占められ官幣社
長生岳父きしてさやかに使ふ象牙箸
ぞりぞりと晩夏の魚の鱗剥ぐ
模糊として口の開け閉て晩夏の鯉

虫籠の中はと見れば蟬の殻
雀来て群がる盆の変電所
衰ふるもの目に見えず夕端居
蚊の刺せる處膨らむ天の川
いつもより早めの夕餉芋殻焚
芋殻焚日暮れひとえに待たれけり
わらわらと芋殻燃えけり石の上
芋殻火にめいめいの頭をよぎるもの
蟻ちよろちよろする居間なれば菓子こぼさじ
木斛に晩蟬こゑをたてずにゐる
へくそかづら攀ずる金網灼けてをり
句を貶し海鞘に談論風発す
「ただいま」と芋殻抱へて妻戻る
芋殻焚うすくらがりに溜まる煙
芋殻火の果てたる闇に炭の香す
落胆のこゑ薨のほとりより
晩夏おそなつをたとへて云へば座礁船

粹な昼餉つめたき南瓜のスウプかな
鼻つまみ鳴き継ぐ蟬の盛夏過ぐ
夏曉なつあけのぼんやりしてゐる頭と手足
朝の蟬聞き流しをり床の中
大暑には頭使はぬコップ拭き
いとたやすく手捕らる蟬となり果てしか
美学にして幾何学ヨットの帆走は
浮輪の子おど臍の深さまで
校庭の鉄棒に寄り踊り見る
盆踊雨の様子見して再開
豆腐屋の娘めかして盆踊
山妻は根っから陽気踊りもラフ
新作の踊りに挑む影法師
踊りに飽きかはほりのごと闇馳す子
朝から翅バタつかせあてて残る蟬
団扇をこ絵は漢を転こかす女武者
「糞暑いねえ」と自転車行き交へり

船体のごとく傾き始む夏
向日葵や還らぬものを猶おもひ
向日葵の司どる海荒れむとす
その目つき何暗示せる実ひまわり
実向日葵ブラックホール引き込みて
実ひまわりこんざ典座のごとく佇つタバ
ひまわりの火の性しん天より頒たれて
実ひまわり今は落ち着き土の性
蟬しぐれ漫然と聞き横坐り
ひまわりの彼方夕栄え未帰還機
生彩無き盆花なれど仕方なし
トネリコの微光放てるその青葉
立秋の掛け声ばかり臍のゴミ
落蟬の翅ヒクヒクとさきほどまで
玉子割れば黄味の生き生き敗戦日
はらと落つ抜け毛のあたる裸かな
真水飲み噎ぶ八月十五日

もの溢る屑籠八月十五日

疎開地 静岡 島田

疎開して生にんにくの虫下し

やみくもにティッシュ渡さる街薄暑

ひっちぎる日めぐり八月十五日

炎昼をふうふう言うてコップ拭き

硝子器の汚れ目につく大暑かな

それなりに数つけにけりミニトマト

プチトマト朝夕の膳賑はせり

二夜連続戦争ドラマ熱帯夜

氷水舌の形が判りけり

ひまわりの一つ目小僧月下に聳つ

天目に撲たれ強しよをみなへし

物匂ふ世が嘗てあり冷蔵庫

羽抜鳥どころか鏡のわが瘦軀

盆花の活けある水のすぐ古ぶ

炎天をのこのこ訪ね来る御仁

炎天下へたに歩かぬ方がよい

もう少し肥りたけれど胡瓜揉

手術痕古ぶばかりや夕端居

ジョッキ挙げわれらウルトラマン世代

蝉鳴き出す空襲警報発令と

強靱な蝉の肋を仰ぎ見て

はだける肋に韻く夏の雨

残る蝉非力非力と鳴けるなり

盆僧の頭下げ下げ隣家辞す

路地明けて来るなり芋殻の燃えかすに

古団扇やれやれけふも了りけり

ぶどう一粒地球のやうな愛しさに

西瓜食ぶ間にピッチャー立ち直る

松葉牡丹よく咲き未だ咲き猶咲かむ

蚊の刺せる箇所は真つ赤に掻き壊す

網戸に隙道理であちこち喰はるるよ

香煙の立ちのぼる中匂ふ桃

電線揺れ地震の間飛ぶ蝉見たり

半ズボン地震来て咄嗟に入るゝ足

驚破地震と咄嗟に裸にはおるもの

晩夏の地震母は二階の揺れを言ふ

地震に発つ蝉のおろおろ飛ぶばかり

飛ぶさまは愚直そのもの残る蝉

飛び方を蝉に手ほどきして遣りたし

飛び下手の頭でっかち油蟬

飛ぶ蟬のいづれも路頭に迷ふさま

幾つもや月夜を蟬の魂昇天

方向がちがふと羽根を返す蟬

着艦に似たり油蟬あぶらの止まり際

バタバタと啞蟬あたり昏れしめき

昏れて来て蟬音半減又半減

夕方の風が出てきて減る蟬音

長たらしく鳴いて鎮守に残る蟬

つまむ手のひつきりなしに夜のぶだう

夏の夜の宴昭和のタップかな

日の盛りカレー粉の素炒る香のす

海夕焼け未だ償い足らぬかに

箒草雨に優しさ加はれり

瘦せ向日葵勤王志士にさも似たり

実ひまわりそっくり返ってしまはぬか

薺昨今の新聞紙上を見ればの耳を疑ふ怪事件

がぶがぶとピカドンの日の真水のむ

眼も耳も広島の忌も皆風化

防諜と殺戮向日葵知っている

憲兵のごとき眼をして実向日葵

日課となる朝顔の世話水の世話

顔面の蚊打てば眼ちくはぐに

お迎えはまだまだ先よと蟬啼けり

郵便夫配り損ねて炎天くる

蝉声のおっと止まった誰か来た

蝉時雨ときにはうねることのあり

こりやあびつくり郵便受より蟬発てり

行き遇ひて蟬も驚く吾も驚く
晩夏なる机にやたらもの積まれ
蟬時雨やぼ用一つ出来にけり
四つほど採れたるめうが妻に見す
一歩づゝ秋来る空とおもひけり
大人げなく蚊の刺す処掻き壊す
冷奴の他に肴はもう一品
紋章のごとく大蚯蚓の轢死
ぺちゃんこに蚯蚓国道一号線
手を抜けばかうなる見本蚯蚓の死
精悍に紙面馳す蟻吹き損ず
このところ忘れてをりし夏の月
こほろぎの腿に引け目や夏痩せて
蟬時雨晩年押しつけられてをり
灼かれても青葉が綺麗なたちはぜ
白玉の甘味処を素通りす
端居して退職挨拶読み返す

西日中空振り三振シャットアウト
処暑処暑と口火切りたるつくつくし
灼ける景眼鏡の球を拭くばかり
ガラ刷這ふ蟻の大きさ9ポほど
仕方なし暑さのがれの昼寝せり
本日の一大事とは芋殻焚
蚊に喰はるところ見せ合ひ母と妻
小遣いの前借りなどして八月盡
炎帝に葉は皆垂れて従ひぬ
まだ青実なれどそのうち梅擬
夏満月近々とあり顔ほとり
満月にほっとする顔寄せ合へり
類無く明るかりけり萩透く陽
露の空何かあつては困るなり
のうぜん地に燃え移らむとしてみたり
夕立性一雨新宿駆け抜けり
蟬飛んでなんだ近くにまた止まる

端居していちばん風の来る処
大西日差すといふより照射せり
晩年は引き算ばかり冬瓜汁
おし黙りころり転倒せる蟬も
つじつまの合ふ句は陳腐蟬しぐれ
大西日蟬の今際いまはに立ち会へる
三人みたりにて芋殻火囲む今年また
反魂草残り少なき休みかな
古漬けの胡瓜つまめる残暑かな
煮南瓜の皮真青なる盆の入
百日紅愛染明王然として
熱線に痛み走れり浜日傘
紅にもう一盛り百日紅
のうぜん散乱あたり昏れしめず
炎ゆる日の昼餉昆布茶に焼きにぎり
盆過ぎの空の高さを妻云へり
呼び出され西日の中へ出でゆけり

ぼろぼろの夏果ての鳶岩鼻に
蟬何かに突き当たる音露けしや
引く草がみんな露草なららくちん
露草がひよろりと長けて命日來
朝昼晩餉に出る古漬胡瓜かな
打ち水に真顔もて蚊が刺しにくる
蚊の声す急いで何か羽織らねば
靱殻枕爽涼の声挙げにけり
蟬飛ぶは粹な小政の旅姿
だいぶ夜の更けし厨を蚊のうろうろ
お寺さま咲かする百日紅が見え
権禰宜めく蠅螂にして畏れ多し
をみなへし朝日に溶けてしまひけり
一降りに闇を正せる夜の驟雨
近づきては遠ざかりては夜の驟雨
打ちつけて傍若無人夜の驟雨
真暗がり打ちてやにはに夜の驟雨

端然として聞く夜半の一驟雨

夜の驟雨納まりかけて来りけり

露の世の木と紙の家震ふ地震

討ち取らる蚊のべっちゃんこ膝がしら

莫迦鳴きをはばかりもなく軒の蟬

朝夕の落ち着き来る鳳仙花

妻の指す腿の一箇所蚊の圧死

毛虫付き驚き桃の木山椒の木

昼寝して何がなんきん唐茄子かぼちゃ

後退る方は当方墓でなし

墓荒唐無稽の世に生れて

言の葉のでつくわすとは墓にこそ

隠棲の仕方を墓に教はりぬ

断るに墓の威厳を借りたきもの

へどもどと墓に遇ひたること申す

墓が家にわれらが間借りしてゐるやう

墓とことん措辞にこだはりて

浮世風呂

賢愚邪正貧福貴賤皆裸

裸体の前を押さえて「御免なさい」

日盛りの町の湯に入り私わたくしなし

銭湯の徳を数えて赤裸

裸形はだかにて湯浴び孔子も権助も

お粗末森の石松 三十七道中を悪声ながら勤む蟬

寿司喰いねえ江戸っ子好みの穴子寿司

夜の秋湯屋の板間の節くろぐろ

雨風にばらけ初めたり青芭蕉

夏の日の思い出づくり休暇村

研ぐ米の釜に張りつく終戦日

一驟雨頭のもやもやを拉し去る

振れること忘れぬ朱夏の古磁石

揚花火探り当てたる空の芯

揚花火うち抜きし空締めりけり

葛咲いてやぶらこうじのぶらこうじ

夕日に透き五効ごこうのすりきれ赤とんぼ

白玉にこゑ生き返り「お勘定」

真夏の夢どうせみるなら酒池肉林

ネーム入り傘を貸し呉れ生身魂

夕立あと傘提げチャップリンめく家路

観念し秋暑の路を辿るのみ

ごろ寝して裸の王様すだれ裡

外とに起こることは外とのこと秋簾

考えてもしようがないこと古団扇

力んでは秋の蚊をまた打ちもらす

だだこねて木馬に乗る子希典忌

風が湧き走り回れりお花畑

墓を守るはらからも絶え鶏頭花

秋の風翳を何處かに忘れ来し

露けしの一語荒野の全て指す

露けしの一語に尽きぬ一遍像

露けしと云へば二の句を挟めざり

あめんぼの水を踏まえしトウシューズ
武州金澤八景落雷なくはなし
扇風機はたと止まりしまゝ晩鐘
花火果つその大空のみみず腫れ
愛敬を振りまき上る花火あり
目と鼻とおまけに口もある花火
秋初風句帖持たずば頭に記す
花火果つ五體叩きて砂払ふ
一方に峰雲一方よりタンカー
夜蟬啼くは後悔に似て忸怩たり
夕立の一気呵成のそれが来た
飯支度お手のものなる生身魂
生身魂達者なものよ卵焼く
蟬しぐれ痴呆の母と禅問答
灼け木道一人歩めば一人の音
捨て湯して今日が始まる生身魂
生身魂好き嫌ひなく膳のもの

生身魂野菜サラダに目の無くて
一寸づゝおかずに手つけ生身魂
生身魂何出て来てもマヨネーズ
じつくりと聞く耳持てり生身魂
座睡して楽土に遊ぶ生身魂
夏果ての隠れ煙草を患者らは
ギブス嵌めそれでも煙草炎天下
風死す中あらぬ方見て採血す
落蟬のほとり過ぎゆく勤め人
ふかし諸皮の赤さの切なけれ
夏瘦を挽回せよと通り雨
回覧板届けに晩夏の腰痛持
町中の墓地の空飛ぶ油蟬
原爆忌
その昔リトルボーイの降り来しそら
エノラ・ゲイぶーんと飛び来て止め刺す
手すさびの手のゆく腋毛八月尽
赤恥をさらす訳には蟬しぐれ

夕立来と妻はクイズを抛り出し
ニユースキヤスター金魚の如きおめめして
夜店より孫を剥がすにくまれ口
生身魂だうした訳からつきよ好き
塔婆より塔婆へ飛んで油蟬
ハンカチがなければないで服で拭く
金魚飼ふといつまで言ひ張るわからんちん
夜宮
金魚掬ひ一回だけと念を押し
生身魂畳を擦りて小用に
立佞武多ゴジラのごとくやってくる
世は移り二束三文バナナかな
ぺらぺらの着慣れしパジャマ夜の秋
こら毛虫ここで会うたが百年目
仏桑花葉巻めく花落しけり
雨の日のペット屋金魚ぶかぶか浮く
水族館見学子
海星に手触るとき心臓どつきんこ
ひよろりと長け一寸猫背の実ひまわり

此処天界白さるすべり散るところ
嘗て 教科書で学べば たたかひは上海に起り
居たりけり鳳仙花紅(あか)く散りみたりけり
上海が出て来て困る鳳仙花
鳳仙花防空頭巾を被る世の
サルビヤは機銃掃射の火噴くいろ
千人針知る人絶えてほうせんか
この道は湯屋に抜けるほうせんか
また一つ湯屋が潰れてほうせんか
もう了る花と秋待ちみたる花
秋めくといふ空の下授かる句
秋めくといふ空に吸はれけり
悲しみは追ひかけてくる鳳仙花
ひまわりの根を見ておもふ保水力
岐阜提灯未だ見ぬ世の景見する
岐阜提灯小野小町は野に倒れ
仙厓筆薄と小町のされかうべ

大学芋食うて戦争あやしまず
お隣りは元銀行員水を打つ
紅毛もすなる俳諧杜鵑草
陶片の出でくる畑油点草
いと白き落蟬の腹秋立ちぬ
今日を逃がしてどうする我が家の地震対策
棚の本ときに仇なす震災忌
新米と後ほど聞いて道理とも
新米といはれ一粒灯にかざす
今朝秋の踝汚し戻りけり
茗荷採ここに無ければそこどうか
かたまつてカンナ八絃一字かな
梨重たけれど甘味の保証無し
のろまなる台風と聞きやきもきす
今朝秋のモーニングコーヒーブラックで
そこそこ採れ零余子御飯に一寸足らず
秋雨にガタがきてゐる前立腺

月見まんじゅうもちちとして月見の座
望の夜のかさこの煮付け甘かりき
花すすき揺るゝ辺ひねもす釣糸垂れ
虫の音のじんじんとフルオーケストラ
お供物に両手塞がる秋彼岸
線香を身寄りの墓にも秋彼岸
秋扇いっぽん持ちちて通院す
刺すことの今旺盛な秋蚊とも
栗飯の栗をごろんと箸に乗せ
認知症とはけつたいな秋彼岸
言替えても痴呆は痴呆秋彼岸
下駄履きの種採日和とはなりぬ
蟻螂の逃げるにあらす尻向けぬ
秋の蚊を振り切りしかと辺りみる
秋草を手折るは釣れぬ証拠なり
種採の封筒ふうと膨らませ
糸瓜忌の一犬吠えれば三犬吠ゆ

咲き登る夜顔脇の月を見て
夜顔と夕月闇を同じうす
秋刀魚の骨代はって外し遣りにけり
栗剥けと盆と包丁置きゆけり
青柿や党首張り上ぐ第一声
玉すだれ政権どちらに転ぼうと
栗ご飯お焦げうれしく釜払ふ
ともかくも選挙終れり赤とんぼ
良夜の足二本重ねて寝まるなり
月見まんじゅう月が食うたか一つ減る
鉛筆をいっぽん置きて月を待つ
二つ飛ぶ夜間飛行の灯も良夜
町中の墓地ぼっかりと今日の月
垢抜けてみゆる月夜の路地てふ路地
満月の下に睦める家と家
月の家ヒゲタ醬油の髭の屋根
手に通す良夜のパジャマ薄黄なる

どの家にも一つ良夜の玄関灯
判りにくき墓地の地図見て秋彼岸
彼岸花咲きぬし場所を事細か^妻
蛭蝶あちらではたはたこちらではたはた
蛭蝶はたはた舞へば書き割りめく
種採りをしたり片づけごとしたり
虫の音を聞きつゝ庭の片づけごと
鶏頭を引っこ抜くとき土けむり
女郎花今を盛りとなまめきぬ
長啼きのこれにて退散法師蟬
種採のおつとここにはいぼむしり
十六夜の生節の血合いつつき食ぶ
コスモスに高原の日の乗つてをり
コスモスの上に市街地展け見ゆ
アサガオと鉛筆書きの種袋
なあなああの仲の芒と望月と
かまつかの繪手紙暫し繪のちから

はやばやと旭岳より積雪報

日毎咲く芙蓉と共にある生活たつき

気をもませながら秋蝶まだ止まらず

自転車のブレーキキュツと秋の空

通販の庄内米をファックスにて

禅林に木瓜の青実の大知識

冷まじや葉の端の蠢けはだつは

秋海棠情にほだされ易く生れ

コスモスに配色といふ一語あり

吾なりに菊の好みを云へば野趣

秋晴れにちよつと自慢の出来る花

セセリ蝶ねずみの如き貌をして

蚊孫、美雨に喰はる処をさうかさうかと揉み

半歩でもともかく前へ草の花

色古りて風船かづらにも老境

橋渡り了ふまでに鱒跳ねたまへ

とんぼ飛ぶ泥亀町でいきちようとはこの辺り

夜を長く感じ始める灯の許に

つたなきをぬぐひきれずにゐるばつた

河原石手にとることも一秋思

絵が得手の人の手になる萩便り

霧に頭つ岩相岩場の道ゆけり

松虫草ひるがへるここ天界か

足許は草の色して霧の中

外見は一見丈夫羽拔鳥

衣被不義理いちいち気にしては

鮭缶で二膳軽々豊の秋

秋雨にじたばたしても締切日

冷まじや大根下ろしの山素しろし

秋雨に薄く広げて玉子焼

実紫師系を誇るおたんこなす

家中がぎんなん臭くなり雨日

萩叢を雨は手加減して打てり

済む済まぬは香奠のこと鴟日和

白萩は大鳥となり月明に

永六輔精霊ばつたの齋ならむ

蟪蛄を凝視ひるんだ方が負け

このぶだう旨し笑顔を御礼とす

おほらかに露の凝りしが葡萄とも

昇天の心地ぶだうの一粒に

曰く言ひ難しぶだうの果肉とは

口皺の深々ぶだう食うべけり

ぎんなん落つそびらにいやに大きな音

毛先までぎんなん臭さにまみれけり

ぎんなん採る通りすがりの筈なりしが

ぎんなんの光沢放つ炊き御飯

秋風に団子しみじみ米の味

弁慶草擦り傷つくらぬ子が殖えて

擦り寄りて馴れ馴れしいぞ狗尾草

種採のほかに用無き庭となり

もそもそと種採るほかに人気なし

二回目の種を採るとして小雨の中
仲秋の或る晴れた日の耳掃除
種を採る蝶々夫人の唄声に
ずるずると日の経つばかり草の花
冬瓜にこんな食べ方あったっけ
瘦せ猫の背中ごとごと月下をゆく
良夜かな家は明りが点りてこそ
秋刀魚焼き年金暮し帳尻合ふ
秋来たり木々の陰翳礼讃す
秋の夜を忍んで日劇ストリップ
犬蓼見てぷらんぷらんと戻りけり
典型的秋晴れ球形ガスタンク
遅しきいとどの腿に及ばざり
虫の名のそのいちいち知らざりき
良夜の本開けたところを先づは読み
良夜の本ここ迄にして寝るとせむ
そこそこの句が出来秋のたんぼ道

台風来庭木を括る紐いろいろ
台風の中出て垣根手当せり
台風下足のベタつく厠板
一灯の他は台風圏の闇
うなばらの涯まで野分一掃す
万象の斯くあきらかに野分あと
雨撥ねて葉ばかり大き秋海棠
野分あとこんなに晴れて目の遣り場
台風のあとの日差しに疲れけり
つくねんと水を味はふ震災忌
ここに来てペース落とせり雨颱風
●十月―十二月
藪裾に燃え尽きをりぬ曼珠沙華
夜寒さのがちやがちやらねば縮まらぬ戸
うそ寒の厨に水の吸はるゝ音
秋晴をだうかうもなく家に居り
草の上は空に直結雁わたし

朝の鴉切り裂きやすき大気かな
こんな日はひとりがよくし秋初風
拡声器がなり秋暑の声割れぬ
虎造の快客ものに夜の長し
舌垂らし秋暑にダアと寝そべる犬
向日葵の種子皆窮屈さうにして
朝顔の種こじ開けて下調べ
夕顔の雨にでれつと五つ程
鳳仙花昔はよいことだらけなる
鴉の朝頭機敏に立ち働く
予報士のまたもやヘクトパスカルと
台風に先手打ち鉢取り込みぬ
台風その規模風鈴きりきり舞
煙草買ふ間ありて台風中だるみ
買置きの煙草とライター台風下
台風の眼のなかジメジメしてゐたり
台風直下こんなものかと空見上げ

芙蓉喰う虫はお主か悪漢^わじやのう
夜寒さの暖をとるとして白湯を呑む
髯を振るこほろぎ遺愛の箆箭の辺
悪たれは何處にでも居るまんじゅさげ
ポキポキと目で折り行きぬ曼珠沙華
曼珠沙華疾うに御首級あげられて
この路地に建て込む家並今日の月
車輛音カタカタひつじの二番穂に
夏草のまた生えくれば同じこと
蠅虎雨戸に日和がよささうと
赤とんぼ汚るゝ翅に無頓着
夜顔の実のたんと生り何と野暮
「さうはどっこい」身ひねりかわす蜘蛛の糸
女郎蜘蛛網繕ひを怠らず
行先がすつと決まって萩の寺
紹興酒の空壺に萩活けてあり
ぎんなんを踏みつぶしゆく市営バス

ぎんなん臭さ帯びて戻れば蚊に好かれ
席巻といふ語まさしく泡立草
手と脚が弾んでならぬ運動会
運動会びりつけつにも湧く拍手
一等は万歳三唱運動会
二等賞は万歳二回運動会
三等はえいえいおうの運動会
目の前で抜かれてしまふ運動会
運動会必死になる顔ならぬ顔
穂祭も我もいづれは消えてなくなる日
種子揉みて音にして見す枯れ具合
晩節を種採ることに安んじては
日と雨のたまもの色づく箒草
せせり来て吾がズボンまでせせる蝶
蛭蝶せせる一日始まりぬ
ぎんなん剥きとつくに鼻が莫迦と云ふ
吹かれては芙蓉の影の舞ひあがる

菊鉢を提げ新刊書小脇にす
日の翳り易きむらさき食用菊
蛭蝶せせり疲れの無きものか
大石田大河洋洋露満満
草風船いつそ昔のまゝがいい
ゆっくり枯れ草風船の風流は
もういいかいもういいよとて秋の暮
一膳で足る餉茗荷の古漬に
鶏頭のいたくうらぶれ霧雨に
金木犀台無しにする雨ならぬ
幾つもの風筋通し萩の寺
出来秋のわが体重を量る湯屋
杉田湯
風爽やかピザは高原野菜入り
煙草の香窓より抜けば秋雨が
略凶又出して確かむ蓼の道
熔岩原のりんどうしゃしやりこしやんと咲き
洋梨の器量も含めし値段なり

開戦シーンポップコーンの香が流れ
ホームにて振り払へるは草虱
露寒やるると草に潜むもの
おそろしく乱れてをりぬ通草の藪
鶏頭のとつとと昏れてしまひけり
甘藍の苗に寄せやる土ふんだん
零余子黄葉始まってをり覚圓寺
そこに在るまゝの冬瓜師と仰ぐ
冬瓜の面々授々に他ならぬ
渡り鳥東寺の空に懸りけり
浦のつく駅名多し渡り鳥
簡単に見えてだうして松手入
魚うおにもある唇やや寒覚えけり
軍手・莫蔭・脚立を用意松手入
ご近所より少し早いが松手入
松手入ちよくちよく脚立据え直し
松手入脚立捧げるやうに持ち

松手入素人の域抜けてをり
山妻の見守る中の松手入
松手入新の軍手の昏れてくる
松手入あとかたづけを待つばかり
清流を下るがごとく菊見かな
抱えくる五郎八といふ濁酒
自然薯のハナガサそこを掘れといふ
*ハナガサ||さく果
じねんじよの花笠ひらひら駿河晴れ
じねんじよの好みの土は粘土つち
じねんじよの髭火で焙り擦り仕度
匙をもてべろべろ柿を始末せし
冬珊瑚鰈岳父暮らしも板につき
躰なまらぬ程度にざっと落葉掃く
物音をたてたくなりぬ敗れ蓮
くいくいと鴨鳴く蓮の池之端

バラ銭が箆に鳴り落つ酉の市
壁際につんつるてんの冬着垂れ
ようそろと鷗添ひ翔ぶ冬の航
あらぬこと言ひては払ふ牛膝
文化の日柄の揃はぬ茶碗蒸し
杉田湯の槽ふねの柚の数半端でなし
気泡湯にもんどり打ちて冬至柚子
冬至湯の柚子にこゑかけ上りけり
渡り蟹の食べ殻を捨つ十二月
末枯れの百草を刺す野路の雨
冬麗の砂山一つ作り去る
消灯の紐の音霜でも踏むやうに
毛皮臭き御仁と同車東京まで
腋の下締めて降り立つ冬鷗
むかしから肥れぬ質たちよ干潤目うるめ鯛
寒最中厠で使ふ水の音
冬が来る睫毛のいっぽんいっぽんに

小晦日買ひ足すものはメモにして
大三十日昼過ぎたう降つて来ぬ
大晦日まだ起きてゐて隣の灯
簡単に了はらぬ年よ除夜も雪
大年の雨のこのまゝ上がらぬか
熱唱に六十余州年忘れ
年の夜を更かす蜜柑の皮積み上げ
除夜詣雨にうるほふ地を踏みしめ
年越蕎麦鯁臭さが顔にくる
年越蕎麦鯁の小骨もてあます
年越蕎麦終母・妻・吾の数なるこの三人みたり
参道の歴然とあり除夜篝
除夜篝火の粉の竜を放ちけり
年の火の槽の芯から爆ぜにけり
鈴しゃんと太鼓はどんと除夜詣
鉛筆削りごりごりと冬休

ぴんしゃんと背筋を立てゝ水仙花
水仙は起立国語の授業中
水仙にばったり倒れ込む波濤
日本晴れ咳の一つもしたくなり
新聞でくつまめ一つ困ひけり
風邪抜けずひとりくよくよしてゐては
腰だるしさては取り憑く風邪の神
電気毛布妻に勧めて受け入れられ
冬の洗面真水を顔に打ちつけて
隣室てふ一語に冬の響きあり
大年の空窺へば鳶の居る
東京湾数え日の日を敷き詰めぬ
頓挫して御用納の日のクレーン
数え日の銭湯に四肢伸ばしけり
行年の湯屋に遊んで高天井
湯屋を出づ縁のつめたき洗面器
暮の海一光芒を遺しけり

クリスマスカード日系三世より
鳴り物入り日蓮さんの寺の除夜
年の外に追ひ遣らるごと除夜の鐘
除夜の鐘浅く撞きたる若夫婦
除夜の鐘撞いていささか誇らしげ
義父は慶應ボーイにて初期アイスホッケー
選手なれば
ハイカラで明治生まれでセロリ好き
豊饒の海を海鼠の語りぐさ
大根下ろし辛しと老いの舌曲る
煤の日をふぐり突き上ぐ気泡湯に
冬曙何としたこと尿あやまつ
冬青空噴水勢ひ取り戻す
冬至湯にざぶと一物沈めけり
白息の一条やがて透明に

独歩への一歩 茨木和生（「運河」主催）

高沢良一句集「ねずみのこまくら」の序文も跋文も、ずいぶんと丁寧に読み込んで書かれてあるので、入っていく余地などないくらいであるが、著者と同世代に呼吸する者として、本集を一読し、これからを期待できる作家であることをはじめに言挙げして、筆を走らせていきたい。

大年のむらさきだちし夕櫂

裸木となりてさくらはそこらの木

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

裸木となりて櫂の豊鑠たり

数へ日の日にまどろめるさるすべり

根方よりずいと見上げぬ冬櫂

裸木となつてゐる冬の木を素材とした作品を

あり、乗り超えていかねばならないといえは△豊鑠たり▽という把握であろう。裸木となつて、大きく枝を張り拡げている櫂は、たしかに他を圧して豊鑠としている。△豊鑠たり▽というのも、この作家の発見には違いないが、ここでとどまっていれば、さすがに攻め入つての突破口を開くことはできないだろう。△根方より▽の作品の冬櫂であるが、ここには△豊鑠▽ということばを超えた存在感がある。△裸木となりてさくらはそこらの木▽という作品に、この作家独自の視座のあることを見ている。眼前にしているのは、裸木となつて、そこらにある木々と変わらぬ姿をしている桜の木であるが、花咲かせて、そこらの木とは異つた存在であつたさくらへも心は通つている。さくらに、そこらの木と同じになつているさくらの裸木が、やがてそこらの木とちがった存在として立ちあがってくることも思ひは通つている。この

まず引き出してみたい。そしてもうここに、この作家が対象に迫っていくのに、さまざまな体のぶつつけを試していることを発見する。対象に迫るとは、自然の神秘に触れに行くことでもあるが、そのことに苦闘している姿を発見する。対象に入つていき、それを写し出すということだけでなく、詩としての深さにまで入ろうと試みいることを発見する。しかし、これらの姿や試みが発展途上にあることも事実である。蛇が脱皮して身を大きくするごとく、作家として大きくなるために乗り超え、打消していかねければならないものも見ておく必要がある。

裸木となりてさくらはそこらの木

裸木となりて櫂の豊鑠たり

根方よりずいと見上げぬ冬櫂

打消していかねばならないといえは、△裸木となりて▽という措辞を一つの作品に絞ること

作品で作者は、さくらそのものの奥処に入ろうとして、いまままでに誰もが試みなかった視座を誕生させているといつてよい。

大年のむらさきだちし夕櫂

もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木

数へ日の日にまどろめるさるすべり

△数へ日▽と△大年▽には、わずかな日の差があるが、そのわずかな間の季の感をこまやかになしてあげている佳品である。この夕櫂も大きなものであるが、夜明ければ新しい年という、この夕暮の光の中に、むらさきだつている櫂の繊細な枝々のひとつひとつにまでも生命の通つていることを見届けているこの作家の眼差しの深さが見えてくる。数へ日の、意外と暖かな日ざしにまどろんでいると見たさるすべりには、この木に注いだこの作家の眼差しの暖かさが見え、数へ日のなかの人間のさまを思い浮かばせてくれる。△もうそろ

そろ山が笑ふVと感じているのは勿論作者であるが、それを△胡桃の木Vを通して見ているこの作者の感受の豊かさを眩しむ。胡桃の木の本質に立ち入っているから掴むことができたのだとも思う。この胡桃の木、温みはじめた水音のひびきを聴いて、流れに枝を差し出していたにちがいない。△裸木となりてさくらはそこらの木Vという作品に、この作家独自の視座を見たが、この△もうそろそろ山が笑ふと胡桃の木Vという作品にも同じ新鮮さを覚え、この作家の作品を独歩のものとするための有力な武器となる視座であると思っっている。花咲く木々の、共鳴する作品に眼を送ってみたい。

紅梅にもっとも近く女ごゑ

温言のごとき日を載せ茶の咲けり

散りそめて白さるすべり水の上

寒牡丹こゑあたたかく讚へらる

らみのある把握と措辞は、生きることを善をつくしていこうとしているものの、自然の讃歌であり、それを尊ぶ人間の讃歌であるといつてよい。そして、手放しの善意で、連翹の花のありさまを見て、ハハハハと見てとるのなど、軽い見立てと限って思いたくない。見立てといえは、集中に△あめんぼう方程式のXなすVという作品があった。『沖』副主宰の林翔の旧作に△鮎跳ねて瞬のCの字上り築Vという作品のあったことを思い出す。見立てについて、一定との批判を受けてきた私は、△見立てVといわれながらもそれに取り組んでいく意欲を買いだいたいと思ったりもしている。△方程式のXなすVは、見立てだが、やはり、△方程式のVとまで突っ込んでいったところに、一匹のあめんぼうでなくなにやらもぞもぞと動いて、不可解なまでの数量を見、ここまで突っ込んでいくやり方なら一つの方法として、積極的にならなくて出る必要

月高みはくれむ浮力のつくごとし
飛びつ切り上等の旭が花木瓜に
鳥入れてさくらのうつらうつらかな

連翹のハハハハと又ハハハハと

一点に集中させていった鮮やかな写生の力を感ずる△散りそめてVの作品と、喩をもって絞り込んでいった△温言のV△月高みVの作品に、この作家の力量の確かさを感じている。△はくれむVの花といえは、翔び立つという喩をよく見てきたが、月が高く澄みのぼった空へ、△浮力のついたVように浮き立っている鮮やかな景としてきりとりことなど、作句技術を、ことばを先立ててつくっているといはいくまい。見詰めることをし、純な心で捉えることを先立ててこそその所産である。△飛びつ切りVの句も、素な心の捉えた朝日のまぶしさであり、新鮮なこの作家のことばである。△紅梅にV△寒牡丹V△鳥入れてVのふく

のあるものと思ったりする。さて、連翹の句について、軽い見立てと思いたくない、といったのは、たしかに連翹の花を見れば、ハハハハという形で花咲いているが、見立ててやろうという意識が先行すれば、それは見えてこないものだからである。作品の結果を見て、見立てといいきることはやさしいが、このハハハハという咲きさまを見ていることのできるのは、人間の明るさと自在さがなければできないものである。ハハハハと見た連想力の駆使は高いものといふことはできないが、これを恐れない作家であるから、前進の方向が見えてくるのだとも思ったりする。

もてなしに大きな湯婆年の宿

宿の餉にけとばしの出て紅葉季

亀の手といふ貝が出て涼しき鮓

海鞘好きの客と覚えてあて呉れし

この作品が一等上質のものではない

が、こんな作品をなしうる作家を信頼したのである。国際観光旅館などに泊っていては味わえない、お互いの人間を明らかにした交流が見え、そんな人間好きの作家像の結ばれてくる作品である。人間の厚味がなかったら、作品の発展はないと思ったりするが、こうした作品を見ると、常民の親しさ、あたたかさ、善意をもっている作家であり、そこからさらにふくらみのある作品をうみ出しているのだと思えてくる。

ちやつきらくよくそろひめておちよぼ口

歳時記にないものへの挑戦について序文にも書かれていたが、△ちやつきらく▽は三浦市に残っている小正月の神事舞である。いま、作家中上健次がすすめている熊野大学講座は十九回目となったが、そこでは俳句も一つの軸となっており、私は、「熊野の歳時」を押し出せとも話してきたが、これもこの作家はすでに押し進めているのである

る。序に跋に書かれなかったことを主に書いてきたが、そこに書かれていたことごとく賛意を覚えたからである。しかし、そこで称えられた作品と重なるものが多いが、絞りに絞った佳品を、私としてどうしても示しておきたいのである。

朴落葉山の暦日重ねけり

空ら拭きの机にひびくしぐれかな

竹が散るまた散る論されあるごとし

うすらひをつつと鶺鴒浄瑠璃寺

ぶんぶんと泣虫抛り出さんかな

孟宗の雄ごゑおんべの火中より

菜飯食ぶ子にまづまづの志望校

鳥籠を日向にサトウハチロー忌

遊ばれて磯に置きざりあめふらし

われ泳ぐ下にテールサンゴ礁

巨福山梅の活潑潑地かな

暖雨去りうぐひす餅のやうな島

繰上げて海晴るる日の七五三

こうした佳品を見ると、生得、俳句の広さを知悉していたように思えるこの作家が、もつともものを見、その攻めを拡大していけば、独歩の道をたどっていくにちがいないとも思えてくる。『句集』ねずみのこまくら』を、その独歩への第一歩として眩しんでおきたい。

(平成二年十月号 「濱」所収)

虫の素顔 土生重次（「扉」主催）

一句の成ったよろこびは、日常の平凡なものから非凡を見出したときに生れてくる。非凡といっても特殊で唐突な事柄をいうのではない。見慣れたものが、新しい姿で眼前に立ち現われてくるのを捉えることである。それが大野林火先生の指摘された「ひとふし」だと解釈している。句集名が『ももすずめ』というので、漢字を当てると「桃雀」か「百雀」と思っていた。鳥のことはまったく知識がないので、よく見る煤けた雀ではなく桃に似た雀でもいるのだろうかと思ったり、「百千鳥」の連想から、竹藪にでも群れている雀をいうのかと思っていた。ところが「あとがき」によると、蛾の幼虫だという。「スマートな肥り様は、

吾がミニチュア版にして快なる哉」というから、句集名にして「ひとふし」がある。「僧帽弁閉鎖不全なる一病にみまわれて」と「あとがき」にあり、「首回り、胴回りは、優にその適正寸法を越えた」とあるからには著者は相当の肥り型と思われる。差し出がましいが、次の句集名は「ががんぼ」あたりが好ましいと思うが如何。

大あくび春の海より貰ひけり
大茅の輪仕上り風が先づくぐる
川下の方へほうたる木を替へて
くるぶしの上より刺せる秩父の蚊
葛餅に頁の耳を折りて立つ
さういへば家紋に似たる柿の蒂
なめくぢら砥石溶かしにかりけり

身の些細な素材も、著者の手にかかると初

めて見るもののように思わせられる。それは誰もが見たたり経験していることであるが、これらの句を読む寸前まで読者のところに眠っていたものである。この眠りから醒めるのが感動なのである。そこに作者と読者のところが通い合う。「大あくび」という俗なるものと「春の海」の悠長でみよびやかなものとの対比がユニークである。「貰ひけり」でさらに自然に向う人間の存在の小さなことを思い、それが人間の逞しさにも通じてくる。以下の六句それぞれに、作者の着眼点が明快に打ち出されていて爽快である。いささかも曖昧さがない。未消化の思いを観念的な言葉に頼るとか、只事を短詩型の力を借りてする思わせぶりが無い。抽出句の中で特にたのしいのは、「くるぶし」という人間の体の部分でも骨の突き出たもつとも硬いはずのところを刺す「秩父の蚊」である。この蚊のイメージは、ふてぶてしい縞の模様を鑑つ

ている。また「なめくぢら」の句はどうだ。

「砥石溶かしにかりけり」である。こういうわれってみると、自来也の墓、蛇丸の大蛇、綱手姫の蛭の立川文庫の世界もまんざら嘘ではないように思えてくる。「なめくぢら」はきつと「砥石」を「溶かす」ほどの妖力が、あのねばねばした体液にもっているのと知らされる。ひよつとしたら、彼奴も秩父生れかもしれない。著者独自の発想は、適確な表現力を得て新鮮な印象を愉しませてくれる。また、本書の顕著な特色は、擬声語、擬態語を自由に駆使しているところにある。

十夜僧ずしんずしんと廊渡る
みつまたの荅おつとり日の射せる
啓蟄やずいと近寄るぶちの鯉
よろよるとじやがたらいもの花へ蝶
パリパリと揚がりズドンと花火了ふ

夕顔を天蛾すずめがぶると発ちにけり
はつはつと山車倉の上に鶉鳴ける
コスモスの脇をぶると馬体過ぐ
ぐりぐりの夕顔の種蒔きにけり
ぶるぶると顔を震はせ蛸蚪浮上

俳句は直感の詩であるとするならば、耳に入ってきた音声をそのまま表現に使うこともまた個性である。擬態語もまたモノの本質を捉えている限り意外性があってインパクトのつよい一句になる。右に抽いた諸句の表現上の工夫は、それと感ぜさせずに対象を直感的に消化し読者を一句の世界に導いてくれる。『ももすずめ』の底流には上質の諧がある。これは自然体で対象に臨むところから生れてくるものであろう。俳句的にしようというはからいが無いのだ。その諧をしばし愉しんでいるうちに、読者は単なる「諧」ではないこと

に気がつく。ピエロにもある素顔に気がつくのである。それは、ときには哀しい表情をする。本書に登場する人間・動物・虫・草花たちはそれぞれそんな表情もどこかにもっている。『ももすずめ』は「芋虫大にして、角あり、ストライプあり。なかなかダンディー」という蛾の幼虫である。美しい名前は人間のつけたもの。この虫の素顔もまた哀しいものかもしれない。

(平成四年五月号 「濱」所収)

『さざなみやつこ』私見 本宮鼎三（「畦」同人）

この句集『さざなみやつこ』の著者、高沢良一氏と、どこかで出合っているのかも知れないが、記憶力の弱い私は、その容貌など、全く思いつかないのである。しかし、袖を仮にふれ合なかつたとしても、句集を見させていただくということは、俳人同士、「他生の縁」ということになる。しかも私とは、同世代の昭和一桁生れ。この句集を味読して、いちいち肯くことばかり、また身につまされることが多いので、この盲筆を敢えて執らせていただくこととした。この句集の分類にならい、四季別に作品を挙げることにする。

「春」

梅を見て廻る歩幅となりゐたり

紅梅の雨滴とろりと枝をつたひ
花さんしゆゆ日差しに斑むらのありにけり

花山茶黄いり玉子めき夕日中

まんさくに昼の風向きかはりけり

みつまたの夕づく蒼思慮深げ

にはとこの出臍のごとき芽の並び

菜の花のきちがひじみしひかりあぶ

一泊が二泊となりぬ花菜村

絹莢のさして頼りにならぬ蔓

兎波マーガレットに駈け寄りぬ

風除け籐ストックの香を封じけり

おてだまを抛りあぐごと白木蓮

大如雨露ぐうるりぐるりチューリップ

滴れりみみずのやうな鹿尾菜の茎

さくらさう二つ返事で咲きにけり

この句集をひもといて先ず目をみはつたのは、この作家が植物に詳しいということである。俳

句は、「いいとめる」「みとめる」ということが大切だが、高沢良一氏は永年、「もの」を見る眼を鍛え、その鍛え抜いた眼で、もろもろの植物を観察し、それを観照、つまり自分の眼光で照らして、詩に昇華させていると私は感じている。たとえばにはとこの出臍のごとき芽の並び 良一

を例に挙げれば、この句から、ふと

甘草の芽のとびとびのひとならび 素十

を思いおこすのは私だけでないだろう。それは高野素十の句の姿に似ているからであり、ややもすると、姿が乱れがちな現代俳句の中にあつて、林火、鉄之介という系譜を曳くこの作家が、その教えに従い、正しい句の風格を守ろうとする、そのあらわれであると私は受けとっている。「にはとこ」の「芽」を「出臍」とみとめたのは良一独自の眼である。「みとめる」は「認める」であるが、この漢字の構成を見ると「言を忍ぶ」、いえば、

いい過ぎないことであるともいえよう。目で認

め、ほど良いところで、言葉にすることである。

「出臍」は、ほどよいところだ。「雨滴とろり」「兎

波」「おてだま」なども快い、いいとめ方である。

まだ「春」で認めたい良一作品があるが次へ、筆

を進めよう。

「夏」

金網を這ひずりまはる時計草 良一

野あやめの妹分の著莪咲けり

濃あぢさゐ男色の粹尽しけり

十葉の森の何処より手をつけむ

苗はこぶ南安曇野曇りかな

若楓煽られしどろもどろかな

梅もぎの擦り傷此処とこことここ

教会の三人掛の梅雨木椅子

でで虫も其角の墓も傘の内

つまみ上げ大海牛の段袋

菱形となりて大瑠璃駆くるそら
あめんぼう脚のさうじにかかりけり
ががんぼのせうことなしに玻璃せせる
もう我慢できぬぶんぶん締出せり
木零の音を聴きゐる華奢な露

大野林火全集

橘のかをるが如く上木す
こころもち幹を振りて夏櫛

御旅所に団扇と扇子語らひつ

長かりし一日ビールの黄昏色

くりくりの空があるなり吾亦紅

利かん気な飛び方をせる蚋一つ

かはほりに油ツ紙のやうな空

「論より実作」という見方から、つい面白い句を挙げてしまうと、かくも多くなるのである。もちろん「春」にも私が挙げなかった句で、いいのがある。「夏」作品も同じことがいえるというこ

とは、お断りしておこう。とにかく読んでいて、思わず「微笑」を誘う句が、あまたある。私の師、秋元不死男は「俳句は微笑の文学」といつていた。

高沢良一氏も「アクアミュージウム」で見た「熱帯魚」を見て「悠々」「人なつつこさ」を感じ「サザナミヤツコ」などという、その名に「庶民性」「俳諧性」そして、自身との共通点を見出だして、微笑し、ここから俳句の活力を汲み取っているのである。この高沢式俳諧には、先人がいる。それは小林一茶である。

寝ころんで蝶泊まらせる外湯哉 一茶

瘦蛙まけるな一茶是二有

我と来て遊べや親のない雀

これは私がいうまでもなく、氏はよくご存知の筈、しかし高沢氏の方が動植物ともにその素材が広いし、また観照の視点も現代的で、境涯性を内面に沈潜させ、表面に持ち出さないので、読者

に快感を与える。だが、俳人の精神という点では一茶と一致するものがあるのは見逃せない。いえ、俳句の上では人は花、鳥、虫と同等であるということ…。「松」のことは松に習へ「芭蕉語録」とおり。「松」を師としたり、友とする…。或は「蛙」を、「雀」を、「蝶」を、「熱帯魚」を友として暮らすことのできるのは、俳人に天から授けられたものというのは過言だろうか…。私は氏の俳句にそれを感じているのである。

「秋」

竜淵に潜む面持ちして診られ 良一

跳ぶ前をおんぶばったのゆうらゆら

とび出して土師器色なる墳の虫

稲雀舞ひ降るてんでんばらばらに

屈服の仕方まちまち破蓮

迎へ火のたきつけ紙をひねりけり

おがら火の一揺らぎして直なる炎

背合せに吊らる軸物お風入れ

松手入れすこし空き過ぎたかとおもふ

とにかくこの自在な表現は、二十年ぐらい作句に打ち込んで鍛えないと、湧き出てこないはずである。要するに俳句のいい、わるいは、どこで決めるか…。一言では誰も答えられないと思うが、その一つには「季語」を十七字の中で、十分、活かしきっているか、どうかということがある。また、その二つには「もの」をよく見るといいうが、一步踏み込んで対象をよく見ているかということ、人の目の気づかないところ、つまり意表を衝くことができるか…。というような要素があると思う。意表を衝く表現、それと諧謔が適当に入りまじっていい意味の「遊び」が感ぜられるとともに、季語を無理のない形で、軽妙に、らくらくと活用しているのが、良一俳句の特徴の一つであるといえよう。

「冬」

玄冬の海に百の目啼鷗 良一

水仙をぎうと鳴らして活けにけり

柗の人目にふれぬ零れ方

新薬の効き目追ひ追ひ枇杷の花

冬ざくら花の漂着せる如く

こんもりと妻の蒲団の山かたち

心電図師走の波形出でをらむ

籠りきり日向ぼつこのやうな日々

炬燵火に脛を焙りて「安愚楽鍋」

手前より杭・葭・鴨の睡る水

青畝迎へ俳人協会黄泉路支部

本の塵本に舞ひ降る煤払

こりこりと何を剥きゐる小晦日

鉢物に土を足しやる小晦日

年の瀬に打ち上げられてゐることし

おしくらまんぢゅう服台無しにしてをりぬ

青天に月は大きな氷玉

平橋に続き反橋雪積める

これらの作品、おしなべて飄逸、滑稽、軽妙であり、また閃めき、直観力、動きを即刻、いいとめてしまう、その素早い判断力、そういつた作者の五官の働きに私は、感心させられるのである。

それは芭蕉の「物のみへたる光、いまだ心にきへざる中にいひとむべし」に適う作句法であり迅速なる、このいいとめ方は、この作者の独自のものであるといえる。たとえば

冬ざくら花の漂着せる如く 良一

「冬ざくら」を見た瞬間、「漂着」という語が泉のように湧き出でてくるのは、並大抵の作句修業では、こういうわけにはいかないだろう。この句集は、この作者不断の努力が結実したものである。まとまらない句集評となつてしまつたが師走の一夜を棒にして書いたこの拙文、よろしくお

汲みとりいただきたい。(平成五年十二月二十二日記)

(平成六年二月号 「濱」所収)

『ばらりとせ』を読む 村上一葉子（「濱」同人）

せつせつせ雛罌粟咲いてばらりとせ

句集名となった一句。作者の愛着のほどが察せられる。意味があるような無いような。〃せつせつせ〃は昭和初期頃のわらべ唄の出だしの一節である。〃ばらりとせ〃は花の形容とも作者の心象的な造語とも想われる。何気ないようだが〃せ〃の音の重ねの感触に惹かれる。この口調に執しているのがこの句集の特色となっている。音の感触からくる独特な軽妙さの調子を是とするかどうかの評価のわかれるところ。魅力的ではあるが評者にとつてはまことに扱いにくい句集であるといえる。

曲ることついつい忘れ優^{やま}胡瓜

月の夜の海月が考へさうなこと

〃青嶺〃のあとに据えた〃水利権〃に景の、言葉としての意表外の飛躍がある。月の夜の海月が

〃考へさうなこと〃とは一体どんなことであろうか。海月の化身である作者に問うほかないが。

秋季より

人間に雲脂といふもの秋立ちて

虫の夜のあ利尿剤利きにけり

敵はない人の句を誦す夜長なり

〃雲脂〃は人間だけにあつて他の生きものには無いものなのであろうか。思つてもみないことだが。〃敵はない人〃など複雑な今の世に居るのであろうか。ましてややかましい俳句界においておや。そのような人の句は味気ないであろう。

冬季より

風花に取り込み忘る男物

春季から

やつかいな正月の富士詠み初めに

青麦の放てる夜気と覚えけり

好意ありがたく綻ぶ梅のなか

未完なる塔にしぶけり櫻の芽

花桃のやいのやいのと日表に

世の習いではおめでたいものの代表格の富士が作者の手にかかると〃やつかいな〃な存在として登場する奇妙さ。詠み初めの句をたずねるのは野暮。〃好意ありがたく〃と述べてはいるが実のところそれほどでもない作者顔が浮かぶ。〃やいのやいの〃というような語形はしばしば出会う。形容というか擬態語の用い方は自家薬籠の感。

夏季より

切り出してこころ青嶺の水利権

あぢさゐの色ならぬ色みえくる日

柿芽吹き蟹の缺のやうな芽を

きさらぎも半ばつるりと虚子の貌

東京に出でゆく御用納めの日

鰯の口この一年をしめくくる

避寒地に降り立ち一本目の櫻

ホトトギス派にとつては神様をもしのぐ虚子をおのうに戯画化した俳句を見たことないが、確かに虚子の一面をうかがわせている。上下にかかると〃半ばつるり〃は何とものの趣き。一本目の櫻は〃避寒地〃を受けた視線か。恣意的に載せた以上の作品のほか句集全般に通じて感じられるのは、対象を捉え、そして表現する視線が正眼ではなく斜眼、斜視的であると言える。斜めから見た独特なおもしろさに軽妙さが添っている。この軽さは俳諧的な〃かるみ〃とは違った現代的な〃軽さ〃。〃おもしろさ〃であつて作者にとつてはそれが自然体なのである。現代は正面から見た俳句が殆んどときに、斜めからの目で簡明に詠う作者

の存在はまことに貴重といえる。なお、集中には筆者が住む信州で取材した作品を多くみる。身近な愉しさと読ませていただいた。その一部を紹介しておく。

人混みよりわが身抜き取る出開帳

善光寺お開帳の作は多くあつた。地元であるが故にお詣りしなかつた筆者。

起請文累々芽吹く社にて

「生島足島神社」の前書がつく。上田市塩田にある社はその位置を本州の中心地であると謂つてゐる。「乙鳥に乙鳥いろの朝鮮人參小屋」も塩田。西塩田から丸子町にかけて薬用人參の栽培が盛ん。最低三年の小屋掛け作り。

訃報告ぐ子の名は穂高立夏経て

礫山のタツチ若葉のやはらかさ

わさび田の水を束ねる處あり

初句には「田淵ひで子さん逝く」の前書がつく。

故人は濱同人で感性ある作品をのこした。夫君行男氏は高山蝶、雪形などの山岳写真家で記念館を残す。「礫山」は彫刻家の荻原礫山。古いことだが昭和三十年代に林火先生と安曇野へ夫妻を訪ねた一日が想い起こされる。

一疋のねりぎぬ月の千曲川

月下の千曲川の流れを「一疋のねりぎぬ」とはまことに微妙。島崎藤村や五木ひろしとは違つた千曲川がある。作者は心臓疾患をかかえておられるので無理せず一句一句と高澤俳句の大成を期していただきたい。

師走妻うしろをよぎり前よぎり

蒲団のずれ直し呉れをる妻をうつつ

病床にあつた作者をみとる夫人のうごきを描いた二句を添えておく。老筆多謝

(平成十六年五月号 「濱」 所収)

あとがき

俳句を始めて三十六年になる。俳句は〈覇気ある裡が華〉と気張って作句して来たが、ここらで一服、振り返ってみたくなった。これ迄の句業をつづめてみれば、十二句集。

この内、4句集が既刊であり、残り8句集が未刊であった。

収録句は多く、緩選と云はれるかもしれないが、どの一句をとつても、自分史上、痛くも痒くもあるわが分身の一部である。

それを快く読んで頂きたくと編んだ一集である。

入稿はインターネット経由で PDF (Portable Document Format) 形式で行い、費用軽減等を計った。

尚、当集とは別に、十二句集を季題別に並べ収録

した「季題別高澤良一全句集」を同時刊行した。

二〇二二年七月十六日(七十二歳誕生日)

高澤良一

著者略歴

高澤良一(たかざわ・よしかず)

昭和十五年七月十六日横浜市本牧に生まる。関東学院六浦中学校・高等学校を経て昭和三十九年三月日本大学理工学部数学科卒。日本電気(株)に入社。国内および東南アジアの官庁関係部門へのコンピュータ導入・システムサポートを担当。平成十二年七月定年退職。

俳句は昭和五十一年俳句結社「濱」に入会。大野林火先生に師事。昭和五十七年「濱」賞受賞。師林火逝去につき松崎鉄之介先生に師事。昭和五十八年「濱」同人。俳人協会会員。

著書には句集「ねずみのこまくら」「ももすず

め」「さざなみやつこ」「ぱらりとせ」「鳩信」

426

津」がある。

インターネットにて平成九年自分のホームページを開設し俳句作品等を発表し始む。平成十一年インターネット句会を開設、平成十二年「俳句検索データベース」を構築・公開し一般の利用に供する。次いで平成十七年「俳句例句データベース」を構築・公開した。

病歴として心臓病 僧帽弁閉鎖不全を患い、平成九年慈恵会医科大学にて「弁形成」術を行う。

その後 平成二十一年葉山ハートセンターにて

「弁置換(機械弁)」を行った。

現住所 〒二三六〇〇一四 横浜市金沢区寺前

二二二二二〇

高澤良一全句集

二〇一二年十月一日 初版

私家版

著者 高澤良一

印刷所 株式会社平河工業社

東京都新宿区新小川町三丁目九 〒一六二一〇八一四

電話 〇三(三二六九)四一一一

© Yoshikazu Takazawa 2012 Printed in Japan

